

せめて、せめて一勝を

冬月 道斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は一度の敗北が忘れられず、高校2年になる今でも武神を倒すことを目指し続けている。

これは高坂 虎綱のリベンジのお話である。

目次

プロローグ	1
第一話 日々之修業	7
第二話 武術脳の弊害な過去	15
第三話 化け物爺は生徒を見ている	22
第四話 舶来娘と代理決闘 前篇	30
第五話 舶来娘と代理決闘 後編	41
第六話 努力娘との分かれ道	50
第七話 有限地獄連続仕合 一日目前篇	59
第八話 有限地獄連続組手 一日目後編	68
第九話 有限地獄連続組手 二日目〱強 気娘編〱	79
第十話 有限地獄連続組手 三日目〱奉 仕物語編〱	87
第十一話 有限地獄連続組手 最終日	95
第十二話 地獄の傷跡	107
第十三話 通常の三倍親馬鹿	116
第十四話 決戦前日、侍娘	127
第十五話 対武神 数年来の激突	135

第十六話	敗北	その後	149
第一七話	一大事の足音	――	159
第十八話	東西激突	前篇	166
第十九話	東西激突	後編	176
第二十話	古くも新しい風	――	187
第二十一話	英雄たちの加わる風景	――	198
第二十二話	結局執事に振り回される	――	207
第二十三話	東に渡る燕一羽	――	221
第二十四話	新しい波が馴染むまで	――	230
第二十五話	親馬鹿再び	――	243
第二十六話	水上体育祭前編	――	256
第二十七話	水上体育祭後編	――	266
第二十八話	怪我の影響	――	277
第二十九話	若獅子タッグマッチトーナメント前篇	――	287
第三十話	若獅子タッグマッチトーナメント後編	――	298
第三十一話	相談事の多い日前篇	――	309
第三十二話	相談事の多い日後編	――	320
第三十三話	若獅子達の世代交代	――	334

第三十四話 お悩み相談室番外編

347

第四十二話 宣戦布告

434

第三十五話 川原の討論

358

第四十三話 作戦会議

444

第三十六話 決戦前、道分かれた二人の

お気に入り数2000記念お礼、IF一

454

戦い

367

子END

464

第三十七話 対武神、三度目の正直

前

第四十五話 最終決戦 其之二

477

編

378

第四十六話 最終決戦 其之三

487

第三十八話 対武神、三度目の正直

中

第四十七話 最終決戦 其之四

497

編

388

第四十八話 最終決戦 其之五

506

第三十九話 対武神、三度目の正直

後

編

401

第四十話 お約束の満身創痍

412

第四十一話 川神院強襲

423

プロローグ

川崎市某川原に年頃十を過ぎたかどうかの少年と少女がいた。

少年は倒れ臥し、それを少女が見下ろしていた。

「なんだ、もう終わりか？　まあ結構持った方か」

失望感、程ではないが達観のこもった様子でそうこぼす少女、彼女は強かった、故に孤独。

そんな気持ちから漏れた言葉であった。

——しかし、少女の気持ちはどうあれ、そんな言葉をかけられた少年はどう思うのか。

これがただ喧嘩をしただけならば悔しさはあれど忘れられただろう。

通りがかりを殴られたなどであれば憎しみは残ってもそこまでだ。

少年の年がもつと幼ければ無意識に心が折れてそこで終わっていた。

逆にもう少し大人になっていけば諦めの感情が先に立ったであろう。

少年は諦めるには子供すぎ、心が折れるには育ちすぎている。

少女が一礼をして立ち去った後、少年は声を殺して泣いた。

「ち………つくじょう………ぐぞ、ちくじょううう………」

ここから少年の一途な青春は始まった。



みんなに聞きたいことがある、心に残っている挫折ってどんなことだろうか？

僕こと高坂 虎綱は小さいころ自信を持っていた武術で負け、失望された。

自信を持って勝負に臨んだが結果は圧倒的な力負け、化け物つかってくらいの力の差を見せられた。

小さなことかもしれないけれどももう一人称が俺から僕に代わるくらいの挫折だった。それから僕はただひたすらにあの時の圧倒的な力に対抗するために腕を磨いてきた。すべてはあいつに勝つために。

「痛てええええええ！ 俺の腕がああああ！」

「ああーん、今日もモモ先輩超かっこいい！」

「流石モモ先輩、まさに霸王だぜ！」

……うん、周りが騒がしいのは聞かないことにしたいな。

現実逃避を続けたい限りではあるが、何をどう間違えたのか僕が勝ちを望む相手というのがあの武神なのだ。

あ、もうほとんどのやつが骨外されて積み重ねられてる。

「ふふっ、美しく積みあがったな」

「姉さん、これもはやホラーだから」

おっと、終わったみたいだな。まああまり参考にできる戦いではなかったけどまあいか、学校に向かうか。

そうして心に刻む。

——なに、こうして敵の強さをしよつちゆう確認できるんだ。なればこそ僕の歩みは早々止まらないさ。

つとかっこいいことを考えながら目の前にモモ先輩に飛ばされた男が横切り乾いた笑しか浮かばなかった。

さらに後ろから女を漁る武神の声なんか聞こえてない。

うん、なんか情けない気分になるから断じて聞こえていないのだ。

「らんらんるー」

などと考えていると僕の所属するクラスである2年S組のクラスメイトである榊原小雪が何か絶対言つてはいけないような気がしてならないセリフを吐いていた。

「おはようユキ、井上、で、早速だが保護者としてあれはいかんでしよう。なんでいけないのかはわからないけど唐突にハンバーガーが食べたくなっただけだ」

「やめろユキ!! クラスメイトがなんか唐突に変な宗教に引っかけた感じになつてる!!」

「おー、ハゲは朝から元気だなー、トラーおはよー」

「いや、ここは全力でいかないといけないような気がしたんだよ。おはようさん高坂」
うん、なんか気になりはするけど追求してはいけないな。

そのまま二人と連れ立って雑談に興じようとしていると後ろからやけにまぶしい気配を感じた。

そして人力車を引く音と、

「フハハハハハハハ!!」

この笑い声である。

間違いないなこれはあいつだ。

このテンションは知っている奴なら全員が全員あいつだとわかるだろう。

「おはよう！ 庶民！」

「おはようございませみなさん！ さあ元気に英雄様にご挨拶してくださいね☆」
そういつて予想通りの金ぴかとメイドが現れた。

「おはよう、英雄今日も金ぴかだね」

「おはようさん、朝から元気だねー」

「おー、おはよー。ねえねえ、準の頭とどっちの方が眩しいかなー？」
なんかひどいこと言ってるな。

「うーん、部分的な強さであれば間違いなく太陽拳が最強だけどやっぱり全体的には英雄の方が眩しいんじゃないかな？」

「おー、そーなのかー」

「使えないから！ 太陽拳なんて使えないから!!」

使っている気がするんだが。

「ところで英雄、次っていつあのバイト入れそう？」

「ウム！ あずみ!!」

「はい!! これからしばらく九鬼は一大プロダクションに掛かりつきりになりそうですのでしばらくはできないと思いますー！」

「そうですか、ありがとうございます。ヒュームさんと揚羽さんや他の従者の方たち

によろしく言っておいてください」

「かしこまりました☆」

うん、しばらくは収入は望めそうにないな。

こうして僕の川神での朝は過ぎていくのであった。

第一話 日々之修業

朝の騒動——といつてもここ川神では驚くべきことに日常と言つて差支えがない出来事であるのだが——の後は特にこれといった事件もなく放課後を迎えることができた。

このあたりは流石はS組、特進クラスといったところか、これがお隣のF組であればこうも行かないであろうことは目に見えている。

現に昼休みに何かひと騒動あつたみたいだし。

そして待ち望んだ放課後である。

「今日もよろしくお願ひします」

さて、僕が何をしているかというところ、道着を身に着けて川神院のお弟子さんたち百人と向かいあつている。

別に僕は川神院の弟子、つまり川神流と言うわけではない。

川神流と言う流派は多くが門外不出を謳いそのほとんどが住み込み、つまりは内弟子で固めているが別に閉鎖的というわけではない。

寧ろ対外試合という形であれば流派別の交流自体はかなり盛んな流派と言つていい

だろう。

まあ、これが仕合や死合いとなればまた話は変わってくるのだが。

それでも僕のようにただひたすら経験がほしいといった手合いにはこの上ない修練場であることには違いがないのでしょっちゅう利用させてもらっている。

その甲斐あってか最近では高弟も含んだ百人組手などといった贅沢な仕様となつていて経験値ウマーである。

僕の流派であるが、元々は家の近くの柔道場に通つていた。

この道場の師範というのがかの思考する柔術家 渋川烈火であり柔道と謳いながらも才能があつたらしい僕はより実践的な柔術の指導をいただいていた。

そこで自信をつけたのがいけなかつたのか現武神に手痛い敗北を喫することとなりそこで「力」の差を見せつけられた。

正直本物の化け物連中の「力」はあり得ない、そのかなうべくない現実を突きつけられてなお武術を続けているのは幼いころの敵愾心と自分の流派のおかげであろう。

そう、僕は「力」で対抗することをやめたのだ。



「あ！ 高坂君、今日もお疲れ様！」

川神院門下生との組手が終わり、門をくぐるときに声をかけられた。

「うん、一子ちゃんもお疲れ様。走り込みかな?」

この川神院の養女である川神 一子が汗をかき腰にタイヤを引つ提げて声をかけてきた。

「うん! 高坂君は今日も組手だけ?」

「そうだよ、今日も川神院の方たちにお世話になつてきたんだ」

「おお、少しタイミングが悪かったわね。もう少し早く戻ってくればアタシともできたのに、高坂君も一緒にやればすれ違わないわよ?」

「ハハハ、ありがたけれど僕には川神院の修業はちよつとね」

「うくん、百人組手ができるんだからそんなことないと思うのにな」

「僕は川神流つてわけじゃないからね、自分の修業と川神院の合同稽古じゃあ片手間ではできないよ」

「そつか、じゃあ仕方がないわね。それじゃあアタシ修業の続きがあるからまたね」
「うん、頑張つてね」

そういつて去つて行く一子ちゃんを見ながら考える。

——川神一子 川神院の養子にして武神である姉川神百代に憧れ、その力になるために川神院師範代という狭き門に挑む少女、日ごろから多くの修業に一生懸命取り組んでいる。

その姿には武神に勝ちたいという僕の目標と相まって非常に好感を持てるが、いかに才能が足りないように感じられる。

その分を努力、根性、修業で補っているようだが……、ここが僕との道が分かれたら部分だろう。

正直僕は彼女よりは才能はあるだろうが目標である武神川神百代と比べると五十歩百歩であろうと思っている。

それでも現状、僕と彼女での試合は、まだ一敗さえもしていないという程度には実力差が開いてしまっている。

その差は何かというと――

「さて、着いたか」

親不孝通り、川神市において最低の治安を誇るこの場所で、僕の修業の続きが始まる。「へへっ、今日も来やがったか。今日こそはこの俺の昂ぶりをお前のその体で沈めさせてもらうぜ!!」

着いてそうそうに目的の男たちが現れる。

板垣竜兵 この親不孝通り、堀の外において不良たちを束ねる不良のカリスマにして板垣兄弟の長男、今日もぞろぞろと不良たちを引き連れてお出ましである。

彼はステゴロ、タイムン大好きな不良の鏡ではあるが武術家ではなく、大人数で囲う

ことに抵抗を抱くような男ではない。

よつてこのガラの悪い連中に囲まれるという状況が出来上がっている。

「うん、できるんならどうぞ、やられたいわけじやないけど武術家として負けた時の覚悟はできてるさ」

余談ではあるが、僕の容姿は身長176センチで顔はやや童顔、まあ自慢ではないがそこそこに整っている方だ。

そして体には無駄な筋肉をつけないようにした見事な細マッチョ——こっちは自分で作り上げたものだから大いに自慢したいものだ——である。

何が言いたいかというと目の前の男、ガチである。

そしてそのストライクゾーンに僕はしっかり収まっているようであり、おかげでここでは十中八九喧嘩を売られ、実践相手には困らない。

うん、仮にも護身の武術を修めているために自分から喧嘩を売るわけにはいかない僕としては大助かりである。

「へへへ、いい度胸じゃねえか！ てめえらやるぞ!!」

そう言つて不良たちが襲い掛かってくる。

「死ねやー!」

——さて、この修業は先ほどの百人組手の相手と比べて非常に格が下がる。

不用意に鉄パイプのような廃材で殴り掛かってくる男の懐に入りひじに手を添える、それだけで男の勢いはそれがその無駄になった動きに逆らわないように足を払う、支点は肘。

「へげぶー！」

——それでも僕の修練はここからが本番であるのだ。

何人かを巻き込み回転しながら倒れる男、次に来るのはやはり竜兵、この男だけは先の組手相手と比べても遜色はない地力を持っているだろう。

「今日こそは絶対にやってやるぜええ!!！」

迫ってくる拳に対し相手の内側に入り、右足を突き出しながら相手の腕を利用し己を滑車のようにした円運動を作り竜兵を巻き込む。

「ぐはー！」

——何せこれは試合ではなく実戦だ、怪我をして止める人間がいなく一本を示すこともない

地面にたたきつけられる竜兵だが後続の人間がどんどんと向かってくる。

「おまえを倒せば名が上がるんだよ!!！」

「へへへ、捕まえてリユウさんと一緒に3Pに混ぜてもらおうんだ!!！」

「てめえ！ 痛えじゃねえか！！ 今日こそぶつ殺す」

その中には最初の男に巻き込まれた男もいる。

——つまりは怪我さえさせなければ、心が折れるまで何度でも何度でも向かってきてくれるということなのだから

「さあ今日も時間が許す限りよろしく頼むよ!!」

そう、僕と一子ちゃんの違いは柔か剛かというのももちろんあるが、何よりも

「上等だああ!! 今夜は帰さねえから覚悟しておけよおお!!」

筋トレ、走り込みなどに精を出し地力をひたすら上げ続ける一子ちゃんに対し、ただ只管に投げ、受け、透かし、まれに打つを繰り返し続け、つける筋肉にも技にも一切の無駄をつけないようにはげみ続ける僕と言う差だ。

一子ちゃんを否定するわけではないが、才能の差がある以上無駄を省くべきだという結論にたどり着いたのだ。

こんなこととして退学にならないとは素晴らしきかな喧嘩に寛容な校風、みんなもおいでよ川神学園。

というわけで、他の板垣姉妹も騒ぎを聞いて駆けつけてくれることを期待しながら僕はただひたすらに投げ続けるのである。

……ていうか、こいつら竜兵の影響かガチな奴多すぎないか？

第二話 武術脳の弊害な過去

昨日、4時間に渡って不良を投げつけていた高坂です。

実力に大いに不足はあっても、実際に戦うというのは実に勉強になる。

特に、僕のように理をもつて相手を制するような戦いをする人間にとつてはなおさらである。

これは、僕がモモ先輩に一矢を報いるための大きなフアクターだと思う。

ワンパン劇場としか言いようがない試合を見ながらそう考える。

彼女は戦いに充実感を求めすぎている。

実力差がありすぎてつまらないというのは仕方がないかもしれないが、完全な作業だ。

もちろん、挑んできた相手に対しての礼は忘れていないようだが、それでもああいう

一戦を自分の糧にしようという意志が感じられない。

例えるなら、雑魚敵に逃げるコマンドは使わないが、二〇ラムで一掃するから経験値

は入らないといった感じだ。

彼女はもはやボスやぐれ、コスト的においしいから一応メタルくらいにしか興味を

抱いていないのであろう。

才能というのが、一度に入る経験値の総量だとすればもったいないことこの上ないと思う。

それであつてもいまだに強くなり続けている。

もう、幸せの靴でも履いてるんじゃないのかな？あの武神。

話は逸れたが、一度に入る経験値の量で敵わないのであればひたすら狩り続けるしかないという考えは間違っていないと思う。

川神院の制限やら、本人の在り方という面から何とか付け入る隙になるだろう。

「……おはよう」

考え事をしていると、見世物ではない方の仕合であるために人員整理をしていた椎名京が声をかけてきた。

「おはよう椎名、いつもありがとね。またお世話になりたいから空いている日に連絡くれると嬉しいな」

「うん」

非常に無愛想な反応であるが、それでも彼女にしてみればある程度親しい人間と認定されている。

風間ファミリーと呼ばれるメンバー以外へ自ら挨拶すること自体が珍しいのだ。

彼女との関係は、小学生のの頃にさかのぼる。

あの頃の僕は、モモ先輩に負けてから組手に只々打ち込んでいた。

大人を相手に鍛錬の日々、今のようによく考えて組手ばかりしていたわけではなく、子供ながらに強くなるためには戦うのが一番と思っていたのだと思う。

そして、いくら勝負できているとはいえ体格差と言うのは如何ともし難しいものだった。

負けるわけではないが、負担が大きいという現実にはぶち当たっていたのだ。

そんな時に見たのが椎名であった。

『……………うー』

いわゆるいじめであったのだろう、女の子が石を投げられていた。

助けようと思いきやこちらに向かおうとしたのだが。

——ペシ ペシ

『……………え？』

自分ですべて対処していたのだ。

その身のこなしを見て感嘆した。

僕にできるかと言われれば、むろん余裕でできたが、素晴らしい動きだった。

対処されたせいで詰まらなくなつたのか石を投げていた子たちはすぐにどこかに行つたので、僕はすぐにその子に声をかけた。

『こんにちは』

『……(ジー)』

その時彼女は普通に声をかけられたのにビックリしたのか目を少し大きくしてこちらを見ていた。

『僕は高坂虎綱、君強いね。何ていうの?』

『……椎名京』

『へー、椎名つていうんだ。お願いがあるんだけどさ、僕の組手相手になつてくれないかな?』

今思うと何言つてんだろう、僕は? と、いう流れであつたが、その時は多分組手相手が見つかったことに舞い上がつていたのだろう。

彼女も驚いていたが、了承してくれた。

おそらく形はどうあれ人とのつながりに飢えていたのだろう。

その時から僕と彼女はしよっちゅう放課後に組手をするようになった。

『じゃあやろうか』

『……(コク)』

やはり彼女は強く、非常に実りがある組手となり、充実した時間を過ごしていた。彼女も言葉は少ないながらも時折楽しそうにするようになり、友人と呼んでもいいくらいには打ち解けていった。

そして、そのまま形は普通でなくとも友人として関係を持ち続け、ある時彼女は風間ファミリーと言う集団に入ることになった。

なんでもいじめから助けてもらったそうだ。

その時、僕は愕然としたのを覚えている。

僕は彼女が助けを求めているとは思わなかったのだ。

何せ彼女は強かったのだから。

何をされても自分で対処し、耐えていたのだから。

言い訳をさせてもらえるのであれば、僕の流派と言うのが護身術の側面が強かったというのがある。

己の身は凶器である、故に、不用意に抜かず。

そういう精神を教えられ、格下相手に耐えることを選んでいた椎名はそういうものだと思うっていたのだ。

そんなことがあって、僕は彼女のファミリーには入れずとも友人ではあるという関係だ。

「それじゃ、空いてる時に連絡待つてるね」

「うん、またね」

これまで通り空いているときに組手の相手をしてもらう関係である。

助けられる距離にいて助けられなかったと知った時は、彼女に謝ったものだが、

『普通に遊んでくれてすごく嬉しかったよ』

そう彼女に言われて救われた思いだった。

組手の相手と言う遊びと言っていいのかわからないような時間だったが、それが少しでも彼女の助けになっていたのなら、悪いことではなかったと思ってもいいのだろう。

勝手な思いではあるが、目標を達成した時、強くなるのに協力してくれている友人に少しは報いることができるのではと思っている。

なんにせよ、もう少して僕は壁を越えられそうなのだ。

そこさえ超えれば後はただひたすらに挑むだけ。

——勇往邁進だ。

……うん、一子ちゃんの真似してみたけど結構これいい気分になるな。

因みに、その日の出来事と云えば、井上がラジオの放送中にモモ先輩に骨を外された
だけだった。

うん、いつも通りだ。

第三話 化け物爺は生徒を見ている

今日は挑戦者はいないようだ。

毎日いるわけではないのは当然ではあるのだが、少しでもモモ先輩の力を見ておきたい立場としては物足りないものである。

たまには一撃以上持ちこたえる猛者に期待するのは悪いことではないはずだ。

「ギャアアア!! 助けてくれえ!!」

「はー、まて、こいつう」

と思っていると武神が一般生徒を襲いだしたようだ。

武神ご乱心! なんてテロップが頭の中をよぎる。

「ついに籠が外れたか? 何とも恐ろしい……」

なーんて、流石に追いかけている相手が風間翔一であることからそんなことはないとはわかってるけどね。

と内心考えながらもつぶやくと。

「これこれ、人聞きの悪いことを言わんでくれないかのお」

後ろから好々爺が話しかけてきた。

「いや、わかってますって、学長。ただいつものイベントがないから退屈だったんで言ってみたお茶目ですよ。ってか、独り言に反応しないでください。しかも学園の門から、ビックリするじゃないですか」

——川神 鉄心 川神院総代と言う立場につく年齢不詳のおじいちゃん、ぶつちやけ化け物である。

そして、僕はまだ学園に行くためには渡らなくてはいけない大橋——通称 変態の橋——を渡っていない。

それなのにこのお爺さんは僕の眩きに反応してやってきたのだ、しかも回り込んで後ろに。

「ふおふおふお。よう言うわい、あと少しでも間合いに入ってれば投げられとったじやろ、わし?」

「いえいえ、別に害意が無いのでそんなことはしませんよ。そんな短い付き合いというわけでもありませんから信頼していますし」

まあ、投げられることは否定しないけどね。

うん、もしも触れられていたら投げていたかもしれないな。

この人、あのモモ先輩の祖父だけあってたまに妙な悪戯心出すしな。

「ならええんじやが、ところでモモの籠が外れたといったが、そうなる前にやらんのか

い？」

「ご冗談を、すぐに負けてしまうような勝負はしませんよ」

僕の予想では最初の数撃を凌ぎ、投げて極めても、本気になったモモ先輩の一撃が一度でも当たればその時点で負けることになると思っっている。

「ふむ、モモ相手に暫らく粘れるというだけでも大したもんだと思うがのう。ぶっちゃけ、お主のようなものと戦わせればモモも精神修行に目を向けんかと期待しておるんじゃが」

「ハハハ、まあ、ゴールデンウィークに少々遠征を考えているので、その結果次第ではモモ先輩に挑み始めようかと思っっていますので、期待しててください」

この爺さん僕に妙な期待をしているのだ。

身体能力で圧倒しているはずの相手に手古摺れば今までよりも技や精神修行に打ち込むと考えているのだろう。

まあ、確かに今のモモ先輩の精神じゃ後を継がせるのは不安なんだろうがね。

この前なんて川神院に入って師範代を目指さんか？ などと言っってきた。

一子ちゃんの目標と努力を知っている僕としては何とも言えない気分になっただものだ。

鉄心さんも苦渋の決断なんだろうけどね。

大きな組織を背負っている人間だし情だけでは何ともできないのだろう。

「そうか、そうか、では期待して待つとするかのう。ほれもうすぐ予鈴じゃ、いきなき
い」

「はい、それっでは失礼します」

そう言つて学園に向かう。

「ふむ、その年でわしを投げられるような技量を持つというのは末恐ろしいものじゃ
……」

後ろから何か聞こえたが、まあ気にすることでもないだろう。



「たるんどる!!喝つつつ!!!」

朝礼にてあの爺さんの一喝が響き渡る。

きちんと聞いていたS組の面々はいいとぼつちりで、ビクツとしていた。

飢えや野心を持つてとのお言葉だが、ちよくちよくこつちに熱視線を向けてくるのはや
めてほしいものだ。

隣にいる井上なんか視線に押されて少し憔悴しているではないか、可哀想に。

「ふう、なんか妙なプレッシャーだったんだがなんでだろうな?」

「そう？　小さい女の子追いかけてたのみられてたんじゃない？」

「そんなことするか！　俺は愛でていただけだ！　穢れを知らない天使たちを!!!」

はいアウト、今度は付近の生徒から厳しい視線を向けられているね。
さてさて、今年の一年生に一人ものすごいのがいるようだが、うん、彼女も護身の方かな？

うまい具合に隠しているな、まだまだ隠し方が甘いけど。

あれじゃあそれこそ自分より強いのは丸わかりだ。

いや、育ちが良すぎて姿勢を崩せないってだけかな？



次の日、今日は人間力測定である。

普通に体力測定でいいと思うのだが……、鉄心さんの趣味だなこれは。

僕の結果はと言うと、

「スゲーな、ぶつちぎりの一位じゃねーか、細いのになんてなってるんだ？」

「すごいですね、蚊トンプを自称する私三人分くらいですかね？　素敵です」

「まあ一応鍛えてるからね、あと葵はもう一步分離れてくれないかな？」

そうなのである、いくら筋トレ、基礎トレを省いているとはいえその運動量をなめてはいけない、そりや組手、組手と毎日7時間以上してればクラス一位くらいは余裕だ。

隣のクラスなんかには筋トレ筋トレで僕よりはるかに高い筋力を持つ男なんかもあるがそんな例外でもない限りは流石に同年代には負けないだろう。

因みにわがクラスには同年代じゃないのも……、やめとこう、この手の話題は碌な結果を生まないものだ。

どつかのぶりっ子の仮面がはがれかけていることに恐怖なんか感じていない。感じていないんだからね！

なぜだか実力で勝っていても勝てないと思うようなことがしばしばある理不尽はさておき、純粹に驚いている井上に対し、なんか口説きに入っている男は葵 冬馬、学力NO1にして自他ともに認めるバイである。

後半のせいであまり近づいてほしくない。

因みに彼のせいでもつちに目覚めた男もいるため非常に厄介な人間だと思う。何より女の子も漁っているのが許せない。

どつちかに絞れや！ このイケメンが!!

……、ちよつと取り乱したな、反省反省。

「それでもすげーよ、俺だつてそれなりに鍛えてるんだぜ？」

「僕も僕も、がんばってるよー、ホッ、ホッ！」

「そうですね、二人ともなかなか強いんですよ？」

「それでも川神では何とか上の下って所じゃないかな？ 小雪、あんまり暴れないでね？」

いきなり激しい動きをし出す小雪に注意をしながら言うが、実際そんなものである。

川神で本格的に武術をやっている人間たちの中に入れば僕なんてそんなものだ。

目の前のイケメンを除いた二人も実際はもう少し上の身体能力を持っているだろう。

……、まだ僕の方が上かな？

まあ、本物の化け物連中に比べれば誤差誤差、五十歩百歩に目くそ鼻くそ、やってらんないね。

「まあ、川神には川神院があるからなー、そりゃあそのおひぎ元じゃあ大した自信にならないか」

「そうだね、僕は何度もお世話になってるから基準がねえ……、それに毎朝のように見せられる理不尽もあるし、やっぱりたいしたことないんじゃない？ どう思う？ 毎週

骨外されている井上君」

てか、実際言葉にすると真剣で悲惨だな井上、これでロリコンじゃなかったら同情しているところだ。

「違う、俺、片手で自分の骨入れられるようになったんだぜ？」

「準はロリコンだからねー、あ！ ハゲだから関節なくなつてふにやふにやになるんだねー」

「怖いわ!! いくら俺の頭がツルピカでもたこにはならんわ!! てか、ロリコン関係ないよね!!」

……うん、ロリコンでも同情してやってもいいかもしれない。

そして次の日、周囲の環境がさらに騒がしくなる一助となる出来事が襲来することになるがあるが、そんなことは知らずに、その時の僕はただ目の前のハゲを憐れんでいるのであった。

第四話 舶来娘と代理決闘 前篇

あれはない。

もう一度言おう。

あれはない。

「フハハハハ!!!」

「おおー、まるで遠山のようだ!」

あの空間であれば化け物どもの武力すらもかわいく見えるんじゃないだろうか?

信じたくないことに馬と人力車の上でイメージカラー金色の二人が騒いでいる。

いくらK W A K K A M Iでもあんな光景が日常茶飯事になられては引越しを考えな

くてはいけないかもしれない。

そうやって心がどっかに行っている間に決闘が決まったようだ。

一子ちゃんがやるみたいだから見に行ってみることにするとバンダナがトトカル

チヨをやっていた。

彼は風間 翔一で、モモ先輩や椎名とよく一緒にいる風間ファミリーのリーダーだ。

「あ、風間、あの金髪にかけたいんだけど上限幾ら?」

「おお！ 大きく張るねえ、上限は一万までだよ。今んとこワン子有利だけどクリスでいいのかい？」

「うん、それでいいよ、じゃあ一万円をお願い」
儲けられそうなので買って置く。

この直接戦闘のトトカルチョは正直ある程度以上の実力者にとって簡単に儲けられるのでいい収入源だ。

特に今回は正直一子ちゃんにあんたバカなの？ と聞きたくなるような形となっている。

なにせ——

「そこまで！ 勝者クリス!!」

あ、とりあえず賭けには勝ったな。

「面白いわねクリス……、本気でやろうじゃない!!」

一子ちゃんから外されるリストバンド、それは地面に落ちた時に大きな音が出る程度の重りであった。

まあ、あんなのつけてたら負けるよね。

始まってから外してもその隙を許してくれるような相手じゃないし。

もしあれがなければかけようとは思わなかったんだけどなー。

あ、学長に拳骨された。

換金してもらって教室に戻る途中になんか人さらいのような武神が見えた気がするが気にしないでおこう。

あれのために只管腕を磨いていると思うとやるせない……。
つて、学長と喧嘩始めた!! ありがたく見ておこう。

「うん、やっぱりもう少しだな。届かなくともきつと戦える……」

そうして、貴重なある程度本気を出した武神話見ることができ、自分の積み重ねに間違いがなかったと確信できた日の夜、椎名からメールがあった。

『キヤップが転校生をメンバーに入れようとしてる。賛成されたから様子を見たけどそれならトラに入ってほしかったな……。因みに今日は大和に24回振られました』
……いつもながら反応に困るメールだ。

そもそも一子ちゃんと椎名以外特に大きな面識がないから何て返していいかわかんないよ。

『とりあえず諦めないでアタックあるのみだね。結婚式には呼んでくれると嬉しいな』

と言うわけで直江には犠牲になってもらうことにしよう。

——この日、島津僚では友の応援を受けて行われた数割増しの濃厚なアタックを受けつつも、何とか貞操を死守した男がいたとか。



二連休を終えた月曜日である。

昨日までの二連休、僕は七浜に行っていた。

普段九鬼のバイトとして本社を襲撃するという仮想訓練をすることもあるのだが、暫らくは忙しいらしいので他のことをしていた。

まあ、あそこの執事トップであるヒューム・ヘルシング、ヒュームさんはスパルタなので近いうちに抜き打ちで打診が来るかもしれないと思っただが於いておいて。

七浜にある公園にはなぜかジャーキーで相手をしてくれる、何ともお得な壁を越えたお姉さんがいるのだ。

おかげで休日には非常に実りのある修練ができています。

他にも松笠に行けば、竜鳴館と言う何とも変わった名前の高校で館長をしている生まれるのが遅すぎた竜や、それこそ川神院でルー先生——ルー・イーと言う川神学園で体育教師をやっている川神院の師範代——に時間を取ってもらったり、もっとお手軽など

ところでいえば板垣姉妹の次女辰子などと言うのもいる。

おかしい、この近辺はどんな化け物の巣窟なんだろう？

とまあ、そんな感じで実力試しには事欠かない休日をごさせていただいているのだ。

「高坂！ 同じS組として此方の代わりに山猿たちに吠え面を書かせるのじゃ!!」
……何て、現実逃避をしているんだがなあ……。

同じクラスである不死川 心、選民思考に固まった、日本三大名家が一つ不死川家のご息女が吠えている。

その家からの寄付で、指定制服ではなく着物を着て登校などと言う普通じゃない、のカテゴリーに入る少女だ。

因みに三大名家の一つに綾小路家と言うのがあって、日本史の教師を務めていたりもするのだが、その教師も顔を白塗りにしているというエキセントリックな教師なのだがそれは置いておいて。

「いや、なんで僕が……、そういうのは自分でやりなよ」
心はその度が過ぎる選民思考のせいで、正直友達が少ない。

そんな少女が、なんで名家でもない僕にそんなことを頼むかと言うと、

「ホッホッホ、なあに此方の代わりに同じく柔の道をゆくお前に討伐の榮譽を呉れて

やるというのじゃ。喜ぶがよい！」

こういうわけである。

実は、腕を磨き続けているにつれて、渋川先生だけでは足りなくなり、いろんな方々に教えを乞うたのだ。

その中の一人に、彼女の師もいて、僕が柔術を使えるというのがばれているのである。今では、もはや我流の面も強いので、流、などと名乗っていないのだが、同じ柔らの術を使うものとしてある程度懐かれているのだ。

「いや、僕は基本、護身の術だからそういうのは勘弁してほしいんだけど」

「何、遠慮することはないぞ。すでに申し込んできているのじゃ！ しかも相手はF組みで一番強いであろうあのクリスじゃぞ！ 久しぶりにお前の雅な技を見せるがよいのじゃ！」

心いわく、僕のあの化け物と戦うために磨いた、力をできる限り排除した戦い方は雅で美しいらしく、僕の出自にはあり得ないほどに認めているらしい。

それこそ名で呼び捨ててることを良しとするくらいには、だ。

「いや自分でやればいいじゃん。実際強いんだからさ」

そう、彼女は普段バカにされたり、友人がいなかったり、侮りすぎて負け続けていたりするが、実際強い。

それこそ、学園の生徒の中では僕とモモ先輩、あと前に見つけた刀もちの一年生くらいしか彼女には勝てないだろう。

精神性が改善されればの話ではあるが。

「うるさいのじゃ！ 言つたであろう。お前のその雅な技が見たいとな。それでは行くぞ。……ほら、ついてくるのじゃ！」

どうやら拒否権はないようだ。

いや、断ろうと思えばいくらでも逃げれるのであるが、一応お世話になった人の愛弟子だ、少しくらいの人間は大目に見るべきかな。

死合つてわけじゃないし……、と自分を慰めながら引きずられていく。

「うおおおおお！ S組を倒せ—— エリートどもに意地を見せてやるんだ！」

「S組の生徒対F組の転入生クリスの決闘だよー！ さあ張った張った。今の常クリス有利だ！」

「クリスきーん！ いつも俺らを見下す奴らを倒しちゃってくれー！」

会場であるグラウンドについて帰りたくなかった。

なにこのアウエー感？

心が仕掛けたってだけでこれってもう半端ない、実際に戦う僕もちよつと傷つくんだが……。

あ、見知った三人を見つけた。

「あ、井上、僕この空気の中戦わないといけないの？ 変わってくれない？」

「おう、相手はお前になるのか。まあご愁傷様、頑張ってくださいよな」

「うえーい、トラー、8対1だつてートラにかければ大儲けだねー」

あ、ちよつとカチンときた。

まだ相手が分かつてないんだらう段階からこれつて舐められ過ぎじゃないだらうか

？

僕を指してじゃなくても腹が立つ。

「うん、じゃあ限界まで僕にかけるといいよ、儲けさせてあげるからさ。ついでに俺の分も買つといてよ」

「ほほーう、すごい自信ですね。相手はあの川神さんに勝ったクリスさんですよ？」

大丈夫なんですか？」

「うん、負ける気はないよ」

「お、なら俺もかけさせてもらうかね。もし負けたら今度暴力ラジオの身代わりゲストになつてもらうからな」

「いいよ、その代わり儲けたらおごつてね」

「おおー、頑張れートラー」

そう言つて級友たちのもとを離れて中心地に向かつていく。

「なんだ、高坂が相手なんだ」

「ほー、イケメン優男か。クリス！ たたんじまえ!!」

「ガクト、嫉妬心抑えて、見苦しいよ」

その途中F組みの直江 大和、島津 岳人、師岡 卓也に会った。

「うん、このアウエー感に帰ろうと思つたけど、賭けの倍率聞いてちよつと思つところがあつてね」

「いや、不死川の引つ張つてくる奴つてだけで、お前のことを対象にしての結果じゃないぜ？」

「まあ、わかつていても俺様はクリス一択だけだな」

「ちよ、ガクト、本人の前だつてば」

「はは、それじゃあ僕にかけた人をもうけさせるために頑張るかな？」

「え？ トラが相手なの？ キャップ、トラに限界額で」

「うーん、高坂君がやるのね。キャップー、高坂君に3000円お願い」
うん、僕がやるとわかつたら椎名と一子ちゃんは賭けてくれるようだ。

その様子に男三人は驚いたようだ。

「え？ 相手はクリスだぜ？ 高坂つてそんなに強いのか？ 京がそんなに強気で賭

けるなんて。俺もうクリスに限界額賭けちゃったんだけど」

ふむ、やはり直江もクリスが勝つと思っているのか。

「ワン子も大丈夫なの？ バイト代そんなに多くないのに賭けちゃって」

一子ちゃんのお財布を心配して言う師岡、てか一子ちゃんにかけられたらますます負けられないな。

うん、モモ先輩にまだ目はつけられたくなかったが、まあ目処も立つてきたし少し頑張っちゃおう。

「二人ともありがとう。期待しててね」

なんだろう、ギャラリーが多い試合なんて初めてで少し興奮してくるかもしれない。

Fの風間ファミリーの面々の騒ぎを背に人ごみの中心へ歩いていく。

「ウム、競技は武器制限なし、時間無制限、直接戦闘と言うことだが相違ないな？」

鞭を持った世界史教師、小島 梅子先生が、向かってくる僕を見て言う。

「来たか！ Fクラス代表、クリステイアーネ・フリードリヒだ。尋常に」

そう言つてワッペンを出す。

この川神学園には決闘システムと言うものがある。

これは競技を問わず決着をつける際に、お互いのワッペンを重ねることで成立する、競い合いを推奨するこの学園を象徴するシステムだ。

少し危険のある直接戦闘でさえ、教師の立会いの下許可されるのだ。

——ああ、思えば戦闘による決闘は初めてのことだし、少し楽しみだ。

「S組、不本意ながら心の代理として戦うことになった高坂 虎綱だ。よろしく」

——まあ、相手も弱くもないし何事も経験だ、糧にすることにしよう。

二つのワツペンが、校庭の真ん中で重なり、決闘が成立した。

第五話 舶来娘と代理決闘 後編

「それでは、はじめい!!!」

さつきまで小島先生だったはずがいつの間にか学長が仕切っていた。

因みに視界の端で我らが担任宇佐美 巨人、通称ヒゲ先生が小島先生に振られてい
る。

うん、どうでもいいな、決闘に集中しよう。

「行くぞ!!!」

と、丁度良く相手も向って来るようだ。

てか声出しながらって親切すぎるだろう。

クリステイアーネ、長いからクリスにしよう、そう呼ばれてたし、はフェンシング使
いだ。

払いや斬りがないわけではないが特性上ほぼ突きと言う直線攻撃である。

なにが言いたいかと言うと——

「何?」

——相性が良すぎるんだよな、これ。

踏込と突き出しのぎりぎりの範囲に体を下げ、すぐ目の前に切っ先がある状況で言う。

「うん、なかなか早いね」

「クツ！ バカにするな！」

予備動作からわかるが間違いなく連撃だろう。

しかし、改めて言うのと相性が良すぎる。

柔術と言うのは武器を持っていては相手に対抗するために作られたのが起源であるからして、突きメインの、反応できる速さであるのならば対応はいくらでもできる。

「素直すぎるよ」

「な!!」

今度は体の軸を変えて向きを少し回転するだけで僕のすぐそばを過ぎていくクリスのレイピア、ついでに引かれる前に横っ面を押ししておく。

伸び切り、一瞬静止した棒を横から押せば、何も不思議なことはなく軌道はぶれて連撃につなげられない。

素手で武器を払われて驚いているようだ。

うん、彼女は武器は自分の一部として用いられる技への対処ができないようだ。

切れ味では類を見ない刀でさえ、刃がふれなければただの棒なのだ、加えて重心まで

通っているのであれば利用しない手はないというのに。

「なら!!」

苦し紛れに難いでくるが、甘いんだよなあ。

僕がレイピアの間合いの内側の最奥にある安全地帯、つまりクリスの目の前にたどり着く方が早い。

「ホイ」

ついでにその勢いだけで当身をしておく。

中途半端に無防備な人間に変に技掛けると怪我しちゃうからね。

「くあ!」

後ろにたたたらを踏んでまた少し間合いが開く。

「舐めているのか!!」

と、こ立腹のようだ。

「何がかな?」

「なぜ追撃しない? 自分は無防備で貴殿の好機だったはずだ! それを明らかに見

逃すなどどういうつもりだ!!」

どういうつもりも何も。

「怪我させないようにするためかな?」

「ツツツツツ!! 貴様あああ!! 騎士を侮辱するか! 戦うと決めた以上上げがなど覚悟の上だ!!」

うん、立派な覚悟である。

だがしかし、

「うん、君に矜持があるように僕にもあるんだよね、弱い人に怪我はさせたくないんだ」

「うあああああああ!!」

あれ? 言い方ミスったな。

明らかに切れて一撃にかけてきている。

確かに早さも桁違いに上がっているがむしろ好機だな。

これなら抵抗されて傷つける心配なんてないだろう。

全力であろう一撃の軌道に合わせて足を延ばし、重心を下げながら懐に入り込み、一番速度が乗った瞬間にさらにクリスの袖を引いて速度を乗せてやる。

加えて踏み込んで来た右足に自分の足を合わせる。

自分の制御できる速さを越えた勢いに加えて、踏込の足を殺されればあとはこけるだけだ。

崩しがこれだけ綺麗に決まれば後は僕の流れだ。

普通であればここから更に力に方向性をつけて投げが完成するわけであるが、すでに崩しの方向がそのまま投げべき方向へ向かっているため、反射的に動こうとするのを僕の動きの起点にして反転することで邪魔をしてやれば、あとは地面に顔から叩きつけられるだけである。

これが僕の磨いた柔らの理の根幹、流れに乗せてしまえば少なくとも流れが切れるまで抜け出すことはできない。

——のだが、僕によつてつかまれた後襟に引つ張られ、クリスは地面すれすれで止まる。

「まだやるかい？」

「……参った」

「そこまで！ 勝者高坂!!」

自分の背後から支えられている形なんぞ取られたらもう負けを認めるしかないだろうね。

——うおおおおおおおおおおおおおお!!

すげーぞ！ なんか決まった動きのように投げられてたぜ！

いつもみたいによく見えない戦いと違ってスゲー綺麗だったぜ！

くそー!! クリスに全力でかけてたのに!!

うん、大歓声のようだ。

まあ、聞こえがいいやつを意識したが、大部分が最後のよ様な叫びなのは聞かなかつたことにしよう。

「ありがとうございます」

「……ああ、こちらこそ」

あ、やっぱり試合中の言葉のせいで睨まれてる。

一応弁解しとくかな、多分印象回復はしないだろうけど。

「ちよつと言いつつ訳させてもらうと、僕の使う柔術は根幹が護身術だから仕合や死合以外で壊す技は使いたくなかったんだ。特に僕の方が強かったからね、格上に勝つために作られた武術でもあれば、それ以外は殺さず制するために刀を捨てた武士の戦い方だからね」

うわー、これ結局お前より格上だ！ って宣言してないかな？

大丈夫か僕。

「おお、武士？ 高坂殿は武士なのか？ なるほど、これが噂に聞く不殺の心得と言うやつなのだな!! なるほど、侍の高尚な心根だな!!」

えー、反応するのそこなんだ、チョ口過ぎじゃないか？

大丈夫かこの子。

「まあ、そういうわけで、覚悟を侮辱したように感じたなら謝るよ」

「ああ、受け入れよう。願わくばまた手合わせ願いたい」

それはもちろん

「喜んで」

さて勝った勝った、ついでに僕に賭けてくれていた級友たち誘って風間んとこに金受け取りに行くか。

「井上、葵、小雪！ どうだ、儲けさせてやったぞ！」

「いやはや、本当に強いんですね」

「ああ、ビックリだ。ほれ、お前さんの分だ、約束通り今度おごってやるよ」

「サンキュー、もう換金してたんだ。風間たちのとこにドヤ顔で行ってやろうかと思つたのに」

「ちよ、性格悪いな！ おい！」

「ま、今回はちよつと気分悪かったからね。それじゃああつちで必要以上に煽って調子に乗ってるお嬢様回収して帰るわ」

「おお、またな」

「はい、また」

「これは竜兵たちの言っていたことは間違いないようですね」

「ああ、正直びっくりだぜ。あそこまですとは」

「あははー、僕はわかつてたよー。トラは強いって」

「ほう、どうしてですか？」

「だってトラは切れちゃってるんだもん、途中で」

「切れてる？ 必要以上に冷静だったと思うぜ？」

「ちがうよー。僕とは違うけど少し似てるんだ、僕は壊れてるけどトラは切れてるんだ」

「あー！ ユキの言ってることはやっぱりわかんねー！」

「フフ、私は少しわかりますよ？ だって——」

彼からは驚くほど嘘を感じませんから

「はい、心そこままでにしようなーもう帰ろうねー」

「おお！ 高坂！ 美事、まさに美事な技であつたぞ！ 見るのじゃこの打ちのめされた山猿どもを……って離すのじゃまだ此方は……こら極めるでない！ っちよ、動け

ないのじゃ——!!」

「ごめんねー、それじゃあお騒がせしましたー」

なんとというか、ここに来た時と逆の構図で帰ることになったな。

うるさい心を極めながら、また、後ろから妙に鋭い視線を感じながら帰路に就くのであった。

少なくとも、あの時と違って目を向けられていることに小さな達成感を感じながら――

第六話 努力娘との分かれ道

有名人と絡むと有名人になってしまふのは必然である。

なんか昨日までと比べて妙に視線を感じる高坂です。

さてここで僕の持論であるが、護身の心得として大きく分ければ二つある。

一つは隠すこと、自分に力がないと思わせられれば厄介事には巻き込まれない。

これを昨日まで実践してきたがやはり効果的だったのだろう。

そしてもう一つは示すこと。

こちらは力を持つていないといけないが、自分の持つ力を見せてやることで露払いをするのだ。

たとえば知力、たとえば財力、権力何ていうのもある、そしてもちろん武力もだ。

要するに何でもいから敵わないと思わせればいい。

こちらを昨日決闘をすると決めた時から実践することにしたのだが、どうやらここ川神学園での効果は薄いらしい。

感じる視線は興味本位のものから好意的なものまでであるが、一際鋭いのが好戦的なものであるのだ。

少し辟易するが、僕としては護身護身言いながらも別に戦うことが嫌と言うわけではないので開き直ることにした。

と言うわけで今一人の巨漢と向かい合っているのだが、

「二年の高坂虎綱だな？　俺は柔道部主将の飛田だ。　昨日の決闘には感銘を受けた

！　俺が勝つたら是非柔道部に入ってくれ!!」

うん、最初にしては気持ちいい理由での申込みだな。

そうでなくとも戦うことには否などはないのだが。

「はい、わかりました。　じゃあ俺が勝つたら入部はしないけどしたいときに自由組手を柔道部とさせてもらってもいいですか？」

「願ってもないことだ。　その技を受けることができる機会があるだけでも実りがあるものになる。　では柔道場に行こうか」

おやおや、この人きちんと技量を理解して挑戦してきたらしい。

下手すれば準ワン子ちゃんくらいの強さはあるかもしれないな。

実際に戦えば柔道に凝り固まつてる分勝ちはできないだろうけど。

そもそも打撃技を省いてしまった武術である柔道は、言つては悪いが実践ではかなり劣るものとなるだろう。

もちろん実力があれば強いのに変わりはないが、同程度の実力であれば下手すれば喧

嘩殺法に負けるだろう。

何せ近づいてしまえば強力であるが近づくための技術を、道を学ぶものとして省略してしまっているからだ。

何せ、道、という所謂武道と言うものは、規範と言うものを重視する傾向が強い。

簡単に言うただだ道を歩いているときに、理由もなく大多数に囲まれてルールもなく襲いかかられる状況と言うことをほとんど想定することがないということだ。

そんなことを想定している方がおかしいのかもしれないが、そのおかしな人間と言うのが俗にいう武術家だ。

護身と言う綺麗な言葉を誇りとしている僕も、競技としては反則もよいところである急所攻撃やら追い打ちやらにはかなり入れ込んでいる。

——とまあ、結局のところは、新規の組手場所一軒キープってことだ。

因みにそんなことをしている間にSF大戦は知力戦とそのあとに駆けっこだったりと白熱したものが繰り広げられていたらしい。

……うん、SF大戦、気に入った。

何て出来事がありながらGW前日である。

そこで僕は、その日の川神院での組手の後に、一つの誘いを受けていた。

「それで、せっかくの連休だし一日みっちり川神院で鍛える気はないかね？」
ルー・イー先生である。

この前言っていたこの近辺に生息する壁を越えたものの一人、いわゆる化け物である。

どうでもいいが常にポージングを取っているのに意味はあるのだろうか？

……拘りは人を強くするってことで納得しておこう。

「ありがたいのですが、僕と川神院の稽古は相性が悪いんですよ。川神流は剛柔一帯の流派ですよ。僕の戦い方は意図的に剛の術を省いているので、同じ稽古をさせていただくのは遠慮させていただきたいのですが……」

僕が偏っているのもあるが、実際川神院と言うのは武の聖地であり強うなるために理想的な場所であると共に、多くの人間に無意識の妥協を強いる場所だと思う。

あそこは才能の低い人間を押し上げることと、才能のある人間が高みを目指すという二極に見える。

ありていに言うと、僕や一子ちゃんを始めとした大多数のある程度の才能の人間が壁を超えるに至らせる可能性はとも低い場所だろう。

大勢を一步進ませることはできても、所詮は一步なのだ。

大股全速、更には飛行能力までついてるような人間に追いつくにはあそこのやり方は

落第だと思ふ。

もちろんその大勢を進ませる指導力やら意欲は敬意を示すべきではあるが。

「ウーン、それならいつもより時間を取つてより多くの組手をしに来ないかい？ 正直

君との組手が刺激となつて門下生も多イんだヨ」

おお！ ちよつと失礼なことを考えていると願つてもない提案だ。

流石川神院、大好き川神院。

だが、武神、てめーはだめだ！

「それなら是非お願いしたいです。川神院での組手はやはり得ることが多く、充実していますから。できれば今回はルー先生とも経験を積ませていただきたいですね」

「受けてくれるかい？ ならワタシも組手の相手くらいお安い御用だヨ」

よし！ このゴールデンウィークに掲げている一大イベントに組み込めそうない返事をもらえた。

「それでは、急で申し訳ないのですが、用事もあるので連休初日の明日お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ウン、待つてるヨ」

うん、楽しみだ。

それにしても僕、しよつちゆう行つていだけあつて院の人には好かれているんだよ

な。

武神なんかは最低限やった後遊んだりバイトしたり女漁ったりして接点少ないけど。あらためて見ても理不尽だ。

その帰り、まだギリギリ日が沈む前に川原に二つの人影があった。

一子ちゃんと島津だ。

「あ！ 高坂君、今から帰り？」

「おう、昨日行クリスと戦った奴か、てか、ワン子とは知り合いなんだな？」

「どうも、二人とも。うん、川神院で組手をよくさせてもらっているよ。そして今もその帰り」

「げ！ 道理で強いわけだけ。今度賭けがあつたら俺様ももうけさせてもらうからな！」

「うん、その時は応援してくれると嬉しいな」

「ねーねー、高坂君、ちようどいいしちよつと組手していかない？」

どうやら川原で修業をしていたようだ。

魅力的な誘いであるが、

「ごめんね、これから用事があるんだ。それに、ルー先生に誘われて明日みっちり川神院で組手をする事になったからそのときにね？」

そう、これから堀の外にある、いわゆる違法闘技場である青空闘技場に師の一人である渋川先生に誘われているのだ。

因みに武神は明日から鉄心さんと無理やり精神修練合宿に行くらしい、まああのモチベーションじゃあ効果は見込めないだろうが。

「本当？ 楽しみだわー」

「うん、頑張ろうね」

そう言つて二人と別れる。

——一子ちゃんは僕にとって失礼な話反面教師であつた。

もちろん嫌いではないし、あのやる気には頭が下がる思いだ。

彼女とは、彼女が武術を始めた時からずっと同じ目標を抱いている。

武神に追いつく。

その思いのルーツは正直逆に近いが方向は同じであつた。

そして僕は漠然と見ていた捨力の境地を目指しながらもやはり不安であつた。

修練方法から目指す先まで、目標が理不尽すぎて悩みは尽きることがなかつた。

そんな時助けになつたのがともに道を走っている一子ちゃんだ。

彼女は僕とは違う方法で同じ道を走っていたのだ。

おんなじ道を走る仲間がいるというのは非常に心強いことである。

そして、お互いに差が出るにつれて、比べることで自分の方法は正しかったと励まされてきたのだ。

もちろん一子ちゃんに進めることもできたのだがそれはしなかった。

それはもちろん意地悪から何て理由ではない。

思いのルーツの違いだ。

彼女が底を目指す理由がモモ先輩の力になるということである故に、僕のような方法は向かないのだ。

それこそ明日壊れても構わないやり方、さらに言えば、ここにたどり着いたからこそ師範代を目指すさなかなどと言われているが、最初から目指すにあたって正規の修業を積んだ人間とそうでない人間、どちらが好ましいかなんて言うまでもないのだから。

そんなこんなでこういう形にはなっているが、それでも僕たちはかけがいのない同道を行くものであり、一子ちゃんも変わらず親しくしてくれている。

おそらく僕も、今の立ち位置が逆でも笑って受け入れられるだろう。

僕たちの関係と言うのは、ライバルとも違うが、かけがいのない同道者なのだと思う。

因みに、青空闘技場は参加もしたが、経験よりも賭博の儲けの方が目立つあまりいい

ものとは言えなかった。

たまに板垣も来るらしいので保留である。

さて明日からの大型連休、かねてから企画していた一大イベントを実行する予定だ。

これは武神に実際挑み始めるにあたっての最終試験として己に課すものだ。

題して

ドキ!! 化け物だらけの数え組手!! ぽろり(おもに上裸の男)もあるよ☆

……うん、今回のノリはあまりよろしくないな。

第七話 有限地獄連続仕合 一日目前篇

さて、今日は約束通り川神院に朝から赴いている。

モモ先輩と鉄心さん、それについていった一部の門下生以外が懸命に稽古をしている。

聞いた話では、風間が検証で当てた旅行が予定に入ったために合宿ではなくなったそうだが、一応一日自然の中で瞑想させるらしい。

いてもまだ戦う気がないから出かけること自体がなくならずに好都合だ。そんな中いつも通りに組手を繰り返し、一子ちゃんの番が回ってきた。

「よろしくお願いしますー！」

「よろしくお願いします」

当然武器の制限などはないため、一子ちゃんは薙刀装備だ。

しかも監督者がいるため刃引きなんぞはしていない真剣と向かい合うことになる。まあ、あんな範囲の狭い刃に当たってやる気などないのだが。

「はっ！ つほ！ せええい!!」

何度も組手しているだけあって、小刻みな攻撃を繰り返してく一子ちゃん、クリスと比べて武器を使うということに対しては格段にうまく、僕の流れに乗せられないように頑張っている。

そりやあれだけいっばい投げられていればそうなるよね。

こういう組手をお願いしているだけあって、ここでの組手は指導ともいえるような形でじっくりやっている。

そういう意味では一子ちゃんは上手くなった。

薙刀と言う武器の特性、回転で刃部分と柄の部分とうまく使うことによつて、攻守のバランスは悪くない。

現状流れは一子ちゃんにあるといつていいだろう。

「っし!!」

「っ・っくー!」

まあ、そうであるのならばいくらでもやり様はある。

回転の間を縫つて首元に向かい貫手を放つ。

が、いかんせん僕程度の仕掛けたものだ、よけられてしまう。

でも、そんなの想定していない方がおかしい、せつかく首元なんて言う絶好の位置まで手を伸ばすのを許されているのだから、ただそのまま戻すはずもなく。

「ほいっと」

「キャン！」

襟をつかみ、避ける、と言う動きで既に十分すぎる崩しが成っているのであるからして、あとは地面にくみ臥すだけだった。

「そこまで！」

終了の合図がかかったためすぐに解放する。

「ありがとうございます」

「うう、ありがとうございます」

やはり攻勢を一手で覆されたのだから悔しいのか少し涙目の一子ちゃん。

「ほら、泣かないの。この前より考えてあったから少し掴みに行きづらかったし、成長しているよ」

「うん、でもやつぱり一回で簡単に負けちゃうんだから悔しいの」

いや、それはできる限りそうしてるしそもそも、

「そこで自信なくされても困るよ。だいたいそういう戦い方をする武術なんだから、僕の柔術ってやつはさ」

そりゃ、まともな一撃もらわない様に制圧するためのものだからやすやすと抜けられては困る。

それができるのは関節のない生物か、化け物連中くらいであろう。

「そっか、うん！ それでも今度こそ攻撃を当てて勝って見せるわ！」

「その意気だよ。実際僕から動くような展開になってきたからね、もう少しだよ」

まあ、僕の場合攻撃を当てられるようになってからが本番のようなもののだが。

「よしそれじゃあ、アタシは稽古に戻るわね！」

そういつて稽古をしている門下生たちの方に戻っていく一子ちゃんを見送り、気を引き締める。

そう、ここからが本番であるのだ。

ルー先生をはじめ、師範代候補生との組手が待っている。

「ありがとうございます」

とはいえ、候補生に負けているようでは化け物たちに挑もうとは思わないけどね。

触れられてからが本番と言う言葉通り瞬殺である。

何せ先ほどまでと違い紙装甲の僕にとってはこのレベルの攻撃にも結構必死なのだから指導がどうか言うとか言ってられない。

んで、メインディッシュであるルー先生のわけだが、ついに始まる化け物連戦。

この四日間で何戦できるかはわからないが、白星が多ければ武神に挑戦しようと思っ
ているのだ。

その記念すべき一戦目だ。

「ルー先生、今日は仕合のつもりで挑みますのでよろしくお願いします」

「ウン、よろしくネ」

ま、どつちにしろ僕が格下なのに違いはないのだから手加減なんてできない。

それでも、

「それでは、双方よろしいか？ ……では、始め!!」

性能の差が絶対の基準じゃないということを証明してやる!!

「ハイ……!」

もちろん先手はルー先生だ。

このレベルの相手に自分から攻めるなんて自殺行為もいいところ。

桁の違う速さで襲ってくる手刀であるが、こんな様子見にやられてやるわけには行け
ない。

わざとまだ勢いの感じられる領域でかすらせて、その勢いを自分の体に乗せて足刀を
顔に向けて撃つ。

その際軸にした左足が熱くなる勢いだ、半端ない。

そんな蹴りもルー先生にとっては見戲なのだろう、空いた方の左手で受け止めるが、それは悪手！

「ヌワ!？」

「っセイ!!」

軸足に貯めた勢いに抵抗せずに左足をルー先生を挟み込むように足元を払う。

僕の手だけでは足りないだろうが、そこはルー先生の力がこもった勢いなのだ、あとは相手の体を重心で見、正確な位置に於いてやれば幾らでも投げられる。

「取った!」

そのまま僕も宙に浮いてしまうが、受け止められた左手を足で固めて自分の手で固めれば、変則飛び関節の出来上がり。

——ゴキントツ!

「グツ!!」

通常であればそのまま押さえつけて制するのであるが、相手は壁を越えた化け物、容赦なく外させてもらう。

ある程度のレベルになれば、あらゆる衝撃に強くなるなんて世界ではあるが、関節はそこまで顕著ではないのだ。

それに、修業や経験で着脱自在なんて言うのはよく聞くと、物語では痛くもないなどと言うのはあるが、あれは嘘だ。

慣れれば耐えることは可能だし、動かせる程度にはめなおすこともできるだろうが、痛いものは痛い。

さらに、自分で外させてしまえばそれこそ丁寧にやられれば影響は少ないが、僕の意思で外したのだ、それは激痛であろう。

さらに、

「つく、やるネ」

入れようとするルー先生であるが、

「甘〜」

わざわざそんな隙を許す必要などないのだ。

せつかくはずして死角となっている左半身に貫手を放つ、が、流石は師範代、受けたり、普段は推奨されるギリギリの見切りと言った手ではなく、この場の最善手の飛び退くという選択をした。

僕が動きで追いつけないのだからそれで正解だ。

「やるネ、今ので分かったヨ、接近戦では分が悪イ。ワタシの切り札でさえ破られるかもしれないネ」

——ゴキツ！ ビキツ！

非常に苦い顔をしながら腕を入れるルー先生。

慣れてるとはいえ、ああも過剰にねじつてはずしてやればそりやあ入れる時でさえ激痛だ。

それで普通にしゃべってるのだから恐ろしい。

「ありがとうございます。それでもこうも簡単に距離を取られちゃうんだから難儀なものです。」

苦笑しながら返す。

「それじゃあこんなのはどうかナ？ ストリウム光弾！」

来たか！ これが化け物たちと戦う最大の壁だ！

気、と言うものがある。

それは自分の力を底上げしたり、回復力をあげたりと非常に便利な内功と呼ばれる比較的鍛えやすいものと、今放たれた外功と言うそれ自体に影響を持たせたものがある。

どちらにせよある程度までは誰でも鍛えられるものであるが、それを昇華させるには元の才能である絶対量が必要不可欠だ。

僕も鍛えることのできる限りは鍛えているが、いかんせんここでも物を言うのは才能

だ。

未だに使用に値するほどの外功など身に着けられていない。

なにか言いたいかと言うと、この後の展開は打って変わって一方的であった。

近づききれず倒れ臥してしまふ。

「そこまで!! 勝者、ルー・イー!!!」

「ありがと……う、ごさいますし……た」

「ウン、いい戦いだつたヨ」

こうして、二十発……に及ぶ豊富な気の攻撃を受け続け、第一戦目は黒星に終わるのだった。

第八話 有限地獄連続組手 一日目後編

今日、第一線目のルー先生に負けた高坂です。

そして今僕はSMクラブにいる。

別に目覚めたわけじゃないよ？ 凹されて気持ちよくなっちゃったとかじゃないよ？

うん、誰に言い訳してるのかわからないが、今僕はそのクラブのベットの所で女王様を待ちながら体を休めている。

「なんだい？ 見たことがあると思えば、よく殴りこんでくるボウヤじゃないかい。いつも来るのは甚振られたかつたからってことかい、ならそういえばいいのに」

ボンテージ姿で現れたのは板垣 亜巳、板垣さん姉妹の長女である。

とても心外な勘違いをしてくれているが、もちろんそんな理由でここに来たわけではない。

「どうも、亜巳さん。違うから嬉しそうな顔で鞭を振りかぶるのやめて。いや、つちよ？ 真剣で！」

「遠慮しなくていいんだよ？ 金払ってきてるんだ。アタシに嬲られる権利はあるさ

ね」

「ホント違いますから！ ここには亜巳さんに会いに来たんですよ！ 予約さえ入れればここなら確実に会えるから！」

「なんだい、口説きに来たのかい？ それならもつと従順な豚になってから来な。

……いや、結構かわいい顔してるしそうなるように調教してやるのもいいかもねえ

……」

ひい！ やばい、なぜか何言っても危険な方向に行っている。

いやそりゃこんな場所であってるんだから仕様がなないけどさ。

クソ！ 自業自得か？

「いや、本当に会いに来ただけだつて。ついでに今夜の時間をもらいたい。仕事と言うことで金も払う準備もできてる」

「なんだい、抱きたいのか。まあ金額次第じゃ考えてやってもいいけど高いよ？」

墓穴うううううう！ なんだよこの場所！ 違和感ないよ！ ちよつとは仕事しろよ違和感!!

もういい！ さつさと用件を伝えてしまおう！

「本当に勘弁してください。ちよつと亜巳さんに頼みたいことがあつたんですよ」

「頼み？ こんな場所で何を頼むつもりだい？」

やっと話を聞いてもらえるようだ。

いや？ 残念だなんて思ってたないよ？ ホントに。

……少ししか。

と、気を改めて用件を伝えよう。

「辰子さんと戦わせてほしいんだ」

「辰子と？ それなら本人に頼めばいいじゃないか。たまにやっているじゃないか」
そう、たまに戦っている。

でもそれは――

「違うんだよ。今日は真剣な辰子さんと戦いたいんだ」

空気が変わった。

先ほどまでの流れから少しからかうような雰囲気が一気に払拭されている。

「……アンタ本気かい？ 死ぬよ？ いつもの辰子と戦っていて勘違いしているならよしときな。アンタの想像以上だよ」

そんなことを言われても、

「覚悟の上だ」

その上と戦う覚悟まで決めているのだ今更である。

言いながら札束を取り出す。

「これから一晩分の代金を含めて百万用意した。いつも上客を取っている亜巳さんでもこれだけあれば足りるよね？」

そういつて取り出したお金に本気度を悟ったのか息をのみ、

「わかった、ついて来な」

了承してくれた。

「ありがとうございます」

うん、九鬼でバイトしててよかった。

あそこ能力給だから払いいいんだよな。



堀の外にある工業地帯、その廃工場の一つで待っていると、ずいぶん眠そうな女性を連れて亜巳さんがやってきた。

この女性が板垣 辰子、板垣姉妹の次女にしてその実力は壁を越えたものと言える。

この人も実に才能に愛された人間であるが、やはり武神には及ばないであろう。

ならば腕試しの一つとしてふさわしいではないか。

そのあとに続いて二人ほど人が入ってくる。

一人は見覚えがあり、小柄なツインテールの女の子、板垣 天使である。

この子、名前の読みがエンジェルでありその名にコンプレックスを持っていて呼ぶと切れる、ブチ切れる。

そしてもう一人はなんかさえない中年だった。

だがその醸し出す雰囲気は——間違いない、この人も化け物だ。

「そちらの人は？」

「オウ、こいつらの師匠やつてる釈迦堂っていうんだが、本気の辰子とやりたいなんて言うアホがいるっていうから見学に来たんだわ。まあ、今日生きてたらヨロシクな」

釈迦堂……!! そう言えば川神院にはもう一人師範代がいたな、僕と接点のないうちに破門になったらしいから覚えてなかったがなるほど、この人が釈迦堂 刑部か、なるほど、強い。

「そうだけ、いつも好き勝手やつてるからつて調子に乗りやがつて！ ウチが負けておねんねしてるのを思いっきりシヨットしてヤンからな！」

うん、何て姉妹だ。

一番の化け物である辰子さんが癒しとはこれいかに？

「ん〜、あ〜、高坂君だ〜。本当にやるの〜？ 痛いのだなあ〜」
ほんわかしてる。

非常に申し訳ないことにこの人にこれからとつても痛いことをしなくてはいけないのだ。

……なんかひわ、いやいや何考えてるんだ？

さっきの亜巳さんとの会話が後を引いてるのか？

「辰子、今日は相手がお望みなんだ、真剣でやっていいよ」

そう亜巳が言うのと空気が変わった。

「ウ……ウアアアアアアアアア!!!」

突然襲い掛かってくる辰子さん。

そうだ、これだ。

この亜巳さんの言葉がキーになるからわざわざあんな所まで行ったのだ。

迫りくる手、もう型もくそもない只々野生の一撃に笑みを浮かべ——

——ゴキーン!

「へえ、やるじゃねえか見誤ったか？ 思い上がったガキかと思ったが」

あいさつ代わりに手首を外してやる。

速度の出ている物体は、横からの一撃に弱いのだ。

固定された棒、骨への大きなダメージは期待できないが勢いがあるものほど軌道をず

らされると大きく暴れ、繋ぎ目を破壊する。

それを見て外野は何かを言っていたが、

「ウガアアツあああ!!」

こうなつた辰子さんは獣だ。

この程度の怪我などものともしない。

むしろ手負いの獣となる。

ならば、

「動けなくなるまでやり続けてやるよ!!」

これしかないのだ。

左手で来る、こちらも外す。

外れた腕で殴り掛かってくる、肘まで届かせる余裕はない。

ならば勢いを利用して円の動きを作り顎を打つ。

すさまじい威力のためすべては流し切れない、夕方の一戦が響く、がまだまだ動ける。

捨力は伊達ではない、体がきちんと動くならばまだまだやれる。

少しは脳が揺れたようでも動きの精彩が欠ける、流星に脳が揺れば万全とはいかないの
だろう。

それでも足が来る、好機、幾ら獣でもここをやれば格段に弱体化だ。

精彩が欠けて揺れた動き、これなら投げられる！ 振り切つた瞬間を狙つてさらに跳

ね上げ、上がった右足を軸に振りながら倒れこみ巻き込む。

空中での移動力は格段に落ちるため大した抵抗もなくひざを折りながら倒れこむ。

それでもまだ立とうとするが、流石にこれなら僕からも仕掛けられる。

肩を支点にした投げ、——一番脳が揺れる小刻みな振動が頭に伝わるもの——をかけてやれば、流石にもう起き上がってこられることはなかった。

二戦目、板垣 辰子戦、白星。

「っしやあ!!」

きつかった。

少しでも戸惑えばすぐに持って行かれる威力だった。

夕方のダメージも加えて非常に辛い、——が

「ひゅー、すげえじゃねえか兄ちゃん。その程度の才能で辰子をやるか、舐めてたわ。それで、おじさんとも遊んでくれないかねえ!!」

今夜はもう一戦やってやらないといけないらしい。

「川神流無双正拳突き!!」

川神流師範代二人と一日のうちに戦うとか一般人には悪夢だな。

いや、もう日付跨いだか。

迫りくる正拳に先の辰子と同じ要領で勢いをそらす。

が、流石に磨かれた正拳は脱と緊が絶妙で、関節を外すには至らない、しかしそれでも軌道はずれる。

即ち、崩しの出来上がりだ。

それならばやることは一つで投げるだけ！

ルー先生戦で分かったことだが、やはり崩してさえしまえば柔の理からは逃れられず、化け物連中でも十分に投げられる。

力がないということは、力では抜けられないということだ。

「ぐあ!!」

それを証明するように、無双正拳突き勢のままに釈迦堂さんは地面にたたきつけられ、ダメージを避けられなかったようだ。

それもそのはず。

受け身をとれないように投げたからだ。

受け身と言うのは、それぞれ衝撃を逃すためのキーがある。

後ろ受け身なら背の着く流れ、横なら方の入る位置、前なら腕をつく位置もしくは共通して回転に変える動きだ。

それを、今のように腕を封じて前に叩きつけてやれば、ダメージはそのまま、むしろ

倍増して届く。

「ちい！ やるねえ!!」

辛そうではあるがまだやれるようだ。

接近戦は不利と悟ったのかルー先生の焼き増しのように間合いを開けられる。

と言うことはだ。

「そんなら、こんなのはどうだい？ リング！」

やはり来た！

だが。

「んな？」

「伊達に夕方に撃たれまくってないんだよ!!!」

もう対策はできている！

あとは体が持つかの持久戦だ!!



「……はあ、負けちゃったよ。才能はないはずなんだがなあ……」

突発第三戦目、釈迦堂 刑部戦、白星

「あ……り……ウ……まし……た」

それにしてもどっちが勝者かわからない差である。

倒れ臥しながらもまだしゃべる余裕のある釈迦堂さんと、見下ろしながらも息絶え絶えな僕、つてもうだ……め……。

そこで意識は途絶えた。

「あくあく、無理しちまって。おい、亜巳、天、とりあえず辰子連れてこい、まず骨入れるからよ。それ終わったらこの兄ちゃんと一緒に運んでくれや。丁重に扱ってくれよ、辰子と俺に勝った褒美だ」

「仕様がねえね。まあ有り余る代金ももらってるし、今日は泊めてやるか」

聞いた話では、その時天ちゃんは、信じられないものを見たときと呆然としていたらしい。

第九話 有限地獄連続組手 二日目〈強気娘編〉

目を覚ますと体の自由が利かなかった。

いや、大げがとかそういうのではないが、とにかく動きづらい。

「うくん……むにゃあ」

理由ははっきりとしていて、辰子さんに全身で拘束されていた。

うん、大分けしからんが、本気で動けないのはまさに化け物と言ったところだろうか。と言うよりなんだ？ この状況は？

いや、本当にけしからん。

「おや？ 起きたかい。それでいつまでそうしてるんだい？」

「？ 亜巳さん？ いやとりあえず辰子さんどかしてください。真剣で動けないんで」

「ああ、なんだい、辰の胸に夢中だったんじゃなくて動けなかったんだね。ほら、辰！ 起きな!!」

そう言い、辰子さんの頭を思いつきり殴りつける長女、バイオレンスだがこのくらいしないと起きないのは流石と言ったところだろう。

うん、名残惜しくなんてないさ。

というより、

「えっと、どういう状況でしょうか？」

後ろで、痛いよ、などと呑気に言っているのは恐ろしいからおいておこう。

僕ならあれ喰らったら違う意味で寝てるってばよ。

ついでに昨日あれだけやったのにびんぴんしているのも触れないでおこう。

理不尽理不尽。

「ああ、師匠に頼まれてね。俺に勝ったご褒美に看病してやれ。ってさ。」

「それはお世話になりました。でもなんで抱き枕？」

「いいよ、宿泊料は十分もらってたしね。辰については、部屋が狭いからね。寝る時にくつついちまったんだろうさ。昨日はあたと辰で挟んでいたからね」

なんだその状況。

目覚めてから味わいたかつ……、寝起きで頭が働いてないな、そうに違いない。

「いやなんでそんな配置に？」

さすがにそんなサービスがある店でもないだろうし。

「あん？ リユウに掘られたかったのかい？」

「お世話になり、心より感謝いたします！」

納得の理由だ。

まさに天国か地獄の二択である。

「だからいいって、流石にそれはアタシたちも勘弁してもらいたいしね」

「それで、もう一度これはがしてもらえませんか？」

「すび〜……、んんう〜」

このわずかな会話のうちにまったくつついている。

相変わらず素晴らしい寝付きだ。

「っはあ、起きろってんだよー。辰ー」

おいおい、今度は武器まで持ち出したぞこの女王様。

昨日の店ではこんなのが日常なのか、くわばらくわばら。

で、ふと時間を確かめると、もう11時を回っていた。

「うわ、寝すぎたなあ。それじゃあそろそろお暇しますんで、あと辰子さん、関節に違和感があるようだったら連絡くれれば入れなおしますんで」

そう、いつもならともかく、このゴールデンウィークは時間がないのだ。

もう折り返しているからして、次の相手のところに行かなくては。

んで、なんでそんな驚いた顔で見られているんだらうか。

「呆れたね、師匠にあれだけやられといてもう動けるのかい……」

ああ、なるほど。

「いや、ダメージは残ってますけど動かせますよ。そもそも自分の動きをコントロールするのが専門みたいなものですから」

そう、相手の動きを制するために一番初めにやらなくてはいけないのはそれである。そもそもそれができなければ、実力の離れた相手を制するなんてできないだろう。

これに関しては足一本動かなくなろうと普段通りに戦える自信があるぞ。

「辰と師匠に勝つなんてまともじゃないと思ったが、アンタもつくづく化けもんだねえ」

しつれいな、これでも本当に動くのに必要な部分は問題ないんだから言うほどではない寧ろ、

「いや、僕からしてみれば昨日の今日でもうこうしている辰子さんには絶対に及ばないと思いますよ?」

「うゝ……スヤスヤ……」

教訓、二度あることは三度ある。



結局あの後、さらに過激な家族愛を見せられ、戦々恐々としながら板垣家を後にし、首都東京に来ている。

なんだこの路線の多さは、正気じゃねえぜ。

連絡を取り、目的地に着く頃にはもうとつくに午後になっていた。

さて、お次に参りますわゝ柴又ゝ柴又ゝ化け物のもとをお尋ねになられる際は、鉄家の門をお叩きください、なお、その門のをくぐる際は、命を惜しまぬようお気を付けくださいと。

「失礼します」

「ああ、待っていたぞ、それでは道場に案内しよう」

流石は鉄一族、実直で遊びがない対応だね。

ここで行うのはまた二連戦か、もしこれで乙女さんのご両親までいたらお陀仏だったかな？



四戦目、鉄 乙女、白星 五戦目、鉄 陣内 黒星

いやはや、やっぱりあの積み重ねた業は早々破れないか。

ね。そもそも乙女さんに勝てたものの、あれはまだ僕の対応できる範囲だったからだし

力そのものは衰えているはずなのになあ、鉄心さんとともに日本を守り戦ったつてのは伊達じゃないね。

時刻は夕方、もう一戦いけるくらいかと次は松笠へと向かう。

「化け物つてのは学校運営するのが好きなんだろうか？」

そういえば乙女さんも教師志望だったか？

向かうは竜鳴館、知らなければわからない高校の名前だ。

そこに居わす化け物こそが、生まれるのが遅すぎた竜こと橘 平蔵である。

ね。それ言ったらもうモモ先輩なんてどうしてこの時代に生まれたんだって感じだけだ

ね。窮屈で可哀想である。

「おお、来たかあ、待っておったぞ」

「はい、今日はよろしくお願ひします」

「うむ、元気があってよろしい、近頃は若者も元気がなく挑んでくるようなのがいなく寂しかったところよお」

なんというか、声だけで無敵なんじゃないかな、この人は。



第六戦 橘 平蔵戦、黒星

いや、遂に貯金を消された。

と言うか、竜巻って理不尽だよな。

あれのせいであまく間合いを崩されて受けきれなくなったよ。

経験できてよかった。

あの精密さは才能だけじゃあ真似できないだろうが劣化版くらいは可能性はあるだろう。

というか、

「すみません橘さん、運んでもらっちゃって」

「なあに、久しぶりに血の湧く思いをさせてもらったのだ、構わんよ」

うん、やっぱり動けなくなっているわけだよな。

そりゃあもう正直陣内さんの時点でいっぱいだったさ。

それでもこの男の最終形態引出、持久戦にまで持ち込めたのはもう嬉しい誤算だった。

うん、何言ってるかわからないだろうが、この御仁、変身するのである。

しかも二段階。

てか昨日の三戦、と言うより師範代ペアで気に対する慣らしができていなかったら死んでたよ。

「親御さんにはワシから言っておいてやろう。休むがいい」

「ありがとうございます、お言葉に甘えますね」

そうして軽く明日の予定を組み立てながら寝ることにする。

あとはジャーキーのお姉さんと戦って、確かその上司がもつと強いとか前言ってたから頼んでみるか、あとは今日見たい……れば……ほくりくに……で……も……。

そうして二日連続ぶつ倒れて三日目を迎えるのであった。

第十話 有限地獄連続組手 三日目く奉仕物語編く

おはようございます、体が痛くて泣きそうです。

やはり化け物と三戦もすれば体はガタガタになつてしまうようだ。

動ける限りは頑張るしかないんだけどね。

本日向かうは七浜公園、ジャーキーのお姉さんことナトセさんのところだ。

休日はそこにいる場合が多いので多分会えるだろう。



「あ、トラ君！ おはよう！」

「こんにちは、ナトセさん」

ああ、この目はあれだ、餌をねだる犬の目だ。

毎回ジャーキーあげてるせいか味を占めてやがる!!

まあ、今回も用意しているんだけどね。

「ありがとー！ 今日も組手？」

「はい、けど今日はできれば本気でやりあつてほしいので場所を変えてもらつていいですか？」

「え？ ちょっと待つてね。夢……」

おおう、なんか遠くに走り去つてしまつた。

「お待たせ！ 森羅様がそういうことなら屋敷の庭を使つていいつてー！」

うん、何かの許可を取つていたようだが場所まで用意してくれるとはな。

てか、どこまで行つてたのだろう？

なんにせよ戻つてくる速度がばねえなおい。

「そうですか。では、案内お願いしますね」

そうして着いていくと、そこは豪邸でした。

「私はここで働いているんだ！」

素敵な笑顔で言われたが、まあ、この強さならこんなところで働いていてもおかしくはないよね。

下手したら数部隊の軍程度なら相手どれる屋敷と言うのは深く考えないようにして

おこう。

「ふむ、お前がナトセに挑むという男か」

おやまあこれは美人。

屋敷の主人らしき女性がこちらに声をかけてきた。

「あ、トラ君、こちらの方がこの屋敷の主人の森羅様だよ」

「どうも、ご許可と場所の提供ありがとうございます」

お礼言つとかないとな、あいさつは大事だよね。

「ああ、で、大佐はどう見る？」

「ウム、見たところ錬の小僧より少しばかり上と言ったところでしょうかな、まあ、腕試しとしてはよい経験になるでしょう」

「そうか、それじゃあナトセとやった後にうちの執事とも一本やっていってくれ。それが条件だ」

とのことらしいが、まあ構わない。

それよりも、

「はい、そのくらいであれば。よろしければそちらの方とも一手お願いできますか？」

そういつて森羅さんのそばに控える二人の男——そのうち若い方は話に出た錬さんだろう——の壮年の方の方に言う。

「ハツハツハ！ 小僧、元気があつてよいぞ！ よかろう。二戦終わった後に相手を
してやろう！」

「だ、そうだよかったな少年」

多分この人が前にナトセさんが言っていた上司だな、確かに強い。
しかもこれ、ポテンシャル以外にも相当鍛えてる。

「それではさっそくはじめようか。審判はワシがやってやろう。」
よしそれじゃあ、今日もやっていきましようか!!

「よろしくお願ひします」

「うん、よろしくね！」



第七戦 ナトセ戦 白星

いやいや、昨日までの相手と比べたらまだ常識的だった。

ムエタイ主体の打撃型ファイター美味しかったです。

と、比較的余裕を持って勝てた僕を見て一同は驚いていた。

「大佐、錬程度ではなかったのか？」

「いや……、申し訳ありません、見誤っております」

「錬、アレとやるか？」

「いや！ 勝てつこないですよ！」

うん、相当意外だったようだ。

しようがないよね、技量と経験以外は確かに錬さんとどっこいみたいだし。

「それでは、次は錬さんですよ？ よろしくお願いします」

「え？ ちよつと待ってくれないか？」

うん、すごい冷や汗だ。

この分じゃナトセさんの強さよくわかってるんだろうな。

……入れなおしてあげたとはいえ半ばぐにやぐにやになっていたのを見たせいもあるんだろうけど。

「大丈夫ですよ。流石に誰彼かまわずああするわけじゃありませんから。てか、本来僕の流派は護身術なんであんなことはめつたにしませんよ。ナトセさんくらいになるとああしないと勝てないだけで」

「そ、そうか。じゃあ勉強させてもらうよ！」

「まあ、それでは、始め！」

番外編 上杉 鍊 白星

「いやー、すげーな！ 全然手応えないし、こっちも全然痛くないのに何にもできなく
されちまった」

「何か感じ取ってもらえたのならうれしいですよ。それで、大佐？さん、お願いできま
すか？」

「うむ、悪いが予想以上にエレガントだったからな、手加減はできんぞ!!」

「そうでなくては!!」

「では、田尻 耕行くぞ!!」

そうして余裕を持った状態での二戦目を始める。
てか、本名普通なんだな大佐さん。



第八戦 田尻 耕戦 白星

「フム、やるではないか！ 小僧！」

「ハハ……、ナトセさんも田尻さんも骨さえ入れれば元通りつてのは恐ろしいですね……」

これが化け物の化け物たる所以だと思う。

「すごいな少年、まさか家の二枚看板を一人で倒すとは思ってもみなかったぞ」

「ありがとうございます。見てのとおりポロポロではあります」

戦いの後の様子を見ればどちらが勝者かわかったものじゃない。

「ああ、それでもだ。そうだな、いい時間だし、食事でもしていくといい。いいものを見せてもらった礼だ」

「ありがとうございます」

確かにいい時間だしお言葉に甘えよう。



うん、あそこの料理すごく上手いな。

しかもあの森羅さん有名な指揮者らしく、演奏の招待券までもらっちゃったよ。

田尻さんもまたいつでも相手になるって言ってくれたし、あそこいいとこだ。さてそんなこんなで、三日目も戦い納めだ。

残りの時間で何をするかと言うと、

『新潟線〱乗車のお客様は〱〱〱』

うん、移動時間に使う。

ホテルとつたり準備してたらさすがに今日はもう戦えないさ。明日も一戦位しかできないさそうではあるが、

いざ北陸、劍聖黨 大成！

第十一話 有限地獄連続組手 最終日

川神を飛び出てこんにちは。

いやあ、どこ行っても九鬼九鬼九鬼だね今の日本は、出先のビジネスホテルでまでこの名を見るなんてあの一族は色々可笑しいと思う。

さて、やってまいりましたのは北陸、剣聖のいる道家。

普通そう簡単に挑戦できない相手だが、流石は鉄、流石は橘、やはり化け物たちにもネットワークと言うものはあるようです。

そう考えると僕の人脈って大変だな。

国くらい平気で傾けそうなメンツが知り合いだよ。

ああ、怖い怖い。

「たのもう!!」

うん、道場破りみたいだが仕方がない。

インターフォンがないんだもん。

あとで聞いた話だと、本宅はともかく道場関連の方は大成さんの機械音痴から、極端に機械類が少ないそうだ。

「いらつしやい、遠方からはるばるよく来たね。まずは少し休むといい」
なにこの人、すごく優しい。

たいていの化け物たちって挑みに行ったら即戦闘が当たり前だったのに、流石剣聖、人間できてる。

「はい、それではお言葉に甘えて」

昨日までだったら即戦闘即移動の精神だったが、あいにく明日から学校なので今日はこれ以上戦えないし、お誘いに乗るとする。

僕の言葉を聞くと少し嬉しそうに道場の縁側に案内してくれ、お茶を用意するように指示してくれた。

「うん、それで高坂君は川神学園に通っているんだよね？ 少し聞きたいことがあるんだが……」

なんでも、娘さんが川神学園に通っているそうで、そのことを僕に聞きたかったようだ。

正直心当たりがなかったが、ふと、妙に姿勢の良かったこのことと、椎名からのメールの内容を思い出した。

共通して、刀を持った一年生。

うん、これは間違いない、黛さんの家の子だね。

なんでも、その子、名前を由紀江と言うらしく、言葉は選んでいたがいわゆるコミュニケーションと言うやつで大層心配しているらしい。

それに対し、椎名から聞いていたファミリー入りがあったので、友達がいるようだと言えあげると、大層嬉しそうにしていた。

「さて、それでははじめようか」

会話に一段落が付くと、そういわれた。

てか、明らかに雰囲気変わってるヨ？ 人格者でも所詮はあっち側の人間でしたかそうですか。

けどまあ、気にすることでもない。

「よろしくお願いします」

さて、剣聖、と言われるくらいであるからして、まあ当然剣を使ってくる。

因みに、僕は武器を専門に使った化け物と戦うのは初めてだったりする。

一応鉄さんのところは、申し訳程度に武器も使うが、基本ガチンコである。

とはいえ、別段緊張するといったこともない。

何せ、当たったらお終いであるのは全く変わらないのだ。

間合いにしたって、連中普通に大規模だ。

とはいえ、別に脅威に感じないわけでもない。

さつきも言った通り当たったらお終いなだから。

——ブン

うん、音が遅れて聞こえてくる剣速っておかしい。

そして別に普通のことだと割り切っている僕も最近どうかと思う。

「ふむ、すごいな。ワタシの剣速でとらえきれないというのは。その身のこなし、落ち葉であろうが切れるはずなんだが、それよりも難しいとは……」

うん、避けるだけならば避けられる。

相手より速く動いて避けるのは化け物の技、僕が得ることができたのは相手より早く動く技だ。

しかし相性が悪い。

この速度で刃物となると、自分の体に当ててから流すことができない。

衝撃を調整とかしている間にバツサリなのである。

これは困った。

「ふむ、仕方がない。死なないでくれよ?」

!!? これはまずい!!

構えを少し変えた大成さんであるが、長年鍛え上げた警報がピンピン反応している。

——一か八か!!

呼吸の合間を縫って一気に距離を詰める。

「黛流 那由多」

今までの比ではない速度の剣速であった。

——しかし

「掴んだ!!」

特攻が功を奏したのか、刀の間合いの内側に入り、掴む。

が、

「驚いた、呼吸を読むのもここまで来ると神速を極めたものと変わらないとは……」
そう言いながら、腰にあったはずの脇差が僕の首に添えられていた。

「……参りました」

なるほど、剣速が早いつてことは次弾も早いつてことか……。

大成さんの手より放たれた刀は、その時やっと地面に落ちたのであった。

第九戦目 黛大成戦 黒星



珍しく無傷で負けることができた高坂です。

その後、由紀江のことを気にかけてほしいというお言葉をいただき黛家を後にし、川神につききました。

お昼前に出てももう夕方。

流石にこれ以上相手に心当たりはない。

と言うことで、この企画はここで終了。

五勝四敗と言うことで見事勝ち越しである。

自分の進歩に満足しながら自宅の門をくぐると、

「エクストラステージ突入だ小僧」

「フハハハハ!! 裏ボス登場である!!!」

新しいプロダクションとやらで忙しいはずであるお二方が待つていた。

うん、一度締めたつもりの決算覆す案件っていやになるなあ……。



結局拉致られて、九鬼本社の訓練場に連行されました。

「いや、あなた達忙しいって聞いてたからスルーしてたんですけどこんなところにいていいんですか?」

こんな普通じゃない場所を用意できる二人、九鬼家長女である九鬼 揚羽とその師にして九鬼家従者部隊第0位に君臨する男ヒューム・ヘルシングに問いかける。

「なに、貴様が面白いことをしているときいてな！ 多忙な中時間を空けてやったのだ！」

「達人たち相手に腕試しを繰り返すとは、なかなかいいお遊びではないか、俺たちも混ぜろ」

ああ、出たよ化け物ネットワーク。

世界滅ぼす前に僕を滅ぼしに来たようだ。

「はは、終わったと思ったのにな……、どちらからやります？」

「当然我だ!!」

まあそうなるよね、やっぱリラスボスが一番最後に来るものだからラスボスらしい。

ここ取らないと後がない。

「準備はできているな。始めろ」

促しているようでただの命令によって揚羽さんとの戦いは始まるのだった。

EXTRA STAGE 突入

「フハハハ!! 最初から全力で行くぞ!!」

うん、この人は小手調べ何てしてたら容赦なく骨を外されることを知っているからもう最初から全力である。

「ホレホレホレホレ!!」

捕られないように引手に意識を置いた連撃をただひたすら透かし続ける。

「つくー!」

これが僕の弱点の一つである。

どうしても受け身に偏る故に、捕られないことを念頭に置かれるとなかなか手を出せなくなってしまうのだ。

けどまあ、

「捕まえた!!」

透かし続けている間だって微調整しながら近づいていくことだってできる。

「甘いわ!!」

そう言つて繰り出されるのは大振りの蹴り上げ。

警戒はしているようだが力の流れを出してしまえばやれることが増える!!

そして、密着できる距離は僕の距離だ。

蹴り足の勢いそのままにわざと蹴り上げられてやる。

この行動には、僕の紙装甲を知っている揚羽さんは驚いていたが、これは今までやってきた組手ではなく仕合だ。

甘さを廃した初めて見せる技だつてある。

蹴りあげられた僕は宙に浮くこととなる。

——揚羽さんの顔を掴んで、

「はあああああ!!」

勢いが強すぎて離さないように結構必死であるが、その甲斐あつて、僕は揚羽さんの顔を支点に背後に向かつての円を描いた起動で持ちこたえる。

揚羽さんの首に衝撃のほとんどが言った状況でだ。

さらに、素晴らしい流れを得たようで、数少ない僕の名のある技、それだけ自信を持った技の形に持つて行けた。

「——首折り逆背負い!!!」

「——カハッ!」

揚羽さんは体の全面を打ち付けられ、そのまま気を失つたようだ。

——首折り逆背負いは柔道の技として危険とされている背と背を合わせた形の逆背負い、この技でさえも受け身のとれないことや、脊椎の損傷の危険があり禁止技とされているのだが、その投げ手を首に変えることにより対化け物用に改悪した技だ。

この技は頸動脈締め、脳揺らし、首折り、受け身不能、脊椎折りと凶悪な仕様となっている。

が、やはり化け物に効果があったのは前者二つだけであった。

怪我と言う面では大したものには負わせられていない。

が、

「そこまでだ」

「しゃあ!!」

勝ちも勝ちである。

基本故に引き出しが多かったおかげでいわゆる殺し技をほとんど見せていないおかげで、こちらの不利な形になる前に倒すことができた。

第十戦目 九鬼揚羽戦 白星

そして、

「見事だ、無傷でラスボスとは理想的な展開ではないか、小僧」

この男が後に控えてるから賭けのような接近をしたのだ。

「ハハ……、お手柔らかに……」

「却下だ。失望させてくれるなよ?」

そう言つて、現役最強と呼び名の高い老執事と合い見えることとなる。

LAST STAGE開始

「ジェノサイド・チエーンソー！」

「いきなり!!」

化け物のガードの上からでもごっさりダメージを与える反則蹴りを開始早々に仕掛けてくる。

「ふん、貴様相手に小技は自殺行為だからな。いくら俺でも舐めはしない」

「僕の戦法ほぼ全否定の戦い方ですね!!」

これは正直どうしようもない。

いくらうまく流したところでダメージ確定であるのならば、ほぼ負けパターンである耐久戦に持ち込むしかないのだ。

「ジェノサイド・チエーンソー、ジェノサイド・チエーンソー、ジェノサイド・チエーンソー、ジェノサイド・チエーンソー、ジェノサイド・チエーンソー!!」

「いや、ちょ、真剣でか?」

そして選択肢など無いようだった。

実に楽しそうな顔で連発しやがっている。

「クソがあああ!! やあつてやるぜえええ!!」

「クハハ! そうだ! それでこそ小僧と呼ぶにふさわしい!!」
ならばとただ只管に受けて反撃をしてやる。

——結果

LAST STAGE ヒューム・ヘルシング戦 黒星

関節の十ほどはずしてやったが、結局は根負けして意識を失うこととなる。

GW戦乱、六勝五敗にて、見事勝ち越し。

目を覚ますと夜中にもかかわらずお二方を交えた豪華な食事をいただき送ってもらえた。

流石は九鬼である。

第十二話 地獄の傷跡

地獄の底から戻ってききました高坂です。

よくこの長期休暇を生き残れたと本気で思う。

実際今も行動に支障がないようにして居るがぼろぼろだ。

と言うわけで、体が治り次第武神と戦えるように鉄心さんに申し込みに行っておこう。

「おはよう」

我らがS組、あんまり愛想がいいクラスではないが、あいさつは大切である。

何人かは普通にあいさつ返してくれるしね。

「ああ、おはようさん……、若！ 今すぐうちの病院で場所を取ってくれるように連絡しよう!!」

「おやおや、これは大変ですね。大丈夫なんですか？」

「うわーい！ お化けーお化けー、準備だ〜」

「によわ〜、化け物なのじゃ!!」

とても失礼なことを言われてしまった。

不死川なんか涙目で逃げて行ってしまった。

ついでに井上がユキの言葉に突っ込まないくらいには慌てている。

「朝一でそれは流石に傷つくよ？」

「傷つくも何もすでに傷だらけだろう！ 何があつたんだよ？ てかなんで学校来てるんだよ！」

「？」

「おやおや、ご自分の状態が分かっていますか？」

自分の状態って……、まず、全身に打ち身がたくさんあつて黒くなつてるな。

特に受けの起点となる腕なんてひどく腫れている。

切り傷も多いな、もう血は止まっているが結構な範囲に広がっている。

ついでに何回か外れた間接も入れなおしてるからその付近の内出血はひどいかもしれない。

あとはあえて言うなら全身筋肉痛と疲労で大変なことになっているな。

うん、なんでそんなことを言われているのかわからないよ。

「不思議そうに首を傾げるな!! それもう完全に大怪我じゃないか、いいから家の病院に行くぞ！」

「いやいや、そんな病院に行くほどの怪我なんてしてないよ？ 動きに支障ないし」

「なんで支障ないんだよ！」

「いいですか？ 高坂君、医者の子として言わせていただければ、打ち身やら擦り傷だとしてもそれだけ全身に及んで入れば普通入院していただきますよ？　と言うより動けないはずなのですが……」

うん、武人じゃない人にはわかってもらえないようである。

骨も折れていないのに入院って大げさな。

「おはよーさん、HR始めるから席に着け……、よし、高坂、お前は今日はもう帰れ」
何……だ……と……、教師にまで帰宅を促されてしまった。

そうまで言われては仕方がないので、仕方がないからとりあえず鉄心さんに会いに行こうと思う。

用事もあるしあの武人の中の武人ならわかってくれるはずだ!!

「ふむ、とりあえずはれが引くまで欠席にしておこうかの。なに、回復に専念すれば内功かじつとる人間なら一週間やそこらで回復するわい」

駄目でした。

なんでも、武人としては理解するが、教育者として了承するわけにはいかない、てか他の生徒が怖がつてあまりにも悪影響になるらしい。

通りで登校中避けられていたわけだ

「はあ、わかりました。つまり学校に居なければいいんですね？」
うん、堀の外でも遊んでよう。

「その顔、大人しくしているつもりは無いようじゃの……、まあええじゃろう。さつきも言った通り武人としては理解できるからのう。そのかわり、絶対に制服でうろつくんでないぞ？」

「わかりました。それで、とりあえずこの怪我治ったらモモ先輩と戦いたいのでセツティングお願いしたいのですが」

「!! そうか、やる気になってくれたか。よかろう。この連休の活躍も聞いておるし予定に入れておこう。前日までには連絡くれりゃあ準備しよう」

「ありがとうございます」

よし、目的の一つは達成した。

てかやっぱり実在するんだね、ネットワーク。

そうしてとりあえず着替えに学校を出ることにする。

校門までの間は阿鼻叫喚だったとだけ言っておこう。



「へへ、今日は早いじゃねえか……、って化け物か!」
うん竜兵にまで言われてしまった。

「いや、少し怪我しただけだよ。さて今日もやる?」

「おいおい、俺は人でなしだとは自覚してるがそんな相手に戦いたいとは思えないぜ。
やつても楽しそうじゃねえしな。と言うより、大丈夫なのか?」

なんということだろう、不良まで心配そうにこちらを見ているではないか。
解せぬ。

「えーと、かかってこないの?」

「バカなこと言ってるねえで怪我直せよ、いや真剣で」

おお、僕の居場所はないのか、そういえば両親も泣きそうになってたっけ。

「えー、動けるのに休んでたら腕がなまっちゃうよ」

「帰れ!」

駄目でした。

しかし僕はあきらめない。

不屈の意志を持っているのだから!

と言うわけで非常識の通じそうな人に連絡を入れるとしよう。

「あ、もしもし、揚羽さん? 今時間大丈夫ですか?」

『うむ、十分程度なら構わんぞ』

「ちよいと学校追い出されたんで従者部隊の訓練で組手させてもらえませんかね？」

『よかろう、連絡を入れておく。それだけならば切るぞ？』

「はい、ありがとうございます」

『うむ、ではまたな』

流石非常識の巢窟だ、二つ返事だった。

と言いうわけで、昨日振りの九鬼本社に向かおうか。



「oh、クレイジーにもほどがあるだろう……」

「すごいですね。今ならただ横になっているだけで私よりもリアルな死んだふりができそうです」

元傭兵と暗殺者にまで言われてしまったが、もう慣れた（キリ

と言いうわけで、従者部隊15位と16位である、ステイシー・コナーさんと李 静初

さんに連れられて九鬼本社を歩いている。

お仕事でよく来ているが、やはりそれだけなので一人で歩かせてもらえるほどの信頼

はまだないようだ。

「ついたぜ、なんかあつたらそこらの奴に言いな。全員従者部隊の奴だからよ。……てか、死ぬなよ？」

「死にませんよ、と言うよりこの怪我、結構な割合でヒュームさんに着けられたものなのですが……」

「ああ……」

「納得です」

そう言ってみると心底同情した目で見られてしまった。

「んじゃ、アタシらは戻るけど強く生きろよ」

「失礼します」

なんか大げさな励まし方をして去って行ったが、まあ、もとより無茶をする気はない。とりあえず回復第一であるのだから。

——それじゃあ、やるとしようか。



さてさて、九鬼つてすごいな。

飯は上手いし寝床は最高級、訓練相手も申し分ないときた。

常に誰かしら訓練しているからひっきりなしに組手ができる。

ついつい怪我が治るまでの10日ほど住み着いてしまったよ。

……まあ、たまにヒュームさんとかが来るのは勘弁してほしかった。

「小僧、遊びに来たぞ。構えろ」

つてなんだよ！

あんたの相手なんかしてたら怪我治るどころか増えるつつーの!!

何とか頼みに頼んで制限組み手にして貰えなかったらあの人をはるかに凌駕するま

で怪我が治ることはなかっただろう……。

「それではお世話になりました」

「うむ、従者たちにもいい経験となっただろう。また何かあったら言うがよい」

しかもなんか訓練相手としてバイト代までもらってしまった。

これももう囲い込みに来てるんじゃないか？

まあ、武神倒すまでそんなこと考えてられないってのはわかっているみたいだからい

いけど。

——昔こんなことがあった。

「高坂よ、お前その腕を九鬼のために使う気はないか？　それほど磨き上げた腕だ、我が高く買つてやるぞ？」

「あー、考えたこともないですし、まだ考えられませんね、将来のことなんて」

「何故だ？　それほどまでに、まさに命を削つて鍛え上げた腕だ、何か成し遂げようとしているのではないか？　それなら九鬼に來れば最高の環境でそれをなせるぞ！」

「いえ……、そんな、そうですね、ただ昔おられた意地をもう一度通したいだけです。それができないと多分他には何も考えられませんよ」

と、納得はしてもらえたようであるが控えていたヒュームさんの目が怖すぎたのは嫌な思い出だ。

何よりあの人が一番諦めていないと思う。

面白いおもちゃとして……。

さて、そんなこんな長期連休が超長期連休になったが、また明日から学校である。怪我も治つたし武神との戦いももう少しだ、気を引き締めていこう。

第十三話 通常の三倍親馬鹿

さてさて、改めて学校にやっけてまいりました。

今回は通学中に悲鳴をあげられることもなく、いたって普通の通学路だった。

「おはよう」

「おう、おはようさん。今度はちゃんと治してきたな」

「おはようございます。それにしてもそんなに短期間で治る怪我ではなかったはずなのですが……」

このくらいの変常、川神に居れば日常茶飯事であるからか、この前のような反応ではないが、真面目な葵は少し考え込んでしまっている。

「いやいやそこは川神補正つてやつで気にしないでいいんじゃない？」

「……そうですね、医者の子息としては納得しがたいことではありますがそうしておきます」

「それで、ここしばらくのノートとか貸して欲しいんだけどお願いできるっ？」

「おう、それくらいなら大丈夫だぜ。それよりもお前さんがいない間に転校生が来たんだぜ？」

「へー、それはそれは S 組に転校してくるってことは優秀な人なんだろうね」
「ええ、とても素敵な方でしたよ」

普通ならここで女子だと判断するのだが、両刀の言葉だとどちらかわからんな。

「で？ どんな人なの？」

「おう、それがな……」

「おはようございます」

……は？

いやいや、なんか法治国家日本じゃあめつたに見ることのないものが見えた気がするんだが。

キノセイダヨネーネボケタヒトノミマチガイダヨネー。

「おや？ そちらは誰ですか？ 答えなさい、準」

「おおう……、噂をすればってやつか。こいつはけがで休んでた高坂虎綱だよ。んで高坂、こいつがさつき言っていた」

「マルギツテ・エーベルバッハです。栄えあるドイツ軍所属の少尉です。よろしくしなさい」

「えつと、GUN? ARMY?」

「はい、Armeeです」

おお、通りで軍服だ。

「えつと……失礼ですが、ご年齢は？」

「無論年上です。この学園には護衛任務の一環で来ました。なるほど、あなたが高坂虎綱ですか」

「はあ、そうだけど……何か？」

「いいえ。直にわかるでしょう。もう始業です。軍人は時間に正確であるべきだ」
そう言つて自分の席に戻つていくマルギッテさん、まあ同級生だし呼び捨てでいいかな？

てか護衛つてなんだよ？

とりあえずは、

「……いや、僕民間人なんだけど……」

どうしてだろうか？

すごく疲れた。

ふと視線を感じてそちらを見てみると井上が仲間を見るような目でこちらを見ていた。
護身とかそういうの全部うつちやけてブン投げたくなった。



あれから何事もなく放課後を迎え、学園長室にお邪魔していた。

「ふむ、完治したようで何よりじゃ。して、モモとの仕合の件かの？」

「はい、怪我も治りましたのであとはそちらの都合を調整していただきたくて参りました」

「よかろう。それでは明後日でよいかの？ ちようど休みじゃしろう」

おお、話が早い。

事前に申し込んでいただけあって待たされることもないか。

「はい、それではよろしく願います」

そう言つて学園長室から出ていくが、やはり実際にカードが組まれるというのは感じるものがあつて、僕の内心はいつになく昂つていた。

その下校途中のことだが、妙な視線を感じて煩わしかったので、人のあまりいない原っぱに行くことにした。

「出てきてくれないかな？ 今、すつごく興奮していてさ、そんな挑戦的な目で見られてたら迷惑なんだ。気が静められないじゃないか」

「ほう、我が精鋭たちに気が付くとは中々ではないか」

そう言つて出てきたのはまたもや軍服。

しかし、その男は年かきで、雰囲気からお偉いさんだとうかがえる。

そして男の周りについて、先ほどまで同じ教室にいたマルギツテを始め二十ほどの軍人が付き従っている。

「んで、何者ですか？ ついでに急ぎでないなら後日に回していただきたいのですが」
軍に狙われる覚えなどないからして。

「いやいや、そう言わずに少し時間を作つてほしいのだよ。私はフランク・フリードリヒと言うものだ。ドイツ軍中將をやらせていただいている」

驚きの将官であつた。

なんでそんなお偉いさんがこんなところにいるんだよ？

「なんでそんなお偉いさんがそんなところにいるんだよ？」

あ、しまった。

口に出してしまった。

「貴様！ 中將に向かつて！ 口を慎みなさい！」

「あ、すみません、つい驚いて思つていることをそのまま言つてしまつて……」

「止すんだ少尉。いや、構わないよ。確かに普段からこうして普通に歩いている立

場ではないからね」

自覚してんのかよ。

「それで、何かご用でしょうか？」

「ああ、話と言うのは私の娘のことなのだが」

娘？

どういうことだろう？

「ふむ、娘と言うのはクリス、クリステイアーネ・フリードリヒのことだよ」

「ああー！ あの転校生の親御さんでしたか。……それで、こうして部隊を連れているということとは決闘の敵討ちと言うことですか？」

それなら丁度いい、この昂ぶりを静めてくれる!!

いや、竜兵の真似はなんか嫌だ。

なんか昂つてた心も少し落ち着いた気がする。

なんて考えながら少し警戒を強める。

「いや、確かにクリスは負けはしたがそれは競い合つてのことだ。流星に介入しようとは思わないよ」

なんだ、違うようだ。

んじやなんだろう？

「問題はそのあとでね。クリスが君のことをよく報告してくるようになったのだよ。なんでも武士として不殺の信念を持った好漢であるそうだね」

「えっと、そこまで大げさかどうかはともかくとして、護身の武術に誇りは持っていますか……」

なんか褒められた。

これを言いたいためにわざわざ部隊を連れてきたのか？

じゃあ護衛つてことかな？

「うむ、素晴らしい。それでなのだがね、最近収まったようなのだが、娘は直江大和君と言う男と少し反目していてね。なに、悪い男ではないのだが、主義主張が合わないようでね、彼と対比するように君のことを報告していたのだよ」

「はあ、まあ、それは光栄で？」

いや、直江お前なにしたんだよ？

嫌われない様つてのがお前の十八番じゃなかったのか？

まあ、それにしても話が見えないな。

「それでだ、一つ聞きたいのだよ。そんなことは決して、億に一つもあり得ないとは思うが、思うんだが一応確認しておきたいのだが……」

!!?

雰囲気が変わった？

なんだ、何を聞く気だ!?

「わが娘に手をだそうだななんて考えていないだろうね!？」

……ああ、なるほど。

全てつながった、この人ただの親バカだ。

なんか一気に力が抜けたなあ……。

「いや、大丈夫ですよ。少なくとも今はそんな気はこれっぽっちもありませんから」

「娘に魅力がないとでもいうのか!!!」

どうすればいいんだよ？

つと、これ銃を出そうとしてないかこのおっさん!?

「うわ!？」

と言うことで咄嗟に距離を詰めて、銃を取り出そうとしている手を掴み、そのまま足を払う。

「ぬ!？」

そして、膝をつかせて手を後ろ手にして拘束する。

「ちよつと落ち着いてくださいよ。銃なんてシヤレにならないじゃないですか!？」

そうやって正論を吐いたつもりなのだが、

「貴様!! 中将殿から離れんか!!」

忠誠心の高いらしいクラスメイトはこちらに迫ってきた。

流石に中将人質にした形で相対するのはまずい。

なにかまずいかって社会的にまずい。

第三次世界大戦なんて大惨事の引き金になんかなりたくない。

「いや、落ち着けよ!?!」

「Hasen Jagd!」

なんか眼帯とって襲い掛かってきてるんですけど?

「少尉! やめ……な!?!」

そんな様子に中将さんは落ち着いたようにマルギツテを止めようとしてくれたようだが、既に迫ってきている武器、トンファー、それを避けて彼女の腕の裾を掴み、その生地を捻る。

すると、腕が動く力と言うのが服に拡散され、向かってくる力に空白が生まれる。

そのできた空白の間に、腕の内側から外側にくぐるように動く。

するとさっきの中将殿の焼回しのような体制の出来上がりである。

その出来事に中将さんは止めようとした言葉を飲んでしまったようだ。

「……………!! Hasen Jagd……」

「!! 少尉! やめないか!!」

そのせいでまだ抵抗しようとするマルギッテであるが、流石に今度はしつかり止められた。

「は!」

「ふう、さて、高坂君、冷静さを欠いてすまないことをした。謝罪しよう。それで、重ねね申し訳ないのだが部下を放してはくれないだろうか?」

「はあ、もう暴れないなら放しますが……」

そう言つて、手の中の彼女を見る。

「軍人にとつて命令は絶対です」

と、言葉のとおり抵抗する様子もないので放してやる。

この人、制したの怪我覚悟で抜けようとしていたよな。

化け物一歩手前つてことか、怖い怖い。

放してやると迷いなく中将殿の護衛の位置に戻つて行つた。

「うむ、護衛たちに反応もさせずに私を制するとは、流石クリスに勝つただけはあるね。その手腕も素晴らしい」

「それはどうも、それで? 話を続けるようであればせめて武装解除していただきたい

いのですが?」

「いや、こちらも熱くなつてしまつたし、今日はここまでにしておきたい。この失礼の詫びは後日しつかりさせてもらおう。それでは失礼するよ」

そう言つて軍人たちを引き連れてさつて行つた。

ついでにマルギツテからは非常に好戦的な視線をもらつてしまつた。

いや、まさに嵐のような人たちであつた。

第十四話 決戦前日、侍娘

心が昂って仕様がありません高坂です。

昨日日本人にはないが、宣戦布告をしてやったお蔭で落ち着かない。

学校では武術をやっているような人には少しばかり感じ取られていたようで、特に心なんかは怖気づいていた。

んで、放課後、僕は昨日に引き続き絡まれていた。

「あ、ああああの、高坂先輩ですよね!」

「落ち着けまゆつち、オラの見たところ少し先輩引いてるぞ?」

うん、流石KAWAKAMI刀もった変人にガンつけられるなんて貴重な体験だ。

しかも顔が超こわばっている。

正直、真剣怖い。

素性に心当たりなければBダツシユかもしくは臨戦態勢を取っていた。

「えっと、黛さんであつてるよね? 初めまして。高坂虎綱です。大成さんには月あたまにお世話になりました」

うん、心当たりあつてもついつい敬語のなつてしまった。

いや、じつさい顔が整ってる分崩されると大迫力である。

「えええつと、そうです！ 黛 由紀江と申します！ ここ、高坂先輩のことは父から聞きました！ あの、ご挨拶をと思ひまして！」

「そうだぜー、パピーがすっげー褒めてたんだぜ。んで、少年何故敬語よ？」

ああ、こんな時どういう顔していいかわからないんだ。

おそらく腹話術だろうけどこれだけ性格違うとどっちに対応していいかわからない。

「いや、うんまあ、大成さんになんて言われたかは興味あるけど。どうしたの？ そんなにこわばった顔ってことは決闘でも申し込みに来たの？」

敵意は感じないけどこれだけガンつけられればそうなのかも知れない。

達人は意を消して人を斬れるという。

特に僕なんかはそれができるってことはよくわかる。

達人って言える力してないけどね。

「い、いえ！ そんな私なんか決闘なんてそんな！ ただ父がおっしゃっていた方がどんな方かと思ひまして！」

「そうだぜー、まゆつちはそんなに喧嘩っ早くないんだぜー。パピーから連絡あったから友達GETのチャンスだと意気込んでるだけだぜー」

そろそろ突っ込んであげた方がいいんだろうか？

さりげなく僕の目線に入れているストラップについて……。

「そうなんだ、で、その腹話術？ どう反応してあげればいいのかな？ テンションにギャツプありすぎて……」

「いえ、松風は付喪神ですので腹話術とは何のことか」

「そうだけ、オラTSUKUMO神の松風！ シクヨロな」

あ、別勘定にしといたほうがいいんだ。

まあそれならそうしよう。

大人の反応ってやつだ。

「ああ、そうなんだ。よろしくね、松風。で、戦う気がないなら刀から手を放してくれ
ると嬉しいんだけど。正直君ほどの使い手に、いつでも斬りかかれる雰囲気では
と怖いぞ。真剣で」

「い、いえ。そんな私などまだまだで……」

「いや、無理あるって。姿勢と目線、あとは僕に呼吸合わせてるし自分の対応できる範
囲完全に把握してるでしょ。わかる人なら一発だよ」

「おお！ バレテラ！ まゆつちこれは観念した方がよさそうだけ？」

「うう、そんなにわかりやすいでしょうか？ 他の方々はあまり気にして無いよう
なのですが……」

刀は背にしよってくれた。

少し安心できるな。

それにしても結構気付かないもんなんだね。

「うーん、大成さんに聞いているならわかると思うけど、僕って敏感じゃないと瞬殺だからね。おんなじように自分の間合いに常に気を張ってるからさ。いうならば弱者の勘ってやつかな」

そう、勝ち負けは別として、僕に致命傷与え得る実力者なんて結構いるんだ。

そんなの相手に対抗できるようになるには、相手の動きを精密に分析できる目がないとやってられない。

それをできるようになるまで只管実践を重ねてきたんだ、わからないはずがない。

「そうですか……、実際に見て父に迫ったというのは少し信じられませんでしたが、やっぱり本当なんですな」

「へー、そんな強そうじゃないのにそんなことまでわかるなんてやるじゃねーか」

何だろう？

この子煽ってるのか？

いやいや、そんな感じではないってことは天然か。

「はは、負けちゃったけど。それで？ さつき松風が友達って言ってたけど何かの

お誘い？」

「え、えええええええと!!」

「落ち着けまゆつち！　せつかく先輩からこの話題出してくれたんだ、何としてもこの機を生かすぞ！」

おお、武術関係のこと話したら少し落ち着いてたけどまたテンパった。

どうしよう、少し楽しくなってきた。

「あ、あああの！　私と、と、友達になつてくれませんか!!」

見事な九十度、最敬礼である。

「うん、いいよ」

「そ、即答？　私の緊張の意味は!?　けどやりましたよ！　松風！　これで友達九人

目です！」

「やったねまゆつち！　百人まであと九十一人だ！」

うわ、かわいそうな子だったのか？

まあ、刀もってガンつける子だからわからなくもないか。

即死技で蹴りつけてくる執事が知り合いにいる僕には隙はなかった。

「それで、どうするの？　友達って言っても宗教とか政治団体とかに入る気はないん

だけど……」

「えっと……、それじゃあ、こ、この後お時間あるでしょうか？」

あ、特に何も考えてなかったようだ。

悩みながらおそろく遊びに誘っているんだろう言葉をいただいた。

「うーん、予定は決まってるけど、なんなら僕の予定についてくる？」

「は、はい！ 是非!!」

おお、また顔が怖くなったよ。

「それじゃあ、行こうか」

「え、と、何をなさるんでしょうか？」

「組手」

ああ、降ってわいたようにいい相手が見つかったもんだ。

これで明日に備えられるね。

金曜集会が始まる前に今日のノルマを終わらせた私は時間まで暇を持て余していた。

「これ、モモよ、ちょっと来なさい」

げ、爺からの呼び出しだ。

長いと面倒なんだよなー。

「んー？　なんだあ、じじい。説教なら間に合っているぞ」

「違うわ。明日、挑戦者が来るぞい」

その言葉を聞いた瞬間、私は態度が一変しただろう。

そう自覚できるくらい心が躍った。

「ほう、相手は誰なんだ？　強いのか？」

「ふむ、今回は明日になってからのお楽しみじゃな」

当然の疑問をぶつける私に、爺は答えを濁してウイंकをしてくる。

ムカつく。

「おい、じじい、それはないだろう。せめて強いかどうかだけでも教えろよ。最近期

待はずれなのが多くて欲求不満なんだ」

「こりや、対戦者にそういうことを言うもんじゃないぞ！　全く、まあ気持ちはわかる

がのう」

む、結局教える気はないようだ。

また今回も期待はずれなのであろうか……。

私は爺から対戦相手のことを聞き出すのをあきらめ、その相手が私の飢えを満たせる

実力者であることを願いながら、仲間の元へ向かう。

いつも通りがっかりする結果に終わるであろうと思いながらも、やはり少し楽しみで私の足取りは軽いものであった。

第十五話 対武神 数年来の激突

決戦の日、胴着を持って川神院の門をくぐる。

そこに待っていたのは、川神院総代 川神鉄心、師範代 ルー・イー、そして武神川神百代。

「お前が挑戦者か、クリスに勝った奴だな。期待しているぞ」

いつもの碎けた口調より幾分か固い言葉使いでそう言ってきた。

しかし、その言葉に反し幾分か期待はずれであったという雰囲気が見え隠れしている。

「はい、今日はよろしくお願いします」

そう言つて、着替えるために一度川神院の中にお邪魔する。

——ああ、遂に、遂にこの時が来たんだ。

先ほどの様子を見ると、彼女は僕のことなど覚えていなかったのだろう。

それはそうだ。

だって、彼女にとつては数多いたすぐに倒すことのできた挑戦者たち、そのうちの一人でしかなかったのだろうから。

だが、だがかし、僕はあの日から、ただの一度も彼女のことを頭から離れたことなどなかったのだ。

そして、今僕は、彼女と戦うために川神院の仕合場にいるのだ。

「それでは、双方、準備はいいのう?」

その言葉に二人とも頷く。

「西方、高坂 虎綱!」

「はい」

この勝負、勝てるとは言い切れないだろう。

「東方、川神 百代!」

「ああ!」

当然だ、彼女であれば全勝していてもおかしくはない仕合に、何とか勝ち越したただけなのだから。

「いざ尋常に!」

だが、それでも、あの日のように失望したように、諦めたように見下される結果など

「始めいっ!!」

断じて認められないのだ!!!

「川神流無双正拳突き!!」

数多の挑戦者を開幕直後一撃で敗北に追い込んだ、試金石ともいえる彼女の一撃。しかし、本気でもないただの打撃など、

「舐めるな!!!」

——ゴキッ！ゴキン!!

「つく!?」

射線から体をずらしながらの横からの一撃で関節を外してやる。

それも加減のある一撃なのだから、余裕をもって手首、肘の二つをだ。

「はは！ 確かに舐めていたな。だが、どこまでいけるかな？」

そう言う彼女には、外れたはずの間接はその痕も残っていない。

これが、武神と呼ばれるポテンシャルの代名詞であろう瞬間回復だ。

普通であれば一度使うだけで気を消耗しきってしまうであろうその技を、彼女は平気で連発するのだ。

「そら、だんだん強くしていくぞ！ 無双正拳突き！」

支障など全くないと言わんばかりに二度目の正拳を放ってくる。

言葉通り威力を増してくるのだろう。

二度目、二つの間接を外してやる。即回復。

三度目、同上

四度目、二つはきつくなつた、肘に絞る。即回復

五度目同上、六度目同上、七度目同上。

八度目、流石に余裕がなくなりただ受け流す。

九度目同上、十度目同上、

十一度目遂に威力に変化が見られなくなつた。

「上手く受けるもんだな。じゃあ、数はどうだ？ 川神流無双正拳突き乱れ撃ち!!!」

拳の弾幕、しかも威力を落とさずにだ。

しかし先ほどと違い、次の動きを意識に入れた流れのある攻撃だ。

であるならば、

「捕った!!」

少しずつ受ける際に力の流れを変えてやり、生まれたつき手と引手の間に生じた空

白、その間に彼女の腕の袖をつかんでやる。

掴むことによつてこちらに掛かる武神の突きの力。

その力を利用して行うは

「大外おお!!!」

柔道に於いて基本とされる足技だ。

「ぐあ!?!」

そして、掴まっつてはその力だけでやられてしまいかねない故に、残心もそこそこ距離を置く。

しかし、すぐに立ち上がる武神。

肉弾戦の後、距離ができた。

次に来るものと言えば大体の予想は着く。

「ハハハ!! 本当にやるなあー! じゃあ、こんなのはどうだ? か・わ・か・み・波!!!」
迫りくるは気による攻撃。

だが、

「読んでるんだよおおおお!!!」

こんなことはもはや体験済みだ。

気による攻撃、そのほとんどは単純なエネルギーによる衝撃だ。

つまり、方向性の決まった力の流れなのである。

だというならば、

「受けられない理由なんかないんだあああああ!!!」

僕でも使える内気功、それによって、僅かながらでも耐久を上げる。

そして射線上からわずかにずれ、後は己の身を歯車のようにしてその流れを受けるだけだ。

「ああああああああああああああああああああ」

気による衝撃には肉体による攻撃とは違い明確な実態がない。

故に理論では可能でも、実現は難しかった。

しかし、気が使えりょうな連中との仕合の中で、勘を掴み、骨を掴み、只管経験を積む。

その中で実現したことである。

故に

「ああああああああああああ!!!」

肉弾戦と変わらずその流れを調整し

「ギ!!!?」

近づいて相手にたたきこんでやるのだ。

「はあ……はあ」

気弾の勢いを使った渾身の一撃で武神を吹き飛ばすが、流石に力の濁流の中では無傷とはいか無かった。

歯車はすり減るものなのだから。

対して、

「ハハハハハハ!!! こんな対処をしてきたやつは初めてだぞ! 避けるわけでも打ち

消すわけでも跳ね返すわけでもない!! むちやくちやじやないか!! だが、何発耐えられるかな?」

やはりすでに回復していて、次弾を放ってくる。

五発、上位の気弾である星殺しも含めて繰り返された。

やはり僕にはダメージはたまっていく。

そして、

「星殺し!!!」

すでに六発目が放たれていた。

こうまで繰り返せばもはや流れ作業のように反撃を見舞ってやる

「今度は私が掴まえたぞ!!」

が、吹き飛ばされながらも僕の腕を掴み

「川神流炙り肉!!!」

性質を炎に変えた気をその腕に纏った。

流石に熱エネルギーをどうこうなんてできるはずがない。

故に

「がああああ!!!……っらくさい!!!」

完全に根性論で耐えながら投げつけてやる。

掴んでいるというならばそれは僕の間であるのだから。

「なあつ!？」

流石に単純に耐えて投げられるのは予想外であったのか、無防備な状態で投げられ、素直に放してくれた。

「ぐ、ぐああああ!! ……はあ……はあ」

そして、熱いものは熱く叫び声をあげて耐える。

その叫びに触発されたように

「クハハ!! クハハハハハ!!!! すごいぞ!! 吹けば飛ぶはずなんだ! 一撃だつて耐えられないはずなんだ!! それなのに倒しきれない!! 楽しい! 楽しいぞ高坂!!!! さあ、私の技では決定打にならないというなら、倒れるまでやってやろうじゃないか!!!!」

驚きながら、ものすごく楽しそうに大笑いした。

そして、やはりダメージの消えている彼女が、絶望ともいえる持久戦を宣言してきた。
が、

「望む……所だああああ!!!」

こちらとて引く気などかけらもないのだ。

「禁じ手!! 富士砕き!!」

最初の拳とは比にならないほどの威力での突きが放たれる。

対処はできたが、やはり体に残るダメージも格段に多い。

本格的にこちらを取りに来て、なおかつ消耗もさせるつもりのようなのだ。

だが、大技ばかりは続けてられないのだろう。

最初の一撃以外はただがむしやらかな連打であった。

疲れる、受ける、折る、回復、蹴られる、流す、投げる、回復、打たれる、流す、撃

たれる、流す、反撃、回復……………

ただ只管に繰り返される中、再び掴まれてしまう。

また、気の性質変化かと急ぎ薙げようかとする——が、少し様子が違った。

——まずい!!

「川神流!! 人間爆弾!!!」

一瞬で地を蹴り、衝撃を少しでも抑えるよう後ろに跳ぶ。

同時に彼女を中心にした全方向への衝撃の塊が発生する。

僕がどうしても対処しきれないものの一つである爆発が襲ってきた。

逆方向への跳躍、少しだけ衝撃の緩和。

次いで内気による衝撃の相殺、微量ながら成功。

次に筋肉の一斉収縮によって衝撃の吸収、いまだに向かってくる衝撃は甚大。吹き飛ばされ、最後の最後に全力で受け身を取る、やはりダメージは甚大。すべてを終え、ぼろぼろながらも立ち上がる。

「はあ……はあ、つく……」

「ハハ……、遂に致命的なダメージを通したぞ!!」

そう言つて立ち上がる彼女、その体は即座に回復——していなかった。

「ハハハハ……!!? な、回復が間に合っていない!!?」

その様子には彼女は大いに動揺していた。

「やっとか、……やっど終わったか!!」

「何を言つて……!!? まさか!」

彼女も気が付いたようだ。

なにも彼女が回復できなくなったのは何か特殊なことをしたわけではない。ただ単に回復できるほどの気がなくなっただけだ。

何せ一度でも膨大な気を使う瞬間回復だ。

関節を戻すだけとはいえ、何度も何度もただ只管に繰り返させていたのだ。

大技を廃し、一撃で決める賭けの機会を見逃してまでこの確実に勝機となりえる瞬間のためにだ!!

「これで持久戦に勝ち目が出てきましたね?」
にやりと笑って言ってる。

「ハハハハ!!! 言ってくれるじゃないか! 私の瞬間回復を破った奴は初めてだぞ!!
しかもこんな正攻法でだ!! でも、明らかにお前の方がボロボロだぞ!!」
そう言ってる襲い掛かってくる。

しかし、やっと、やっと僕にとっての勝負を始められるのだ!!!

また繰り返すように受け、透かし、流し、反撃し、投げる。

回復力がかかり落ちたとはいえ、少しずつは回復する相手に、こっちは気力のみで繰り返す。

「ハハハハハハハハハハ!!!」

もはや彼女も特別なこともせずには笑いながら繰り返す。
しかしその体には確実にダメージは蓄積している。

「クック! 川神百代オオオオ!!!」

その壮絶な壊し合いの中、思わず叫ぶ。

「ハハハハハ!! 楽しいなあ!! 高坂虎綱アアアアアア!!」
 笑いながら殴られ、技を掛ける。

僕らはいっただいどう見えるのだろうか?

「くあつ!!」

遂に彼女の回復は追いつかなくなってきた。

「クハ! クハハハハハ!!! 川神百代!!! 僕は、……俺はここまでたどり着いたぞオオオオ!!!」

「ハハ!! ハハハハハハハハ!!! そうか! 遂に来たか!!!」

彼女は昔のことなど覚えておらず、自分が回復できなくなったことに対して言っているのだろう。

それでも構わない!

「今度こそは! 今度こそはお前を地に着けてやる!!!」

そう言ってもはや両の腕の間接などなくなっている彼女を投げるために掴む。

「そうか! そうか!!! だが! 負けてやる気などない!!!」

それに合わせて彼女は僕のもはや檻樓になっっている道着に噛みついてきた。

「ほへえほふあひは!! ふあはふいふう!! ひんふえんふあふはふ!!!」

(これで終わりだ!! 川神流!! 人間爆弾!!!)

回復も使えなくなつて、まさに自爆となつた技を、それでも勝つために使つてくる。急ぎ投げるが、彼女は受け身を取る努力さえ捨てていた。

「つく!!!」

先と同じ対処、しかし、もはや投げと言う行動に入つていたため一瞬行動が遅れる。

「ああああああああああああああ!!!」

二つの悲鳴ともつかない叫びが重なり、片やその場に、片や吹き飛ばされ倒れこむ。――まだまだ、まだ立てる。

それが止めになつてしまつたのか、もはや自分の体が動いているのかもわからない。しかし、目には同じく立ち上がったであろう彼女が映つた。

――なら、まだ戦うしかない。

もはやどのくらい速さが出ているのかもわからない歩みで近づく。

彼女も同じくしてぼろぼろでありながらも向つてくる。

――あと一撃、あと一撃で倒せる。

そう確信できるほど彼女は満身創痍であつた。

そして、

――掴んだ!

彼女を掴み、投げようと力を入れると、世界が向きを変えた。

——者——神——代!!

彼女が倒れる音を聞くことはなく、最後に感じじたのは自分に何かのしかかってくる感触だった。

第十六話 敗北 その後

目が覚めると知らない……わけじゃないな。

川神院の治療室の天井だった。

全身が痛くてしようがない。

てか、負け……たんだよなあ。

「ああ……、まだ届かないか……」

うん、まあでも何もできなく地に伏せられた頃よりはましだと考えよう。

「失礼しまー……!! じいちゃーん!! 高坂君起きたよー!!」

声をかけられ、返事をする前に襖が開けられたと思つたら、一子ちゃんが駆けていった。

何と言う早業!!

てか、暗いな、決闘は午前中だったから……八時間くらいは寝てた?

思わずあつけにとられていると、数人の気配が近づいてきた。

「目を覚ましたようじゃのう」

「体は大丈夫かい？」

「大丈夫？ 動かない所とかない？」

戻ってきたら一斉に声をかけられた。

ずいぶん心配されているようだ。

「おはようございます。 うん別に動かない所は……あれ？」

ちよ?! 待って！ 立てないどころか体起こせないんですけど!!

「無理をするでない。ぶつちやけ治療する前はワシでも死んだと思ったのじやからな」

「そうだよ、何とか後遺症はないようにできたと思うガ……多分ネ」

「あわわわわ、ランニングから帰ってきたらとんでもない高坂君が……。怖かったわ」

え？ ちょっとそんなに酷かったの？

いや、確かにあの時はもう痛みなんか超越してたんじゃないかってくらい興奮してたけどさ！

ていうか一子ちゃん涙目の範囲超えてね？

「ち、因みにどんな状態だったんですか……う？」

おっかなびつくり聞いてみると

——ピシ!!

全員固まってしまった。

「聞いた(の) かい かのう)?」

あ、これは怖い。

「いえ、やめておきましょう。うん、それがいい」

怖気づきました。

「それがいいじゃろ。なに、川神院の総力を結して何とか元通りになるようにできて
いるずじゃ」

ああ、鉄心さんでも不安になる惨状だったんですね。

流石紙装甲、少しでも気を抜いたらミンチだね!

いや、笑えねーよ。

「あー、モモ先輩は?」

この話題を続けると怖くてしようがないのでそらしてみる。

「うむ、モモも流石に自爆技を回復なしで使うのは堪えたみたいでの、今は部屋で療養
中じゃ。なに、あと数時間もすれば気が回復して瞬間回復でも使うじゃろ」

おお、相手も無傷とはいかなかったようだ。

……でもすぐに回復できるってのはやっぱり卑怯すぎると思うんだ。

「お主も夜が明けるころには立ち上がるくらいはできるようになるじやろう。死ぬほど痛いじやろうけど……」

「ゆっくり休むといいヨ。そうダ、食事でも持つてこさせようカ。固形物は無理だろうけどネ……」

「うう、死んじゃったかと思つたわ」

ちよいちよい不安になることを言わないでほしい。

てか、一人トラウマになつてないか？

感覚自体は……うん、死ぬほど痛い。

よかつた、動かなくなるつてことはなさそうダ。

「ありがとうございます。とりあえず動けるようになるまで休みますね」

「そうしなさい」

「それじゃ、食事ができたらもつてくるヨ」

「早く元気になつてね？」

そう言つて出ていく三人。

いや、最後の自爆は確かに死んだかと思つたけどやっぱり危なかつたようだ。

そうして、夜が明けたころには、何とか動けるようにはなっていた。
動けるようには……

「なんじゃこりゃ?!」

トイレに行つて鏡を見ると、モンスターだった。

これ僕生きてるよね？

まあ、痛みさえ我慢すれば動けるから生きてるんだらうけど。

「なんだ!!」

叫び声に反応したのか武神が飛んできた。

てか、本当に回復しやがったこのアマ。

理不尽だ。

「つと、高坂か、どうした？ どつか不具合でもあったか？ 一応後遺症は残らないとは言っていたが……」

この人も人を心配したりするだな。

「いえ、体は動くみたいですが、起きて初めて自分を見たらUMA見たいのがいて……」

「あー……、確かに今のお前そんな感じだなあ。まあ、私の攻撃を最後まで受け続けた

んだ、そうなくてもおかしくないだろう」

「こんにやろう、ドヤ顔ムカつく。」

「いや、それにしてもこの差は不公平でしょう……」

「ハハ、まあこの私だからな！ ……とは言っても、私だつて気がある程度回復するまではひどいもんだつたぞ？ 両の手はぐにやぐにやで、自爆したせいでぼろぼろだ。あ

あ……、美少女としてあるまじき姿にさせられてしまった」

最後は演技がかつた仕草で泣き崩れた。

うん、平常運転だ。

だつてこの人目が笑つてるんだもん。

「はいはい、びしょーじよびしょーじよ」

「こんだけ、通常通りの姿を見せられては罪悪感も糞もわくわけがない。

「なんだよー、あんなことしといて冷たいぞー！ 責任とれよー！」

あ、ちよつとすねた。

責任……、責任ねえ？

改めてこの武神を見てみる。

顔、うん自称するだけはある、美少女だ。

胸、けしからん、流石武神けしからん。

腰、てかなんでごつつくないんだろう？

尻、名は体を表すとはこのことか！

足、……実は僕、脚フェチなんだ……。

総評、まあ、普通にありである。

「う、ま、まあ、なんだ。あれだけ出し切ったのは久しぶりだったぞ？　実に楽しかつ

た。またやろうじゃないか!!」

露骨に見過ぎたのか、照れてしまったらしい。

明らかに話題を変えてきた。

照れるんならやんなきゃいいのに。

「はい、こちらから頼みたいくらいです。で、いつやります？　いつでもいいですよ。

ちようどいいしこのあとやりましょうか？」

まあ、話にのってやるとしよう。

「ちよ？　おま、この後つて？　普通に満身創痍じゃないか!？」

「ははは、体が動くんなら問題ないですよ。死ぬほど痛いけど」

もともと、化け物たちと比べたら大したことのない身体能力だ、このくらいなら誤差もいところ、幾らでもやってやろうではないか！

「い、いや、流石の私でもこんな状態の相手と戦いたいとは……」

「大丈夫大丈夫、さあ、外行きましようか？」

「え？ ちよ？ 本気かお前？ いや、引つ張るなよ……、じじいー!! じじいー!!!」

おお、珍しく助けを求めているぞこの人。

さあ、頑張ろうか。

「どうしたんじやモモ。朝から騒がしいのう」

「あ、おはようございます鉄心さん」

「いいから何とかしろじじい！ こいつこの状態で戦おうとしてるんだ！」

「……ふお？ 正気か？」

む、失礼な。

「はい、まあ気が乗らないというなら組手でも……」

「いや、そういう問題じゃないからな！ 死ぬぞお前!!」

「大丈夫大丈夫、ほら行きましようよモモ先輩。つく、ほら、少しだけだから」

「いや、お前！ なんかおかしくなってるからな!? ちよ、じじい！ いつまで呆けてる!! 何とかしろ!!」

はあ……はあ……、いつも自分から誘ってるくせになんでこんなに抵抗するんだこいつ？

「……ツは！ 落ち着くんじや高坂よ！」

「そうだ、落ち着け、昨日負けたばかりだろう？ そんな状態でやつてもしようがないだろう、な？」

あ、それ言っちゃおう？

気にしてないでも思ったのか!!

「く、いいだろう！ ならば決闘だ!! ほら、大丈夫だから！ 先っぽだけだから!!」

「おい、なんか卑猥になつてるぞ!!」

「むう、高坂よ、許せ。川神流 秘穴突き!!」

「甘い!! 怪我をしているとはいえそう簡単に食らつてやるもんか!!!」

向かってくる鉄心さんを受け流す。

「お前！ すごいけど、確かにすごいけど！」

「さあ、行きましようかモモ先輩!!」

「ツク！ ルー！ ルー!! 協力するんじや!!!」

この後、ルー先生も加わってしまって、流石に取り押さえられてしまった。

「……なあ、じじい」

「……なんじゃ？ モモ」

「ちよつと私、精神修行もするようにするわ……」

「ああ……、わかってくれて何よりじゃ……」

後日、少しは戦闘衝動を抑えることに前向きになったモモ先輩がいたらしい。
なにかあった？

第一七話 一大事の足音

ああ、僕は進級大丈夫なのだろうか？

結局、適度な組手はともかくとして、怪我が良くなるまでは川神院に軟禁されてしまった。

これでひと月近く学校を休むことになってしまっているのだが……。

うん、鉄心さんを信じよう。

最悪九鬼を頼れば何とかできそうな気がするしな。

「高坂君……、リハビリとか言ってそんなに戦ってて大丈夫なの？」

組手を終えて将来について不安なことを考えていると、学校から帰ってきた川神姉妹がいた。

「おまえ……、本当に怪我してるのか？ 瞬間回復しなくてそれっておかしいだろう……」

二人とも心配してくれている…….のか？

少なくとも一子ちゃんは心配してくれているようだ。

「いや、僕みたいなのは戦い続けてないと勘が鈍っちゃうからね。怪我については慣れ

てるから」

そう、紙装甲である僕は、やっている修業方法から大怪我なんてしよつちゆうだった。何せ、町の不良の凶器攻撃でさえ受け流せなければ大怪我だからね!!

……悲しくなってくるな。

「ムー、アタシもまだまだ努力が足りないのかしら……」

「オイ、ワン子やめてくれ、こんなやり方してたら普通死ぬぞ? いいか? こんな怪我慣れるとかいうのはただの変態だからな?」

おお、変態認定されている。

て、言うか女漁っている奴に言われたくないよ。

「うーん、でも、高坂君はお姉さまと戦えたんでしょ? ならそのくらいは……」

「一子ちゃんはやめた方がいいと思うよ? 師範代目指すつていうならこんなやり方は邪道だと思うしね」

「そうだぞワン子、これみたいになるのには師範代試験なんかよりずっと厳しい道だぞ」

二人して説得をする。

僕としては一子ちゃんがお姉さまに勝ちたいという思いを優先させるといふならこつちに来てもいいとは思いますが、彼女はそうではない。

「うん、そうね！ アタシの夢は師範代になることだもん！ やり方は違うわよね！」

「そうだぞ、ダークサイドに落ちる必要なんてないんだ！」

ちよ、おま、ダークサイドって。

「そうよね、アタシダークサイドには落ちないわ！」

「……………なんだ……………と？」

一子ちゃんに、あの一子ちゃんにダークサイドって言われた…………。

僕は思わず膝から崩れ落ちてしまった。

にやにやしながら一子ちゃんを連れて去っていく武神が憎たらしい。

これはこつちから攻める方法が至急必要なようだ。

と、決意を新たにした。

そんな治療生活を終え、無事出所し、いつも通り親不孝通りへ向かった時、衝撃的な情報を得ることになった。

「人が、少ない？」

そう、いつもなら湧いて出えくる僕の組手相手が非常に少ないのだ。

これに疑問を覚え、竜兵を探し出して事情を聞いてみた。

「ん？ああ、てめえか。不良が少ないだ？ ああ、最近九鬼の奴らが介入してきやがってここらの馬鹿どもが少なくなっちゃったんだよ。んで、丁度いいな。そのせいで俺の獣の昂ぶりが発散できなくてな、どうだ？ その陰で……へぶっ!!」

親切に説明してくれたのは感謝するが、その後がいただけでない。

とりあえずブン投げた後、九鬼本社に向かって走る。

今回は訓練のバイトではなく、本格的に強襲することになるかもしれない!!

「つく！ 中途半端な飛び道具は無駄だ!! 全員で囲め!!」

「ああ！ 35位が投げられた!! 穴をふさげ！ そいつは隙をつくのが病的に上手いぞ!!」

周りの従者達が僕をとらえようと叫ぶ。

しかしこちらとしては目的さえ達成できればどうでもいいので、気にせず呼びかけさせてもらう。

「揚羽さアアアアん!!! ヒュウウウウムさああああん!!! 説明してもらおう

ぞおおお!!」

おそらく今回の件の責任者だと予測できる二人の名を叫びながらひたすら建物を目指す。

そして、建物の前には二人が待ち構えていた。

「どうしたのだ? 高坂よ。こころも騒ぎを起こされるのは我としても見逃せなくなるぞ?」

「まったくだ。何のつもりだ小僧?」

流石に警戒した様子で尋ねてくる。

何のつもりだと?

それはこつちのセリフだ!!

「今回の件どういうつもりですか!? おかげ親不孝通りは不良が少なくなってしまうたじやないですか!!」

「む? 何か不都合でもあるか?」

「いいことではないか。貴様は何をそう喚いている?」

ああ、この二人はわかっていないようだ。

あそこは、あそこは僕の大切な!!

「人の組手スポットを駄目にしたのはどういふつもりかと聞いてるんですよ!!!」

「……………は？」

呆ける二人。

「あそこは、怪我さえさせなければいくらでも相手が出てくる素敵スポットだったんですよ？ しかも向こうからケンカ売ってくれるから問題にもならない！ それを！ それを!! どんない理由があつて駄目にしてくれたんだ!!!」

「……………あ、ああ、すまないな？」

「ふむ、そ、そうか？」

おお、この二人が戸惑うなんて超レアだ。

特にヒュームさんがうろたえたところなんて初めて見た。

だが理由を聞いていない。

「理由は？ 納得のできる理由はあるんでしょうね？」

「あ、ああ、これから九鬼の新プロジェクトの問題として治安が悪すぎることはよくないのですね、掃除させてもらったのだが……………」

ふむ、ちよつと仕様がないう気もする。

だけど、大犯罪者がいるとかならともかく、町の不良程度のことだ。

あそこまでやる恐怖政治の理由としては弱いと思う。

「でも、あそこの中だけなら迷惑もかけずに集まっていた人たちもいるはずですよ！ やりすぎでしょう。おかげで組手相手が……」

「わかった。ならば川神百代にくれてやろうと思っていた案件、お前に任せると約束しよう。それでどうだ？」

ん？ つまり、組手相手は保障される？

……ならいいか。

「わかりました。それで納得しましょう」

「あ、ああ、そうしてくれ」

「ふむ、では小僧？」

良かった、話はまとまったようだ。

んじや、もう用はないな。

「はい？」

「落とし前の時間だ!!!」

そうして、また即死技連発の無限ループを体験することになるのだった。

第十八話 東西激突 前篇

遂に学校に復帰したと思つた矢先に待つていたのは、東西交流戦と言う一大イベントであつた。

なんでも西の天神館が修学旅行がてらに決闘を申し込んできたらしい。

全学年同時にくるつて、向こうは毎年修学旅行があるのか？

うらやましい。

以前にクリスとの決闘を披露していた僕は、当然の如く代表に選ばれていたようだ。

「うわあ、あれはひどい……、大将囲まれてぼこぼこじゃん」

そのイベントの第一戦である、一年生の部、うちの学校の大将がわざわざ突っ込んで行つて凹されているのを、高所から身をろしながらぼやいてしまう。

「いや、あの黛さんが頑張つてるんだから時間稼げばいいのに……」

「まったくだ。自分の力量を見極められていない。まあ、自業自得だな」

後ろからかかった声に振り向けば、武神がいた。

「おや、モモ先輩あんまり楽しそうじゃないですね。せつかくの戦う機会なのに」

「ああ、強そうなの居ないしな。弱い者いじめになりそうで気が進まん」

おお、微妙にであるが精神修行の効果があるんじゃないか？

まだまだ強い人との戦いは別のようだが。

「まあ、確かに化け物は……一人、かな？　しかも2年生だから戦えませぬ。残念」
その点僕はいいい修行になりそうだ。

「ん？　そんなに強いやついるか？　……わからんなあ。まあ、楽しみにしておくか」
うん、僕の弱者としてのセンサーは優秀な部類らしい。

「まあ、それよりも向こうの館長？　だったけかな。あの人、ぜひ終わった後にご教授願
いたいですね」

「おお！　お前もそう思うか！　確かにあの人はいいなあ。戦ってくれないかなあ
……」

あの方は強い。

きつと戦えば得るものは多いだろう。

そんなことを二人して夢想していると、

「阿呆、向こうも仕事じゃ。今回は諦めなさい」

また後ろから声をかけられる。

今度は鉄心さんだった。

気が付いてはいたけど、化け物が後ろから近づいてくるのはあまり心臓にやさしくな

いな。

「……そうですか。残念ですね」

「えー？ ケチだなあじじい」

二人して文句を言う。

それにしても武神、諦めがいいな。

なにかこの人をここまで変えたのだろうか？

「ほれ、一応行事とはいえ夜じや。学生はとつと帰らんか」

教師らしいことを言って帰宅を促す鉄心さんたちと別れて第一夜目の終了だ。

今日の前では第二夜目、三年生の部の戦いが始まろうとしている。

『天神合体！』

のだが、何のつもりだろう、あれ？

相手全員が合体して一つの塊になっていた。

いや、確かに多少強くなってるしカツコイイけどさ。

効率悪すぎるだろう。

カツコイイけど。

避けるの難しくなっただけじゃね？

カツコイイけど。

そもそも一人一人の耐久上がったわけじゃないからギリ貧じゃん。

カツコイイけど。

「星殺し!!!」

一条の光が合体した生徒を貫いた。

「おおぅ……、一撃で瓦解とか……」

せっかくのロマンが台無しであった。

格好よかったのに。

せめて合体が姿じゃなくて一撃の技であつたら通用していたかもしれないのに……。

提案者はロマンをよく理解しているようだ。

素敵である。

てか、あれで手加減してらって、

冗談だと思うだろう？ 僕、あれを何発も受けたんだぜ？

「終わった終わった」

そう言ってこちらに向かってくる武神。

その掌がこっち向いてるの怖いんだけど。

「お疲れ様です」

「おうー、あんまり疲れてないけどなー」

そりやそうだ。

一発くらいで疲れてくれるんなら、あの時僕が負けているはずがない。

「それにしても、向こうさんはかつこよ……ゴホン、何がしたかったんでしょうね？」

「おい、なんか言いかけたな？ まあいい、多分デカかったら強いー、とかそんな考えだったんじゃないか？」

いや、きつと合体は勝ちフラグ、と言う考えだろう。

まあ、口には出さないけど。

「そんなもんですかねー」

「と、言うかお前、見えてたけどすごくキラキラした目をしてたぞ？」

不覚、見られてしまっていたようだ。

「つと、そうだ。弟から作戦会議だからお前を連れてくるように頼まれていたんだ。

来い」

はい？

まあ、行くけどなんで僕も会議に参加するんだろう？

作戦なんて中心人物たちとそれが得意な奴で立てるもんだらう。てなわけで引きずられながら会議会場につく。

と言つてもただ人が集まっているだけだが。

「来た来た。ありがとね姉さん」

思つたよりも人数が少ないな。

九鬼主従、直江、葵だった。

「え、とこのメンバーだとなんで僕が呼ばれたかわからないんだけど？」

「ああ、一年の戦いを見て、流石にいがみ合ったままじゃ勝てなさそうだからね。一番問題なS組とF組の橋渡しと、どうせ大将は九鬼だろうから大まかな作戦を話し合つておこうかと思つてね」

「フハハハ!! 大将、確かに引き受けたぞ! 明日は見事皆をまとめてやろう!! 作戦立案についてはわが友トーマに任せる。あずみ! 後は任せるぞ! ではな! 我は多忙故ここで中座するが、しっかりはげめよ!」

「了解しました! 英雄様!!」

「はい、任されましたよ」

そう言つて去つていく英雄。

てか、僕が呼ばれた理由の説明全然されてないよね?

「じゃあ、用事も済んだみたいだから僕はこの辺で……」

「ちよつと待とうか」

そう言つてちらりと武神を見る直江。

なんかのアイコンタクトだろう、次の瞬間には武神にのしかかられていた。

「おいおい、まだ来たばかりだろう？ どこ行くつもりだ？」

「いや、僕いる必要なくね？ と思つたんですが。てか、先輩もなんでいるの？」

「いや、一応最高戦力にもいてほしくて。俺も最初はそのメイドさんいるしいと思つただけど、姉さんが二年の最高戦力なら高坂だつて言つて、それに九鬼主従が賛同したからさ」

おおう、先輩の件については無視か。

んで、クリスの一件しか知らない直江はやはりどこか納得しきつていない口調である。

悪かつたな、派手じゃなくて。

そんなこんなで、彼我戦力の確認と作戦案が話し合われることとなつた。

「西方十勇士、これが厄介だ」

「そうですね、一人一人の情報も完璧とはいきませんし」

なんか、情報制度がどうこうとか話してる。

「なあなあ、あずみさん？ 情報だったら九鬼がこうばーつと！」

「阿呆か、こんな学校行事にわざわざ介入してたまるか。あんまり抜けたこと言ってるじゃねーよ」

うわ、酷い。

「ああ、やつばそうなんだ」

「つけ、これだから馬鹿は困るぜ」

む、このメイド猫かぶりやめたと思ったらあんまりじゃないだろうか？

ここは少し脅しておこう。

「あんまり舐めたことばっか言ってる、揚羽さんとヒュームさんに頼み込んであずみさんの上司になっちゃいますよ？」

「つげ!! お前それ!! 微妙にシャレになってねーんだよ!!」

お、やつぱり危機感湧いたようだ。

実務はともかくとして、九鬼一族の護衛も仕事とあれば意外とあり得なくはないのだ。

「あの一、お二人さん？ こつちに参加してもらえませんかね？」

あ、頭脳派二人に白い目で見られてる。

仕方がないだろう、こつちは戦術面、しかもごく一面的なものに人生かけてきたんだ。

理解はできてもそうそう戦略にまで目が向いてたまるか。

「あー、じゃあ、提案」

そう言ってみると、言っといて期待していなかったのか少しびつくりした様子で先を促すように見てくる。

「僕、敵の密集地帯通る、敵の大将倒す」

いった瞬間、場の空気が凍った。

因みにいまだに背中中に張り付いている武神は大笑いしていた。

……胸が当たって気持ちいです。

「……いや、何だろう姉さんと同レベルなのか……」

あ、武神がはがれて直江にお仕置きしてる。

しかも失礼だな。

「いや、一緒にしないでよ。高度な話には入れないけど一応考えた上の話だよ」

お、武神が戻ってきてしまった。

さつきと違って軽く絞まっている。

「考え、ですか？」

お、さすが頭脳派二人、切り替えが早い。

呆れてたはずがもう聞く体制ができてる。

「うん、ぶっちゃけ二年では僕くらいしか勝てなさそうなのが一人いる。それ引き寄せるためにも目立たないとまずいかなあって思ったんだよ」

と、伝えると直江は武神の方に目で確認していた。

「ん？ ああ、昨日もそんなこと言ってたな。わたしは気付かなかったが、こいつの察知能力の精度なら私より上だからそうなんじゃないか？」

「な!?! 姉さんより上!?!」

おーおー、驚いているねー。

いくら武神とはいえすべてがトツプってわけじゃないんだよー。

そんな感じで危機意識が芽生えたのか僕の意見は採用されたようだ。

うん、上手いことたくさん相手の相手と戦えるようでは何よりである。

第十九話 東西激突 後編

「怯むなー!! これ以上行かせるな!!」

はいどうも、向かってくる人をちぎっては投げちぎっては投げ。

無双モードに入ってる高坂です。

いや、実際は結構必死だけどね。

はたから見ると余裕サクサクでもHPが少ないから大変なんだよ。

「くっ! おい! 十勇士の誰かに連絡して来い! 俺たちじゃ止められん!」

今僕がいるのは定石では一番固められる大将までの最短コース。

ご多分に漏れずに人がいっぱいだがまあ、親不孝通りやら川神院やらで大勢相手は慣れているし全員倒す必要はない。

サーチ&エスケープを駆使しながら程々に進んでいる。

——ドーン!!!

「うおっ!」

少し遠くから炸裂音が聞こえた。

本当に大砲使う馬鹿がいるらしい。

遠距離と爆発つて相性最悪じゃないですか。
やだー。

——ドーン!!!

「いや、こんな連発つてここは世紀末かよ?」

ひっきりなしに響く音に戦慄する。

あとから聞いた話だと椎名まで矢に爆薬を着けて射たりしたらしい。

なんと恐ろしい。

——ドドーン
!!!!!!

……………。

を?

ひとときわ大きい爆発音の後にもう後に続く音はなくなつたな。

倒したのかな?

「く!? 待て! 無視していくな!!」

さてさて、倒さずにおいてきた人数もだんだん増えてきたな。

後ろからも結構な数が迫ってきている。

「さて、人数減らしておくか」

そう言つて追いかけてきた人に向かいなおす。

「やつと諦めたか！大将のところに行きたければ我々全員を……うお!!」
相手より速いスピードで走っただけあつて追いかけてくる人たちには少しずつ差が
できている。

と、言うことで先頭集団の数人を走ってくる勢い度転ばせるように投げてやる。

「く、なかなかやる……つて！ 待て!!」

んで、次に早いやつらが追いついて来る前に逃げましょー。

多対一の常套手段だよ、これ。

「うわああああ!! 気持ち悪いよオオオオ!!」

ん!?

なんか妙に切実な叫びが聞こえた辺りから警戒するべき力の持ち主の気配がした。

が、なんか覚えのある気配だなあ……。

なんとなくかわらない方がいい気がする。

なんかあいつたまに壁越えてるんじゃないやね? つて気迫出すときあるんだよなあ……。

うん、考えないことにしよう。

——ドーン!!

そしてまた炸裂音である。

これ家の本陣の近くからしてね?

……ああ、あのN I N J Aメイドか。

てか、合戦とはいえこれ生徒同士の戦いだよね？

まあ、昨日のあれの後だと些細なものか。

「ぬははは！ お前が正面から突破をかけてきているという馬鹿か!!」

順調に進んでいると前から上半身裸の変態が現れた。

K A W A K A M I 以外にもあんなのいるんだなあ。

まあ、見覚えのない変態と言うことは敵だろう。

「フツ、本当は海から奇襲をかける予定であつたがああ、あの兵の壁を越えようとしている奴がいるというならこの俺も動かねばなるまい!!」

——バシヤン

そうやってぬるぬるした液体を被る変態。

「ヌルヌルだ。この西方十勇士が一人、長宗我部 宗男のオイルレスリングを味わうがよい!!」

「……いや、僕そんな誰得なサービス望んでないんだけど……」

そう言うのは童兵とか相手にやってほしい。

「ぬははは！ 部下から聞いているぞ！ お前は柔道を使うらしいじゃないか。これならそう簡単に掴めまい!!」

ああ、なるほど理にかなっている。

「確かに掴み辛そうだね、それ」

そもそもアレに触れたくない。

「そしてこの俺のパワーを相手に寝技絞め技は通用しまい！」

うわあ、ビジュアル最悪だけど結構よく考えてあるなあ。

腰を低くして向かってくる男を見ながら考える。

でもまあ……。

向かってくる長宗我部に向かってこつちも駆ける。

「ぬははは!! レスリングのタックルを味わうがよ……ぐあああ!!!」

交差する瞬間、後ろ足の方から斜めに軸を作つて拳を突き出してやる。

「柔術なんだよね、僕のは」

そう言う僕の手には棒手裏剣が握つてあつた。

「二応、当身もできれば武器も使えるよ。まあ、これはある程度の強さもつ奴には一切通用しないんだけどね……つて、聞こえていないか」

カウンター気味に額に棒手裏剣の柄をたたきつけられた長宗我部は泡を吹いて気絶していた。

まあ、投げられないこともないんだけどこつちの方が楽だったしね。

何よりオイルに組み付くのはごめんだ。

そう思いながら棒手裏剣を袖の中にしまいながら又大将に向かっていく。

……ああ、これを次に使うのいつになるんだろう？

組手以外の実践で僕の威力でこれ効く奴ってそういないんだよなあ。

しかも普段は投げた方が早いし……。

それにしても、

「ヌルヌルな武神……ありだな」

こういう敵と相対するにしても美女にしてほしいものである。

そしてついに敵本陣についたが

「あれ？ 大将逃げてるの？」

大将がいなく、一人のマスクを着けた男が倒れていた。

「てか、死んだふり？ できれば君と戦いたいんだけど？」

そう言つて声をかける。

「……………」

あれ？

こいつ絶対起きているはずなのになあ。

そもそもこいつ倒せそうなやつ僕の学年じゃあ心当たりにないのに。

「んー、無理強いはできないし大将追いかけてもらうよ?」

そうそう言つて大将の気配を追いかける。

後ろから安堵したため息が聞こえたが、無理強いするわけにもいかないしほうつておくことにした。

——
そうして気配を追つていくと隠れやすそうな場所で一子ちゃんとおつさんが戦つており、そのすぐそばで直江と敵の大将が向かい合つていた。

「おーい、直江ー。お前戦えたんだ? わざわざ戦線に来るつて結構な自信だね」

「お!! 高坂! ちようどいいところに来た! さあ! やつてしまいなさい!!」

おい……!」

「なんだよそれ? この状況でそれ言つちやう? なんで前線来たんだよ? お前実

は頭悪い?」

「う!! いや、予想以上に大将が強くてさ……、そばにいたやつもわんこ抑えちやうし……」

苦笑いしながら答えられた。

いや、直江が大将じゃなくてよかつた。

一年の二の舞な光景が頭をよぎったよ。

「おい！ この出世街道を歩むこの俺の前で寸劇とはいい度胸ではないか!!」

おお、敵さんはお冠のようだ。

「ほら、敵さんも待ちかねてるし頼むよ」

そう言う直江はもう離れて観戦大勢だった。

無駄に要領がいい。

「……はあ。じゃあとりあえず戦ろうか」

「……フ、いい度胸だ。素人ではないようだな。西方十勇士が大將石田、行くぞ!!」
おお、構えで練度を読むってことは結構強いなこいつ。

そう言つて刀を抜き放った。

「はあああ!」

あ、こんなもんか。

刃物は脅威だがあの剣聖相手にした後だとももの足りない。

「はい、苦勞様です」

ひよいつとかわして柄の部分を掴んで小手返し。

「ぐあー!」

あつけなく地に伏す大將。

まあ、刀を放さない根性はすごいな。

刃物持っている相手に組技に移るほど切羽詰まってないから離してやる。
うん、刺さったらいやだからね。

「まだやる?」

「……く! 舐めおつて! いいだろう。この機会に倒さなかったことを後悔するが
いい!!」

そう言うのと、何か光りだす大将。

「な……なんだ?」

後ろで直江も驚いている。

これは気が膨れているな。

こいつ、下手したら壁越えか!?

「奥義・光龍……」

「えい!!」

「ぐえ!」

と言うわけで、早いうちに落としましょう。

間合いを詰めて落とすために組み付いてやる。

裸締めつて地味だけど鬼畜技だよね。

「……………これは……………ないだ……………ろ……………う……………」

「はいおちたー」

うん、変身待ってくれるのはアニメだけである。

「え……………」

後ろで見ていた直江も不満そうだった。

「いや、強くなるの待つ必要なんてないでしょ？」

そう言いながら、戦えないのに前に出てきた馬鹿は黙つてろと言う視線を向けてやる。

「うん、これでこっちの勝ちだなー」

すると空気の読める子直江君は目線をそらして言った。

まあ、個人戦なら間違いなくwktkしながら待ってたけどね。

悲しいけどこれ、チーム戦なのよね。

「御大将おおおお!!!」

「隙あり!!! 川神流水穿ち!!!」

あ、あつちも決着ついたりみたい。

「おー！ ワン子も勝つたみたいだなー！」

直江は助かったとばかりにそっちに意識を向けさせようとしていた。

まあ、いいけどさ。

「お疲れ様、一子ちゃん。勝鬨あげちやいなよ」

「あ、高坂君！ でも、大将倒したの高坂君じゃ……」

「そうだけ、お前がやればいいんじゃないか？」

そう言われるが、

「いや、あんなぐだぐだな終わり方じゃあねえ……」

「あ……、まあ、そうか……。よし、ワン子。高坂もそう言ってるしお前がやつちや

えよ」

「えーと、いいのかしら？ それじゃあ、敵将！ すべて討ち取ったわ!!!」

——えいえいお——!!!!

こうして、一子ちゃんの掛け声とともに東西交流戦は終了したのだった。

第二十話 古くも新しい風

総合で2勝1敗と言うことで見事に勝利を得た川神学園。

しかし、あれだけやってもやはり学校行事に変わりないようで、終わった後も結構フレンドリーだった。

「この俺が本気になる前に仕留めたのはよい判断だったな。しかし次は貴様を圧倒して見せよう」

うん、実際強いんだろうにあふれ出る小物臭、残念だ。

「うん、楽しみにしてるヨ」

こうまで上から目線だと反応に困る。

まあ、実際僕もあの場までそこまできとは思わなかったから底上げ技ではあるが、ある種の穩行として一流じゃないだろうか？

「……ゴホ」

あっちの隠しているであろう彼には完全に避けられてしまってるし……。

隠すんならもっとうまくやってよね、僕なんて頑張っても強そうなオーラが出てくれ

ないのに。

「おい、急に涙ぐんでどうした？ 伊予かん食べるか？」

上裸の男に慰められた。

こいつ、変態なのがいいやつだ。

と、ちよつとした騒ぎが続く中、目的の人の気配を探しているとモモ先輩とかち合つた。

「おおー、高坂か。どーした？」

「どーも。いや、同じ方向向かってるならわかるでしょう？」

あいさつもそこそこに、お互い視線でけん制し合う。

「おいおい、此処は年齢順だろう。まあ、2戦目の時間はないかもしれないがな」

「いやいや、ここは形式にのつとて弱い方からでは？ この前負けちゃったわけです」

やはり譲る気はないようだ。

「おま！ 結構気にしてたくせに平気で負けたこと言い出すのか!？」

「そりやあもう、弱者としては使えるものは全部出しきらないといけないもので」

口元を釣り上げて返事してやる。

「ほう、だが残念だな。譲らんぞ！」

「いいんですか？ 仕合となると川神院の腰は早々軽くならないでしょうに」

「つく！ し、しかしだなあ……」

おお、こつちは効いたようだ。

「ふっふっふ……、それではお先に!!」

モモ先輩が少し怯んだ隙に先に行かせてもらおうとする。

が、

「諦めろと言ったじゃろうに……、喝っつっ!!」

鼓膜にダイレクトアタックをくらってしまつた。

「おおう……じじいめ、先回りしてやがったか」

「いや、わし学長、こいつ館長、一緒にいておかしくないじゃろうに……」

「ガハハハ!! 師よ元氣のよい子たちじゃないか。惜しい、教え子の付き添いでな

ければ大暴れしていたものを……」

「おお！ 乗り気じゃないか！ なあゝじじい、いいだろゝ？」

「ダメじゃ、お主らレベルがやるとどんだけ被害が出ると思つておる！ 今回は我慢

せんか!!」

「ちえゝ」

うん、こゝまでずつと耳抑えて転がつていたが、引き下がった武神はこつちにちよつ

かい掛けてきやがった。

いや、うん、一般人にしてるほど手加減してないせいで当たると結構きついレベルのちよっかいなんだが……。

「ふおふおふお、決闘の1件以来仲が良いようで何よりじゃ」

「ガハハハ！やはり元気があつていいじゃねえか！」

うん、止める気はないようだねこの二人は。

特に鉄心さんは結構簡単に引いてくれた孫にご満悦のようだ。

まあ、じゃれる気程度だしこつちもそう気にしてないんだけどね。

「て!! ちよい待て!!! 流石にその光ってる手はやめといて!!」

ああ、いい鍛錬になりそうだ畜生が!!!!

翌朝、朝のニュースは各局一つの話題でもちきりになっていた。

「武士道プランねえ……」

偉人のクローンだとかなんとか、正直どうでもいい。

が、川神学園ではそのあおりをもろに受けそうである。

まあ、結構強いのが川神に入ってきているようではあるがこの近辺で言えばもう今さらである。

むしろ、対して隠さずこの程度なら……、まあ、機会があれば仕合ってもらおうかなつてもんだ。

そんなこんな登校中には空駆ける武神など、やっぱりその程度でどうこうなる川神じゃないと再確認させられた。

……黒か。

多くの人間の死角だと思い油断したな武神!!

「おお！ お前は高坂ではないか！」

変態橋はその名に負けず今日は上裸の変態がいた。

「えーと、長宗我部だよね？　なんでこんなところに？」

「うむ、東西交流戦で負けてしまったからな、その汚名を雪ぐために武神を倒しに来たのだ!!」

おおう……、命知らずすぎるぜい。

ん？　ちよつと待てよ、まさか……。

「あー、モモ先輩ならさつき飛んでたからもうすぐ来るから頑張つてね」

「おう！ お前も武神が斃れる瞬間を見ていくがいい!!」
うん、本当に頑張ってほしい。

何せもしかしたらヌルヌルの武神が現実のものになるかもしれないのだから!!!

うん、やっぱり無理だったか。

指弾くらい何とかしろよ!!

「おい、むつつり。そんなに悔しそうにするなよな」
うん、後ろとられたね。

まあ、気配消してたわけじゃないから気付かれて当然か。

「いや、男なら期待するでしょ」

「おお……、真顔でとは、うん、むつつりではないな」

まあ、機会がなければがついたりしてないからむつつりだと思われたのかな？

「僕は結構オーブンな方でしょう？ 現に先輩のスキンシップ楽しんでるし」
てか、この人ライン跨ぐと結構くっついてくる人なのね。

「ほう、弟よりも素直だなあ。まあ、あれだけ熱くぶつかり合ったんだ、この程度じゃあ照れないか」

「はい、あれはお互い足腰立たなくなりましたね」

周りが殺気立つがもちろん決闘のことです。

「本当に動じないなあ。可愛げがないぞー!」

「まあ、先輩くらいの美少女ならいつでも大歓迎ですし」

からかいたくて仕様がな駄々っ子をあやしながら学校に向かうことになった。

途中、聖域の中の布地の色を指摘したら真っ赤になって殴られました。

学校についたら、何やら臨時全校集会が行われるようだ。

まあ、あれだけ騒がれていれば当然か。

「それでは、葉桜 清楚、あいさつせい」

なんでも6人いるらしい転校生の最初の一人が呼ばれた。

——オオ!!!

周りが非常に湧いている。

確かにそうなくてもおかしくないくらいの美少女である。

が、

「……………うえ…………」

「どうかしましたか？ 顔色が悪いようですが」

心配してくれた葵に手を振ることで答える。

なんだあれは？

整合性が採れていなくて気持ちが悪い。

いや、武神とかはこれでも何にも感じないのか？

あれ、威圧感やら積み重ね、武の匂いが全くしないのに化け物級だぞ？

自己紹介を聞いている限りでは自覚すらしていない。

ああ、アンバランスすぎて気分が悪くなる。

途中コントじみた遣り取りも含めた自己紹介の間で何とか直視できる程度までは慣れたが、やはりあまりいい気分じゃないな。

「……美人なんだけどなあ」

うん、見た目は間違いなくぴか一だ。

「ああ、お前もそう思うか」

と、独り言に返事があつた。

「やつぱり育ちすぎだよなあ……、あと10年早く会いたかつたぜ。高坂もそう思うだ、うおおお!!?」

「一緒にするなロリコン」

つと、気分が悪くなつてて自制が利かなくなつていた。

でもこれは投げ飛ばしてしまつても仕方がないと思うんだ。

小雪もけりで追撃してるし。

そんなコントをしている間に次は2年S組に入つてくるといふ3人が紹介されるみたいだ。

「武蔵坊 弁慶、源 義経、両方女性じゃ」

学長の紹介と共に姿を現す二人にまたも生徒一同、特に男子が湧いた。

うん、眼福ではあるが、隣にいる葉桜先輩にまだ慣れないせいでテンションが上がるねえ。

ていうか、葉桜先輩が一番おっかないだろう。

なんだあの人は、魔王かなんかか？

これもう日本の偉人だつたら信長とかそのあたりじゃね？

「那須 与一！ でませい！」

どうしても、葉桜先輩のことが頭から離れないでいると3人目が来なくて周りがざわついている。

そんな中、弁慶の飲sy……ゴホン！ 飲川神水、川神水！ 川神水!! 大事なこと

なので3回言います。

が話題に上がり周囲が対抗意識を燃やしている。

「あれ？ 3人Sに入ってくるんだよね？ 俺1か月分くらい居なかったから強制Sオチとかないよね？」

「南無……」

「あははー、トラのことは忘れないよー」

「な……んだ……と？」

唐突に気が付いてしまった事実。

そして準とユキの反応に両膝を着いてしまう。

「……こら二人とも。大丈夫ですよ高坂君。あなたの欠席は怪我と言う考慮に値するものですから単純に成績順のものになるはずですよ」

「本当か!? ああー焦ったー」

まあ、別に落ちたら落ちたのだが、なんとなく悔しいじゃん？

と、不安を払拭していると何やら演奏が聞こえてきた。

と言うか、この気配って……。

おんなじ顔の執事が橋を作っていく光景すらどうでもよくなるほど禍々し……ゴホン！ 力強い気を感じる。

「我、顕現である」

そう言つて現れたのは九鬼 紋白、九鬼兄弟の末っ子である。

この人がここにいるつてことは間違いないなあ……。

隣ではしやぐロリコンすらどうでもよくなつてしまう。

ああ、僕今遠い目をしてるんだろなあ。

あの後ろに立つてる執事は間違いないよなあ……。

あ、こつち見て口元釣り上げやがった！ なんて嫌な笑いだ！

うお！ 殺気が飛んできた！

「新しく1年S組に入ることになりました、ヒューム・ヘルシングです。皆さんよろしく」

ああ、あの爺、よろしくの時明らかにかこつち睨んだよ……。

注意の向け方が武神と半々じゃねえか。

そこは武神だけ見とけよ!!

ほら、武神もなんか挑発的なことを言つてあの爺の注目を一身に背負えよ!!

そんな願いもむなしく、最後までせいぜい値踏みする程度の二人だった。

第二十一話 英雄たちの加わる風景

さてさて、世にも恐ろしい化け物の競演の場の後の我がクラスはとても癒される。

金ぴか、若づく……メイド、軍人に残念名族、バイ、ちよいヤバ不思議ちゃん、ロリコン。

これだけそろっていても癒される。

……泣いていいかな？

「義経と弁慶、与一だ。皆転入生とは仲良くするんだぞ」

てなわけで、先ほどはあまり聞いていなかったが改めて自己紹介のようだ。

うん、美少女、美女、美少年と言ったところか。

しかし！ この川神！ 美形ほどぶっ飛んでいるという謎法則があり得る土地、油断

はできん!!

現に、男女関係なく口説こうとする美形に早速決闘吹っかける美形がいるくらいだし

な!!

「そおい」

うへえ、完全パワータイプだねえ弁慶は。

あれ喰らったら大変だな。

うわ、軍人さん正面からガードしたよ、ありや無理だろ。

てか、あれで認められるって学校としてはどうなんだろうか？

最高の校風ですね、ええ、非常に助けられています。

「では、次は、義経が威を示す番だな！」

そして始まる真面目チャンネルタイム。

多馬川の野鳥の推移って……。

まあしらせるわな。

ここがS組じゃなければ下心ありきで盛り上がったかもしれないが……。

「……カルガモ」

あ、落ち込んでる義経ちゃん慰めたいです。

しかし、何のフォローも浮かばんよ。

ああ、口舌に長を持たぬが武辺者の性か……。

「ところで、1年も2年も、S組に人数が増えた分、S組の最大人数も増えたのであろ

う？」

「ウイ、いもつとも」

きた！ ちよい怖くなる話題だぜ！

「ぬるいのう。此方は嫌じゃぞ、余分に……ヒイ！」

「ムー！ すさまじい殺気!!」

余計なことは言うな心よ！

ついでに賛同しようとしてた軍人プラスαよ!!

フハハハ！ 軍人二人と英雄以外真っ青になって口をつぐんでおるわ!!

葵に慰められたが残留確定じゃないからな、鬼にでもなつてくれるわ!!

「おい、そこの一か月休学者！ とりあえず即落ちはないからその殺気引つ込めろ！

おじさんもちびるところだったぞ……」

あ、そうなんだ。

安心して気を収める。

おお、クラスに安堵の息の大合唱がおきたぞ。

なかがいいなあ、うん。

「へえ、大した気の量じゃないのにおっそろしく研ぎ澄まされてたね、コワイコワイ」

「彼は……、東西交流戦で大将を討ち取っていた人だな。ものすごい練度だ……」

「つく……、こんなところでまで機関の人間か!? いいぜ、たやすくやれると思うなよ

!?

おお、本質理解できるのか英雄s、これはやりたいなー。

一人なんか妙な居たけど……。

放課後。

とりあえず俺が行くまで待てと暴力執事さんから連絡と言う名の脅迫があったので待っている。と野次馬が来るわ来るわ。

下心から好戦的なまでいっぱいいます。

お、風間ファミリーまで来てらーな。

「おす、トラ」

「あ、高坂君だー。放課後残ってるの珍しいわね」

「どもども、二人とも。ちょっと約束があつてね。椎名、直江の妻アピールしとかなくていいの?」

「挨拶が済めばすぐに行くに決まってるんだ!!」

すごい速さで夫のもとに向かう妻。

あの速さは脅威だな。

夫じゃない! 高坂! 煽るなー!! などと聞こえてくる気がするが気のせいに
違いない。

椎名もこっちに親指建てているしね。

いいことした後は気持ちがいい。

ちよいちよい交流していると直江と与一の共通点が発覚した。

うん、黒歴史か、僕にとってはあの武神に叩きのめされる前の天狗の時期かな。

「やめろー!! そんな優しい目で俺を見ないでくれ!!」

おっと、気が付かないうちに慈愛の目で見つめてしまっていたようだ。

必要以上に傷つけてしまったようだ。

ニヤリ。

「オイ、俺様が思うにあいつからも隠れDSのにおいがプンプンするんだが?」

「うん、ちよつとブルつて来ちゃったよ」

「アイツも怒らせないようにした方がよさそうだな……」

「そう? 高坂君優しいわよ?」

男どもは失礼なことを言っているようだ。

一子ちゃんはいいい子だなー。

「なんやかんや与一が弁慶に窓から投げられた頃、……普通に言ってるがなんかおかしいな?」

まあいいそんな時に、

「よーしつーねちゃーん、 たったかおー☆」

はいはい来ましたよ武神ちゃん☆

「酷い！ 先輩!! 僕もいるのに真っ先にほかの女に声をかけるなんて!! 僕のとことは遊びだったのね!」

「な!! 高坂!!? いや、違うんだ！ 一番はお前だよ、だがでもそれだけじゃあつていうかだな……」

あ、乗ってきた。

「いいわ！ その気なら僕だって!! べんけーちゃーん たったかおー☆」
さりげなく? 迫ってみる。

「うん、高坂って大人しいやつだと思ってたけど実際姉さんとそっくりなのかな?」

「トラは寸劇も楽しんでるけど実際は仕合狙いだと思うな。見てよあの目、寸前までふざけてたとは思えないほどギラギラしてるでしょ?」

「うわ、姉さんクラスって本当だったんだ。目だけで理解しちやったよ……」
武神と似てるってのは言い過ぎじゃないだろうか?

女漁りなんかしてないもん!

つと、いつ来るかと思つたが遂に来たか。

「はしやぐな小僧ども」

ヒュームさんチース。

「どもども、で、何の用事だったんですかね？」

気が付いてなかったようで急に出来た執事に武神含め目を丸くしている。

「小僧、川神百代、今は引け。そのうち機会は作ってやる」

ちえーやっぱりか、まあ、九鬼は絡むわなあ。

「……むう、機会は作ってくれるのですね？」

お!? 最近大人しいと思っただけど聞き分けよくね？

なにがあつたし。↑原因

「……ああ、約束しよう。それで、小僧。お前に前約束していた組手相手の斡旋だ。義

経たちの学園外からの挑戦者をふるいにかける」

おお!

堀の外の代わりキター!!

「了解です!! いつからでしょうかね？」

「とりあえず近日中からだ。まだ大人しく待たせられる範囲だからな」

ま、今日の今日じゃそんなもんか、流石は九鬼である。

「おいおい、お前だけうらやましいじゃないかー分けるよー」

げ、武神が仲間になりたそうにこつちを見ている。

ふざけるな、肉なんか投げてねーぞ。

肉投げてたら一子ちゃんあたりならワンフィッシュな気もするが。

「貴重な経験値を分割されてなるものか!!」

「おーい、いいじゃないかー私とお前の仲だろ?」

これ以上ないほどバイオレンスな仲な気がするんだが。

は!? 力ずくで奪いに来るつもりなのかこの武神は!?

「そうやってまた僕に乱暴するつもりなんだな!? 青年誌のように! 青年誌のよう
に!!」

「おい、なんか違うかい? そのセリフは」

「いや、もう教育とか気にしなくていいくらいぐつちやぐちやでしょ?」

回復するとはいえぐんにやぐにやにしたしこつちなんか昇天半歩前だった。

「オイ! 青年誌だつてよ? なんかリアリティあつてエロティックじゃね!」

「いや、あの二人の雰囲気見てまだそっちに妄想できるお前が非常にうらやましいよ」
興奮している一人を除いて青ざめてるね、特にワン子ちゃんなんかは実態見た分もう
泣きそうだ。

まあ、流石にこんなところで大暴れするわけもなく仲良く鉄心さんの拳骨をくらうこと
になった。

……鉄心さんもうちよつと手加減してくれないと僕にはきついよ……。

第二十二話 結局執事に振り回される

おはようございます。

真夏一步手前の刺すような日差しがづらい中、皆様はいかがお過ごしでしょう。

私、高坂 虎綱は——

「Good morning 小僧、着いて来い」

朝から拉致宣告を受けております。

この爺今まで川神一か所に留まることがなかったから気が付かなかったけどこんな
にうつとおしいのか!!

因みに、僕は軽く型を流していました。

自分の力をコントロールするには早く動かすよりゆっくり動かす方が難しかったり
するんだぜ？

「……おはようございます。朝から威圧的すぎませんかね？」

「うむ、寝ていなくて命拾いしたな。俺の目覚ましは致死率67%だったぞ」

おい、気配だけかと思ったら行動に移す準備まで整ったのかよ……。

この人近づいてきて寝てるのかありえないけど恐ろしすぎる。

「それで、何のよ……」

——シユツ

「……うですか？」

うわー、早ーい。

化け物の速さを体感しちゃったね。

質問言い終わる頃にはもう川原ですヨ。

そしてこつちに気付いたガラ悪い5人組、板垣さんと釈迦堂さんじゃないですか。

「おう、あんとときのガキじゃねえか。それと、爺さんは……、ああ、見たことあると思ったらヒュームとかいったか？」

「ああ、お前は才能の塊だったが、腐ったようだな。どうだ？ 大した才能もない小僧に負けた気分は？」

おお、喧嘩腰だねえ、不良中年共演ってか。

と言うよりそんな嫌味のために連れてこられたんだらうか？

「あく、トラ君だろ。お鍋食べる？」

「ああ、丁度いいね、どうだい？ 金払えばまた辰とやらしてやるよ？」

「どもども、亜巳さんや、あなたは誤解を招く言い方しかできないんですかね？」

以前と言いいこの人は妄想爆発する物言いしかしねえなあおい。

言いながらも朝ごはんはんに御呼ばれてちよつと和気藹々。

敵意の天使ちゃんはいとして欲情の竜兵はどうにかならんのだろうか？

「俺が勝つたら、俺やこいつらに干渉するなよ。つて、俺いいこと言ってるのになんか
楽しそうだなおい？」

お、なんかお二人が戦うみたいだ。

いい見取り稽古になりそうだ。

「と言うわけだ、小僧。やれ。」

「ふえ？」

多馬川でとれたてであろう魚を食べながら見ているとまさかのご指名入りました。

「おら、早く来いよ。それとももうやっちゃっていいのか？」

うん、経緯が待った分からないが僕学校前だぜ？

怪我したらまた欠席増えるね。

でもまあ、

「やるんだつたらいつでもいいですよ？」

立ち上がりながら言つてやる。

ああ、呆然としている板垣一家の視線も、いい笑顔を見せてくれている執事も今はど

うでもいい。

今日は会朝からいい経験ができそうである。

「小僧。負けたらわかつているな」

脅しの言葉と共に向かってくる釈迦堂さん。

とりあえずはいつも通りに受けに回りますかね。

「うるあ!!」

うん、腐ってたとは物もいいようだ。

確かに一か月前と大して変わってないねこの人。

僕が前この人とやった後どれだけの化け物と戦ったと思ってるんだろう？

「ほいなー」

うん、後ろに弟子たちいるからか気弾は使ってこなかったね。

なんか人質とつてるみたいだなあなどと考えながら、慣れたものになってしまった化け物の速さに対して余裕を持って対応できる。

お手手を取って一本背負いだ。

この人攻撃に意識行き過ぎで威力はあるけど投げやすいよね。

「ちい」

まあ、単純な形だからこそ向こうも受け身捕りやすいんだろうけど、対化け物を想定しててそこで終わるはずもなく。

「げ、ぐああああああ!!」

衝撃の跳ね上がりと同時に顔面踏み付けである。

小刻みに地面と僕の靴で5バウンドくらいかな？

化け物でもこれは痛いだろう。

「うわあ……」

「えげつないねえ」

外野の板垣さんたちも声を漏らしていた。

それでも笑顔の観客が多いってのはこの場は異常なんだろうなあ。

やめて！ 亜巳さん！ 仲間を見る目で見ないで!!

「てんめえ!! 調子に乗んなよおオオ!!」

「げ……」

やば、引き際ミスった。

足首掴まれた。

これはまずいなあ。

「獲った!!!」

いい笑顔で握り潰してくれる釈迦堂さん。

これは外せないなあ。

しゃーない。

——ゴギン!!

骨の碎けるいやーな音が辺りに響き渡り。

そのまま膝を釈迦堂さんの頭に叩き込むように倒れる。

ついでにいい具合に視界もさえぎれてるし手も片方は僕の足。

——コキン!

と言うわけでもう動かしくくなつた方の足は捨ててしまおう。

自分で膝を砕いた足を絡めて頸動脈をくいとね。

数瞬後、釈迦堂さんは驚きに目を見開いたまま落ちていた。

「ゴ」苦勞、小僧」

うん、足が痛いね。

膝は嵌めても皿割れてるし自分じゃどうしようもないよ。

「どうも、ヒュームさんヘルプ！」

「心配するな。すぐにクラウディオが医療班と共に来るさ。そんな怪我を負うとは情けない。……と、言いたいところだが、貴様のスペックで足一本ならまあ上出来だろう」
おお、褒められた。

まあ、前やった時は動きに支障なかったけど全身ボロボロだったし、いい進歩かな？
足一本程度ならもう一戦位できるしね。

次は文字通り命がけだろうけどな！

「これ学校いけますかね？」

「ふん、治療に時間はとらせんよ。起きろ釈迦堂。」

うへ、出たよ致死率六割強の目覚まし。

確かにあれは僕なら死んでるねえ。

お、クラウディオさんが来た。

「それではみなさんまた会いましょう」

何て手を振りながら運ばれていった。

因みに辰子さんだけは手を振りかえしてくれた。

他の三人は異常者を見る目で見ていたよ。

勝つためなら足の一本や二本捨てるのは当然だろうに。

九鬼の医療班が優秀なのは知っていたが、まさか送迎付きとはいえ遅刻もしないとは思わなかった。

因みにギブスでがちがちなのは杖もつかない僕に周囲は白い目だ。

「高坂君、それは怪我を悪化させるのではないでしようか？」

「んにゃ、まあ、使わないよりは悪いけど一応しつかりかばってるよ。何より片足生活はせつかく作ったバランスを崩しかねないんだよね」

そんな会話にクラスメイトは呆れていた。

軍人は少し納得していたが……。

「高坂君、確かに言いたいことはわかるが、怪我をしているなら無理はしない方がいいんじゃないか？」

「うわー、いたそー」

ん、義経が我がことのように心配そうに声をかけてきた。

ええ子や、そして弁慶はもうちよい心配しても罰は当たらんぞ？

「ありがと、だからできるだけ動かないようにはしてるさ」

「フハハハ！ 紋！ 学校でも会えて嬉しいぞ！」

「フハハハ！ 我も同じ気持ちです、兄上！」

うん、なんか来た。

背景に黄金屏風が見えるぜ！

お、こつち来た。

てか、メインは義経たちだなこれは。

「義経、弁慶！ クラスでうまくやっているか？」

ほらやっぱり。

うん、酒……ゴホン、川神水飲んでるのが普通になるっておかしいよね。

「高坂よ！ 朝はご苦労であったな！ その怪我も九鬼の依頼で負ったものと聞いた

ぞ。不自由があれば何でも言うがいい！」

「どーも、紋ちゃん。すでに従者の方には世話になつてるから大丈夫だよー」

うん、今食べている大量の弁当も九鬼が用意してくれた。

恥ずかしながら大食漢です。

動いた分は食べないとねー。

「うむ、そうか。だが、その怪我では義経たちの相手の選抜は他に用意しなくてはなら

ぬだろうな……」

え？ 何て言ったよこの子？

「ちよい待った。やるよ？ 僕やるよ？」

——え？

あ、教室で聞いてた人が全員引いた。

今度は軍人さんも引いてるぜ。

「え？ あーと、大丈夫なのか？ こちらから頼んだこととはいえ無理をする必要はないぞ？」

「もちろん大丈夫だよ。一応心配してくれるなら一本丈夫な棒用意してくれる？ 義足代わりに足固定するから」

「あ、ああ、それはいいのだが……」

む、やっぱり怪我したら実力に不安があるのかね？

「このくらい大丈夫だよ、ね？ ヒュームさん？」

彼女が信頼しているだろう人物に確認を取ってやる。

「はい。紋様、やるというのであればやらせて大丈夫でしょう」

音もなく現れてそう伝える執事。

まさに神出鬼没である。

「ほ、本当に大丈夫なのか？ 義経は心配だ」

「うえー、化け物だね」

うん、義経ちゃんはええ子や。

そして立ち往生の君には言われたくないですね。

そんなこんなで放課後、予定通りに変態の橋の下。

足に一本筋を通して動いても大して負担の無いようにして多くの挑戦者たちを前にする。

「それでは、僕に決定打を入れられた方は合格になりますので頑張ってください」
つまり化け物か、準化け物級なら合格と言うことだ。

ああ、不良たち相手にするより質の高い組手になりそうだ。

けが人相手で馬鹿にされていると気丈を上げる挑戦者たちが次々と掛かってくる。
が、それじゃあ駄目だよねえ。

舐めてかかるようじゃ実力が全く読めてないってことを宣伝してるようなもんだ。

——案の定、今日は合格者はいなかった。

一応応援か交代要員かで見学している武神を余所に今日の組手を終えたころ。

「うわあ、足一本負傷してるのにこれって……。見た目怖くないから逆に不気味だなあ」

「やつほー、高坂君」

「ん、トラだ」

「おお、高坂殿か」

「高坂さんお疲れ様です」

ちようど帰り道らしい風間ファミリーと遭遇した。

あ、一子ちゃんちよい元気ない、こりやあ義経辺りに負けたかな？

「お疲れー、そっちは今帰り？ てか、殿はやめないかな？ ちよいくすぐつたいし」

「ああ、ワン子の決闘終わり」

「ううー、負けちゃたわー」

「……フム、しかし武士を相手に敬意を示すには……」

うん、まあまだ化け物には届かないだろうな。

やり方次第では準化け物級には届くんだろうけどなー。

特に義経ちゃんなんかはバランス良いから付け入る隙少ないだろうし。

てか、一人絶対ずれてるよね。

大丈夫か？　この子？

「それにしても、すごいな。見たところかなり強い相手もいただろうに」

「はい、確かに壁を越えた方はいらつしやらないようですが、片足でとは……」

「ははは、見て分かる通り、僕自身が大したことはないからね。動けさえすれば多少のハ
ンデなんて誤差だよ」

うん、素早さ100の相手に50だろうが10だろうが関係ないしね。

「謙遜……、てわけでもなさそうだな。どっちにしろとんでもないな」

「そうだ、とんでもないぞ〜！　そのせいで私の出番は結局なかったんだ。だから
もつと私に構え〜！」

そう言つて後ろからのしかかってくる。

怪我した足に負担にならないようにしてるのは流石と言つたところか。

ていうかやつぱりおこぼれ狙いかよこんにやろう。

「ふむ、そんなに戦いたいか。川神百代」

なんか急に執事が会話に入ってきたぜ。

「ええ、最近は抑えていますですが正直に言えば……、もしかしてお相手してくれるんです
かね？」

キヤー、好戦的ー。

どうでもいいけど人の背中でおっぱじめるとかないよな？

ヘルプまゆっちゅー！

てな感じの目で一番頼りになりそうな子に視線を送るとおろおろし始めた。

ええ子や。

「ふん、焦るな。冬までにお前の鼻っ柱を折る奴が現れるだろう」

お？ 冬までかー、期限つけるとかきついよー。

「うぬぼれるな。最近負けたばかりだろうが負け犬」

「ぐはー！」

心を読んでさらに傷つけられた！

酷い!!

へたり込んだらワン子ちゃんとクリスと由紀江ちゃんが慰めてくれた。

ドヤ顔の武神め！ いつか屈服させてやる!!

第二十三話 東に渡る燕一羽

「俺は星龍。愛も情も許さない……、いざ勝負、川神百代！」

はいはい、ワンパンワンパン。

川神の変わらぬ朝だ。

「見ているな！ 高坂！」

あ、なんか呼ばれてーら。

あの人だんだんこつちに絡むの多くなつてないか？

正直常日頃から相手していると身がもたん気がするんだよな！

「はいはい、お疲れでーす」

とはいえ名指ししたうえで逃げ切れるはずもないので声をかけておく。

「なんだー、気のない挨拶だな。朝から注目していた美少女に声をかけられたんだ。もつと嬉しそうにできんのか？」

「直江！ 君に決めた！ 僕の壁になつてくれ」

見える範囲にいた、おそらく物理受けに振つたであろう男を身代りにするべく声をかける。

俺!? などと驚いているが、これは君の管轄だ!

しかし、個体値バグの相手はお気に召さなかったようでより絡んでくる。

「おいおい、あれだけ執着してくれたのにそれはないだろー!」

くそ! 直江に絡むより力加減考えなくていいからって味を占めてやがる!

てかお姫様抱つことは!

怪我してるし楽でいいかもしれない。

「運ちゃん、川神学園までヨロシクー」

「な! 恥ずかしくないだ!!」

今まで被害にあつていたのであろう男は戦慄していた。

「リンリンリン、リリーン♪」

と、あー来たよ。

あの先輩苦手なんだよなー。

「おお見ろモロ! 葉桜先輩だぞ清楚だなあ!」

「ほんとだ……、自転車から降りる仕草も絵になつてるねえ」

僕にとつては不安を掻き立てる抽象画だよ。

それでいて美しいから余計怖い。

「モモちゃん、こんにはー」

「清楚ちゃんこんにちは！ おっぱい揉んでいいかな」
でた、流石です武神さん。

てか、口説こうとするのはいいいけど投げ捨てんなよ！
仮にも怪我人だぞ！

なんて、片手で着地から体を起こしてロンダート、もちろん着地は無事な方の足で。

「「おおー!!」」

あ、ちよつとした歓声を浴びてしまった。

「すごい！ 身軽なんだね！」

「あ、どうも」

そして注目してほしくなかった方からお褒めの言葉を頂いちゃったぜ。

「ギギギ……、私の清楚ちゃんが……！ 殺す！」

「グググ……、俺様よりアピールしやがって！ 殺す！」

色欲強い獣二匹がこつちを見てるぜ。

助けてまゆつちー、とまた目で助けを求めてみると今回は狼狽えずにこつちに來てくれた。

「高坂さん、肩をお貸ししますね」

あ、けど助け求めた理由は伝わってなかったみたい。

まあ、いい感じにフエードアウトできたから良しとしよう。

まゆっちはええ子や。

てな感じで、葉桜先輩が自転車に乗って先に行くまで由紀江ちゃんと隅っこで会話をしておいた。

てか、人工知能付き自転車って、九鬼って言えば何でも許されると思うな！

「んー？ 今の見た？ かなりさりげなかったけど」

「俺様は見えなかった……、パンツ何色だった？」

「……ピンク」

「そうじゃなく……え？」

ぼそりという和一斉に僕に注目が集まった。

うん、鍛え抜かれた観察眼ってやつだよ。注 使用方法を間違えています

「なななな、なんだと!? 私は気づかなかったぞ!!」

「おおおおお、おい！ 真剣か!? 真剣なのか!」

さっき僕にすごい敵意を向けていた二人が打って変わって崇拜するかの目を向けてきた。

うん、僕が言うのもなんだけど、引くわー。

「おはよう、みんな」

いいタイミングで義経ちゃんが通りかかってくれました。おかげで色魔二匹は新しい美少女の方へ注目してくれた。

なんだろう、刀もってる子っていい子が多いな。

和気藹々と会話してる中、なんか奇跡的に島津のアプローチがいい方向に向かったかと思つた時、後方から敵意が向かってきた。

「危ない！ 義経!!」

そう言いながら義経ちゃんをこつちに引つ張る。

義経ちゃんを抱きすくめた瞬間

「いっただきいいいい!!!」

バイクが猛スピードで通り過ぎて行った。

「あ、あああ、ありがとう、高坂君!」

抱きすくめられてテンパりながらもお礼を言う義経ちゃんマジ可愛い。なんて思っている

「いや、きつちり鞆とられてるぞー」

呆れたように声をかけてくる武神。

shit!! ひき逃げじゃなくてひつたくりかよ!! 対応ミスった!!

しかも由紀江ちゃんの斬撃はじくくらの硬度があつたようだ。

「主の持ち物を盗むとは、許せないな」

次いで、弁慶の投げた小石もはじかれた。

へー、なかなか。

おー、ワン子ちゃんを追いかけてる早いなー。

「高坂はなんかやんないのかー？」

風間がこつちを期待した目で見てきたが。

「いや、無理無理。怪我してなくてもこの距離は僕にはお手上げだよ」

人選を間違えてるよね。

てか、どうせ武神いるし荷物位なら緊張できんなー。

「クラウディオー！ ソドムの弓矢あるか？」

あ、与一がなんかやるみたい。

おー、でっかい弓だなあ。

何気に飛び道具も鬼門だよなー僕。

「お前は生と死の境界線を彷徨うだろう……、奥義！ 七大地獄への誘い（ワール

ド・ツアー）！」

おおー、当たったー。

スゲーな、ネーミング含めて。

とりあえず直江を見つめておこう。

おお、悶えてる悶えてる。

「んでー、いつまで主を抱いてるつもり？」

「あ、あうあう〜」

あ、いけね、忘れてた。

役得役得。

学校でいくつか授業を受けた頃、なんか化け物っぽいのが学校に来たようだ。

しかもこれ、ニューフェイスっぽいぞ。

くっ！ いったいこの川神に何が起きているというのだ!?

まさか！ 組織の介入か!?

……KAWAKAMIの平常運転な上に与一の真似はあんまり自分にやさしくないな……。

これは、屋上かな？

一応向かってみるかなー。

と、その道のりで見かけない美少女と遭遇した。

「お？ どうしたの？ お姉さんに何か用かな？」

あ、この人強いね。

初対面の僕に対してこれだけ警戒できるってこたあ、見て取れる実力だけじゃなく観察力か事前情報の収集がばっちりってことだね。

「いえいえ、なんか見かけないバケも……ゴホン！ 強い気を感じたもので一応見ておこうと思ひまして」

「ありゃー、上手く隠してたつもりなんだけどなー。バレちった。てか、女の子にそれは失礼じゃない？」

あ、ばつちり聞かれてたね。

まあ、気配に関しては確かに大勢は気づいてないみたいね。

「まあ、敵意もないんで気付いてるのは学園長とルー先生と九鬼の執事二人くらいじゃないですかね？」

「うん、その中に名を連ねられるって相当だよな？ そんな君のお名前を聞いてもいいかな？ あ、私は松永 燕、今度この学校に転校してくる西の武士娘だよ」

ふーん、転校生なんだ。

それに確かにあんまり心臓にやさしくない面子の末席に入ってい待ってるみたいだ。てか、この学校の戦力はどう考えてもおかしい。

「どうも、初めまして。高坂 虎綱と言います。趣味は特にはないですね。一応柔術をかじっていますので機会があればぜひ手合わせを。つてどこですかね」

「うん、トラ君だね。覚えたよー。手合わせは……、まあ、公式戦じゃなければいつかね」

おお、いきなりあだ名か。

まあ、いいんだけどね。

「それじゃあ、お近づきのしるしにこれを。またねー、ナツ、トウー」
そう言つて松永先輩に渡されたのはカップ納豆だった。

……ネバネバな松永先輩、うん有りだ。

第二十四話 新しい波が馴染むまで

うわー、化け物って怖いなー。

そう言えば僕って化け物相手にした回数より化け物同士の喰い合い見た回数の方が少ないんだよね。

松永先輩は最初の一撃以外、只管品変え物変え節操のないことで。

グラウンドで楽しそうにしている武神と松永先輩を見ながらそんなことを考えていると

「ヌンチャク、三節棍と来て、太刀に鞭、ハンマーに薙刀、あげくに弓矢に槍にスラッシュアックスときたもんだ。よくあれだけ武器が扱えるよな」

などと準が話しかけてきた。

ついでに、心なしかクラスの間人が僕に解説を求めるように注目していた。

「いや、あれは面白いね。あれは別に武器を習熟させた結果じゃないよ」

「ほー、どういうことだ？ 全部すぐ上手く使つてると思うんだが？」

「いやまあ、ある程度は練習してるんだらうけどさ。ほら、よく見てよ。間合いで分けて、中、狭でのフォーム、あんまり変わってないでしょ？」

「おお、確かにそうじゃな。しかしそれでもあれだけの種類じゃ、それなりですむ練習とは思えんぞ?」

「いや、武器一つ一つは問題じゃないんだよ。問題なのは間合い。その間合いさえ体に覚えさせればもう武器の種類じゃなくて、どれだけ武器っていう付属品を自分の体の一部として使えるかって話さ。極論、あの人にとつちや似た長さのものなら槍だろうと薙刀だろうと変わらない、ただし片方にできてもう片方にできない、みたいな専門的なものは難しいって感じだね。納得できないなら受けの動作に注目してみな」

だから槍にしては突きに決定力がなく、薙刀にしては守りに欠ける。
棒にどうやって有効部位が付いてるか程度の認識での使い方だね。

「おお!! ホントだ〜! 受ける時の動きがほとんど一緒だ〜!」

まあ、器用貧乏と言ってもそこは化け物じみている。

あれだけ幅広い鍛え方してさえあれだ。

くわばらくわばら。

軽く嫉妬してるとどうやらタイムアップで終わったみたいだ。

握手をする二人に全校から称賛が浴びせられている。

「ま、何よりも武神の一撃を素手でいなせたって所が一番見るべきところなんだけど

ね……」

あのパフォーマンスで彼女の等身大を見れたのはそこだろう。

僕の眩きを目ざとく聞き取ったのは弁慶と与一だけだった。

因みに、その日の放課後は義経たちの歓迎会の準備で盛り上がり上がっていたようだが、僕は例の選別作業に只管精を出していましたマル

そんなこんなで歓迎会当日、流石に九鬼からの依頼である選別作業はなかった。

それならと、他の組手の伝手に向かおうとしたところ暴力執事に拉致られたでござる。

「小僧、今日は義経たちの歓迎会だ」

などと言う普通なセリフなのにあれは立派な脅迫であった。

「直江大和。2―S全員連れてきたぞ。あずみと英雄は仕事で帰還しているが」
軍人さんが幹事に報告している。

「ついでにあと一人普通に帰ろうとしてたけどな」

続いて準が余計なことを報告しながら笑いかけてきた。

「おい、薄情だな……」

直江に白い目で見られてしまった。

うん、心が痛むね、これは。

お、電話が来たと思つたら直江が出て行つた。

まあ、ぼつちり聞こえてたけどね。

与一がごねているようだ。

ということでも汚名返上のために手でも貸してやるかなー。

「伏せろ与一!!」

とりあえずと言うことで与一がいる屋上に向かったのだが、入り口で最高にホットなシヨーを目撃してしまった。

厨二二人つてカオスだね。

あ、二人がこつちに向かつてきた。

「ん? ああ、高坂か」

「!! お、お前いつからそこに!?!」

普通に軽く驚いた与一に比べて直江はこの世の終わりと言わんばかりの驚愕っぷりであった。

そして小さな声であとで交渉がしたいと伝えてきた。
うん、今度満足いくまでおごってもらおうかな。

ところ変わって歓迎会。

「ふむ、此方と語らうだけの格がある連中と言うのはやはり少ないものじゃのう。そう思わんか？ 高坂——って聞いておるのか!？」

「うん、ひいへるふおー」

いやー、学校での小規模なものとは思えないほどいい料理が並んでるねー。

「こりゃー！ 食べながら返事をするではない!!」

うん、心よ、始まってからうろろうろしていたと思つたら結局こつちに来て僕相手に只管しゃべって、寂しいんだらうなー。

因みに僕はあたりさわりが無い挨拶を一通り終えたところから只管に食べてます。たまにこつちに来る人も心の態度にすぐどっかに行つてしまう。

と、ニューチャレンジャーが来たようだ。

「高坂さん。お料理は口にあつたでしょうか？」

「おー、由紀江ちゃんが作つたんだ。普通にすごいね。嫁に来ない？」

「よ、嫁!？」

軽口程度で真つ赤になる由紀江ちゃんマジいい子。

「む、これ、高坂よ、この娘は誰なのじゃ?」

「あ、はい。私は――C所属の黛由紀江です。不死川先輩ですよ? あ、あの、よろしくお願ひいたします」

おお、顔怖!

心もによわー、とか奇声上げてビビッてらーな。

あ、立て直した。

「ほほーう、黛とな。不死川ほどではないがそこそこの家じやのう。劍聖の娘がなぜ川神に居るのじゃ?」

お、名家センサーに黛は引っかけたようで心が由紀江ちゃんにアプローチかけた。始めた。

てか、あの態度でしつかり話してるって由紀江ちゃんばねえ。

以外に弾む会話を傍らに料理を食べてしばらくすると、触発されたようにワン子ちゃんが近くで食べ始め、今回の歓迎会の料理の半分はこいつらが食べたといわれるような見世物となるのだった。

歓迎会の次の日、午前中川神院にて組手をした後、待ち合わせの場所へと急ぐ。

一応けが人であるからして、流石に一日中組手は自粛している。

昨日の歓迎会の後に今日会う約束をしたのだ、あまり待たせるわけにはいかない。

「ごめん、まった？」

うん、代名詞みたいなセリフだ。

「…………いやそうでもないよ。それよりなんているの？ 姉さん……」

はい、相手は直江さん家の大和君です。

ついでに隣の武神は川神院で連れて行けと駄々をこねました。

「なんか着いて来ちゃった」

「ずるいぞー、弟ー、私にもおごこれー」

そうです。

例の口止め料です。

おごってくれと言った時は歓迎会で僕の食べた量を思い出して涙目になっていたね。

「おい、高坂。お前だけでもきつそうなのになんで連れてくるんだよ……」

「いやだって武神だぜ？ 振り払えないってばよ」

「くそ！ 納得だよ!!」

おーおー、可哀想に。

流石に安い店にしてやろう。

「それで？ どこに行くんだ？ 弟のおごりで!!」

それにしてもこの武神上機嫌である。

「はあ……、で？ どこでおごればいいんだ？ もう覚悟は決めたよ……」

「ハツハツハ！ 高坂！ 遠慮はしなくていいぞ！ コイツ定期的にあくどい金をため込んでるからな！」

あ、直江が裏切り者を見る目で武神を見ている。

「まあ、あれだ。仲見世通りで軽く時間つぶした後食べ放題のある店にでも入ろうか」
「高坂！ 信じていたよ！」

僕＋武神にしては安く済みそうな提案に直江が感激して抱きついてきた。
そつちの趣味はないんだけどな。

「ちえー、詰まらないな。そんなもんなら稽古が終わったころ合いにワン子も呼ぶか」

「この悪魔に比べてなんていいやつなんだ!!」

武神の提案にさらに抱き着く力が強まった。

コイツ、竜兵でも呼んでやろうか？

そんなこんな、結局食べ放題コースのある焼肉屋に、川神姉妹と直江との四人で入ることとなった。

その場での話題は自然とここ最近大きな話題となっている転校生たちの話となっていた。

「義経たちはいつも決闘で大変そうだけど実際武人から見たらどうなの？」

結構気にはなっていたみたいで直江が聞いてくる。

強いとはわかってても測り兼ねていたのだろう。

諦めた出費分も情報を！　と言う意気込みが感じられるね。

「三人とも強いわねー。今のアタシじゃ勝てそうにないわ」

一子ちゃんは正直である。

「あー、全員戦ってみたいと思うくらいは強いぞー。ただ与一はちよつと好みから外れるかなー。二つの意味でな、義経ちゃんは可愛いなー、あれはちよつといじめた後に抱きしめたい。弁慶ちゃんはもうエロ過ぎだろう！　あの体！」

想像通り武神様は目の付け所が違うようだ。

まあ、余計なの呼んじやった原因は僕だしちよつとは気を使つとくかねー。

ただ、美少女二人に関してはおおむね同感である。

「とりあえず三人とも化け物だね。何よりパーティーとしてみた時すごくバランス良いよね。前衛。パワータイプの弁慶、中衛にバランスのいい義経ちゃん、後衛に与一、隙がない組み合わせだねー。流石英雄って呼ばれてただけあってどつちかという集団戦向きな連中じゃないかな。僕らに比べると」

「あー、確かにそんな感じかもなー。個人戦では勝っても集団戦、消耗率とかも考えたら私でも危ないかもしれん」

武神も同意した。

まあ、個人戦でもおかしいくらい強いのは間違いないんだけどね。

「大和く、レベルが違い過ぎて自信がなくなっていくわく」

あ、ワン子ちゃんがちよっと泣きついてる。

「なるほどね、参考になるけど理解できないな。じゃあ意外に運動神経がいいと話題の葉桜先輩は？」

「清楚ちゃんマジ清楚!!!」

即答の武神。

食い気味過ぎて不気味である。

んで、僕は

「よくわからんから苦手」

これに尽きる。

「さつきと打って変わって短いな。何が苦手なの？　すごくいい先輩だけど」

「そうだそうだよー！　あんな美少女が苦手とか男としておかしくないか？」

なんか一名ほどブーイングをたれてやがるぜ。

「でも、珍しいわね。高坂君こういう時つてビックリするくらい細かいところとかも教えてくれたりするのにわからないって」

あら、ワン子ちゃんつてたまに鋭いよね。

バ……ゴホン、純粹さゆえの強みと言うやつか。

「あー、そうなんだよ。僕は単純なスペック低いから観察は怠らないようにしてるはずなんだけど、どうしても葉桜先輩があやふやでさー。嫌いとかじゃないけど気味が悪くてね」

「あー、なるほどつて言っているのかわからないけど、だから苦手なんだな」

「ほう……、同じクローン組だし高坂がこう言うつてことは清楚ちゃんも何かあるのか？　これは美少女を口説くのを楽しみが増えたかな？」

理解はできないが納得はできた感じの直江に対し、武神は何か考え込んでいるようだ。

「んじや、最新の転校生、燕先輩は？ 姉さん相手にできるっただけで驚きだけど、実際のところどうなの？」

「おお！ 燕かー。あいつは面白いな。話しやすいし戦ってて楽しいし。最近は私と渡り合ってくれる奴が出てきてお姉ちゃん嬉しいぞー」

「こつちに流し目を向ける武神。」

「うー！ アタシも負けてられないわ！」

「気炎を上げる一子ちゃん。」

「まあ、あれだね。才能に物言わせた僕って感じのタイプだと思ふな、松永先輩は」

「ほう、その心は？」

「あの人は間合いの取り方や体の使い方が上手いね。僕から見ればまだ荒いけどあれで化け物スペックなんだから笑えないなー」

「そう、タイプ似てても基礎能力差が笑えない。」

「あー、そんな感じかもな。決定力なくても私の攻撃を受け続けてたし。と、言うよりお前がぶっ飛びすぎなんだよ。百回は殺したと思っても流れで反撃してくるなんておかしいぞー」

「おい！ 殺したって！ オイ！」

「そう言えば大和はいつの間にか燕と仲良くなっちゃってるよなー。このジゴロめ」

あ、そうなんだ。

「直江、仲良くなったら松永先輩にアピールしといてくれない?」

「お? なんだー? お前燕狙いか? 目の前にいる美少女二人放つといてそんなこと言っちゃうのか?」

「え? アタシも?」

絡んでくる武神。

赤くなってる一子ちゃん可愛いです。

まあ、けど

「いや、戦ってくれないかなーと思って」

「ああー……」

しれっと答えたら全員から呆れた目で見られてしまった。

解せぬ。

こんな感じで、結構珍しい僕の友人との団欒の時間は過ぎて行った。

因みに店を出る時僕と一子ちゃんついでに武神のせいで店員は涙目だった。

第二十五話 親馬鹿再び

せつかくの休日、またもや午前中は川神院にお世話になり、昼食もご一緒した後のことだ。

「おい、高坂ー、暇だー。構えー！」

「高坂くーん！ あそぼー！」

昨日に引き続き駄々っ子が来た。

今日は一子ちゃんも午後は稽古はないようだ。

川神姉妹の遊び、これを顧みるに結論は一つだな。

よし

「うん、じゃあ道場行こうか」

「おい」

二人に両腕をとられた。

二人同時とは、武神だけでも手に余るのに地獄だぜ。

「お前ー！ 怪我してるくせにそんなに突つかかるなよ」

「高坂君、無理はいけないと思うの」

いやまあ、一応自粛してるけどさ、据え膳じゃん？

「だってモモ先輩に誘われるってことは……、ねえ？」

「あー……」

「おいこら待てよ。どういうことだ？ ワン子もなんで納得する？」

知らぬは本人ばかりだね。

「くっ！ まあいい。それで、高坂よー燕を大和に寝取られて暇なんだよー」

へー、直江つてば手が早いこと。

と言うより寝取られるも糞もねーだろうが。

「まあ、僕も修練しないなら暇だから遊ぶのはいいんだけど何すんの？」

「わーい」

「おー、そう来なくちゃ。因みに金はないぞ。と言うわけで金がかかる遊びは却下だ」

おお、わかりやすいね。

おごつてもいいんだけど黙っておこう。

一度甘い顔をすると調子に乗りそうだし。

「じゃあ、川原で体でも動かしましょう！」

おお、稽古の後でも元気だね。

「あ、ごめん。僕怪我してるからあんまり体動かすのはちよつと……」

「おい！」

「またもやユニゾン。」

「おまえ！ いや、正論だけど……。戦うのはよくて体動かす遊び駄目ってどういうことなんだ！」

「流石にどうかと思うわ」

「いやだって、組手は強くなるけど遊びじゃあねえ。」

「あー、それなら釣でも行く？ 七輪でも持つて軽くバーベキューでもしながら」

「あー！ いいわね！ その場で焼いて食べるつてのがまたそそるわ」

「おー、ならそれでいいか。……てか戦うか食うかって感じだなお前。わたしもこんなだったのか？」

「言われてみればそうかも。」

「そして落ち込むなよ武神、僕に失礼だぞ。」

「そんなこんな軽く食料を川神院から拝借し、ついでに買い出しをした後に海を目指して出発する。」

「その場で食べるつてんなら海釣りだよね！」

釣り場についたら先客がいた。

「お、キャップのバイト先の店長か？ どうもーこんにちはー！」

「こんにちはー！」

「おう！ バツキャローどもか！ お前らも釣か？」

おおう、会話がいきなり罵声だ。

まあ、暗い感じがないから気風のいい人って感じなんだろうな。

「どうも」

「ん？ 見ない顔がいるな」

「ああ、こいつは高坂って言ってたまに家に修業に来るんですよ。今日もその終わりです」

「おう！ そうか、俺あ金柳で本屋なんてやってるんだ。兄ちゃんもよろしくな！」

「はい、よろしくお願ひします。知り合いのようですよ。一緒にどうですか？」

まあ、満腹になるの目的でバーベキューするわけじゃないので人数が増えてもどうってことないし誘ってみる。

「お？ いいのかい？ そんじゃあこいつも食つときな」

そう言つてバケツを差し出された。

中には数匹のハゼが泳いでいる。

「わーい！　ありがとうございませーす！」

釣る前から目的の魚が手に入って嬉しそうなワン子ちゃん。

まあ、とりあえず店長さんと一緒に火でも起こそうかね。

そんな感じで大人含んだ四人で釣にいそしんでいると、この前知ったばかりの気配が近くをうろついている。

これは松永先輩と直江か。

まあ、デートみたいだしわざわざ教えることもないか。

などと気を使つてたのに向こうから近づいてくる。

「お？　あれモモちゃんじゃない？」

「あれ？　本当だ。高坂もいるしこんなところで何してんの？」

おいおい、せつかく気を使つたのにさー。

てか、松永先輩や、これわざとだろ？

百歩譲つて僕と一子ちゃんの気配に気が付かなくてもここに居わすは天下の武神様だぞ？

気付かないはずないやろ。

「おー、燕と弟かー。見ればわかるだろー釣しに来てんだよー」

「ぐまぐま、カサゴって焼いてもおいしーのね」

ちよつと疑惑の視線を松永先輩に向けるが意味ありげな笑いで流される。

まあ、どうでもいいか。

と、考えるのをやめて竿に目を戻すと強烈な当たりが来た。

「んー、おお！ いいサイズのメバルだ!! これ30超えてるんじゃない!? てん

ちよーさんん！ これ記念写真撮りましょうよ!!」

「おう！ でけーじゃねーか！ 待つてろよ、網もつてくからよ！」

今日一番の当たりに興奮する男二人。

「わーすごーい！ 手伝うわ！」

大きな獲物に目を輝かせて怪我人の僕を手伝いに来てくれる一子ちゃん。

「ありやー、せつかくの登場が流されちゃったね」

「ははは、もうあの三人の意識の外ですね。……て、本当にデカいな！」

「しゃあー!! 捕ったどー!!!」

「どーー!!」

結局、記念撮影をこ一緒した後二人はまたデートに戻っていった。

ちやつかり小さい魚を食べてカップ納豆が人数分置かれていたのは流石だろう。

さて、休みが明け、学校も終わり、義経ちゃんたちの決闘の選別も落ち着いてきたの
か量が少なかった。

物足りないので川神院にでもお邪魔しようかと思つたら僕にお客さんのようだ。

「高坂、時間は大丈夫か？」

お供を連れたクリスだった。

「んー？ 大丈夫だけどどうしたの？」

「この後暇か？ 暇なら一緒に来てほしいのだが」

なんだろう？

嫌われていないとは思つてたけど、名指しで誘われるとは思わなかった。

「高坂虎綱、中将殿も貴様が来ることを望んでいる。準備なさい」

「マルさん！ 駄目だろう！ こっちは頼んでいるんだからそんな風に言つちや！」

「は！ 申し訳ありませんお嬢様」

あの親馬鹿がらみか……いい予感はないけど娘さん使つてゐるってことは物騒なこ
とはないだろう。

「まあ、付き合うのはいいんだけどどんな御用なの？」

「ああ、それはだな……」

「おお！ よく来てくれたね、高坂君」

僕の目の前には50人程度の軍人とその前にクリスとその父親が相對している。

……道着で。

「それではよろしく頼むよ。なに、指導の範疇であれば立場のことなど気にしなくていい」

それにしてもこの親子、非常に楽しそうである。

なんでもこの親子は日本文化（間違い）が非常に好きだそうで柔の技に興味があったそうだ。

それでも中途半端に学ぶのは礼を失しているために本格的に入門するわけでもないのに高名な人に教えを乞うわけにもいかない。

そんな時に、娘の学友で、流派の看板を背負っているわけでもなく気軽に頼めそうな僕に白羽の矢が立ったというわけだ。

体験程度であるが、軍隊格闘技にも役に立つものであるために自分の部隊の人間にも学ばせよう、と考えこのようになったようだ。

あー、まあ、というわけで

高坂虎綱の一日限定柔術教室始まるよー。

………

「今日は世話になったね。食事でも一緒にどうかね？」

夜、成り行きでやることになった指導を終わらせた後にフランクさんに誘われた。

バイト代にしては高額なお礼ももらったが、食べさせてくれるのならばと着いていったら、

「うわぁお……」

想像以上に豪華な場で驚いてしまった。

道理で途中着替えもさせられたわけだ。

ドレスコードの店に気軽に誘うとは流石中将。

九鬼と付き合いあるお蔭で初めてではないけど面喰ってしまう。

因みにクリスは体験教室が終わった後に寮に帰って行った。

「おっと……、そうだ、マルギツテ頼んだぞ」

「はー！」

そう言つてマルギツテに自分の武器を渡す中将さん。

するとマルギツテは店の外に出て行った。

なんだろなーと思つてみていたが、

「ふむ、これで私の武装は解除したよ。その代わり店の周りはこちらの部隊で見張りをしてもらっているがね。もしもの時は頼んだよ？」

そう言つて、悪戯気に笑いかけてきた。

あー……、この胆の座り方は流石だな。

この前のことに筋を通すにしてもこんなことやつてのけるとは、あんまり信じてなかったがやはりこの人は人の上に立つ器らしい。

「はあ、一応怪我人ですのであまり期待しないでくださいよ？」

ちよつと困り気に行つてみてもハツハツハとさわやかに笑うだけだった。

最初は僕の柔術のことやらの世間話だったが、食事が進むにつれて本題に入るようだ。

「それで、この前は失礼な結果に終わってしまったが、今回はできるだけ和やかな場を用意したつもりだ。

まあ、ここまで言えばわかると思うがクリスのことなのだが」

うん、やっぱり親馬鹿には違いがないようだ。

無駄に凜々しい顔つきになっちゃってるヨ。

まあ、それでもあれだ、娘のためにと、ここまでされたからには僕も襟を開こうかね。

「はい、前にも言ったと思いますが、僕には今そう言う風に考えるつもりはありません」

「ーん、ゴホン。そうか、まあ、君を信用しないわけではないのだが可愛い可愛いクリスのことだ。すぐに納得はできないのだよ。特に君のようにやろうと思えば我々の力で抑えきれないかもしれない人間に対してはね」

あ、こいつ右手懐に突っ込んだよ。

銃がなかったから冷静に戻ったけどこの前の焼き増しになるところじゃねーか。

可愛いのところにあくセント置き過ぎだぜ。

まあ、ここまでした理由も理解できたな。

なるほど脅威に思われていたとはね。

「まあ、少し僕のことを聞いてもらってもいいでしょうか？」

そうやって話すは、僕の原点ともいえる挫折から今までに至るまでの鍛錬のこと。

おそらく僕の素性など調べに調べているだろうからこのことに関して疑う余地などないだろう。

「——と言うわけで、僕の誇りと言うか、抛り所と言ったものは今もあの日に置きっぱなしでして。それ取り戻すまでは恋愛とかは考えられない……うん、言葉通り考えられていないようなんですよ。確かにクリスマスなんか見ると可愛いなーとかも思いますけど、それで行動を起こすとは考えられなくなっているんですよ」

ああ、ここまで詳しく人に話したのっていろんな人たちに教えを乞いに行った時以来だ。

更に恋愛どうこうなんて言ったのは初めてで少し恥ずかしい。

それでも、この話をする時と言うのは何よりも誠意を見せる時だという意志は伝わっているようで、フランクさんの顔は穏やかなものとなっていた。

「そうか。ふむ、素晴らしい志ではないか。私は実際に日本に来てこの国の現状に失望していたが、なるほど。少し歪ではあるが日本人の意志の強さと言うのは存在していたのだな」

そう言った時のフランクさんの表情はどこか救われたようなものでもあった。

第二十六話 水上体育祭前編

川神院にいても通りの組手をしていると、僕以外にも外部参加者が来たようだ。

「およ？ トラ君じゃないか。君も川神院の門下生だったの？」

「あー、違うぞ。あいつもお前と同じ外部参加者だ。もつとも年季が違い過ぎて下手な門弟より長いけどな。てかトラ君ってそんなに仲良かったのか？」

松永先輩登場。

体操服でここにいるってなんか場違いな気がするなー。

「どうも。外部参加者と言っても組手の相手をお願いしているだけですけどね」

「おい、高坂ー。お前も燕寝取ろうつてのか？ 弟といいお前と言いきげだぞー」

「へー、ていうか今やってたのそうだよね？ よくもまあ片足不自由なのにあんなことできるねー」

品定めする目をしているなー。

「どうも、松永先輩もどうですか？」

「うーん、怪我人相手っていうのもなあ。ホントーに軽くだつたらいいかな？」

「おい！ 無視するな！ いつの間に仲良くなったんだよー？」

おう、意外と必死だな武神さんよ。

「いや、二回会ったくらいですよ？」

「うん、私が下見に来た日とこの前の日曜日の二回だね」

「むー、なんか息合ってる疎外感だぞ。よし！ 私もトラって呼ぶぞ!!」

いや、そんなのどうでもいいんですが。

それに息が合ってるというよりは探り合いの協定みたいのが無意識に働くだけで……。

あ、なんかアイコンタクトされた。

「やだなく、モモちゃん。そのあだ名は私とトラ君だ・け・の呼び名だよ？」

「な!!」

「いや、普通に他にも呼んでる人いるから」

椎名とか小雪とか辰子さんとか、機会は少ないが生徒会長なんかもそう呼んでるし。

「えー？ ノリ悪いなー。せっかくアイコンタクトもしたのに無視はひどくない？」

「いや、からかうのはいいいけどなんとなく変な地雷踏みそうな気がして」

「つば め〜〜？」

ほら

「およ？ ちょっと想像以上かな？」

冷や汗を流しながら言う松永先輩。

「いや、その子意外と寂しがり屋みたいだから、その手のからかいするときは細心の注意がいるみたいなんですよ」

「そう言うのはもつと早く知りたかったな……」

「お前ら……好き勝手言ってくれるな？」

あ、やべ。

飛び火してきたよ。

うがー!!と吠える武神を、鉄心さんが止めに入るまで二人で迎撃することとなってしまった。

じゃれ合いとはいえ百人組手より疲れるってどんだけだよ？

週末、義経たちの決闘相手の選抜を終えた後のことだった。

「おい！ 聞いているのか？ 弟が燕に寝取られそうなんだ!!」

武神が管をまきに来た。

なんでも直江が随分と松永先輩に懐いているようでご不満のようだ。

いや、僕にどうしろと？

「——ていうか寝取られ寝取られって、その土台となる事実ないんだから言われてもしょうがないだろ」

「なんだとー!?!」

あ、口に出てた。

まずいなー、愚痴って一度全部吐き出させる前に口出すとボルテージ上がって長引くんだよな。

「いいか!! 手塩にかけて育てた弟を燕とはいえぼつと出のお姉さんにとられたんだぞ——」

あー、いつまで続くんだろう？

しかもなんかよくわからんけど町の一か所に強い気が7つくらい集まってるけど大丈夫か？

武神愚痴に夢中で気付いてないけど。

「——そりゃな、燕はいいやつだけだな？ それでもあんなに簡単にホイホイと着いていくようには——」

いやー、寝取られて言葉が両性に使えるとは流石武神さんですよねー。

「——あんな風に年上に餌付けされるとは——」

あー、直江にメールしとこー。

現状軽く書いてーと、

ぶん投げられるのとこれ何とかするのどっちがいいか選べ

つと、そーしん☆

「——そもそもあいつとは一生舎弟だという契約を——」

と、返信が来た。

『ごめん、無理。本当にごめん。』

今度なんか埋め合わせするから耐えてくれ。

ps 今日俺たちの集まりあるから夜までには終わると思うから頑張ってくれ』

よし、今度は手加減せずにおごらせよう。

結局本当に暗くなるまで愚痴を言って去って行った武神であった。

そんなこんなで、武神がいつもよりまとわりつくことが多くなった次の週。

「水上体育祭のはじまりだぜー……!!」

おそらく島津の声だろう。

似たような雄叫びがそこから中から聞こえている通り今日は川神学園名物のスク水まつ……ゴホン、水上体育祭である。

膨らみかけではなく膨らんだ結果のスク水つとつてもエロいよね。

うちのクラスなんかはどう見てもイメクラなメイドが…… キンツ！

おおぅ……、苦無が飛んできやがったぜ。

いやー、出番の少ない暗器類が役に立った。

来ると思ったから防ぐ準備していました。

「あれ？ 高坂は出ないのか？ まあ、怪我はしてるがお前なら出ると思ってたんだが」

「おわ!? 海坊主!」

「いや! 確かに禿だけどき!! つて、禿みとめちまったじゃねーか!!」
とりあえずはお約束を一つつと。

「うん、義経は安心したぞ。高坂君はすぐに無理をするからな」

「とは言っても私たちの挑戦者の相手は続けているみたいだけどね」

「いや、お遊びで怪我悪化させるわけにはいかないじゃん?」

当然だ。

「……何だろうな、これがなんかの大会前とかだったらスポコンっぽくてかつこいいんだが……」

「アハハ、トラが言うとね〜」

「ええ、普段片足で武芸者の相手しているのを見ていただけに」

「正気とは思えぬな」

おお、みんなして酷い。

家のクラスってこんなに仲良かったっけ？

で、位結束してやがるぜ。

「失礼だなー、でも一応参加するよ？ 午前の部の釣り大会。競技見学しながら糸で

も垂らしとくさ」

「あく、いいね。私もそれ出ようかな」

あ、弁慶が釣れた。

と言うわけで、午前中はまったりと釣でもしていればいいさね〜。

と、思っていたが。

「うおおお!! フィッシュユ! フィイイイッシュユ!!!」

非常に騒がしい男もこの競技に参加していた。

「おお！ 高坂に弁慶じゃねえか。英雄が相手とは燃えてきたぜ！」

「……まあ、僕たちはゆつたりやつてようぜ」

「……そうだね。できればいいけどね」

予想通り、僕たちが釣つたり風間が釣れたりするたびに騒がれてあんまりゆつたりできまませんでしたとき。

そうしてお昼時。

ていうか、風間釣り上手すぎ。

全く歯が立たんかったわ！

それでもがんばって二位につけてやった。3時間で20匹はかなり調子がいいと思っただけだなあ。

「英雄様！ 新鮮な食材をお持ちしました」

相変わらず九鬼さんは騒がしいぜ。

そして新鮮さなら負けはしないはずだ！

釣った魚を捌きながら少し対抗意識を燃やしてみた。

「高坂虎綱。こっちは終わりましたよ」

「おお、流石軍人。サバイバル慣れしてるね」

マルギツテも手伝つてくれている。

……軍用ナイフで。

いや、まあいいんだけど、なんだかねえ。

「んじや、塩ふつて焼こうか」

「ええ、焼けるまでの間、私の分の昼食も分けてあげましょう」

そう言つて卵の一つを差し出してきた。

まあ、貰つておくか。

「ありがとー、てか二つしかないのにいいの？」

「釣った魚を分けてもらったのです。気にしなくていい。今日のはいつもより豪華

だ。心して食べなさい」

「によほほ、なんじや、高坂よ、結構な量ではないか。仕方がない。此方もお呼ばれし

てやろ——によわあああ!!」

二人して殻を割つたところに心が匂いにつられてやつてきた。

と、思つたら涙目で叫びだした。

「な、な、な、なんじや! そのグロい卵は!!」

「おお、珍しいね。バロットじやん。あれ? バロットつてアヒルの卵限定だったかな?」

「孵化直前の状態です。普通の卵より栄養価が高い優れたものだ」
二人して齧る。

あ、これかなり直前だな、かなり歯ごたえが強い。

「ふむ、高坂に渡した奴の方が成長していたようですね。食べにくくないですか？」

「あー、ちよつと骨が硬いけど大丈夫だよ」

「そうですか。お、この小ぶりなのは焼けたようですが」

「和やかに話すのではないのじゃあああああ!!!」

「とつても騒がしい心であった。」

第二十七話 水上体育祭後編

午後の部、レクリエーション要素が強かった午前比べて体力勝負が増えてきている。

「そおおいー！」

今もまた遠投で、弁慶の手によって一つのボールが星になった。

いや、半端ない。

「お疲れーっす」

「うゝす。頑張ってきたよゝ」

とはいえ、競技に参加していない僕はまた糸を垂らしてのんびりしていた。

そしてこういう空間が好きなのかちよくちよく弁慶が来るのだ。

「ほいよ、今釣れたばかりの鱈天」

「おー、素晴らしい気遣いだね、この店は」

そう言いながら手に持った川神水を煽って、空いた杯に満たして渡してきた。

「あー、どうも。っと、——ッカー！——来るねー」

「おお、予想以上に言い飲みっぷりだね。て、言うか高坂がこういう風にのんびりす

る性分だとは思わなかったな。いつつもすぐ帰って戦ってるらしいし」
杯を返すと弁慶に意外そうに言われた。

「そりゃあ、強くならなくちやいかんしね。まあ、でもそう言う時じゃないんらゆっくりしてたいさ〜」

お、なんだ雑魚か。

リリース。

「へ〜、こつちの高坂なら仲良くなれそうなんだけどね。転校していきなりがついてきたときは面倒くさいと思っただよ」

「うーん、別に時々仕合ってくればいいし、そこまで一人に執着はしないつもりだから安心していいよ」

ただし武神は除く。

「へー、それならまあ安心かな。つと、なんか歌合戦みたいのが始まったね」

「まあ、いいBGMじゃないかい？　うわ、軍人エキサイトしすぎだろ……」

あ、蛸が連れた。

下ごしらえ面倒なんだよなー。

「おお、立派な蛸なこと」

「これって漁権どうなってるのかね？」

「さあ？」

流れてきた洗脳納豆ソングを肴に二人で杯を傾けた。

そして遂にファイナルステージが始まるらしい。

「んじゃ、そろそろもどろつかね？」

「うん、そうだ——!!」

弁慶に返事を返そうとしたら急に強い気配が近付いてきた。

「ふおつふおつふお。中々楽しそうじゃのう」
学長だった。

「どうも。食べます？」

「どうも。飲みます？」

二人してもっていたものを差し出してみる。

「おお、ありがとのう。で、高坂よ、今日一日退屈して居ったんじゃないかのう？」
そう僕に話しかけてきた学長だが目線は完全に弁慶に行っていた。

このエロ爺が。

いいだろう、さつきまで独占していたぜ！

「いやー、でも怪我人なんで余計な運動は……」

「そうかい、——これは独り言なんじゃが。最終競技は怪物退治と言つてのう。着ぐるみに入った川神院の修行僧をチームワークで倒す速さを競うものなんじゃが。今年はずよつと不安が残るクラスが多くてのう。1―C、ヒュームには手を出させんように言つておるから1―Sはいいとして、2―F、2―S、3―Fと元気なクラスがいつぱいでちよつと怪物の中身がもの足りないとか思つておるんじゃが……」

「やります！」

「そうか、助かるぞい。ワシが入るかとも思つたんじゃが流石に監視のために待機しておきたかつたんじゃ」

「はあ、やつぱり疲れそうだな、こいつは……」

笑い合つている俺と学長に対して弁慶は呆れてため息をついているのだった

まんまと学長につられたクマーした結果、クマとも何とも言えない着ぐるみの中に居ます。

うん、意外と通気性いいクマ。

無駄に素晴らしい技術で作つて着ぐるみですこと。

「なー、つばめー、この競技ってやっぱり私たちは自粛した方がいいんだよね？」

「まーね、中の人にもよるけどあんまり張り切っちゃだめだと思うな」

「あー、じじいかルー先生でも来るかと思つたら、少なくとも爺はあそこにいるしなー。つまらないなー」

「まあ、しょうがないよ。大人しく応援に回ろう」

中の人などいません。

僕の間かうことになつた3—Fの問題となつた二人は少しさみしそうに会話をしている。

しかし、イベントだからお互い本気はないとしてもそんな心持で倒されるわけにはいかんのだよ。

お、合図だ。

んじや、行きましようかね。

「お、きたぞー！ 川神さんたちは様子見みたいだしとりあえず俺たちでやろう！」

「「「おお!!」」」

おー、何人かで一斉に来た。

「おー、おー、内の男子どもが掛かつて行つたぞ。まあ中身も大して強そうじゃないし……つて！ あれ？ この気配は？」

「あ、一斉に投げられてる。ねえ、モモちゃん？　もしかしてこれって私たちも行った方がいい気がするんだけど」

「そうかもなー。おい！　お前トラだろ？」

化け物二人が近付いてきた。

ついでに僕に気が付いたようだ。

「中の人などいないクマー」

あ、二人ともこけた。

ノリがいいことで。

「あー……、これは間違いないな。まあ、最後の体育際としては楽しめそうだな」

「そだねー、私としては初のももあるんだけどね」

さて、この着ぐるみのせいで投げにくいけどまあ、イベントだ。

クラスのチームワーク見れるまでは粘ってみようかね。

「それ!!　……つと、いや、やつぱり不思議だよな。よくもまあここまで力を操作できるもんだ」

「てや！　ほりや！　うわー、手ごたえほとんどないや。ちよつと自信なくしそう

……」

とりあえず粘ってみているが……。

いやいや、イベントだけあつて下手に骨外すわけにも絞め落とすわけにもいかないからマジできつい。

あつちも場をわきまえてるお蔭でもつてるけど、相手にダメーჯとおさずに時間稼ぐつて、僕にとつて不向きもいところじゃね？

「ハハハ！ こうしたらどう受けるんだろう、な！」

「くらえー！ 愛と友情のツープラトン！」

おお、挟撃かい、確かにチームワークだけど二人だけつて……、ルールの倒されるわけにはいかんのだよなあ……。

「そんな物騒なのは投げキャン（投げキャンセル）だ！」

とりあえずまだましそうな松永先輩の中段蹴りを上方にずらしてそのまま蹴り足に密着。

相手の軸足をそのまま軸にして位置を入れ替えて仕上げに軽く払う。

「わわ！」

完全な投げにはなっていないが、迫りくる武神の拳に対応するために焦って転んでしまう松永先輩。

「悪い！ 大丈夫か？ 燕」

「うん、へーきへーき。いやー、話には聞いてたけど想像以上に厄介だね。正直舐めたよ」

「ああ、あいつのは受けてみないとわからんよな。これでもネチネチした反撃無いからすつごく楽だぞ」

「うへえ、ネチネチの詳細は怖くて聞けないなあ……」

結構好き勝手言ってくれるな武神よ。

しゃーないじゃん、普通に攻撃しても効かないんだからさー。

「まあ、でもそろそろ時間も時間だしなー。っていうか粘られ過ぎてイライラしてきた」

「えー、モモちゃん……、この場でその右手のものぶっ放すのはどうかと思うよ？」

「大丈夫だ。あいつは最大出力の屋殺しも何とかして見せた」

「うわ……、両方どうかしてるヨ……」

げ、遂に気弾使おうとしやがたよあの子。

「まつクマー！ 流石にイベントでそれはどうかと思うクマー！」

「この期に及んでその語尾って腹が立つと思わんか？ 燕よ」

「アハハ、確かにそのくらい大丈夫な気がしてきたかも☆」

ちよ！ なに言っちゃってるんでしようか御嬢さんがたは！

下手に受け流したら周りの生徒さん死ぬんじゃないかね？

「よーし、いつくぞー（はあと）」

「ちよ、え？ 真剣クマ？」

とりあえず後ろに人がいない海を背にする方向へ移動する。

「最後までクマをつけたその根性は認めよう。かーわーかーみ、波あああ!!」

本当にやりやがった！

「緊急脱出!!」

着ぐるみだけ残して抜け出し砂浜を転がって迫りくる凶弾を躲した。

いや、まじ無駄な技術で作られてて感謝だわ。

「おいこら！ 化け物ども！ TPO弁えろや！ 死ぬかと思ったわ！」

「おお、着ぐるみから出たらもうクマってつけないのか」

「てか、化け物どもってひどいなー。こんな美少女達掴まえてさー」

いや、化け物だろ！

うん、間違いなくギャラーラーたちと心が一つになったぜ。

何せ周りの目がひとつ残らず同情の視線だからな！

「いやいや、見てただろが！ 割れちゃったよ？ 海！」

「いやいや、お前なら何とかできると信じてたさ！」

ハツハツハー！ と笑う武神の一言で、ギャラリーから信じられないものを見る目で見られた。

「いや、それにしても方向悪かったら怪我人出てたぞ!？」

「そうならないように何とかしたろう？ 流石じゃないか」

「ほんに、流石じやのう。じゃが、お前はちよいとはしやぎ過ぎじやよ、モモ」
笑っていた武神の声がピタリと止まった。

「じ、じじい……」

「これはお話が必要じやのう？」

おおう、流石は川神院総代。

光った眼は半端なく怖いっす。

「い、いや……、その、な？ 悪かったよ」

「ふむ、流石にそれじゃあ済ませられんよ。 喝つつつ!!!」

うへ、強烈な拳骨。

あ、武神も涙目。

ざまあ。

「ふむ、ご苦労じやったのう、高坂よ。 まあ、お前さんが着ぐるみから出た瞬間が退治

と見てええじゃろう」

「そうっすねー、お疲れ様でしたー」

正直ヒヤヒヤしたせいでかなり疲れた。

因みに松永先輩は流石と言う感じで鉄心さんが来る前に逃げおおせていた。

第二十八話 怪我の影響

期末試験が近い。

多くの学生が焦りだす時期となっている。

こう見えても僕はS組、つまり特進クラスだ。

身体能力で足りない分を補う意味でも学ぶことに手を抜くこともない性分なので別にどうってことはない時期なのだ。

——いつもならば。

「井上、次のノート貸してくれ」

「あいよ、怪我つてのは大変だよな。遅れた分取り返すだけでてんやわんやじゃねーか」

そう、今学期の僕は一月近くを怪我で休学してしまっていた。

と、いうわけで、休日である今日、おごる代わりに井上を呼んでファミレスで勉強中だ。

「お前っていつも成績どのくらいだっけ？」

「んー、30台をうろちよろしてる」

因みに家のクラスは50位を下回ると強制転落、いわゆるS落ちをすることになる。

「あー、なら何とかなるか？ 幸いお前理系得意みたいだから今回は暗記をなんとかすれば乗り切れるんじゃないか？」

「そんな感じかな？ でも日本史が鬼門なんだよなー」

「ああ、マロか。確かにたいていは普通だけど数問、配点大きいのに平安時代のディープなのだしてくるからなあ……」

うちの日本史教師の綾小路 麻呂、不死川家に並ぶ三大名家の人間で公家鼻根なせいで授業の九割が平安時代と言うクレイジーな教師だ。

「あれ上位狙うと結構きついんだよね。あれだけで順位が10位上下してもおかしくないし……」

「違ういな。まあ頑張るこった」

なんだかんだ付き合ってくれているこいつは友人思いなんだろう。

試験一週間を切っている今、流石に組手を後回しにして（結局やる）居残り勉強をし

ていた。

「おい、高坂。俺はそろそろ切り上げて委員長探しに行くがまだやるか？」
何人か人が残っている教室で井上が声をかけてきた。

因みに委員長と言うのは家のクラスの委員長である英雄のことではなく、お隣F組の委員長甘粕 真与さんのことだ。

このロリコンが探すということで、当然ながら見た目がちよつとアレな人だ。

「んー、じゃあ僕も今日はこの辺にして川神院でも行こうかね」

「あー、お前さんもよくやるね」

などと、大した中身のないことを話しながら校舎を歩いていると、

「あ、直江大和が年上に憑りつかれてる」

「憑りついてるんじゃない、これは私のだ」

武神が直江を捕獲していた。

「なんとかならねえか、姉さん背中からはがれないんだ」

あ、経読もうとした井上が吹っ飛ばされた。

「こっちなつたらお前だけが頼りだ！ 頼む高坂！」

こっちに水が向いたな。

うん、それなら

「椎名でも呼ぼうか？」

「やめて！ 好転する未来が見えないよ!!」

「ははは、こやつめ。」

「んでー、お前が残ってるって珍しいなー。いつもならもう人投げまくってる時間だろ？」

「あー、今回休み多かったから先に勉強してた。ちようどよく怪我で控えめにしてるしね」

「この状況で何事もなかったかのように会話しないでくれ、てか何気ない会話が物騒!?!」

「えー、めんどくさいなー。」

「とりあえずこれから川神院行く予定だし一緒に行く?」

「おー、そうだな。ハイヨー! 大和号!」

「結局降りてはくれないのか……」

「いや、だって口でそう言ってもそんなに嫌がってないじゃん」

「僕の観察眼はパンチラのためだけにあるんじゃないんだぞ?」

「んー、そうだろう。実は嬉しいんだもんなー弟よー」

「恥ずかしいんだって!」

わがままだなー。

しやーない。

「ほら、モモ先輩、自分で歩きなさい」

そう言つて手を取つてやる。

「えー、つて、おま！ 痛！ 痛いって！！ 分かったから離せよー！」

もちろん捻りながら。

「おおー、あの姉さんをなんとかするとは流石だ」

「むー、いくら羨ましいからつてそれはないだろー」

あ、今度はこつち来た。

「ヘルプ、直江。このボ○ビー今度はこつち来ちゃつた」

まあどつちも神だし似たようなもんか。

「頑張れ！」

コイツ、今度地獄を見せてやろうか？

「お前、碌な死にかたしないぞ？」

「ははは、聞こえないなー」

「ほら、さつさと動け！」

結局、背中に武神乗せたまま行くことなつてしまふ。

その道中、

「あー……、今日も一日よく働いたなあ。自分にビックリだ」
ガラの悪い大人が歩いてた。

「あ、釈迦堂さん、バイトお疲れ様です」
バイト？

「え？ あの人普通に働ける人だったの？」

「いや、本人前にして失礼だろ！」

いや、直江よ、お前あの人のこと良く知らないからそう言えるだけだつて。

「ああ？ あー、にーちゃんか。お前さん百代侍らすとはやるねえ」

「どうも。これ次の目的地に着くまで離れそうにないんですよ。すれ違ったんだし
持つていきます？」

ぐえー！ 首しまつてる。

「カカカツ！ 百代相手にそんな口きけるたあ大したもんだ。ん？ なんだお前、ま
だ足治つてなかったのか？」

いや、お前たち化け物の回復速度と一緒にしないでくれませんかねえ。

「あれ？ 釈迦堂さんコイツの怪我のこと知ってるんですか？」

「知ってるも何も、やったの俺だけ？」

「は？」

「あー、まあ今月中には何とかなるんじゃないかと思ってます」
うん、頑張ってもそんなもんだらう。

「いやいやいやいや、お前釈迦堂さんと戦ってたの？」

「あー、やっぱり高坂つてまともじゃないんだな。普段見ると忘れそうになるよ……」

言っでなかつたっけ？

まあ、わざわざ話すことでもなかつたしな。

「オウよ、二回やって二敗しちまつてな。そいつのせいでこうしてまじめに働いてんだよ」

「おお！ 社会復帰の力になれたようで何よりです」

「おまえー、ずるいぞー、私も強いやつと戦いたいのにー」
背中ではいたばたと、うっとおしい。

「だ、そうですよ？ 釈迦堂さん。と言うことでこれ持ってきてませんか？」

「馬鹿言うな、おじさん働いて疲れちゃってるんだよ」

「ずーるーいーぞー!!」

結局川神院についても駄々っ子は収まらなかった。

そして、組手後。

「あ！ 高坂君だちようどいいわん？」

あら、一子ちゃんだ。

「捕獲——！！」

あら、飛びついて来た。

「どうしたの？ まだ組手する？」

「違うの、あのね？ 勉強教えてほしいの」

あら、なるほど、それで涙目なわけね。

「まあ、いいけど。今回僕もそんなに余裕ないよ？」

「そうなの？ でもS組よね？」

「うん、まあ、40位台で何とかしよう頑張ってるよ」

「お願いします!!!」

こ、これは！ 腹をこちらに向けた犬の服従のポーズ!!

「おーい！ モモせんぱーい！ 妹さん流石に変な調教受け過ぎじゃね!？」

「ん、あーそれやったの大和だ」

直江よ、お前の罪を数えろ！

「あー、まあ、直江は今度ちよつとお話しするとして、じゃあ一緒に勉強しよつか？」

「本当!? ありがとうー!」

「ははは、頑張れよ。妹よ」

あ、武神この場から離れようとしてる。

「待たんかモモ」

「つち！ じじいか！」

「お前さんもちつとは勉強せんか！」

「しようがないだろ！ あいつら2年、私3年だ！」

「関係ないわい！ あの高坂でもやっているのに恥ずかしいとは思わんのか！」

「う……、そ、それは……」

オイ……、オイ！ どういうことだそれは？

こら武神、なんでこつちに勉強道具もつてくる？

そこはいつも通り抵抗して逃げるところだろうが!!!

よし決めたぞ。

一子ちゃんの成績上げて武神に吠え面かせよう。

試験一日目。

「やはり期末試験だけあって、かなりの緊張感だな」

「ピリピリしてるね。……特にあそこ」

うるせー。

こちとら結構ギリギリなんだよ！

クラスメイトが余裕綽々で話している中、僕は最後の悪あがきと只管暗記をしていた。

「高坂っていつもあんな感じなの？」

「いいえ、いつもなら彼も余裕を持っているのですが」

「アハハ、トラは今回休みが多かったから必死なのさ」

英雄たちの同情の視線を受けながら最後まで悪あがきを続けたおかげで、いつも通り程度には手ごたえを感じられる結果だった。

第二十九話 若獅子タツグマツチトーナメント前篇

試験の翌週、今回の結果が張り出されることになった。

39位、何とか三十位台で残留つと。

正直今回は気が気じゃなかったぜ。

「お、高坂、お前も見に来てたんだ。どうだった?」

直江、椎名、師岡、クリスの三人が掲示板を見に来たようだ。

「39、なんとかSに残ったよ」

「良かったじゃん。お、流石にクローン組は10位以内だな」

「おお! 四位とは流石マルさん!」

「いや、一応年上じゃ……なんでもありません」

なぜこの手の話題は突っ込みたくなってしまうんだろう。

間違いなく死地だとわかってるのに。

「そう言えば今回ワンス子の点数が異常によかったんだけど。高坂に教えてもらったってんだ。どんな教え方したの?」

「へー、どのくらい取れてた?」

「なんと！ あのワン子が平均越えを数教科出した!!」

うわあ……、うん、うわあ……。

「あー、一日でそれならまあ妥当なところなのかな?」

「トラ、あのワン子だよ? 今まで大和が頑張っても平均には届くことがなかったんだよ?」

「あはは、僕も目を疑っちゃったよ」

「あの犬、そんなに酷かったのか……」

「なんかクリスを除いた三人、一子ちゃんの成績をよく知る三人に尊敬の目を向けられている。」

「いや、特別なことはなくて、考えさせるの諦めて覚えさせただけだよ?」

「そもそも体を動かす人間と言うのは瞬間的な記憶には意外と長けていたりする。」

「難しいこと一切のぞいて答えになりそうなもの只管おぼえこませてみたのだ。」

「なるほど……、躡と似たような感じか」

「納得する直江。」

「躡っておい。」

「そう言えば、一子ちゃんが犬チツク、てのは認めるとしても服従のポーズとかあれはやり過ぎだろう」

「な！ お前はあれを見たのか!? いや、なるほどそう言われてみれば条件を達しているのか……」

なんか驚いていた。

「いいか、高坂。ワン子の服従のポーズは現在のところファミリーのヒエラルキートップの姉さんか、マジ説教の時の俺と京にしかしていないんだ」

いや、そう言われましても……。

「つまり、あれを見るためには絶対的な力関係と一定以上の懐き度が必要なんだ。だから俺と京でさえこっちの立場が一方的の時しか見られないんだ」

なんだろう、本当に動物の群れの解説みたいになってる。

「いや、そんな解説なんてどうでもいいけど、調教しすぎじゃねって話」

「う……、いやー、そういうえばさんねんせいのかはどうかはどうかかなー」

あ、逃げやがった。

師岡と椎名も目をそらしてそれについていった。

残された僕とクリスは目を合わせてため息をつくのだった。

その日の全校朝礼は、TVカメラが入ったりと騒がしかった。

そんな中、学長である鉄心さんが朝礼台上ってきた。

「さーて、楽しい夏休みは目前じゃのう皆、生水には気を付けて昆虫採集や川原遊びをするんじゃぞ」

時代遅れな前置きをかます鉄心さん。

「さあ、ここからが本番。テレビ、よくとっておくんじゃぞ」

そう言つて離された内容は、毎年川神院主催でやっていた武闘会を、義経たちもいることだし規模を大きくしようということであつた。

「ワシはこの大会のことを……、若獅子タッグマッチトーナメントと名付けることにした」

タッグ……興味が一気に失せたな。

ルール説明？ どーでもいーです。

景品……はまあ欲しくはあるなー。

九鬼重役待遇確約？ すでに囲い込みされそうですが。

武神との決闘の権利？ もう持つてます。

と言うことで、周りが真剣に聞いている中、大してやる気も出ずにボーつとしていた。

まあ、誘われたら出ればいいかな？

そんな風に軽い気持ちでいた。

先日、発表された若獅子タッグマッチトーナメント。

そのタッグ決めに今学園内外の若者たちは躍起になっている。

そのくみ方はいろいろあるが、今変態橋で組み合っている島津と長宗我部は視覚的な公害だと思う。

がっちり握手をしていた二人をまとめて川に投げ込んだ僕は悪くない。

正直突っ込みどころ満点なペアがちらほら目についてしまうのはここがKAWAKAMIだからだろう。

そんなこんなで8月1日、つまりタッグマッチトーナメントの前日である。

僕はと言うと、九鬼本部にいた。

「では、明日からよろしく頼むぞ！」

「はい、了解しました」

何とも面白いことに声をかけられたものであった。

当日、予選会場。

おーおー、観客保護兼監視員として鉄心さん、ルー師範代、釈迦堂さん、鍋島館長。おつかねー。

それにしても順調に進んでいくねー。

まあ、予選だし残る人間は残るべくして残るってことかね。

あ、天神館の石田、また覚醒前にやられてる。

ドンマイでーす。

それにしても暑いなー。

いやー、僕は予選も終わっちゃったし見てるだけつても暇だなー。

いや、面的には退屈しないんだけどね流石KAWAKAMI、あ、一応このスタジアム七浜か。

おー、これで最後のペアも決まりか。

あとは明日の本戦だね。

「タツグマツチトーナメント、本戦開始でございます！」
大会本戦、豪華にもあの大佐さんが実況とか豪華だなー。
そして、

「さて、解説は引き続き皆のアイドル川神百代と」

「西野雄、天神館は西方十勇士の石田がお送りする」

「頼もうと思ってたやつが見当たらなかったから予選落ちした有力者に解説補佐頼むことになった」
なんか増えてる。

まあ、ちよつと自己顕示が強い以外は常識人だから妥当かね。

交渉やら何やら説明があった、手筈やらトーナメント自体は合い方に任せることにして僕は観客だ。

本場に暑い……。

本戦も進んでいく。

しかし正直隠れた強者ってほどのいないから退屈っちゃあ退屈なことだ。

しいて言うなら風間と西の女の子、大友 焰とか言ったか？のペアが見えていて面白いかもしれない。

お、相方に呼ばれた。
出番だねー。

「ホワっちやああああ!!」

「くらいやがれ——!!」

ふむ、この程度の相手に一撃くらうほど俺も相方も弱くはない。
それにしても暑いなー。

「あーと、二人の攻撃が全く効きません!」

「つく、いったい何者なのだ?」

お、相方から合図が来た。

ここからが見せ場か。

「フハハハハ! 九鬼揚羽降臨である!」

「雇われ助っ人、高坂虎綱参上!」

「おーつと! 遂にマントを脱ぎ棄てたー!!」

はい、そうです。

今回揚羽さんに誘われてミステリータッグ組んでました。

「うおい! トラ!! お前怪我治りかけだし無理しないように参加しないんじゃないな

かったのか!!？」

解説席うるせえ。

「姉上、なぜこのような大会に？」

「ひとつは、大会に不穏なものが参加していないか、なかから見張るため
はい、そんなのいなかったです。

つまらんねー。

「もう一つは？」

「お前に無理をさせないためだ。ここで負けてもらう」

おー、麗しき姉弟愛。

「んで、因みにお前がそんなことしてる理由聞いていいか？」

九鬼姉弟が盛り上がってる間に井上が聞いてきた。

「んー、タツグってことでそう興味湧かなかつたし雇われたからかな。あとはこうい
うのって隠しキャラみたいでちよつとやってみたかった」

「いや、そんなにきれいな目で言われても……」

えー、かつこいーじゃんかよー。

「わ、分かりました……、姉上」

「うむ、安心したぞ」

あ、あつちも話しついたらみたいね。

あれ？ 井上どうした？ そつちは何となく地雷だと思うぞ？

おー、おー、よくあの場面でからかえるなー。

「なあ……、義兄ちゃん」

あ、これはだめだ。

最大級の地雷踏みやがった。

「……、高坂よ。このハゲはまだ納得いつていないらしい。戦ってやってくれないか

？ 壮絶に」

はーい、ご指名入りました。

一応目で揚羽さんに確認を取るとすつごく怖い笑顔で頷かれた。

イエス・ママ。

全力でやらせていただきます。

「あー、ごめん井上。雇い主の意向だからさ、大人しく蛸みたいになつてくれない？」

「え？ いや、ちよつと待つて！ ほら、見てよ！ 俺もう十分蛸みたいじゃないか

なー？」

おお、禿を強調してまで助かりたいか……。

後ろの姉弟に確認してみると二人して首を横に振っていた。

「まあ、あれだ？ 後遺症残らないように丁寧に外してやるからさ？」

「ちよ？ え？ いやーーーーー!!」

一つ一つ丁寧な作業によって井上を蝟さんにしてあげた。

「勝者！ ミステリータッグ！」

「フハハハ！ 選手諸君は安心してよいぞ。我々は二回戦で棄権する」

「まあ、怪我人だしそう言う約束ですからねー」

とりあえず、揚羽さんがいなくなることに選手の全員が、僕のことについては知っている人が安心していた。

第三十話 若獅子タッグマッチトーナメント後編

うえ、残ってるチームって化け物どもも結構いるなー。

棄権してよかったような戦いたかったような……。

まあ、次の相手が一子ちゃんのところか、我が級友の女子二人だから流石につぶしてま
でつてのは可哀想だったしなー。

何せ相方が主催者でありどっちかかっていうと優勝賞品になつてる武神側の人間だし。

二回戦が義経、弁慶、松永先輩あたりの組であれば危険はするにしても戦いたかつた
かなー。

まあ、あのマントも返したことでし呑気に観戦でもするか。

「おー、力任せに与一を投げつけた!! あれは痛いだろうなー」

「いや、痛いので済む問題じゃないだろう……」

ん？ あー、弁慶たちが勝つたんだ。

解説の二人、以外と良い組み合わせだなー。

常識外れをそのまま解説する武神と、それを多少は一般人向けにする石田。

楽しめるなー。

「あー、そうだ。トラ！ まだいるだろう？ ちょっと頼みたいことがあるから実況席まで来てくれー」

ん？ 試合の合間に呼び出しくらった。なんだろうね？

「どしたの？ モモ先輩？」

「おー、来たか」

「久しぶりだな。息災そうで何よりだ。交流戦の借りを返す機会はだめになったがまあいいだろう」

「おー、おひさー」

なんかすつげーそうは聞こえないけど石田も歓迎してくれているようだ。心なしか表情もやわらかい。

「あー、それでだな、お前にエキシビジョンマッチの解説頼みたいんだよ。他のマスタークラスには会場の保護に回ってもらいたいしな」

ああ、なるほど。

マスタークラス同士の戦い実況できそうで、そう言った方向だと戦力外だからな。うん、妥当な人選だね。

「いいよー。やっつく」

「頼んだぞ」

そして、そのまま二人のそばで試合観戦。

試合は、弁慶と辰子さんのデス・ミツシヨネルズと松永先輩と直江の知性チームだ。直江狙いが定石だと思うけどあの二人とは結構親しいみたいで松永先輩一人狙いになつてる。

あー、結構きつそうだけど一人倒せば勝のルールだから絶体絶命ってほどではないか？

つて!!?

あ、あれは!!?

「キンニ〇バスター!? キンニ〇バスターじゃないか!! あの技をまさか現実で拝めるとは!! 辰子さーん!! かつこいいー!!」

おっと、ついマイクを奪って叫んでしまった。

あ、辰子さんがこっち見て笑ってくれた。

「おい、マイク……、てかさつきもやってただろ?」

「真剣で? 九鬼の方向行って見てなかった」

「まあ、気持ちはわかる。この出世街道を歩む俺でさえ先ほどは興奮してしまったからな」

だよな？

男ならこの気持ちわかるよな？

ブレーンバスターが一応あるけどやっぱりの跳躍からして別もんだな。

って!!?

「今度はリオンジバスターだ?!?!」　なんだこの試合は?!?　超人プロレスなのか!?!」

「おお！　まさか忠実にあの返し技を使うとは!!　素晴らしい！　西から来たかいがあつたというものだ！」

興奮する俺と石田。

「決まった！　勝者知性チーム!!」

そのままあの伝説のやり取りが決まった。

「おお!!　松永せんばーい!!　ハ○ケーンミキサーも見せて!!」

「いや、ちよつと待て高坂よ。この展開をやるのは本来200万パワーズ（島津・長宗我部）がやった方が美しかったのではないか？　と言うよりなんでミツシヨネルズにキン○マンが……」

「あー……、まあ、その様子なら解説は大丈夫……か？」

しばらくの間石田と盛り上がっていた。

因みに次の試合はバランスのいい椎名と義経の源氏愚連隊と知性チームだったが、直

江への攻撃を迷う椎名のサポートがなくなった義経を松永先輩が倒した。

うん、さっきの試合が楽しすぎて普通に見るだけだったな。

そして、優勝した知性チームのインタビュー中、松永先輩が直江にキスをした。

おー、やるねー。

「お、オイ!!」

お、隣の武神が動揺してる。

ん？ 松永先輩がこっちチラ見してほくそ笑んだのか？

誰も気づいてないけど、なるほど悪女だ。

そして始まるエキシビジョン。

おお、試合前から武神に勝るとか言っちゃってるよ松永先輩。

まあ、どうなるのかね。

「えー、解説変わってミステリータッグ技の二号こと高坂虎綱と」

「引き続き石田でお送りする。さて、高坂よ、松永は何やら準備と称して何かしているようだが……」

「装着!」

松永先輩の声とともに光があふれた。

そして光がやんだ後には……

何やらピツチりとした戦闘服に様変わりした松永先輩がいた。

「おお！ バツフ〇ーマンの次は変身ヒーロー!? 松永先輩よ！ あなたはどれだけ男の子の夢をかなえてくれるんだ!!」

「うむ、まあ、今回はフルフェイスではないのがちよつと残念だな
あ、確かに。」

それでもやっぱり会場が湧いている。

やっぱりいくつになっても変身ものって目になると興奮するよね。

「それでは！ はじめ!!」

あ、始まった。

「そーそーら!!」

「あー、最初はモモ先輩の一撃ですね。あれで一体幾人の挑戦者を葬ってきたのか」
「うむ、確かにすさまじいな。しかし、勝てるといったのは伊達じゃないのか松永も
しつかり受けている。む？ 松永の手甲は武器らしいな。スタンガンか？」

石田の言う通り電気を出したようだ。

「そうみたいだね。でもあの武神相手にあんなの効果あるのかね？」

「おお！ あれが噂に聞く瞬間回復か。あれは脅威だな」

「でも、勝てると言い切ったからには対策があるのかね？」

「おお、武神は30回くらいが限度だと言っているぞ」

「あー、回復するものの程度にもよるけどそんなもんかね？ 僕の時はずちままとし

たのも回復してたからもうちよつと使ってたけど」

「ほう。……つて!? ちよつと待て？ その口ぶりからするとお前破ったのか!？」

「あー、結局最後は自力で劣ってたから負けちゃったけどね」

「……通りでこの俺が不覚を取るわけだ」

いや、あれはそんな段階じゃなかったけどね。

て、言うか松永先輩それが切り札なのかな？

だとしたら期待外れだな。

「おお！ 松永は持久戦に備えてか的確によけながら反撃を見舞っているな」

「まー、あのチート相手じゃそれくらいしか方法ないでしょ。一撃必殺持つてる人な

ら別だけどね」

うん、スペック違うから迫力が違うけど僕の時の焼き増しだな。

てか、武神荒れてるなー。

研究のために友情を偽った？

ぶつちやけ僕もそう変わらないだろうに。

まあ、依頼どうこう話してたからビジネス的な感じて不機嫌なのかな？

「おお!!? 自爆技? これは流石武神と言うことか」

「うわー、でもあれまともに受けて松永先輩耐えたよ。僕はあれ必死に受け流して満身創痍だったのに……」

「……お前もまた規格外だな。普通死なないか? あれ?」

だから必死だったてば。

「て、なんか松永も回復したぞ?」

「あー、なるほど、あの手甲は気の操作の補助的な役割あるみたいですね」

「なるほど、そうやって一つ一つのため時間を短くしているわけか」

ああ、気に入らないなー。

使えるもの使うってのは正しいけど……、武神倒すというなら自身の限りを只管に尽くせよ!

「む、どうした? 少し気迫が漏れているぞ?」

「いや、なんでもないよ。でもあの程度の回復量じゃあ持久戦に勝ち目は見いだせないと思うよ。あ、出ました先ほど言っていた気と言うものの最も分かりやすい形、武神の川神波です」

「ふむ、流石にけた違いだな、だが松永も受け流したな。そして、また目にとらえるのも大変な攻防に戻ったな」

「な!? 回復しない?」

ん? 武神の回復が止まった?

「どういうことだ? まだ到底三十回も回復したようには見えんが」

「あー、ちよつと待って。フムフム、松永先輩が言うにはあの電気纏った攻撃で回復機能をマヒさせたらしい」

「な!? そんなことが可能なのか!?」

「いや、知らなかったけど実際起こってるしそう言うことらしい」

「勝たせてもらうよ!!」

そう宣言した松永先輩に上空から何やら仰々しい兵器が装着される。

そして先ほどの川神波のようなエネルギーが貯められる。

「な!!? なんだあれは? ものすごいエネルギーだ!! 回復できずにあれでは武神も

絶体絶命か!」

「すげー!! カッコイイ!! ……でも、あの程度で勝利宣言とは……」

「ハハハ!!! なるほど瞬間回復を破ったのは見事!! だがその程度で勝利宣言とは……」

「(武神も) 私も舐められたものだ! (だね)」

「星殺しいいいいいいいい!!!」

二つの強力なエネルギーがぶつかり合う。

しかし、それは拮抗することもなく片方に飲み込まれていった。

そして、立っていたのは――

「ハハハ!! 瞬間回復などもう一度破られた技だ! 動揺して直撃していればまずかったかもしれないがそれだけだな!!」

武神こと川神百代だった。

「……それでこそ」

マイクが拾わないように口元で吹き、心の中はやはりかと言う思いで満たされていた。

「な!!? 気を封じられていたのではないのか!?!」

驚いている石田。

「いや、体内の回復機能をマヒさせたただけだと言っていたじゃないか。松永先輩の敗因は、瞬間回復が武神の真骨頂だと思っただけのことだよ。確かに呆れるくらいチートではあるけどね。あれ無くても十分強烈なんだよ。もうちよつと自分を鍛えて瞬間回復封じたうえで変わらないうちまぢまやれば勝っていたかもしれないね」

あとは、なまじ武神についていけるといいう自負があったせいでそこに目がいかなくなつたんだろう。

僕なんて瀕死の武神の一撃でも死ぬ自信があるから絶対に力のぶつかり合いなど選ばない。

まあ、何はともあれ。

「勝者！ 川神百代!!」

「お疲れ！ モモ先輩!!」

「おう！」

僕の目標とするべき彼女はやはり彼女らしくあつたと言うことだ。

第三十一話 相談事の多い日前篇

「勝ったぞー」

解説席に武神が戻ってきた。

「おめでとーございます。てか、松永先輩生きてる？」

「ああ、あれ受けて無事な人類がいるとは思えんぞ……」

「いや、お前の横にいるぞー。まあ、あれは受けてるって言葉が適当かはわからんが」

うわー、もう石田が僕に向ける視線が武神に向ける視線と変わらなくなってきた。

一緒にするな!!

「あー、でも最後のあれにぶつけて勝たなきゃいけないからちよつと力入れ過ぎたかもな。でもまあ、表彰式までには目は覚めるんじゃないか？」

「因みに僕なら多分永遠に起きれないね。だからその目止めてくれない？」

「時に川神百代、あれは具体的にどのような威力なのだ？」

「んー？星殺しの名の通り隕石位ならいけると思うぞ？ 質量にもよるが」

「ほう、つまり隕石程度ならなんとかできると？ 化け物だろう!!」

化け物だと!?

「失礼な！ 質量あると無理だよ！ 潰されるわ！」

「あー、確かに貧弱ではないが筋力は物足りないからなー」
けらけらと笑う武神。

「……論点が違うというわけではないが、なんと言うか次元が違うな。俺もかなりのものだと自負していたがまだまだか……」

悟りを開いたような顔をしている石田。

つく、違うんだ石田、化け物っていうのは自力で空飛んだり走ってる車切り裂いたりするやつのことを言うんだ。

「……うつつうん」

あ、松永先輩目が覚めたよ。

本当にこんな早く復活とか、ああいうのを化け物っていうべきだよな、うん。

「……ああ、負けちゃったか」

そう一言ぼやいた後、

「負けてしまいましたけど、この大会で優勝できたこと嬉しく思います！ これからも納豆のように粘り強く頑張っていきます！ みなさんも松永納豆をよろしくお願います！」

普段通り笑顔で宣伝していた。

「……………」

「ん？ どうした？ 川神百代」

あー、やっぱり心揺さぶる出来事だったみたいだし、心のどこかにひっかかってるんだらうなー。

青春つてやつですかねー。

「なあ、トラ、あとでちよつと時間獲れるか？」

「ん？ いいですよー。この後九鬼でちよつと用事済ませた後だから時間かかりそうなら夕方過ぎでいいですか？」

「ああ、ありがとう」

「ふむ、そうだ高坂よ、丁度十勇士がこちらにそろっているんだこの後少し戦っていかなか？」

おお、いいお誘い。

「おー、いいね。この後すぐでいいかい？」

「おい！ 私の用事は後回しで戦いの誘いはすぐかよ！」

「いや、むしろこれは俺たちの相手なら時間がかからないといわれているのか？」

二人が突つかかってきた。

さあ、どっちでしょう？

結局、十勇士は9タテにさせてもらった。

何気に大友ちゃんが危なかったよ。

いやー、火薬に制限なかったりしたら危ないね、全方位攻撃は力逃がす余裕ないから大変だ。

大村は相変わらず戦おうとしなかったなー。

石田はあれだ、スペックに体ついてってないなー。

制限解放技の弱点だろうね。

そんなこんな、今回協力してた九鬼に顔を出しに来た。

「来たか小僧」

「ご苦労であつたな高坂よー！」

いつも通りな二人に

「……おお、高坂か」

元気のない紋ちゃん

「やほー、トラ君」

「んー？ 皆知り合い？」

知らないおじさんと松永先輩がいた。

あー、こつちも立ち直れてないわけね。

「どもー、松永先輩の横にいる人はどちら様で？」

「あー、これ家のオトン」

「どもー、松永 久信って言いまーす。発明家みたいなことやってるんでヨロシク」

「初めまして、高坂 虎綱です。それでお二人ともどうしてここに？」

「いやー、九鬼の依頼に失敗しちゃったからね」

「それでも腕は認められて何とかスポンサー続けてもらえるみたいで一安心してたど

ころさー」

ああ、そう言えばそんなことも言ってたなー。

「でも、公式戦無敗は崩れちゃったな……。今までせっかく順調に名を売ってたのに」

ふーん。

「まあ、それはともかく、お前の協力もあってこの大会もつつがなく終わらせられた。

礼を言うぞ。話はおしてあるからいつも通り従者部隊の訓練場に顔を出すといい」

「どうもです。それじゃあ失礼して」

「待て、小僧。終わったら俺のところに来い。話がある」

今日は話もちかけられること多いなー。

「あ、揚羽さん。私もちよつと訓練にお邪魔してもいいですか？」

「む？ ああ、別にかまわんが」

あー、なんかこつちも似たような雰囲気？

僕に相談事つて向いてないと思うんだけどなー。

移動中、案の定松永先輩から声をかけられた。

「ねえ？ トラ君は私のことどう思う？ どこを間違えちゃってたのかな？」

「いや、なんで僕に？」

うん、そんな重そうなこと聞かされるほど仲良かったっけ？

「もー、女の子の話は優しく聞いてよね」

む？ これがフラグと言うやつか？

……受け流すか投げるかしかできないからどうしようもないよね。

「いやまあ、いいですけど何について聞いているんですかね？」

負けた原因？ 人間関係？

後者ならいくら美少女のぶつといフラグでも投げ捨てておくことしかできそうに
ねー。

「んー？ 私もよくわかってないんだけどね。モモちゃんとの戦い含めて全部の感想

聞きたいかな」

感想ねー。

「甘い」

「うわーそーぞーいじょーにばつさりだねー」

ジト目で見られた。

「うん。そう言う風にバツサリ切ってくれるからこそトラ君に話してるのかもね。詳しく話してくれる?」

「あー、武神甘く見過ぎでしょ? 瞬間回復どうにかすれば勝てるって思ってたのがまず敗因ですね」

「アハハ、思い知ったよ」

苦笑いの先輩。

「あとまあ、戦いが中途半端ですね。せつかく武神とやりあえる力もってるんだからそれ頼ればいいのに、要に兵器使うってのはいたただけないでしょ」

「うーん、でもあれなしだとやっぱりあそこまで戦えなかつたよ?」

「使うこと自体はいいと思いますよ? けどあれ使つてどのくらい戦いました?」

「んー、試運転と慣熟含めて半年程度かな?」

やっぱりか。

「いや、その程度のものが今まで磨き続けてたものよりも格上な相手に通用するわけがないでしょう？ 実際最後のビーム？もすごかったけど反撃許すタイミングで使っちゃあ武神相手じゃ持ち腐れもいいところでしょう」

「むー、そうなっちゃったね……」

「器用なのはいいと思いますけど使いどころ見極められていない武器なら無い方がましですよ？」

あれじゃあ玩具に引きずられているだけだ。

やるんなら自分の一部にしてからじゃないと。

そうすればそれ含めて自分の力だと胸張れるのに。

「……何も言わないんだね？」

ん？

「研究のためにモモちゃんや大和君に近づいたこと……。せめられると思ってたんだけどな」

ん？

「いや、なんで？」

「え？」

目を見開く松永先輩。

「いや、武人ならーとか、卑怯ーとか外道ーとか……、思わないの……?」

「いや、勝つためでしょ? それよりも公式戦無敗とかこだわって視野萎めてる方が気に障ったかな?」

「あれ?」

なんか心底不思議そうだ。

「いや、そう言う研究なら僕もたつぷりしてますよ? あんまり予想外なことされるとお陀仏だし」

「で、でも、あれだよ? 大和君とか騙した形になつてるし……」

「知らんがな。人間関係まで及んだら僕の管轄外ですよ? まあ、死力尽くすつていうんならいいんじゃないですかね? 実害あつたわけでもなし、友達におごつてくつて媚びるのと大して変わらないんじゃないですか?」

そもそも少し気を持たせるくらい誰でもやつてるだろうに。

悪いやつちやなーくらいには思つても別にねえ?

「……つぶ、ハハハハハハ!」

ん?

なんかおかしなことあつたかな?

「いや、そんな風に言われるとは思つてなくてさ。ねえ? 二人とも許してくれるか

な？」

「今後次第じゃないですか？ いつまでたつても無理なら縁がなかっただけかと」

「アハハ、何の解決にもなっていないね。うん、でも少し元気でしたかな」

そりや当事者じゃないのに解決なんてできるかよ。

「それは何より」

「うん、ありがとう。それじゃあ、甘いと言われないうように頑張っていきましょうか！

ナ、トツウ!!」

あれ？

結構力になれた？

もしかして僕ってそこそこコミュ力あるのかな？

「あ、それはないと思うよ？」

心を読んで傷つけられただと？

打ちのめされた僕を見て松永先輩は大笑いしていた。

九鬼の従者たちとの組手が終わり、約束通りにヒュームさんのところに行くのと、

「小僧、お前が武神を倒せ」

話が始まってすぐそう言われた。

いやまあ、そのつもりだけどさ。

第三十二話 相談事の多い日後編

武神を倒せ？

なに言ってるんだろうこの人？

ずっと前からそのためにやってるって言ってるのに。

は！ まさかぼけたか？

まあ、ご老齢だし仕方が……

「殺すぞ小僧。俺はまだまだ現役だ」

「はて？ 何のことでしょうか。」

いや、心読むなよ。

「フン、まあいい。俺が言いたいのはそう言うことではない。九月……までにアイツに敗

北を教えてやれと言っているんだ」

「……へえ」

「松永の娘が失敗したからな。いずれは俺が直接鍛えてやるつもりだが、その前に一度折れておくのが好ましい」

「つまり……、僕に武神を倒せと依頼をするということですか？」

「ああ、貴様の目的とも一致するだろうか？」

ほう、ああ、全身の血が冷たくなっていくのが分かる。

駄目だ、こらえられないな。

「ボケた方がましだろう。舐めるなよクソジジイ」

「ム……？ 俺の聞き間違いか？ 聞き捨てられん言葉を吐かれたような気がするが」

「耳まで遠くなつたか？ もう一度言つてやるよ。舐めるなクソジジイ！」

「お仕置きだ……」

即座に飛んでくる蹴り。

ああ、望むところだとも。

いつもより無駄な感情が入っているせいで皮一枚分多く持っていていかれて腕から血が飛び出るが知ったことか。

「何!?!」

いつも通りに受け流す。

それを見越してか引きの動作を速めていたクソジジイから驚きの声が漏れる。

目の前のクソジジイに向かって

「くらいやがれ!!!」

思いつきり拳をたたきつけた。

「……何のつもりだ小僧？ その程度の拳効かないことなど百も承知のはずだろう？」

あまりにも予想外だっただろうことと、避ける必要がゼロなことからまともに顔面に受けたクソジジイに聞かれた。

「あ？ あんまりにも腹立ったから殴った」

「おい……、あまり失望させるなよ？ 貴様には期待していたのだがな」

「うるせーよ！ いいんだよ。今はてめーに怪我させるとか勝つとかどうでもいいんだ！」

「ム？」

「いいか！ よく聞けクソジジイ！ この戦いだけは！ 武神との戦いだけは俺の戦いだ！ 踏み込んでくるんじゃねえ!!!」

依頼だと？

期限だと？

糞食らえだ。

人様の意図なんざ一欠けらだつて背負つてやるもんかよ!!

「……」

「あー糞！ 殴った手の方が痛いってどういうことだよ！」

これだから化け物は。

でもそれでもいい。

痛みなんかより拳だから乗せられるものってのは確かにあるんだからな。

「ククク……」

「あ？ なにがおかしいんだよ？」

「いや、小僧、違うな。高坂虎綱。無粋を言った。すまなかつた」

え？

頭を下げた？

あのヒュームヘルシングが？

「あ、はい。わかればいいですよ……」

呆然としか返事できねって、これは。

「ククク、お前の言う通り年かもしれないな。忘れていたよ。お前がどのような人間かをな」

「はあ……」

「覚えているか？ お前が俺のもとに来るようになった時のことを？」

「ええ、まあ」

確か中学生くらいの際にめきめき頭角表す武神に焦って現役最強とか言われてるヒュームさんに挑んだんだったな。

なすすべもなく凹られたけど。

「本当に取るに足りないガキだった。かなり手加減したつもりだったが殺してしまっただかと思っただぞ?」

うん、確かにあの時肋骨おられたな。

「殺したと思っただ……はずがだ、その一週間後にまた訪ねてきたな。百代のように瞬間回復どころか本当に一般人程度の回復力で、呼吸で激痛が走っているだろう様でだ」

「あー、確かに痛かったつすわ」

「そして、その次の週も、その次の週もだ。確かに怪我が増えているはずなのに、ただのガキが目だけ爛々と光らせて掛かってくる。怖気が走ったぞ。俺の祖先が狩ったヴァンパイアなぞよりよほど不可解だ」

ひど、人のことなんだと思ってるんだよ?

「ああ、そうだ。揚羽様を弟子にとった合間だった。才能のある方だ。それと対比するようにただのガキが挑んでくる。正直に言ってやろう。この俺が恐怖した。才も実力も吹けば飛ぶようなガキにだ。ククク……クハハ!! そうだ。誰になんと言われようともそのままで行けばいい!! ああ、実に正しい。殴られて当然だったな!!」

あー、なんか超嬉しそう。

「言われずともつてやつですよ。……言いなりにはならないけどアイツに挑むのをやる気はありません。挑む勝負は勝つ気でいます。だから、ヒュームさんが望む時期に勝つこともあるかもしれせん」

ああ、つまり

「ハハハハハハハハ!! 期待するのは勝手だ、黙ってみていろと言うことだな？」
その通りだ。

あとからついてくるものに期待する分にはどうだっていいことなんだからな。

さて、本日最後のお話と一言することで川神院に来ています。

「あー、御馳走になりました」

いい時間だったのついでと言ふことでご飯食べさせてもらっちゃいました。顔なじみつて得だね。

そして中庭で武神と二人つきり。

「なあ……。えっと、あれだ。あー」

「すぐく言いよどんでいる武神。

まあ、待ちましようか。

「あー……、うまく言葉にできないんだが。燕のことどう思う?」

「美少女?」

もしくは化け物。

「いや、まあ、そうなんだが……、そう言うことじゃなくて今日の試合のことだ」

まあ、予想通りだよな。

「んー? 詰めが甘かったね。ポテンシャルあるのに大火力に目が言って持ち味おろそかにしちやっつてちやあねえ」

「うん……、それで、勝つために必死だったっていうのはわかるんだが……。なあ、私の気持ちってどうすればいいと思う?」

「いや、勝者として堂々としていれればいいんじゃない?」

「あー、まあ、そうなんだが……、正直な? お前と燕だけなんだよ。同年代で遠慮せずに戦えて、友達として気楽にできたのは。まゆっちなんかは戦おうとしない分遠慮しちやうし……。それがな? 気楽にできてるのは私だけだったんだ……」

おー、これは悪い方入ったネ。

「いや、気にしなくていいんじゃない? てゆーか研究とかって意味なら僕もかなり

してますよ?」

「でもお前は只管真つ向から来てくれてるだろう? あれだ、うん、そうだ。不安なんだよ。今までのが全部私の一人相撲かもしれないって思うとき。なあ、トラ。私と燕つて友達でいいのか?」

「それはこれから次第じゃないですか? 向こうの気持ちもこれからも付き合っつけてばわかるだろうし」

「ああ、でもなあ……」

ああああああ!!!

ウジウジウジウジめんどくさくなってきた。

もういい、あれだ。

「モモ先輩、ちよつと待ってて!」

モモ先輩を残して院内に入る。

その途中にちよつと電話を

「あーもしもし。僕です。高坂です。今から時間あります? それじゃあ最高速度で川神院来てください。え? 行きづらい? いや、まあ、いいから来てください。それじゃああとで」

そんでつと。

「鉄心さん！ ちょっと来てもらっていいですかね？」

流石は化け物、鉄心さん連れて行く間にもう来てました。

「えーと、どうしたのかなトラ君？」

「……………」

気まずそうな二人。

武神なんかはどういうことだとにらんできちやつてます。

おー、こわ。

「いや、まあ、それじゃあ、存分になぐり合ってください」

「は？」

おお、三人の声そろったよ。

「いやいやいやいや、聞いてないよ？ そもそも何の準備もしてないし」

「そうだぞ！ いったい何のつもりだ？」

「それにこの二人に仕合せせるんなら相応に準備せんといかんのじゃぞ？」

三人が言い募ってくる。

準備？

何のつもり？

仕合？

「何言ってるんですか？ 友達同士の喧嘩なんてそんなもんでしよう？」

あ、三人とも固まっちゃった。

「いやのう。この二人に戦われては大変じゃと……」

「だから鉄心さん呼んだんじゃないですか？ あれですよ。もう二人とも言葉でどうしていいかわからないって言ってるんです。これしかないでしょう。立場も、記録もクソもない。勝敗すら関係なしにただ思いつきりぶつかり合う喧嘩ですよ。鉄心さん？ 武人以前に学生なんだからこういう形じゃないと蹴りつかないことだってあるんですから武人としてではなく保護者として頑張つてあげてくださいよ」

「……………ツク、ハハハハハハハハハハ!!! ああ、そうか。そうだな。難しく考えることなんてなかったか。せつかくそれができる友達なんだ」

「アハハ……あーもう！ こんな風に戦わされるの初めてだよ！」

そう言いがらいきなりクロスカウンター決めたような形で拳を繰り出す二人。

「燕!! お前どういうつもりだ!! あんなに一緒にいたのに依頼つて!!!」

「しよーがないじゃん!! 家名轟かせて有名になっておかんに帰ってきてもらいた

かったんだもん!!　そもそも何さあの理不尽な一撃は!!!」

おーおー、武神とかつい最近まで公式戦無敗とか言ってたやつらとは思えない無様な戦いなことで。

あ、引つ掻いた。

うわー、松永先輩がかみついてるよ、キャラじゃねー。

「……ふう、しょうがない奴らじゃのう」

「そう言う割には嬉しそうじゃないですか?」

「まあのお。考えてみればモモには子供らしい喧嘩なんぞさせたこともなかったしで、きんかつたじゃろうしの。……そんなことも体験させずに精神修行だ何ぞと言っておったんじゃ。親としては失格かもしれんな」

あーそれは可哀想に。

「いやー、それにしても楽しそうになぐり合ってますねー」

「そうじゃのう。……何か思うことがあれば言ってもよいんじゃぞ。なあにこの場には爺が一人おるだけじゃ。何も気にすことなどないじゃろう」

あー、やっぱり敵わない。

「……羨ましい。ねえ、鉄心さん?　なんであそこにいるのって俺じゃないんですかね?」

「ふむ……」

「ああ、すげーな。殴りあってる。有利不利はあってもあんなに対等に……。ああ、どうして僕はあそこに上れなかったんだろうなあ……」

必死に武神に届く牙を得るためにやってきたが、あんな光景魅せられると妬ましくて仕方がない。

僕だってあの武神と真正面からぶつかってみたかった。

「はっ!!!」

切望のまなざしで化け物二人の殴り合いを見ていると、隣の鉄心さんがいきなり手刀を放ってきた。

「んな?」

そしてそれを察知した瞬間体は勝手に動いてくれる。

そして川神鉄心と言う化け物を地面に叩きつける。

「ホッホッホ。流石じやのう。わしをこうもたやすく投げられる人間なぞそうはおらんわ」

投げられた鉄心さんはまさに教え子を諭す優しい目でこちらを見ていた。

ああ、そうだ。

妬もう、いくらでも、どこまでも羨もう。

それでも、僕が勝つにはこれしかないんだ。

「ありがとうございました」

ああ、いい機会だ。

一人には土足で踏み込むことで無理やり起こされた。

もう一人には諭すように確認させてもらった。

うん、丁度いい。

今日、今日初めて本人に宣言させてもらおうとしよう。

「はあ……、はあ……、何も使わなくてもやれるじゃないか」

「ふう……、ふう……、いやー、こんな泥仕合はもう御免だよ」

どこかすつきりしたような二人、倒れていた松永先輩に肩を貸してこっちにくる武神。

「あー、ありがとうなトラ。スツキリしたよ」

「いやー、もう考えるのがバカバカしくなっちゃったよ」

二人の問題は解決したようだ。

何よりである。

それじゃあ、ちよつとばかり僕のターンをもらいましょうかね。

「モモ先輩、いや、武神　川神百代。お前に初めて負けてからおおよそ十年、ただお前だけを見てきた」

「は？　い、いや、いきなりどうしたんだ？　わ、私だけを見ていたとか」

「ん？　えーと、何が始まるの？」

「先の決闘でやつと、やつとお前の視界に入ることができた。やつとお前に僕を見せることができたんだ」

「む、ああ、そうだな」

「いやー、モモちゃん真っ赤になってるヨ？」

「それでもまだ足りない！　僕はお前を倒したい！　そのために戦ってきたんだ。これから先お前に挑み続けるだろう。付き合ってもらおうぞ百代！」

十年越しに、本人に直接たたきつける挑戦状。

ああ、何とも気力の満ち溢れることか。

第三十三話 若獅子達の世代交代

僕復活!!

とりあえず足も違和感なしに動けるようになった。

あとは調整だな。

体の調整と武神対策の小細工、さてさて思いついたはいいけど通用するのかね？

「あー！ 高坂ー！」

夏休みと言うこともありリハビリがてら組手を増やした帰り、おそらく特別授業帰りの直江がこつちに向かってきた。

「おーす。どしたの？ なんか妙に力入ってるけど」

「お前なにしたんだ？ なんか姉さんの様子がおかしいんだけど」
ん？

「いや、モモ先輩がおかしいのはいつものことじゃない？」

あの化け物が普通なはずないだろう。

「お前……恐ろしいことを……。いや、そうじゃなくてなんか怖いんだよ」

「だからいつものことじゃん」

手から波動が出るような奴が怖くないはずがない。

「あー……、まあ、そうなんだけどき……。そうじゃなくて、なんかこの前から妙に覇気が出ててさ、そうかと思つたら急にしおらしくなるし」

なるほど、確かに少しおかしいかもしれないね。

でも

「なんで僕に聞くの？」

「いやな、覇気溢れさせているときには『フッフ、トラ……』ってギラギラしてて、しおらしいときには『トラか、確かに気持ちのいいやつだが……。いや、でも……。』とか
呟くんだよ」

うわ、わかりやす！

そりゃあ僕に聞くよな。

「あー、覇気の方は心当たりあるかな？」

「ほう、なにしたの？」

「ちよつとばかりし宣戦布告を」

「なん……だ……と？」

うお!?

すげー!!

漫画でしか見ないような劇画調な顔だ。

「おまえ、すごい、いのちしらず」

「落ち着け。ほら、深呼吸。……しゃべり方は安定したか？」

「スー、ハー。……すまん。取り乱した」

「いやまあ、芸にすれば飯食っていけるものだったよ。」

「いやすごいな。姉さんのこと知ってる人間でそんなことできるなんて……、勝算はあるのか？ 最近似たようなこととした燕先輩は負けたけど」

「知らん」

「は？ 知らんって、勝てると思ったから挑んだんじゃないのか？」

ふむ、わかってないね。

「まあ、勝つ気ではいるけどさ、勝算とかどうでもいいんだよね」

「ふーん、武人としての意地ってやつ？ 意外だな、お前はそう言う熱いこと言うやつだとは思ってなかったよ」

「まあ、それもあるけどさ。そんなに難しいものじゃないよ。僕は別に何も背負ってないんだ。負けて失うのは最悪でも自分の命だけだから気軽なものだよ」

「……ええ？」

「そのために今まで何度も修羅場をくぐってきた。だからやるんだ。命がけなんて陳

腐な言葉だけどき、今まで何度もそうしてきたんだ。だからやる、勝つまでね」

「命がけて……」

おや、直江は少し引いてるな。

「あー、この際だからちよつとだけアドバイスしてあげよ。人脈作りとかにいそしんでるみたいだけどき、もうちよつと考えて立ち回った方がいいよ？ この程度の人間なんて僕たちの周りにはいくらでもいるんだからさ」

「は？ そんなわけないだろう。そんなこと考えるような奴は……」

「いるだろ。最たる例として家のクラスには軍人なんて奴もいるんだ」

「あ……」

「それに一子ちゃん、あの子の進もうとしている道に早々都合よく命の保証なんてあると思わない方がいい」

そう、その危険を減らす方針があるうと所詮は武の総本山、修業中いつ命を落としてもおかしくはない環境に身を置いているのが身内に居るんだ。

由紀江ちゃんだっておそらく命のかけどころ位心得ているはずだ。

「……確かにちよつと軽く見ていたかもしれないな。考えてみたらキャップもそういう言うところあるし……。うん、気を付けるよ」

「そうしときなよ。そう言う人種は直江が求めているよりはるかに重いことをしでか

しかねないからね」

軽い気持ちで助け求めて、なんてことになったら気の毒だしね。

「それで、姉さんが覇気溢れている理由は大体分かったけど、急にしおらしくなるのはどうしてなんだ？」

「それはわからないな」

「なにがあつたんだらう？」

今日も今日とて川神院。

組手を終えて帰ろうかと言う時に鉄心さんに呼び止められた。

「高坂よ、今夜時間はあるか？」

「じいいに言われたくないセリフだな、おい。」

「はい、大丈夫ですよ」

「うむ、それでは今日の稽古が終わるところに来てもらおうかのう」

「わかりました」

「なんじゃろ？」

宣戦布告もしたし向こうから仕掛けてくるんかね？
それもまたいいかなー。

などと考えていたら今夜の川神院は世紀末だったでござる。

「うむ、皆よく集まってくれたの」

川神院総代、川神鉄心。

「フン、俺も暇ではないんだ。さっさと済ませるぞ」

九鬼従者部隊序列零番、ヒューム・ヘルシング。

「まあまあ、これも次の世代の子たちに必要なことですヨ」

川神院師範代、ルー・イー。

「オウオウ、俺ん時はここまで大仰じゃあなかったのになあ」

天神館館長、鍋島 正。

「あー、どうでもいいから始めましょうや。つたくよー、弟子のお守りとはいえまたここに來ることになるとはなあ」

元川神院師範代、釈迦堂 刑部。

「いやはや物騒な面子と言ひ、放つとけねえわな」

元川神院門弟にして現総理。

「これは……、我らのことながら壯観だな」

無比なる護衛力を誇る鉄家が娘、鉄 乙女。

「フハハハ！ 物騒な顔ぶれであるな!! ああ、橘のはまだ療養中だ」

九鬼家長女、九鬼 揚羽。

「いいなあ〜！ どいつもこいつも齒ごたえありそうだなあ」

武神、川神百代。

「あわわわ！ 何て恐ろしいところに来てしまったのでしょうか」

「まゆつち落ち着け！ 黛流は狼狽えない！」

劍聖の娘にて黛流の後継者、黛由紀江。

「うわー、ここは今世界で一番恐ろしい場所だね」

西の雄、松永 燕。

「うくん、眠たいなく。トラ君、何かあったら起こして〜」

眠れる龍、板垣 辰子。

.....。

なにこの空間！

すぐにも逃げだしたい。

いや、わりと真剣で。

世界でも征服するつもりかこの化け物ども。

ゴ〇ラまでなら縊り殺しそうな面子だぜ。

「ふむ、各々旧交を温めたい気持ちもあるじやろうがまずはことを済ませてしまおう。鉄乙女、九鬼揚羽、橘天衣、川神百代、この四名をもつて武道四天王としていた。これは若い世代の武人の頂の四人に与えられる称号じや。しかし、百代以外の三人が故合つてその座から離れることとなつた」

「ああ、武の道を外れる気はないが私は教師と言う職に就くことになつた。ついでにはこれも機会と思ひ純粹な武人としては引退をすることにした」

「我もこれからは九鬼のものとして世界を動かさねばならん身だ。正直この座に座り続けられるほどの鍛錬は積めなくなつてきた。橘のについては幾たびかの敗北に次いで重傷を負つたために降りることとなつた」

「そこで、新しい四天王を選出することとなつた。皆も記憶に新しいであろう若獅子タツグマツチトーナメント。あれほど規模を大きくした理由の一つじや」

「そして最後まで候補に残つたのがお前ら四人だ」

ふーん、四人ねえ。

……四人？

「まずは、橘を打倒して居る黛由紀江。トーナメントでもその実力に間違いのないことを見せてくれた。次に松永燕。こちらもトーナメント優勝及びエキシビジョンにて問題のない実力を見せた。次に板垣辰子。全くのノーマークであったが、まだほとんど磨かれていない身でありながら確かな実力を持つておった。現時点他のものより一段落ちる実力じゃがその可能性は計り知れん」

そろいもそろって化け物です。

本当にありがとうございます。

「最後に高坂虎綱。先のトーナメントに於いては裏方として戦わずの棄権であったが、現四天王である鉄、九鬼の両名を打倒するという結果を見せておる」

あああああ!!

それで呼ばれたのか!!

畜生!

明らかに場違いなのによく考えたらここに居る四天王さんと候補の半分倒しちやつてるじゃん。

そりゃあこんな地の果てにも呼ばれるよね!

「この四人の中から最終的に三人を決めるために今日は集まってもらった。そこで、

「フハハハ！ 場違いと言ったな？ どれ、それが本当なのか少しばかり試してやろうではないか」

うわーい。

流石は人の上に立っているお方だ。

この威圧感をカリスマっていうんだらうなー。

決して一人に向けるものじゃないよ。

「いい考えですねー、揚羽さん。一応私と戦うことになっているんで後に残らないようにしましょう」

てめー！

確かに宣戦布告はしたけどこんな大人数で囲って恥ずかしくないのか！

後に残さないようにって、ヤンキーかよ！

それでも武神か!?

「アハハ、ひどいなあ。こんなに美少女そろってるのに言うに事欠いて化け物って。

おしおきだべー」

うわー、一番感情は荒ぶってないけど面白半分できてる。

スゲー楽しそう。

実は一番えげつねえよこの人。

けど確かに眼福な面子だね!!

「松風? 私はどうするべきでしょうか?」

「決まってるだろ! GO TO HELL!!」

うん、一人芝居じゃあもう結論決まってるね。

ていうか松風に聞く前に刀抜いてたじゃん!

やめて!

いつもの優しいまゆつちに戻って!!

「あー、今からごめんなさいっていうのは?」

——ニコ

全員が笑ってくれた。

……けど状況変わってねーなー。

こんな時は無駄に鍛えた観察眼が恨めしい。

「」「もう遅い!!」「」

アハハ、さいしゅううちょうせいにはちょうどいいなー。

……死んだかなこれ?

援軍を求めて大人組の方を見る。

「はあ……。まあ、本人がああ言っておるんじや。新四天王は決まりでいいかのう？」
「ククク、ああ、それでいいだろう。あいつの強さはそう言う肩書背負うのには向いていないからな」

「元気でいいな。俺が四天王だった時のことを思い出さずぜ」

「おうおう！ 若いのが育っているようで何よりじやねえか」

「コラー!! あんまりはしやぎ過ぎちやダメだヨ!! ……はあ、全然聞いてないネ」

「これで終わりですかい？ なら寝てる辰子運んで帰らせてもらおうかねえ」

「zzzz」

……ああ、こりや駄目だな。

こうして若い世代の頂点の世代交代が行われた。

因みに僕は怪我はしないように優しく甚振られた。

この晩で僕はたとえ地獄に落ちても鼻歌交じりで対処できるんじやね？ と言う自信をつけることができたお。

第三十四話 お悩み相談室番外編

『小僧、今日の15時に仲見世通りにある仲吉に行け』

電話に出てみると開口一番これである。

九鬼の暴力執事は相変わらざるようだ。

しかもおそらくこつちの予定なぞ粗方把握した上でだろうから断れん。

と、言うわけで指定の時間に仲見世通りをうろついている。

目的の店にたどり着くと幼女……、いや、見た目だけね、がパフェを突つついていた。

あー、間違いない。

あの爺に言われて居るのが紋ちゃんならこれが呼ばれた理由だな。

「やあ、紋ちゃん元気？」

白々しいなー。

なんか妙に沈んでるもんなー。

「む？ 高坂か。うむ、我は変わらざるぞ」

「いやいや、バレバレですがな。」

気を使うっていうか読むだけならそうそう負けはしないしね。

「まあ、座るがよい。ここに来たということは高坂もくずもちを食しに来たのである
う?」

あれ?

さっきの反応と合わせて紋ちゃんは僕が来るの知らなかったんかね。

おそらく相談にでも乗れつつことだと思っただけど、僕の話術じゃ本人から持ちかけられるんならともかく自分からとか自信が全くないんだが。

「おー、じゃあ失礼して。おばちゃん、くずもちとほうじ茶お願い」

とりあえず紋ちゃんの対面に座る。

さて、どうやって切り出したもんか。

「紋ちゃん元氣ないけどどうしたの?」

はい、話術も糞もあつたもんじゃないね。

どーすんだよこれ。

あ、ちよい殺気を感じる。

いやはや紋ちゃんが一人でこんなところにいるわけないよねー。

「フハハ……、直球であるな。うむ、分かっちゃいますか」

おや?

意外と好感触?

流石は九鬼だね。

「いやまあ、紋ちゃん素直だからね」

「そうか……、しかしこれは我自身が考えることだ。ヒュームやクラにもそう言われているしな」

いえ、そのヒュームさんに言われて此処にいます。

あのじじい、突き放す振りしといてかなり過保護だよ。

自分で相談のつてやれよ。

「ふーん、何に悩んでるかも聞かない方がいいの？」

「ふむ、お前も部外者と言うわけでもないし、隠しておくというほどでもないが……」
「ぜひ聞かせてください！」

いや、俺の身の安全のためにも真剣で。

「ふむ、そんなに心配するほど表に出ておったか……、よかろう。話して何かわかることもあるかもしれないしな」

いやまあ、多少は心配していますがそれがそれより正直店の外から送られてくる殺気が怖いんです。

てか、ここまでのモノを紋ちゃんや他の客に気が付かれないように俺だけに充てるつて……。

一応悩み話してもらおうとこまでは行ったんだから少しは殺気引っ込めてくれませんかね？

「そんなに難しいことではないのだがな。自分のやったことについて悩んでおるのだ」

「やったこと？」

「ああ、松永燕だ。知っておるだろう？ あ奴は九鬼の依頼で武神を倒すために戦ったということを」

「あー、そう言っていましたね」

「あれを依頼したのは我だ」

「なるほど。それで失敗したから悩んでるのね」

「てか、あれ紋ちゃん主導だったんだ。」

「おもにヒュームさんから話聞いてたからあの人主導だと思ってたよ。」

「なんか一度折れておくのが好ましいとか言ってたし。」

「まあ、そうと言えばそうなのだが……、悩んでいるのは別のことだ」

「別の……？」

「他に何が？」

「あれか、あの兵器の実用性とかそういう話か？」

「我は姉上のために川神百代を倒そうとしていたはずなのだ」

「ん？ どういうこと？ もうちよい詳しく聞いてもいい？」

揚羽さんのためってどういうことだつてばよ？

そして、はずとは？

「姉上は川神百代に負けておる。それなのに川神百代はそれ以来負けも知らずに過ごして居るのだ。それが悔しくてな。川神百代が負ければ姉上も喜んでくれると思つていたのだが……」

「あー、なるほど。それが失敗して寧ろ喜んでいたつて所か」

「わかるか？ 失敗したその場に居ても姉上は悔しがるところか本当に嬉しそうに見ていたのだ。そしてその理由が我にはわからんのだ」

なるほどねー。

「でもそれヒュームさんなら一発で理由とか教えてくれるんじゃない？」

うわ、少し収まっていた殺気がまたきやがった。

「うむ、しかし先も言った通りヒュームもクラも自分で理解するべきことだと言つてな。だから私も悩んでおるのだ」

それで僕を繰り出してたら世話ないと思うんだがな。

「あー、参考までに僕の意見聞く？」

「む、だがそれでは……」

「いや、僕も揚羽さんの気持ちが完全に分かるってわけじゃないし、武人としての考えみたいなどこあるから紋ちゃんがそんなに根詰めても答えは出ないかもよ？」

おお、悩んでる。

多分身内に頼って答えだして欲しくなかったんだらうね。

実際僕ってヒュームさんたちにとって都合良い存在だったんだらうな。

近すぎず遠すぎず、この件についてお話しても紋ちゃんに影響与え過ぎないし。

「……聞かせてもらえるか？」

よしきた。

ていうか小さい子の上目使い庇護欲MAXです。

は！ 僕はロリコンじゃない!!!

「あれだよ、たとえ松永先輩が勝つても満足できるのは揚羽さんが一番であつてほしいと思ってるファンと今までモモ先輩に負けてるチンピラくらいだったんだよ」

「身もふたもないな……」

はつきり言い過ぎた？

おお、紋ちゃんのテンションと反比例して殺気が増してる。

ちよつと面白い。

てか、こういう風になること理解して僕よこしたんだろ？

我慢しろよ。

「うん、まあ、その感覚理解できないみたいだからちよつと砕いて言うかね。例えばトーナメント、真面目にやってる人だったら自分に勝った人にはせめて優勝してほしいとか思うだろう？ 多少の打算として自分が負けたやつは最強っていうのは慰めにもなるし。まあ、揚羽さんはそういう打算出す人だとは思わないけど」

「うむ」

「それをどっかからプロ連れてきて凹ったところで胸がすくつてのは不真面目な選手か、その勝った選手がよほど卑怯な手段使ってるかって所だろうさ」

「だが、少しはスカツとするのではないか？ それに川神百代を地に付けた人間がいると言うのが励みになったり……」

ああ、なるほど。

意地って部分が理解できてないのか。

「それはまあ、間違いいではないけどさ。でも結局他人事になるんだよ。揚羽さんは真面目に武人やってたでしょ？」

「ああ、姉上はとっても強いし川神百代なんかよりずっと真面目に鍛錬もしていた!!」
うお！

すごい食いつきだ。

でも納得できるねー。

なるほど紋ちゃんとは真面目な揚羽さんファンだったってことか。

そりゃあ苦労してるの見ていてそうでもないのに負けて、しかも揚羽さんがかばうくらいな状況じゃあ悩みもするか。

「だからこそだよ」

「むっ？」

これは僕にも言えるから間違いないだろう。

そもそもその話が武神が誰に負けようともはや関係ないんだよね。

それでも

「モモ先輩の練習態度はともかく、自分に土付けた人間がやられているところを外側から眺めている何て我慢できない。寧ろさ、なんで自分はその舞台の上に立っていないのか。って、空しくなるだけさ。揚羽さんは引退するらしいけどきつと変わらないよ。やるんならば自分で、ってことさ」

「……そうか。そういうものなのか。……しかし高坂よ、お前ちよつと怖いぞ?」

おつとしまった。

少し興奮しすぎたかな?

「まあ、厳しいこと言っちゃったけどね？ 多分揚羽さんは紋ちゃんのことせめもしなかつたんじゃないかな？」

「ああ、叱ってくればわかりやすいのだが寂しい目で見られてな。それでどうするべきなのかわからなくなつたのだ」

「実気持ちは嬉しかつたんだと思うよ？ 自分応援してくれてる人見て邪魔だと思ふような人じゃないし。多分モモ先輩倒すのが紋ちゃん本人だつたら手放しで喜んでくれたと思う。でも」

「ああ、なんとなくわかつた。わざわざ部外者を連れてきて倒そうとしたのがいけないかつたんだな」

そう、なんだかんだ言つても勝つた負けたの結果は受け入れるしかないんだ。だからこそ僕のこととは応援してくれてるし。

紋ちゃんの失敗は意志を持たない人を外から持つてきてしまったことだろう。だから、結果いかんではやるせない気分になつたことだろうな。

「うむ、高坂よ、礼を言うぞ。参考になつた。川神百代については納得できそうにないが我が横やりを入れるのは筋違いだつたということか」

「そう言うことだね。何かしたいんなら、自分自身で当事者になるべきだつたね」
そう言つてついつい紋ちゃんの頭を撫でててしまう。

やってからまずいと思った。

ほら見ろ、殺気が増した。

いや、この見た目だどつい撫でちゃうって。

これで紋ちゃんを嫌がれば……。

ああ、せつかく治ったのにまた怪我か？

また戦うのが遅くなりそうだけ……。

「むっ？」

「ぐ、ぐめん！ 元気でたのを見たらつい……」

さあ、僕の運命は如何に？

「いや、まあ良い。家族以外に撫でられるのは新鮮で戸惑っただけだ」

うおおおおお!!

助かった！

流石九鬼！

寛容だぜ！

「高坂よ、今日の礼はまた何れさせてもらおう。つつい話し込んでしまったが私の休憩時間もそろそろ終わるのでな。また会おう」

そう言って笑顔で出ていく紋ちゃん。

最近僕のコミュ力がめきめき伸びている気がする。

相談解決率高いな、向いてるのかな？

「小僧、ならば相談なのだが。主に馴れ馴れしくした男を俺はどうすればいいと思う？」

「……いや、寛容な心で許すべきかと」

「残念。解決失敗だな」

ハハハ、執事的にはやっぱりNGでしたか、そうですか。

「なに、力になってくれた分を加味して後に残らぬようには心がけてやろう」

……ああ、この人絡むと結局こうなるのね。

第三十五話 川原の討論

さて、リハビリも順調だしそろそろ武神と戦つてもいい頃だろう。

なにせ、凶らずとも化け物たち相手に調整もできたんだ。

これは非常に運がいいのではないだろうか？

それでも思つておかないと心が持ちません。

新旧四天王からのリンチとか暴力執事と追いかけることか普通トラウマものだよ。

「それでトラウマ。いつになったら挑んでくるんだ？ 明日か？ 明後日か？ 今からか？」

ていうか武神の催促がすごい。

川原で偶然会ったかと思つたらこれである。

「よし、じゃあ、今からやりますか」

いやまあ、当然受けて立つんだけどさ。

「よし来た!!」

闘気をみなぎらせる武神。

ああ、やはり化け物を目の前にすると緊張感が違う。

これ目の前にして心地よいとか感じるようになってしまった僕はもう駄目なのだろうかね。

「行くぞトラ！」

「来い！」

やはり自分を曲げることはしないのか始まりはいつも通りの右ストレートで切つて落とさ——

「やめて！ 川神院でしっかり準備してからにして!!」

と言った瞬間に、第三者から静止の声がかかる。

「ちっ！」

直江め、横槍入れやがって。

いやまあ、場所選ばなかったのは悪いとは思うけどそう言うもんじゃん？

決闘って？

「町が壊れるわ!!」

はい、ごめんなさい。

この現代社会では流石になかったですよね。
こんなところでチームもどきなんて大事ですよのね。

「かーっ、モモ先輩に挑むとか命知らずだよな。タフガイな俺様でも真似できねーぜ」
「いや、でもモモ先輩もこの前は追い詰められたって言ってたしもしかするんじゃない？」

「そーだぜー。最強相手に何度でもチャレンジ！ 燃えるじゃねーか！」
そんな一幕の後、現在川原で風間ファミリーに絡まれています。

今やるかどうかはともかくとして、モモ先輩からの催促に関してはどうせ怪我するんだしまだ夏休みの間にやっておいた方がいいよね。

できるだけ休学したくないしな。

て、言うかまず生き死にを気に掛けるレベルなんだよね。

「えー、それでは両雄にインタビューしてみたいと思います。姉さん？」

それにしてもこのノリである。

「あー？ 楽しみだぞ。この前は勝ったけど結局は自爆でゴリ押しだったからなー。
今回はスマートに勝ってやりたいな」

おおう、挑発的な目線ですね。

別に逃げやしねーっての。

て、言うか切り替え早いな武神。

さつきまで飛びかかってくる一歩手前だったのにその相手の背中の中のしかかっているとかどうなのよ？

最近スキンシップ激しいけどどういうサービスののだろうか？

「自爆でゴリ押しして……。おいモロ。アニメでしか聞かないようなセリフが聞こえてきたんだがおかしいのは俺様なのか？」

「いや、まあ、モモ先輩だし仕方がないとあきらめるしかないんじゃないかな？」

「だよな？ おかしいと思うよね？ 僕も実際やられたけどひどいもんだよ？ 近づいたらドツカーンって。松永先輩よくあれ耐えたよな」

「いや、お前が言うな」

解せぬ。

「あうあうー。高坂君がめちやくちやだわ〜」

あ、一人トラウマスイッチ入っていらっしやる。

「大丈夫だよ一子ちゃん。ほら、僕は生きてるよー」

「本当に？ もうグチャグチャにならない？」

「いや、それはわからない」

「あわわわわ」

あ、泣き入った。

「おー、よしよしワン子。てかグチャグチャになるつてのもそうだけど挑む前からそれを否定しないって……」

「考えちゃダメだよ大和。私も昔何度か組手相手するたびに怪我増えてるのみてて実は少しトラウマ」

一子ちゃんを慰める直江夫妻。

確かに今考えると椎名には悪いことしたような気もしないではないな。

「大和、もう仲人も決まったようなものだし籍入れちやおうよ」

「夫妻じゃないからね？ ただでさえ燕先輩の件で最近アプローチ激しいんだからやめてくれ！ お前妙に京煽るよな！」

「いや、だってなんだかんだ友達の恋路は応援したいじゃん？」

「ナイス！ トラ!!」

「クソ！ 思ったよりまともな理由じゃないか！ いや、ちよ？ 京落ち着いて!?!」

よし！ そこだ押し倒せ！

「はあ、はあ、それじゃあ次、高坂選手の意気込みを……」

ちつ、直江めしぶとく逃げおおせやがった。

それで、まだ続けるのかこのノリ。

結構根性あるね。

「次こそ倒す」

これ以外なんも言えないね。

松永先輩じゃないけど情報晒してまともにやれる相手じゃないし。

「おおう……、なんと言う簡潔な」

「ハハハ！ トラらしくていいじゃないか！」

「ウム、武士らしく簡潔な決意ではないか！ 流石は高坂、高潔な心構えだな」

なんか違う気がするのが一人いますね。

むずかゆくなるような買い被りですこと。

「おいおいクリス、こういうやつほど頭の中ではくだらないエロいことばかりなんだぜ」

「そうだぞー、こいつこう見えてかなりスケベだからなー。ほれほれ、美少女が抱きついてるぞー。どうだ？ ん？ どうなんだ？」

「クソ！ おいこら高坂！ その位置代わりやがれ！」

おい！

色魔ども何言つてんだよ！

正解だけどき。

正解だけどき！

そして島津よ、いくら血の涙を流そうと代わつてたまるか。

「何を言う！ 高坂はこの前柔道について指導してくれた時もマルさんや自分をそういう目で見なかつたぞ！」

「それに私の父も非常に高潔な武人だと言つておりました」

「パピーマジベた褒めだつたんだぜ」

いや、うん。

指摘した二人もどうかと思うけどフォローされるのもちよつと心苦しいです。

ぶつちやけお二人ともいいからだしてまし……ゴホン。

大成さんの信頼度の高さはどういふことだろうな？

「どうかな？ 今度の決闘も寝技でウハウハとか考えてるんじゃないのか？」

な、トラー？」

「いや、あんた相手に寝技とか普通にこつちがやられるでしょ」

筋力が違い過ぎて話にならねって。

力技で抜けられるだけではなく壊される未来しか見えません。

「こ、こいつ真顔で言いやがった！ おい、モモ先輩の体見て何も感じねーのか!? 見ろよこの胸！ くんずほぐれずしたくないのか？」

「わからん……、こいつのスイッチが理解できない……。普通にセクハラまがいなことを言うかと思えばこれなのか？ あとガクトは自重しろ」

騒ぎ出す色魔二人。

ざまー。

島津は命投げ捨てていいならやってみるといいと思います。

そんで、そらみろって感じのお二人はちよつと辛いかなー。

そんなに大した人間じゃないんだってば。

やめて！ そんなに信頼のまなざしを向けないで!!

こうなつては少しは男らしい（悪い意味で）ところを見せておくかと悩みだしたころ、少し複雑そうな一子ちゃんが目に入った。

……ああ、そうだよなー。

目の前でこんな話されてたら君は複雑だよな。

「ねえ、一子ちゃん」

他の奴らが僕はエロいエロくないだの論争を繰り返している間に話しかける。

てか、直江と師岡が何気にヒートアップしてるな。

お前から自分の性癖暴露してるみたいなものに気が付いていないのか？

「今夜、二人で自身の十年間を見せあいっこしようか？」

遊びに誘うようなかるさだなー、と思うと少しおかしくなる。

「え？ それって……」

「うん、久しぶりにやろうか？ 組手じゃなく仕合を」

おそらくこれから武神に挑めばそう機会を作ることまでできなくなるだろうしね。

「うんー」

非常にいい笑顔で返事をしてくれる一子ちゃん。

マジ天使の笑顔だわ。

ああ、僕たち二人はこういう形でつながっているんだ。

だからこんな言い方だろうと一子ちゃんも本当に嬉しそうに受けてくれる。

たまにはこういうより道もいいだろう。

友人との語らいみたいなのこの仕合に、武神との戦いとはまた違った高揚感が僕を包ん

でいた。

それはそれとして、いつまで続くんだろうか？

あつちの論争は。

第三十六話 決戦前、道分かれた二人の戦い

夜、風間ファミリーに絡まれた川原で一子ちゃんを待つ。

因みにあのあほらしい論争については人数的に圧倒的有利であつた高坂変態派であつたが、妙に信頼の高い二人の牙城を落とすことができずに結局引き分けに終わった。

僕が言うのもなんだが変態派頑張ってくれよ。

流石にあそこまで信頼されると心が痛いんだよ。

「お待たせー！ 高坂君」

と、そうこう考えてるうちに来たようだ。

後ろにルー師範代を伴って一子ちゃんが登場した。

「今晚ハ、一応試合と言うことだから見届け人として来たヨ」

「どうも、ご苦労様です」

背負っている薙刀も真剣仕様みたいだし監視人がいることはありがたいね。

もし切られたら大変なことになる。

どうでもいいけど武神って腕切られたりしたら生えてくるのかね？

生えてきても納得なのが恐ろしい。

「早速やりましょう！ 高坂君との仕合久しぶりだから楽しみだわ！」

「うん、やろうか」

待て！

つて言ったら待つのかな？

……何考えてるんだらう？

僕は直江とは違うんだ！

いけない、ルー師範代が開始掛けようとしてるんだから集中しなくては。

「それでは、西方、川神一子」

「はい！」

「東方、高坂虎綱」

「はい」

「いざ、尋常に、始め！」

「でやー！！」

開始早々突っ込んでくるのは川神姉妹の決まり事なんだろうか？

まあ、僕が受けに回ることが多いってのも理由の一つなんだろうけど。

「ほいさつとー！」

突っ込んでくる一子ちゃんに合わせるように間合いを詰める。

途中、上から襲ってくる刃、それをしっかりとその有効範囲の内側に潜り込んでから柄の部分を受け流す。

「どりゃあああ!!」

しかし、年季はともかくこの十年間では川神院の誰よりも薙刀を振ってきた一子ちゃんだ。

握りを素早く持ち直してすぐに逆側の刃の着いてない部分が襲ってくる。

当たってもびんびんしている化け物ならいざ知らず、僕みたいのにしてみれば非常に厄介だ。

「あー! うつとおしい!」

確実に間合いを調整できてはいるが薙刀の利である長い間合いを使った円舞は厄介だ。

なにせ円の動きと言うのは受け止めればともかく受け流したところで軸をどうにかしない限りとめるのはかなり難しい。

加えて一子ちゃんは組手で何度も体験している。

そりゃあ慣れるわな。

「つく!」

そして、僕の間合いに入る直前には飛び退かれた。

突っ込んでくるわりにはきつちりと僕のやり方に対応してるんだよな。

「むー、やっぱりきちんと当たらないわね。持ち替えが大変だわ」

「二子ちゃんも本当に武器の扱い上手くなったね」

受け流すたびにしっかりとその流れにあった方向に振ってきているのだ。

もし流れに振り回されてくれれば隙ができるのに。

ルー師範代も満足げに一子ちゃんを見ている。

「だって高坂君に捕えられたらアタシじゃ何もできなくなっちゃうもん」

「いやはや、モモ先輩とは違った意味で根競べだね」

化け物たちと比べて非常に気楽ではあるが、やっぱり基礎がきつちり積まれた上に相性の良くない獲物つてのは厄介である。

「負けないわ！ しつかりと一撃入れられればアタシでも勝機はあるもの！」

「あー、その通りなのがきついよね」

特に刃なんてまともに当たったら目も当てられない。

薙刀と言う武器は突き以外の払いの動作に円運動を乗せることで力に対抗することなくその長い間合いで相手を仕留められるという、非力な女性に好まれる武器だ。

つまるところ、組手の時のように逸らずに慎重にやられると僕からの攻撃の質がいまいちなのをみるとお互い決定力に欠ける。

「はあ、はあ……」

しかしながら、獲物を大きく振り回し続けないといけない一子ちゃんに比べて受け流す最小の動作で済む僕とでは圧倒的に僕の方が有利な状況になっている。

まあ、受けに失敗しない技量が前提ではあるんだけどね。

それに関してはあれだけ経験積んでいるんだ。

油断さえしなければしのぎ切って見せる。

「お疲れだけど大丈夫かい？」

「ツク！ これで決めるわ！」

おお、焦つてくれると助かるから挑発したけど見事に乗ってくれた。

決めると宣言した一子ちゃんは頭上にて獲物を回し始める。

「川神流、大車輪。アタシの今の最高の技よ」

大車輪は先ほどまでやっていた円運動の攻撃を事前に回転で勢いをつけることで、高速での連撃にて球状になるように叩き込む技だ。

「いくわよー」

まあ、なぜ技の完成まで呑気に見ているかと言うと、大技な分崩しが非常に効果的に

なつてくれるんだよね。

まず来るのは袈裟懸け、これを少し跳ね除け潜るように流す。

崩した軌道に沿って柄での追撃、また流す。

再び刃の方での追撃、流す。

あとはこれの繰り返しだ。

一子ちゃんの体力が切れるまで繰り返し返すのも手ではあるが、すべて受け流せるかと言
うと自信はあるが絶対ではない。

「来たー！」

故に軌道を変えながら待ち望んでいた斬り下ろし、ここで勝負をかける。

垂直に近い軌道を横にずれることで躲し——

「せいー！」

踏みつける！

「あ!？」

大技の名の通りの威力を出した斬撃は同じ向きの衝撃を受けることで本人の予想以
上の力で地を叩く。

その結果が、

「獲ったー！」

体が僅かに流され、待ちに待った力の空白。

手首を取り、前のめりになった体をそのまま転がすように投げる。

「負けるかあああ！」

つもりであったが、一子ちゃんが投げの勢いに逆らわずアクロバティックな動きで地に刺さった薙刀を軸にして空中で回転しながら蹴りを放ってきた。

あ、まず、これ受け流せないやつだ。

「つちい!!」

そのけりがあまりに見事な軌道だったためにせっかく決められたと思った投げを軌道修正する。

予定していた前投げの向きから力をそらして横投げに。

結果。

「痛うう！」

「きゃん！」

丁度丹田あたりかすめるというには深く、えぐるように蹴られ、投げの流れが不完全だったために一子ちゃんには受け身を許してしまう。

「あー！ マズー！」

しかし、無駄ではなかったようで、一連の流れから一子ちゃんに獲物を手放させると

いう結果は残せた。

「今度こそ！」

「川神流地の剣！」

体制が万全ではない一子ちゃんに追撃をかけるべく間合いを詰めるが、素早く動揺から立ち直り、低姿勢を溜めとした回し蹴りで追撃してくる。

が、

「ハッ！」

蹴り足を跳ね除け、そのまま後ろに押し倒し、蹴り足だった足を捻る。

「そこまで！ 勝者、高坂虎綱！」

おー、焦った。

「うー、また負けちゃったわ」

「ハハ、でもあの蹴りにはびっくりしたよ。あんなにきれいに体幹狙われた時はヒヤツとしたな」

「そうだね、あれは見ていてほればれとしたヨ。あの体制からピンポイントでと言う

のは多分ワタシでも無理だよ」

そう、あの受け流せなかった一撃は僕の立体的な軸を的確にとらえていた。

受け流すのに必要な円運動、そのすべての軸になる球体の丁度軸、人間でいう臍の下、丹田あたりを的確にとらえていた。

間合いがあればまだ手段があつたが、投げの間合いと言う超至近距離であれやられてはどうしようもない。

絶対に受け流せない一撃を入れられたのは久しぶりだ。

てか、化け物どもでもそうできんぞあれ。

「へ？ そんなにすごいことやつてたの？ 投げられそうだったから無我夢中だったわ」

「へ？」

あー、たまたまですかそうですか。

まあ、あれだけ崩された中で正確につてのは確かにムリゲーだが、それで、あわや手痛い一撃をもらうつていうところだったから笑えない。

僕とは違う地力を上げることにこの十年必死だったのは伊達ではなく、完全に入ったわけではないのかなり痛い。

僕単体の力じゃあ出せんぞ、この威力は。

「ま、まあ、ともかく、モモ先輩でも爆発以外ではできなかったことをやったんだ。すごいと思うよ」

「そうネ、偶然でもなんでも咄嗟に体が動いてくれたのは普段の鍛錬の賜物だよ。よくやったヨ一子」

「おおー！ ベた褒めだわ！」

「うん、モモ先輩と戦う前に一子ちゃんとすごくいい戦いができてうれしかったよ。お互いの成長を見せあえたのはすごく楽しかった。

大勝負の前にこう言うイベントがあるとモチベーションも上がるというものだ。心して戦える。

「……………」

ん？

なんか一子ちゃんがさすがのような目で見ているぞ？

どうしたんだろ？

「どうしたの一子ちゃん？」

「…………高坂君、死んじゃうの？」

「は？」

え？ え？

なにが？

「そう言うセリフって死亡フラグっていうんでしょ？ 戦いに行く前に言うって死んじやうって大和が言ってたわ」

オイ、オイ！

シヤレにならないこと言わんでくれ！

普通に死にかねない相手なんだからさ！

「ハハハ、大丈夫だヨ？」

「本当？ この前もものすごいことになってたし心配だわ」

「へ、平気だよ。ね？ ルー師範代？」

「エ？ あー……、そうだね。大丈夫だヨ。……多分ネ」

うわ、この前の有様思い出してたんだらうルー師範代の不安丸出しの返事が心に響く……。

僕、武神との戦いの後生きてられるのかなあ……。

非常に楽しかったが、後のことが非常に不安になった夜だった。

第三十七話 対武神、三度目の正直 前編

一子ちゃんとの仕合が何となくのきつかけとなり、武神と戦うことにしたのだが……。

「いや、それ完全に死亡フラグだろ。大丈夫か？ なんなら後日に回すか？」
武神にまで言われちゃってます。

「あーもう大丈夫だったの。あんなの迷信とかジンクスの類だろ？」

「いや、確かにそうなんだが……、なんとなく……な？」
クソ！

なんか怖くなってきたぞ。

だがそんなもんで引いてたまるかってんだ！

「ふん、そんなことばかり言って。倒してしまっても構わんのだろう？」
「ん？」

「それに、僕は負けられないさ。約束したからな……」

「お、おい？」

「だからどんなことをしたって生き残ってやる！」

「わかった、分かったからな？」

「僕、この戦いが終わったら結婚するんだ……。なんだろう、すごく体が軽い……。武神？　ふつ、小娘じゃないか僕の敵ではないな」

「おい、馬鹿止めろ！　わかったから！　オイジジイ！　早く来い!!!
はははは！

楽しくなってきたぜ！

もう自棄だ。

死亡フラグっていうんならありったけ立ててやろうじゃないか！

「なんじゃ？　仕合前だというのに騒がしいのう」

「来たかジジイ！　早く開始を！　この馬鹿がこれ以上死に急がないうちに！」

「本当に騒がしいのう。……ん？　高坂よ、お主死相が……」

「全部聞いてるじゃないか！　ふぎけんなジジイ！」

おい、何の抵抗もなく殴られる鉄心さんとか珍しい。

結論、突っ込みは不可避。

「ゴホン……、それでは気を取り直して、西方、高坂 虎綱」

「はい」

いや、さつきまであんなこと言つてたとは思えないくらい重々しい雰囲気を出している。

総代とか言われているのは伊達じゃないね。

「東方、川神 百代」

「応！」

こつちは切り替えと言うより始まつたら始まつたで楽しくて仕様がなといった感じだな。

もう爛々と目を光らせて正直怖いです。

まあ、望んでやっていることだ。

相手の強大さなど承知の上だ。

「それではいざ尋常に、始めい!!」

「無双正拳突き!!」

開始早々の正拳一撃は彼女のポリシーなのだろう。

予想できているだけにいつも通り伸び切った瞬間に力の方向を暴走させて手首の関節を外してやる。

「はああ!!」

しかし彼女は直す間も取らずに蹴りでの追撃、しかも崩しの取りづらい下段。

仕方がないので腿の部分が腰に当たるような位置へ、加えて衝撃の瞬間に僕が動く形で力を殺してやる。

「痛っ!」

そうすることで必死であるはずの一撃もせいぜい青あざができる程度に減退する。

次いで、化け物との戦いで捕まらないように距離を置くために、

「どっせい!」

腿を腋で挟むように持ち上げ、そのままひっくり返すように持ち上げる。

「おお!」

もちろんこんな力技では武神にダメージを与えられるはずもないが、それでも捕まえられない程度の距離は空く。

再び、五体満足に回復している武神と対峙……

「おろ?」

おかしいな。

手首はずれたままだぞ?

「うん、鈍っていないように安心したぞ……つと。くつ、うん嵌った」

ゴキンっ、と言う音と共に自分で嵌めやがった。

「あれ？ 瞬間回復は？」

「あ？ この前はこういうのいちいち回復していたせいでしてやられたからな。今回は回数やられて駄目になるまでは自力で何とかすることにしたんだ」

うそーん。

「言っただろう？ スマートに勝ちたいってな。喜べ！ こうすればもし私の技で前の防御を破れなくともだ、節約した分爆発できるぞ？」

ニヤリ、つと悪魔のような笑顔で、悪魔のような宣言をされた。

「死亡フラグってこれのことかな……？」

「ハハハ！ とりあえずいろいろ試させてもらおうぞ？」

そう言いながら、再び拳を放ってくる武神。

こちらのやることも決まっているとはいえ削りが不十分になりそうだ――。

「あー、クソ！ やっぱりまだ破れんか。うん、そろそろ関節も限界かな……、つと。喜べ。わたしの回復一回ほど削れたぞ」

「あー……、やっとすか……」

十数回ほど手足の関節いろいろ外してやっと一回。

それでも、一度戦った慣れと言葉通りいろいろ試してくれているおかげで回数割にこつちにもダメージは少ない。

「フム、少しでも打点をずらす余地があれば勢いを殺されるか……」
考え込む武神。

しかしその隙をついて動いたところでそう効果的な一撃を与えることもできない。
地力の開きと言うのは歯がゆいものだ。

「ふむ、ならばまだ未完成で疲れるが……」

行動の一つも見逃さないように見ていると、手のひらが光りだす。
気弾が来るか。

「かー」

一応受け流せるようになったとはいえこの前も結局削りに削られた。

「わー」

しかし慎重を期せばあの勢いの分、それを使えば僕でも武神に多少のダメージを与えることができる。

「かー」

故に身構えているが……

「みー」

いつもより溜めが長い？

これなら気を乱す意味でもこちらから攻められたか？

ニヤリと笑った武神にいやな予感が走る。

「波ああああ!!!」

向かってくる気の塊に掠めるように身を逃し受け流そうとするが

「ヤバ!?!」

その気の塊は回転しながらこちらに向かってきていた。

「ちいっ!!!」

落ち着け、幸いまだ未完なのか回転は荒い。

反撃——無理だ、荒くても流石にそこまで綺麗に受けきれそうもない。

回避——微妙、少し動揺した分最初の狙い通り掠めてしまう。

受け流す——一応可能、ただし力の流れが複雑な分、防御に全力を向けても体が流れる。
る。

ならば、

「くあ!?!」

接触点を最小にした上で全力で受け流すがやはり体が流れる。

反撃を完全に捨てたおかげでダメージは最小に抑えたが体が流れる。

「ハハハハハ!! 禁じ手 富士砕き!!」
やはりできた隙に武神は詰め寄ってきていた。

だが

「獲ったああああ!!!」
「?!?!」

先の気弾の受け流しに使って受けたダメージで痺れていた左腕を無理やり受け逃しの起点に受ける。

体制の分いつもより深めに受けてしまい砕けるような鈍い音が響く。

が、分かっていたからこそ痺れている左手を使った。

深く受けた分、受けた勢いは今までも最大と言つてもいい。

右足を軸に回る勢いに乗せて武神の皮膚を無理やり掴み、勢いに任せて投げる。

「ぐああああ!!!」

投げの勢いが強く、よろけてしまったが、尋常じゃないくらい痛がる武神。

しかし、武神に怪我は一切ない。

武神相手に考えた小細工、皮膚を使った投げだ。

美少女を自称して許されるほどの武神の美貌、そのやわらかい肌、前から疑問だったがやはりこれは鍛えようがなかったようだ。

痛覚だけが非常に敏感に働いていることだろう。

関節、脳、血流、皮膚、人間として鍛えるのに限界のあるものは共通だったようだ。そしてこの手の痛みと言うのはいくら鍛えようとも慣れることのないもので、

「あああああああ!!!」

隙だらけになった武神の顎に掌を当て、投げながら地面に叩きつける。

おそらく落とせたとと思うが、掴まれてもしたらことなので急いで間合いを取る。

そして、少し空いた時間で素早く自分の左腕の不自然に曲がる個所に隠し持っている棒手裏剣を当てて、道着の帯を使って絞めつけておく。

「ふむ、そこまで、勝者……」

数瞬起き上がらない武神に鉄心さんが終了の合図をかけようとする。

「あああああああ!!! まだだああああ!!!」

が、いまだ、脳が揺れているだろう武神が気力で起き上がり、意識が戻った瞬間に吠え、衝撃から出血していた口内もきれいに回復した。

「いや、モモよ。お前落ちておったるーに……」

「それがどうした! 私はまだ立っている! 水を差すな!!!」

気を失っていた、と言う点を見て勝負ありと見る鉄心さんだが、

「いや、まだでしょう」

「そうだ! 私はまだ戦えるぞ!」

「しかしのう……」

「このくらいの間時間じゃあ、僕じゃあ、止めさす前にやられてますよ。これじゃあ、納得できない」

そう、絞めにでも行つたならば、起き上がった武神に殺されていただく。

ずつと目指していた勝利だが、こんな形でおまけしてもらつたように手元に入つてきては納得できない。

「ふむ、両者がそう言うのならしようがないのう……、続けなさい」

「ハハハハハ!!」 そうだ、それでこそだトラ!! ああ、こんなふうダメージを通してくるとは！痛さで我を忘れるなど久しぶりだったぞ!!」

「うわあ……」

完全に出来上がってしまったている武神に正直ちよつと早まったかなあ、と思ひながらも、譲れないのだから仕方がない。

なに、絶望的な差なんて初めて負けた時からわかつていたことだ。

第三十八話 対武神、三度目の正直 中編

「ククク……」

目の前には悪役笑いが似合いすぎる武神がいる。

痛みで明らかにハイになっていらっしやる。

それなんてMの方でしょうか？

あ、眼光の鋭さが増したよ。

「おい、今変なこと考えたよな？」

「いやーなんのことですかねー」

鋭いなんてレベルじゃないねー。

おー、痛てて、こっちも左手痛いな。

痺れとれて泣き叫びたいレベルだぜ。

「ふう……、まあいい、それで？ もう慣れたか？」

おおう、バレーテラ。

変なタイミングで麻痺した左手の痛み来ないように時間稼いでたんだよね。

流石に受ける瞬間に激痛走ったら正確に流せるかわからんからね。

「ずいぶん親切ですね？」

「なに、一度待ったを許してもらったんだ。それに……」

「それに？」

「打ち崩して勝ちたいじゃないか？」

うわあ、何て無邪気な笑顔なんでしょう。

「いや、さつき崩されましたが」

「……空気読めよ。それにあれじゃあまだ二度は通用しないだろう？」

いやまあ、ご自分で未完成とおっしゃってたぶん溜め長いよね。

流石に二度は待たんわ。

「いや、速射できるとか？」

「分かってて聞くなよー。今までやってこなかったからああいう細かい調整は苦手な

んだよー」

あら正直。

「いや、それ言っているの？ ブラフとかいろいろあるでしょう？」

「ん？ そーいうのは向かんしなー。というか、言っても完全には信じてないだろう

から変わらないさ」

まあ、頭から信じてやられるとかありえないよね。

「んで？ もういいのか？ ウズウズしてはち切れそうなんだが？」

おやおや、ちよつとわかつてないみたいだ。

こっちは怪我だらけでも挑んでいたというのに。

まあ、時間稼ぎの意図はあったから勘違いするのも無理はないか。

「何言ってるんですか？ そんなのいつでもいいに決まってるでしょ？」

「つくはー！」

目が光つたと思つたら飛び掛かられていた。

「ハハハハハハ!!! よく言つたあああああ!!！」

迫りくる右の拳、肘の位置に左手を添えて外側にそらす。

自身の勢いで肘が外れる音がする。

完全になれてしまったのかももう気にせず左が来る。

僕の左手が間に合わず右腕で内側をはじく。

あ、やっぱ左手痛いわ。

と言うことで、外した右手の方向に抜けながら足をかける。

ついでにもう一度皮膚掴んで投げに持つていこうとするが

「うげ、何て遅しい……」

「……お前結構失礼だよな？」

予想はしていたが大して揺らがない武神、流石に相手の勢いに乗りきれないといかんともしがたいスペック差があるようだ。

所詮は小細工か、初見で決めきれなかったのはつらいな。

しかし、突きを使う出足との位置関係から蹴りは飛んでこなかったものでちよつと間合いを離すことはできた。

向こうも自力で嵌めなおす分前よりは攻防の間に余裕がある。

「んー、回復しないととなるとこう、なんだ……、やりあつてるとつていう迫力が足りないもんだなあ。もしかして不利か？」

「いや、こつちももう左腕壊されてますがな」

ついでに爆発控えてるとかどんな悪夢だよ。

「まあ、気長に言ってみようか」

勘弁してくれよもう……。

さて、怪我をしてもいつも通りの動きができる自信はあるといつてもやはり限界がある。

なにせもともと完全にダメージを残さずに受けきれぬ相手ではない。

次第にただでさえ壊された左腕にダメージは溜まつていき……

「どうした？ さっきから私は何もされていないぞ？」
遂に反撃できなくなってます。

「いや、もつと大振りしてくれていいんですよ？ それなら何とか……」

「いや、するわけないだろ」

「ごもつともで。」

骨外し続けること78回、回復させること多分6回位。

武神が多少荒いお蔭でたまに反撃の隙はできるわけだが、こつちが持つかわからない。

しかも、節約しているのかこつちが捨身覚悟で勢い貫える気弾を使ってこない。

「それにしても悔しいなあ。ただでさえ抜けないのに受けに徹したら本当にダメージ入らん……」

いや、結構削られてるんですけどね？

概ねこういつた感じで千日手に落ちいつているのだった。

そして、僕からの攻め手に欠ける以上、状況を動かすのは……

「仕方がないか……」

そう言つて両の腕を光らせ始める武神。

来た!!

もうダメージ覚悟で気弾の勢いを叩き込む。
そう思い、溜めに入った瞬間に地を蹴る。

が、

——ニヤリ

迎え撃つ武神様は不吉な笑みを浮かべていた。

ヤバ……。

「捕まえた——☆」

非常に楽しそうに抱きしめられてしまった。

ここでサバ折りでもしてくれればまだ希望があるのだが……。

「ドカーンと聞いてみようか」

そんなに甘くはないらしい。

「川神流……ツク」

「クソがああああああ!!!」

なりふり構わず噛み付き、髪を引く。

やはり毛根は鍛えようがないのか拘束が緩んだ瞬間に地に伏せて転がってやる。

「人間爆弾!!」

「んんんんんん!!!」

丁度背を向けたタイミングで襲い掛かる衝撃。

直撃するより万倍ましではあるが、ものすごい勢いで転がることになった。体の芯に致命的な損傷はないが体中に擦り傷ができた。

ついでに左腕の固定が外れる。

回転が収まり、今追撃されてはまずいと急いで立ち上がるが

「あれ？」

何やら立ち尽くす武神。

「フフフフ……」

回復しているところを呑気に見るのも珍しいが、ボロボロなのが戻っていくさまも相まってなんか怖い。

「ああ、髪なんか伸ばしてるのが悪いんだろうな……フフフ、武術家として狙うのは当たり前だよな……ああ、だが、ちょっとくらい腹が立つのも仕方がないよな？　なあ

……トラアアア!!」

うわ、逆鱗引つ張ったかなこれ。

気迫がこもった一撃を辛うじて流すが、満身創痍なせいでかなりきつい。

「獲ったああ!!」

追いかけるような二撃目。

あ、これまずいな。

仕方がない、次のためにダメージを残さないように……。

「……………あ!？」

などと咄嗟に考えたことに愕然としてまともに一撃をくらってしまふ。

久しぶりに受けるまともな一撃、しかも武神と言う超一級の一撃。

外からだけではなく内からも響き渡るはずの音が感じられないような剛撃。

意識だけがはつきりとした状態で吹き飛ばされる。

今何を考えた？

次？

……次だと？

ハハハ……、何を考えていたんだろう僕は。

走馬灯、危機的狀況で脳がフル活動し過去を思い出すことで解決方法を探すときに起こるといわれる現象だ。

これとはまた違うがおそらく似たようなものだろう、この吹き飛ばされている間に時間が引き伸ばされるように思考が加速する。

笑ってしまふ。

なになが死亡フラグだ……。

僕は、僕如きが、本気の武神に挑んで、生きていられるつもりだったのか？

……いつからだ？

いつからそんなに腑抜けていたんだ？

無様に顔から着地し、ツンとした痛みが脳に届く。

ああ、なぜ僕は生きているんだろう？

ここまで見事に武神の一撃をくらったくせに考える余裕まである。

そんなの決まっている。

何せ追撃されることもないのだから。

僕が死なないように、拳が当たる瞬間に手加減がされたからだ。

ザワリとまるで血の全てが阿多頭に上ったような感覚がした。

なんだ？

なんだこの様は？

手加減され見下される。

あの時と全く変わっていないのか？

ああ、武神は悪くない。

あの咄嗟で手加減して殺さないようにしたことはむしろ褒められるべきであろう。

悪いのは僕だ。

こんな様で手加減させないといけなかった僕が全て悪いのだ。

戦闘続行するにはあまりにも重い——しかし、武神の一撃をくらったにしてはあまり

にも軽いダメージ。

それを押して立ち上がる。

ああ。そうだ。

死亡フラグなら最初からぶつといのを立ててしまっている。

ならばそうだ、次などいらぬじゃないか。

だから、だから。

せめて、せめて一勝を！

ここにきて、僕は自分を捨てた。

その瞬間、世界が変わった。

陳腐な言葉ではあるがそんな感覚を自分の身を包むのが分かった。

「ハハハ！ どうだトラ!! ついに一撃当ててやったぞー！」

僕が立ち上がったのを見てそんな風に楽しげに声をかけてくる武神。

しかし、僕はそれにこたえることなく黙っている。

「ん? ……そうか、限界か。それじゃあ終わらせてやろう！」

立ち上がったのにもかかわらず返事もせず立ち尽くす僕に限界を見たらしい武神の拳が迫る。

「川神流 富士砕き！」

武人としての慈悲であろう。

止めにとはなった一撃は適当なものではなく本気のもの。

——壁に手は届いていた。

おそらくまた当たる寸前に力を抜くつもりだったのだろうがまさに武神の本気と言つていい一撃だ。

——けれどもその向こうを覗くことはできずに来る日も来る日も地を蹴っていた。しかし、その一撃に今や脅威を感じることはなくなっていた。

——その向こうを覗くことに必死で何度も何度も身をぶつけながらも飛び跳ねていた。

最低限を守ることすら捨てた今になって、何故か手に取るように見えていた。

——超えることができないまま何度も何度も体は壁にぶつかつた。

ならばもはや勢いを殺すことすらせずに体を滑り込ませると、すり抜けるかのように轟音は横を通り抜ける。

——ふ、と気が付くと光が漏れていた。

そのまま、出足に力が入る直前に巻き込む。

——覗き込むと

「え？」

何がおこつたのかわからないような間抜けな声が聞こえる。

化け物と戦う中、初めて、何のダメージもないままの完璧な投げが決まつた。

——壁の向こう側が目の中に飛び込んできた。

ああ、もう武神にさえ負ける気が全くしない。

まあ、

「ハハハ！ まだやれるか、流石だな!!」

勝てる気もまだしないのだけどね……。

軽々と起き上ってくる武神を見ながら考える。

さて、どうやって致命打を叩き込めばいいのか。

第三十九話 対武神、三度目の正直 後編

「はあああああ!!」

武神の攻撃を躲し、完全に受け流す。

「っちいー!」

急に僕がダメージを受けることがなくなったことに武神はだんだん焦れてきている。僕がこんなことをできるようになった理由はなんのことはない。

ただ単に一瞬見ることができるようになったただだけだ。

「これならどうだ!?!」

いままで僕でさえもその威力に多少なりとも削られていた正拳。

しかし、今それを明確に知覚することができる。

今ままであれば経験に任せた予測のみで、一回一回が命がけに感じていたそれである。

しかし、身を捨てる覚悟を得た今は、それを一拍置いて明確に見えるようになっていた。限界ギリギリだと思っていたそれ、もはや当たることさえいとわなくなればコンマ

一秒に満たない時間であろうとも見極めに使えるようになった。

この生まれた時間の有無に天と地ほどに差があった。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、か」

自分で言うのもなんだが、今までよくあんな目をつぶったような状態で対処できていたな。

攻撃に移る瞬間の情報が山のように積もっている瞬間を見られるようになると思われられないくらいだ。

試合であれば審判が迷いなく一本と叫ぶこと間違いがない綺麗な小外刈りで武神を静める。

「なんか変わったか？ ただでさえ薄い手ごたえがなくなつたぞ？」

「おかげさまで」

一本腕が使えるなくとも武神に対処できるほどに至つた。

しかし、そこまで状況好転していないな。

「まあ、いい。なんにしろしつかり一撃決めてやればいいだけだ」

そうなんだよな。

ぶつちやけこつちの方が消耗激しくて時間伸びただけなんだよね、攻め手に欠ける状況は全く変わってない。

実際ここに至るまでの消耗のせいで力尽きて倒れるイメージがひしひしと感じられるんだよなー。

「そうか、それならいいんだ。殴れるのなら問題はない」
心底安心したように言われるが

「ああ、それは無理じゃないかな？」

もう、それには何の脅威も感じていない。

「ククク……」

「ハハハ！」

「上等だ!!」

「来いよ!!」

ここにきて武神の猛攻は激しさを増していく。

ふむ、本当に千日手、と言うには僕の体力が尽きるまでと言う制限があるのが厄介だな。

時間に余裕ができたのだから勝機くらいは掴みたいものだ。

「あー、クソ！ 土まみれじゃないか！」

幾度目になろうか、ダメーヅを負ってはいないが地に伏せられた武神が素早く立ち上がる。

ああ、やはり勝つためにはこんな温いことを繰り返すだけではいけないらしい。

「なんなんだ？ 一撃入れたと思っただら前にもまして……」

幸いこのままタイムアップまで繰り返す気は彼女にはないようだ。

明らかに焦れている。

まあ、打ち崩したいと堂々と宣言しているのだから当然だろう。

これなら時期に勝機は廻ってくる。

その証拠に

「つく！ あー、また掴みそこなったか！」

いま、彼女は打撃よりも僕を捕まえに来ている。

人間爆弾、武神を中心に面として襲ってくる衝撃。

これだけは掴まってしまっただろうしてもうまく受け流せないであろう天敵だ。

武神もそれはわかっているのだろう、僕を打ち崩して勝つためにそれを狙ってきている。

「まあ、そう簡単には掴まらないさ」

そして、そう簡単に掴まってやるほど甘くはない。

幾度も地獄の抱擁を交わしている。

だからこそ、今武神は焦れに焦れている。

「ふん、いつかは掴まえるさ。一度でも捕まれば二度目があつても簡単に掴まえられるだろう?」

うわ、とてもちびりそうな笑顔だよこれ。

確実に通用する手を持つ武神が、他の手を通じないままタイムアップを迎えそうになつているのだから当然の状況になつている。

お互いに挑戦者。

本気で武神が僕を倒しに来ているというのはなんと心地よいことか。

よくちびらないものだ。

「まー、もう何やろうとしてるか分かつてるだろう? 結局今回もお前打ち破れそう

なのはこれだけになつてしまつたみたいだが、それでもお前は一回でこれを破らなきゃいけない。できるか?」

「いや、無役茶言わないでくれませんかね?」

そう、無茶だ。

なにせ自分の力で武神の体に大きく傷をつけるほどの衝撃を生む技、それをゼロ距離で全身を越えておおいこむような範囲で叩きつけられる。

こんなもん早々破れるわけがない。

「ふふん、そうだろう。だからしっかりと逃げろよ!!」

千日手だった状況もここに至ってはまるで鬼ごっこ。

結局は連発が聞く状況を作られたのならば武神にとつて必勝パターンと言える此処に行きつけたことがまず大きな成果ともいえるだろう。

躲す、投げる、距離を置く。

時間が経つにつれ余裕は消えうせる。

もとより片手はつぶされ、体はボロボロ。

いくら追加でダメージを受けなくなったからと言ってもすでに負ったダメージはごまかしようもない。

せめて開始からここに至っていれば、と思わなくもない。

ああ、そろそろ本当に限界か……。

そう思える故に、自分を包む腕に、やはりかと言う思いしかない。

「捕まえたぞ? それじゃあ一発目行ってみようか!」

そう、絶望感など一つもない。

「川神流！」

技を宣言する武神。

咄嗟に抱きつかれ礼る武神の左腕の小指をできる限り捻りあげる。

完全に間に合わないタイミングであろうが拘束は緩む。

この程度は予想の範囲内だろう。

何せここからでは絶対に無傷ではいられない。

武神も何発でもやってやるという意志があるのだろう。

が、

「人間爆弾！……!?!」

そこで武神は驚きを顔にした。

駄目だよ？

しっかり掴まえてかないとね。

そのまま武神の片腕をしっかりと掴まえてやった。

絶対にこの手を放してなどやらないよ？

やっと待ちに待った瞬間が来たのだ。

もう覚悟など決まっているんだ。

そう、破る気なんて捨てているのだからね。

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。

力を捨て、身を捨て、捨てて捨ててのこの状況。

たとえ力尽きようともわが志は浮かんでくれるだろうさ。

「あああああああああああああ

!!!!!!!」

全身を襲う猛威。

しかし絶対に手は離さない。

不安定な僕の体は猛威にさらされるが中心からは離れない。

武神を軸にして暴れまわる僕の体。

情けないことだが、考えてみれば当然のことだ。

何度も武神の体と地面を叩く。

三度の戦い、いや、一度目は例外にしてもだ。

地に足もつかぬ状況では決してコントロールもできない暴力が全身を襲っている。

もつとも武神を傷つけることができたのはなんだったのか？

早く、早く。

叩きつけられる度にこの絶対的な力は削られている。体中が壊されていくというのになぜか恐怖も感じない。

誰が見ても明らかなくに武神のこの技ではないか。

力尽きそうな激痛の中、足が地面を掴んだ。

折れている。

がくんと更に沈むが、それでも地を掴んだ。

「ああああああああああ!!!」

ああ、僕の手は、僕は決して武神を離してなどいないはずだ。

ならばもう何も心配はいらない。

自分が叩きつけられた反動そのままに、武神を地面に叩きつける。

型も糞もあつたものではない、この暴力の流れをそのまま叩きつける。

!!

人の力では成し遂げられるはずもないような音が地面を揺らす。

もう立っていることもできない。

うつぶせに勢いそのまま倒れこむ。

この暴力の力をできうる限り使ったのだ。

第四十話 お約束の満身創痍

「生きてる、なんでか知らないけど生きてる」

なんというか、つい最近もおんなじような状況で目が覚めた気がする。

案の定体は動かさせません。

あー、今回はきちんと治るんだろうか？

まあ、もう治んなくても構わないんだけどね。

「……すること、ていうかできることがないな……」

いやこれ真剣で動けないな。

早く誰か来ないかなー。

暇ー、暇ー、なんか気を紛らわせること起こらないと激痛で発狂しちやいそうだなー。
などと思いつながらボーつとしているとやつと襖が開いた。

「おお、目が覚めたようじゃな」

「おはようございます、鉄心さん。早速教えてもらいたいんですがどのくらい寝てました？」

「ふむ、安心せい。ギリギリ夏休みじゃ」

「あー、そうですか……。え？ 1週間以上？」

「うむ、よくもまあその程度で意識が戻ったもんじゃ。運がいいのう」
あー、そうですか。

運がよくつてこんなもんですか。

真剣でよく生きてたもんだね。

「それで、モモに勝ったのじゃが、どうじゃ？ 武神を名乗るかね？」

「ふざけんなよ？」

あ、やべつい本音が。

「ふおつふおつふお、よいのか？ 名乗ったところで誰も文句は言わんぞ？」

あ、この人分かっててからかってやがるよ。

川神の血は趣味が悪い。

通りで一子ちゃんだけ天使なわけだよ。

「いや、もうこの先あんな命がけの決闘はごめんですよ。武神なんて命がいくつあつても足りないじゃないですか」

いやだわー。

「ふむ、ではそのようにしておこう。一応言っておくが、それでもかなりお主の名は広

がるじやろう。用心するのじやぞ?」

「う、やつぱりですか? わかりました」

うげ、もう化け物連中には放っておいてほしいんだけどな。

まあ、仕方がないか。

「それでは休んでおるとよい。目が覚めたのなら見舞いに来るといふものも結構おるからのう。何か必要なものはあるか?」

必要なもの……。

「あ、そう言えば体動かないんですけどトイレは……」

無言で指をさす鉄心さん。

その先には尿瓶があった。

「……………」

うん、誰が世話してたかは聞かない。

そして一刻も早く這ってでも動けるようになってやる。

鉄心さんが去ってすぐ武神が部屋に来た。

「トラ!! 生き返ったか!？」

「いや、死んでないがな」

すつごく必死な形相で言われて非常に複雑だ。

「そうかそうか! 早く治せよ? 次は私が勝つからな!」

「いや、もうやだよ。死にたくないし」

「こんな目に合うのは嫌だと思っただ普通。」

「オイ……、そこはお前いつもみたいだに『それなら今からでもやる?』とか言っただけで私に止められるところだろうが……」

「いや、何言ってるんですか? いやだよ。死ぬじゃん」

頭大丈夫か?

「お前……! お前!! ツク、怪我人じゃなきゃぶつ叩いてたぞ……!」

頭抱えてる武神。

やっぱり頭駄目だったかな?

「ふう……、はあ……。まあいい、それで覚えてるんだな?」

急に真面目な顔になる武神。

僕との間でこんな顔になるような話題は一つだわな。

「ああ、遂に勝ったぞ。武神」

「ああ、やられた」

ああ、地に伏せた僕と見下ろしている武神。

構図自体は変わっていない。

しかし、しかし、なんと満足感に満ちていることか。

武神の顔にはもはや諦めの感情もなくなり僕を認めたように口の端を上げている。

ああ、やつと、やつとだ。

胸にあふれる想いが隠れることもなく武神と見つめあつたまま表情が崩れるのが自覚できた。

「!? まあ、なんだ。何にしろしつかり治せよ？ 絶対にリベンジするんだからな!」

顔を真っ赤に染めたと思つたら何とも不吉なセリフを残して去っていく武神。

「……………え？ いや、もう本当に勘弁してほしいんだけどな」

さてさて、僕はあの化け物から逃げきれのだろうか？

最悪次があるなら体力切れまで逃げきってやる。

絶対にだ。

数日後、根性と気力でトイレに行けるようになっていた。

いや、両手片足折れててそれ以外で動こうとは思えないけど。

ここ数日は特に武神が訪ねてくる回数が多く、僕が初めて挑んだ時から、どんな風に鍛えていたかななどを暇つぶしに話していた。

武神とは何となく身近な気がしていたけどこうしてゆっくり話す機会なんてなかったなー、と思う。

……考えないようにしていたが遂に月が替わり学校が始まるらしい。

あははー絶対まだいけないze☆

逆にテンション上げてると気を紛らわせるのにいい連中がお見舞いに来てくれた。

「うげ？　ちよ？　姉さん、これやったの姉さんだよね？　……うん、これからちよつとくつつくのやめてもらえるかな？」

「うわあ……」

「うげ……、こりやあワン子もトラウマ作るわけだぜ……」

「まあ、でもあれだ。モモ先輩に勝ったんだろう？　名譽の負傷じゃねえか！」

うん、間違いなく有名人見に行くみたいだな野次馬だな。

てか、自分で言うのもなんだが、この状態で引かない風間は物大だと思う。

「おい、軍師大和、今なら俺様でも倒せるんじゃないか？　そうすればモモ先輩に勝った高坂に俺様が勝って……、俺様最強？」

なんか馬鹿なこと考えているのがいるぜ。

「つく、なんと言う外道だ。いいさ殺すなら殺せ。しかし情けをかけたのならば必ずや後悔させてやる！」

「いや、お前なにキヤラだよ？　つと、聞いてのとおりだガクト。あんまりおすすめはできないぞ？」

「いや、それ以前に流石にこの状態の高坂に手を出すのは騎士として見逃せん！」

「うん、仲間だから命はとらないけど……ククク」

「まゆっちも武人として黙ってねーぞ？　ボーイ」

「止めなさいよガクト、多分川神院も動くわよ？」

おお、頼もしい。

こんなにも大勢に守ってもらえるなんて。

てか一角が怖くてみたくないなー。

「ほう……、ガクトは最強がほしいのか？　ならば負けた身ではあるが相手になつて

やるぞー。」

「つジョジョジョジョジョジョーダンだぜモモ先輩!!　おおお俺様はそんな姑息な

ことする男じゃないヨ？」

「まあ、実際そういうことしようとするのが結構湧いてるんだよなー。私が負けたつてのは隠すには大きい情報だし、結構潰してるぞ？」

「あ、やつぱり？ 寝てて妙な気配すると思ったよ。そしてさらつと守ってくれてるモモ先輩かつこよすぎ」

あれ？

ヒロインポジ？

「まあ、あんなのにやられるのは絶対に許せんよ」

まあ、キリつとした笑顔。

流石は女誑し。

こうやって落としているのか。

参考になるぜ。

「それで、いや、こんなこと聞くのもなんだけどやつぱり高坂も学校始まるまでには怪我直せちやつたりするのか？」

「……うつ」

あ、聞いちゃう？ それ聞いちゃう？

気まずそうな一子ちゃんはいいいけどにんまりしてる武神腹立つ。

「……………由紀江ちゃん？」

「は、はい？　なんででしょうか？」

いきなり振られてちよつとテンパった由紀江ちゃん真剣可愛い。

「……………来年はおんなじクラスになれるかもしれないね？」

「……………」

「……………めん高坂」

直江はとつても真摯に謝ってくれた。

結局その後はなんとも微妙な空気で解散していった。

笑い堪えてた武神に罰当たらないかなあ。

いいもん。

ここは川神だぞ？

きつとこんなうやむやになる大事件が起こってくれるはずだ!!

きつと……………、きつと……………。

半ばふて寝していたその日の夜。

死ぬほど嫌な予感がビンビンした。

「起きてるな? 小僧」

うげ、やっぱりだよ、やっぱりだよ!

「こんばんは、ヒュームさん。わぎわぎお見舞いどうもです」

うん、せめて動かせるレベルまで回復してから来てほしかった。

對抗できない状態でこの人に会うとか怖すぎる。

「ああ、よくやった。これでこそ鍛えがいがあるというものだ。礼を言おう」

そういやそんなことも言ってたよな。

「いえいえ、……ねえヒュームさん?」

「なんだ?」

「いや、最悪留年してどうにもならなくなったら九鬼つて拾ってくれます?」

「ツク、ハハハハハハ! なんだ妙に弱弱しいと思っいたらそんなことか。クク、武神を

倒した人間とは思えんな。ああ、貴様の腕が腐らん限りはどうにでもしてやろう」

っしやあああああああ!

勝ち組だぜ!!

「それでは養生するんだな。……それに、学園のことは心配しなくていいかもしれん

がな」

「？ はあ、どうもです」

いつの間にか妙に豪華なフルーツ盛りが置いてあるあたり九鬼って流石だと思う。
てか、最後の一言なんだろう？

いや、本気で何かやらかす気なのか？

いくらここがKAWAKAMIでもないよね？

不安だ……。

第四十一話 川神院強襲

骨もうつつすらとくつついて来て、補助具と細心の注意を払えば動けるようになってきた。

なんか川神院が騒がしい。

いや、気配で大体わかるけど、これ、道場破りか何かだな。

うわー、門下生次々やられてるよ。

これは修業きつくなるんだらうね。

南無。

「えー、ルー師範代と鉄心さんくらいしか無事な人残ってねーじゃん……」

僕はここで寝ていて大丈夫なのだらうか？

「うわ……、鉄心さん大はしゃぎってか？ えげつねえ」

武神は梁山泊どうこう言ってるんかいなとか言ってたな。

これがそうなのかね？

裏かかれてやがんよ……。

まあ、もうほとんど終わってるし、一応見に行くか。

色々お世話になってるしなー。
うげ、いててて。

「鉄心さんお疲れ様です」

死屍累々、なんと恐ろしい爺様だろうか。

「おお、高坂か。……来るんならもつと早く来てくれてもよかつたんじやないかのう？」

「いや、怪我人ですし」

「……ふう、すっかりおとなしくなったもんじや。少し前まで絶対突っ込んでおったじやろうに」

ふ、もう武神に勝ったからな！

余計な怪我する必要はないのだ。

「怪我人になんてことを……、て、まあおふざけはいいとしてまだ結構残ってるみたいですよ？ てか、門でルー師範代が止められててヤバイ」

「む、そうじやな。しかしあの力量を、三人、控えに一人では責められんわい。あー、

どつかに一人二人何とかしてくれるものはおらんもんかのう……」
ちらちらと眉を上下してこつちを見てくる武神。

いや、僕川神流じゃないんですがねえ。

「はあ……、今の僕じゃあ倒せませんよ?」

「わかつとるわい。じゃが、あの程度なら倒されませんじやろう?」

いや、鈍ってるから死ぬかもしれない。

まあ、戦場で寝てるよりはましか……。

「どもー、押しかけ助つ人高坂虎綱ただいま参上ー、一人二人雑談につきあつて〜」

「高坂君!! 怪我は大丈夫なのかイ!?!」

「いえ、できれば動きたくなかったです。つて、マザコンさんじゃないですか。どもども」
も」

「ええ、母を大事にする僕ですよ。高坂さん」
なに?」

これ九鬼?

思い切ったことするな！

「ふむ、高坂君が来たとなると……、これは作戦時間がオーバーしそうですね」

「おお、なら撤退してくれませんか？ よかったー」

ああ、すつげーいやな気配してるから絶対にならないだろうな！

「阿呆。ただ切り札を呼ぶだけだ」

「あー、どもどもヒュームさん。……いや、ルー師範代流石にこれは無理だと思いません？」

「ム、しかし、それでも折れるわけにはいかないヨ!!」

うげ、まあこうなったら少しくらい付き合おうか。

流石に死にはしないだろう。

「早まるなルー。俺の相手は川神百代と決まっている。それ以外に手を出す気はない」

「え？ じゃあ切り札ってなんすかー？」

「ふ、まあじきにわかる」

「へー、じゃあとりあえず一人位相手するよー。と言うことでルー師範代、さつさと倒して助けてください」

「ム……、すまない。無理はしないでネー！」

そう言つて戦鬪に戻るルー師範代。

まあじゃあ僕もつと思つたが、なんか三人組はもう向かつてくる気配がない。

「……んげ、化け物級が来るじゃない。勘弁してくださいよ」

「ほう、分かるか小僧。流石だ」

「ぐあああああああ！」

うわ、早！

てか、バイクで轢き逃げ？

ルー先生轢けるってどんだけだよ!?

「……あー、僕どうしたらいいと思いますか？」

そのまま川神院入つて行つちやつたよ。

ちよつと痛いのが覚悟したと思つたら置いてけぼり……。

泣ける。

「ククク、まあもう今のお前ではどうしようもないだろう。見に行つたらどうだ？」

はあ、何もしないで戻るのか。

なんとなく寂しい……。

「……つて、うわー葉桜先輩やつぱ化け物かよ……」

うー、移動だけでも痛いし時間かかるんだよなー。

うげ、鉄心さんヤバいんじゃないね？

あの爺さんさつきはしやぎ過ぎだよ。

げ、おいてきたルー先生何かされてるよ。

うわー僕なんなんだろうなー。

そんじゃあ

「あー、本当に何もして無くて情けないことになりそうだからさ、ちよつとばかり待とうかその人」

後ろから呑気に歩いて来てる青い人だけは止めとこうか。

「んー？ 邪魔するの？ 杖突の怪我人のくせに？」

「あー、一応ね。ここで君まで素通りさせたら僕人として最低じゃん……」

「あつそ」

そう言いながら手に持っていた双剣を無造作に振るう。

まあ、舐めてるし大したことないな。

刃の腹に杖を当ててちよつとだけそらして回避。

「!？」

「いつつう?!？」

やべ!？」

舐めててくれてよかった。
ビツクリして追撃が来ない。

こんなことで体固まらせるとか気が抜けすぎていた。

「ふう……ふう……。あー、よし、覚悟完了。高坂虎綱、此処は通さない」

「!?」へー、なるほど君が武神倒した人かー。さっきまでの気が抜けた感じじゃあ分
からなかったよ。梁山泊、青面獣、楊志。行くよ」

とりあえず抜かせなきやいいだけだ。

うん、無視さえされなきや得意分野じゃないか。

あー、結論から言うとう川神院落とされました。

葉桜先輩。パナイ。

まあ、ぶっちゃけこっちの方が分かりやすい感じはしていいと思うけどね。

「はあ……、はあ……。むー、時間切れかー。……逃げていい?」

「んー?できれば大人しくしてほしいけどなー。ぶっちゃけ今の僕だと逃げに回られ

ると追いつける気がしない」

「ラッキー……。はあ……。君の技でもこの際いいと思っただけど結局使える技盗めなかつたなー。……。パンツも手に入らないし」

いや、パンツって……。

「あー、僕の技ってそんなに使えない？」

「んー？　すごいとは思うけどあんな限定的な攻撃に合わせる技なんて盗んだところで使えないよー。技っていうより経験の塊って感じかなー？」

まあ、そうだろうな。

型なんて盗むまでもないだろうし。

「ま、いいやー。ばいばーい」

そう言つて去つて行く楊志。

よし、一応足止めはした。

僕は役立たずではない。

去つていく襲撃者たち。

「まあ、これだけやらかしたんだ。すぐに人が来るだろーさね。」

うん、できる限りの介抱しておこう。

……ごめんね、ルー師範代。

続々と集まってくる人。

怪我人建物の中に運んでたりしたら寝ていろと怒られたでござる。

そんなこんな一段落着いたあたりで話を聞かせろと呼び出された。

「つていうことは皆の意見をまとめるとだね」

松永先輩が仕切っていた。

つまるところ、九鬼のクローンの親玉葉桜先輩こと項羽が梁山泊が強襲してきたらしい。

項羽って霸王とか言われる人だよな？

そりゃあおつかないわ。

「フフ……疑問は尽きないだろうな赤子共」

「ヒューム!?!」

「あ、ヒュームさんさつきぶりです」

「ワオ。再度乗り込んでくるとはね」

「勘違いするな。俺は特使だ。戦闘の意思はない」

「え？ 人選みすにもほどがあるでしょう」

あ、やべ。

「お仕置きしてほしいのか？ 小僧」

ブンブンブンブン。

あ、首振りすぎてても体が痛むよおい。

「ふ、まあいい。もう少しすればマープルがテレビで演説をする。必ず見ろ」

「ヒューム！」

ん？

この紋ちゃんの怒り様と、九鬼一族が人質に取られたらしいことから、今回の件は九鬼の総意ではないらしい。

て、ことは……!?

内部抗争!?

そしてその筆頭ではないにしろその重要な位置にヒュームさんがいる？

な、なんてことだ……、何てことだ!!

九鬼に就職できると思ったら自分おしてくれている人が反乱おこしやがった!!

くそう……くそう……!!

もう九鬼は信用できない。

もし留年してそのあとどうしようもならなくなったらどうすればいいんだろう？

……武神倒したって書けば何とかなるだろうか？

僕は例の放送が始まり小突かれるまで愕然としていた。

てかいたんだ石田……。

まあ、天神館の館長いるし居てもおかしくないか。

因みにあとから島に聞いた話だと石田は僕と実況で盛り上がったのが思った以上に楽しかったらしく、僕が武神倒したと聞いて館長さんに着いて来てくれたらしい。

『川神市の連中に……若者たちに勧告する!!』

三人で友情を深めているといつの間にか向こうの山場が来ていたようだ。

そうして言った。

雇ってけると!!

「ヒュームさん真剣?」

「……何に反応したかはよくわからんが。言っていることに嘘はない」

真剣か……、真剣か!!

いや、でもこれどうなんだ?

この波に乗るべきか?

ツク!!

いや、月曜まで時間が与えられている。

すぐに決める必要はない。

よし、落ち着こう。

『更に付け加えるなら、頼みの綱の川神院はもう機能しないよ。アンタら若者を守る存在はもういないのさ』

ん？

ちよい引つかかるなー。

なんかもやもやしているとヒュームさんが回線をつないだ。

「答えは否！ 我らはお前に協力せぬわ、たわけー!!」

そうしたら紋ちゃんがかっこよく啖呵を切っていた。

おお、そうなの？

あつち行つちやダメなの？

まあ、ちよい確認したいこともあるし良いかなー。

ここにいるほとんどは完全に敵対するつもりのようにだし。

そして葉桜先輩、義経達、梁山泊の三人と操られたルー先生、西方十勇士の宇喜多とヌルヌル、と『力』に訴えてくる連中が紹介される。

『ややこしい天下取りよりも皆で殴りあつて最後に立っていた奴が覇者！ 分かりやすい！』

ああ、なるほど。

そう言うつもりなんだねー。

それじゃあ、終わる前に

「二つ聞きたいんですけど、ここに武神がいるんだけどそれについてはどう思ってるの？」

『ふん、先ほども言ったであろう。誰でも来い！ 叩き潰してやる!!』
それを最後に回線は切られた。

……ああ、なるほど。

「……ほう」

僕と武神の声が重なる。

ああ、あれだけ聞ければ僕がどうするかは決まったよ。

「……お前たちが抵抗してきたことで計画はパターンCに変更された」
今の向こうの計画について説明しているがそんなのはどうでもいい。

さて、この怪我でどうやって対面するか……。

周りそつちのけで考えていると、ヒュームさんが少しだけやる気になる。

「戦闘開始と言うことだな。赤子共」

皆がヒュームさんから距離を取る。

そんな中、相対するのは武神、松永先輩、鉄心さん、鍋島館長、そして僕。さつきまでなら僕も距離とっていたが今はスイッチが入ってしまったている。

「クク、まあ焦るな。今回の俺の相手はお前だ。なあ、川神百代」

「へえ？ それは挑戦ですか？ 先ほど清楚ちゃんからも似たような誘い受けた気がしますが……」

「ほう？ 受けないというのか？ それならば仕方がない、俺も狩に参加するだけだ」その一言に場が緊張感に包まれる。

「ハハハ！ いや、私は武神として挑戦は受けるさ。何、貴方を倒してすぐに清楚ちゃん」と戦いに行けばいいだけだ！

覇気に満ち溢れた表情でそう宣言する武神。

ああ……、そうだよ。

それでこそ『武神』だ！

「ククク……、ハハハハハハ!! よく言ったもんだなあ、百代よ!! それならばさっそく行こうか。気兼ねなく暴れられる場所までドライブと行こうではないか」

「皆、行つてくる」

そう短く残してこの場をヒュームさんと共に移動する武神。

ああ、大丈夫だ。

あれなら、あの武神ならきつと誰にも負けはしないだろう。

とりあえず一度解散して、後で川神学園に若者グループは集まるらしい。

それじゃあ、僕も準備しましょうかねえ。

暫らく帰っていなかった家に帰ろうとすると石田とそのお付のような島と大村がこつちに来た。

「ふむ、久しぶりだな。高坂よ」

いや、さつきはしゃいだけどね。

「うん、どうしたの？ 結構な距離あるからさつきびつくりしたんだけど」

「うむ、武神を打倒するという事を……友が成し遂げたのだ。出世街道とは少し外れでも流石に動くというものだ」

あら、友っていうところ少し照れてるヨ。

後ろで二人が微笑ましく見ているし。

「おお！ ありがとう。まあ、でも大変な時に来たね。これからどうするの？」

そう言えばこいつらの出方しらねーや。

「う、うむ。出世街道を往く俺としてはだ。向こう側につくのが一番だ。……なのだかな？ うん、まあ、あれだ、つと、友……、いや、俺の部下ともいえる十勇士の幾人

かは梁山泊にやられてしまったしな。うん、いや……、だからと言うわけではないが……」

すげえ目線を泳がせながら言ってます。

後ろで島は僕に両手を合わせて頭下げてるし、大村は石田に頑張れとジエスチャーしているし。

なんだろう、和む。

てか、男の子のロマンって偉大だな。

そんなに楽しかったか。

うん、楽しかったな。

「あー、うん、ねえ石田。ちよつとばかり厄介なの相手にしないといけなくなつたんだけど、ほら？ こんな様なんだ。僕に力貸してくれないかな？」

まだボロボロな体を強調してそう言うよ

「む、うむ。仕方がない。いいだろう。そう請われてしまつては人の上に立つべき俺としては答えざるを得ん。この石田三郎が力を貸してやろう。幸運な奴だ」

うん、後ろの二人はガッツポーズ。

上から目線だけどいいやつや。

「それじゃあ、よろしく。また変身前に落とされるとかは勘弁してくれよ？」

そう言つて怪我のせいであんまり上がつてないが拳を持ち上げる。

「ふん、いつまでも学ばん凡愚とは違う。大船に乗つた気でいろ」

そう言つて拳をぶつけてくる。

とりあえず協力者ゲット。

なんだかんだ化け物級二人と結構強い島、うん、幸先良いね。

そして、四人でとりあえず僕の家に向かう。

さーで、あと助つ人の宛、しかも無関係じゃなさそうな奴と言えばつと

「んー、あいつの連絡先貰つたはいいけど捨ててないよな？」

三人には取りあえず居間でくつろいでもらっている。

てか、さっきの放送では移つてなかつたけどいないってことは家の親も攫われているよ。ようだ。

うん、まあ普通の一般人だからなー。

危害加えられることはないだろう。

一応それくらいは無効を信頼している。

裏切られたらまあ、残っている皆と修羅となつて報復だな。

「つと、あつた。いやー、自分を狙うガチホモに連絡をすることになるとは思わなかつ

た……」

この前無理やり渡された竜兵の連絡先だ。

そんなに前のことじゃないからつながればいいが……。

『誰だ?』

うわ、これかなり機嫌悪い。

なんかあつたかな?

「あー、高坂だけど竜兵だよね?」

『つち、なんだお前か……、わりいな今亜巳姉と天の奴がやられて気が立ってるんだ。相手してやる余裕はねえよ』

へえ、アイツがクソキモい誘いかけてこないってことは結構切羽詰まってるな。

「誰にやられたかは分かっているの?」

『あ? ああ、一応聞いておくか……。女の三人組だ、亜巳姉と天をやるような奴らに心当たりはあるか?』

へえ、向こうさん見境ないねー。

獣に傷つけやがったよ。

「ああ、僕の要件もそれなんだよねー。最近怪我しちゃってさ、ちよつと会わないといけないやついるんだけど困ってて、一緒に暴れないかと思ってたんだけど、多分そいつ

らだよ」

『……何時だ?』

「明日、詳しくはこれから決めるから後で連絡する」

『分かった。辰姉にも言っておく』

ふう、さて、これだけいれば今の僕でも対面することくらいはできるだろう。

別に無理して戦う必要もないしね。

そう満足していると今度は僕に電話がかかってきた。

「はい?」

『オイ! あとで集まるって言っただろう! 怪我人だから迎えに行ったらいない』

てどういうことだよ!!』

直江からだった。

うん、怪我人だからハブられると思って下準備してたのに、一応勘定に入れられてい

たらしい。

いや、人使い荒くないか?

結局また四人で川神学園まで移動をすることになった。

第四十三話 作戦会議

呼ばれた空き教室に入ると皆が何やら出勤表らしきものを見ていた。

「え？ なに？ この状況なんなの？」

「どうやら梁山泊連中の出勤表らしい。」

うん、なんだろう、なんとなくいたたまれない気分になった。

しかもそのほとんどはもう鉄心さんが倒しているらしい。

いや、元武神もパナイ。

「それで、今までの話を聞いて策はあるか？ 軍師」

風間の言葉で皆の視線が直江に向く。

直江の策は、まず、梁山泊と一般兵対策に有志を募り、川神学園、繁華街、住宅地、多

馬大橋を起点の拠点防衛。

これが守りらしい。

「逆に攻め手だが、我が直接乗り込もうと思う」

攻め手に関しては、九鬼のことと言うことで紋ちゃんがかぎとなって乗り込むらしい。

い。

そして葉桜先輩のことになると一斉に松永先輩に視線が集まった。まあそうだよなー。

あれ倒すなるとそうなるわ。

まあ、どうせ今戦力外視されてるだろうし？

「義経さんの相手は、私が志願していいですか？」

そして義経の相手は同じ刀使いの由紀江ちゃんが志願した。

この時代で剣戟とか胸熱だよな。

「じゃあ、弁慶と与一は俺が止めます」

そうして次に直江が弁慶と与一を止めるとか言い出した

しかも直接城に行くらしい。

うわあ……。

そしてあれよあれよと所属が決まっていくな。

「それで、こんな感じで行きたいと思うんだけど。……ていうかさつきから高坂が何にもしやべらないけど、戦えなくても戦力比較の意見を聞きたかったんだけども？」

ん？

ああ、僕にも発言権ってあったんだ。

完全に戦力外だと思ってたよ。

「んー、じゃあ言うけど。大筋はいいと思うんだけど直江が城に乗り込むって本気？」
「ん？ ああ、そうしないとあの二人は止められないだろう？」

いや、東西戦でのこと覚えてないのかな？

「いや、正直足手まといだと思うよ？ まあ、百歩譲って紋ちゃんは仕方がないとして」

「ああ、それなら大丈夫さ、一応これでもずっと姉さんの相手していたんだぜ？ 回避力には自信がある」

言葉通り自信にあふれた顔の直江。

はあ……。

全然わかってない。

「大村。当てずに6割くらいで」

「……了解した」

そう言うのと僕の近くにいた大村がいとも簡単に直江に踏み込み、すれすれで拳を止める。

周りの連中は軒並み反応できないか、その身を動かすことができる頃にはもう終わっていた。

いや、反応しちやいそうな松永先輩なんかは僕が目で抑えてただけだよ。

「……な!？」

「うん、これが明日行こうって話している連中の最低速度かな？ 不意につていうのはあるけど、……見えた？」

無言で首を振る直江。

「そうだよな、別に俺の方がモモ先輩と仲がいい、とか言われる分には何とも思わないんだが……」。

「まあ、こう言うことだよ。……長く一緒にいたとしても、挑みもしてないのに武神を語るなよ？ ただでさえ奴らは武神をなめてやがってイライラしてるんだからさ……」

「……いい、いや、でも弁慶と与一を止めるにはさ」

まあ、確かにちよい今のままじゃあ心もとないか。

「まあ、それはわかるけどさ、と、言うわけでちよつとだけ配置換え提案」

「……聞こう」

水差したのとやったことから空気悪くしたせいで紋ちゃんの声もちよつと硬い。

「与一については椎名に抑えてもらおう」

「ほう、だそうだが？ 椎名よ」

「んー、できなくはないと思うけど……、町の援護と弁慶は？」

「弁慶については元から何とかできる奴が突入部隊に居るから心配してないよ。な？」

心」

「……ん？　によわ!?　こ、此方か?」

うん、自分に振られるとは思っていなかったのか反応が少し遅かったな。

うん、愛すべき馬鹿である。

「そうだよ？　できるよね?」

「オイオイ、それは流石に……」

「あれだけ負けてばっかりなのに無理じゃねーか?」

直江と島津の否定的な意見聞いて怖気着く心。

あーあー、それじゃあ駄目だろう。

「できるでしょ?」

強いんだから力頼りなあのタイプならばなんとかなるだろう。

そんな風に確信を持って見つめる。

「……………ん、と、当然じゃろう!　あの程度であれば此方に掛ければ何の問題にもな

らんのじゃ!!」

「まあ、とりあえず戦う時は調子に乗っちゃダメだよ?　まあ、しつかりと戦えれば全

く心配はしてないさ」

「うむ、此方に任せるがよい!」

まあ、やる気がないらしいし心なら大丈夫だろう。

「いや、ちよつとまつて、軍師として言わせてもらえばその人選には不満しか……」
「……ん、大和」

それでも信用しきれないのか直江が声を上げるが、それは椎名にさえぎられる。

「この人選が戦局に問題出るつていうなら止めないけど、大丈夫かどうかが不安なだけなら私たちよりトラの方が目が確か」

「……む、分かった。それで、優秀な狙撃主一人はどうするんだ？ これも結構きついんだが……」

「うん、その穴は直江が埋めてよ」

「おい！ ここにきて人任せかよ!？」

いや、そうでなく。

「そりやあそうでしょ。本来いるべき場所においたんだからそれくらいやってよ？」

軍師さん」

「……あ」

気が付いたようだ。

まあ、総大将と言いつつクリスに実動隊と総指揮やらせようとしてるのがおかしいと思うんだ。

寝返り交渉も長期戦ならともかく決戦中に軍師名乗る人間が前線に出て直接やることじゃあないだろうに。

「ハハハハハ……、うん、頭冷えたよ。そうだな、対策できてるならそっちの方がいいな。……本当に不死川は大丈夫なんだよね？」

「まだどうかこ奴!!」
切れる心。

「まあ、もしゲームの軍師みたいにいるだけで将同士の戦いにも補正掛かるならぜひ行くべきだと思うけどね」

「あー、そりゃあ無理だ。うん、そうだな、確かに俺はこっちの方が得意だよ。クリス、俺が参謀をやる。よろしくな」

うわあ、すげえ悪い顔になりやがったコイツ。

絶対碌でもないことたくさん考え付いてやがる……。

迫り段違いで怖いよこの子。

「悪人顔の大和も素敵!」

「よし、椎名、明日無事に乗り越えたら島津寮で直江をフアックしてもいいぞ」

「是非!!」

「オイ馬鹿ふざけんな」

あ、一応反応したけどおぎなりだ。
うん、これホント怖いわ。

まあ、これで大体いいが、こつからはある種私情だ。

「んで、葉桜先輩の相手はまずは僕にやらせてほしいんだよね」

「「は？」」

おおう、やっぱりそんな反応か。

ですよねー。

「おい、それは流石にどうかと思うぞ？ 軍師として」

「ああ、怪我した状態でそれは……流石に」

軍師と大将両方から駄目出し。

いや、利点もあるのよ？

いや、寧ろ僕の無事さえ勘定に入れないければ利点しかないんじゃないやね？

「いや、でも紋ちゃんの護衛に壁越えがない状態での突撃ってどうかと思うよ？

大体とはいえ決め打ちするんなら一人くらい五体満足な壁越えの腰とくべきでしょう。

その方が突破もスムーズそうだし」

そう、どんな風になるか詳しくわからないなら最大戦力は大將のもとにおいておくべ

きだろう。

特に大将自ら攻めるなら特に。

「む、しかし、大丈夫なのか？」

やはり怪我人動かすのは気が進まないらしい。

まあ、武人連中は僕の様子から分かっているのか消極的賛成って感じだな。

「ああ、大丈夫とか大丈夫じゃないとかじゃないんだよ。これは、少なくとも僕の武人としての最後の意地だ。奴らは武神をなめてやがるんだよ？　そしてその最高戦力は武神が倒すと言った。なら、あれを目指した僕は、そのくらいは実現させてやるさ」

そう、これは極論僕のがままだ。

だからこそ吠えんとして、最悪失敗しても本来の役目の松永先輩は手漉きにしてあるんだ。

ああ、きつとあいつは、武神は戻ってきてあの霸王もぶったおす。

それならそれまでの時間位粘ってやるさ。

幸い倒さなくていいなら僕の得意分野だ。

武神に勝ち、落ちて着いていた戦る気がふつふつと体中から湧いてくる。

それに押されてか息をのむ音が重なって聞こえてきた。

「ククク！　これが武神を倒した男の覇気か。なるほど、前とは比べ物にならない。言っておくが、俺たち三人はこいつに協力をしているんだ。ここでこいつの案を飲まな

くても俺たちがあの項羽とかいうやつとの対面までは作り上げる」

ああ、ありがたい。

本当にこいつらは僕に協力してくれるようだ。

もし、ここで却下されて全部が元の配置に戻ったとしても、石田、島、大村、そして
竜兵と辰子さん、たどり着くだけなら問題にならない協力者がいる。

さて、どうなることだろう。

「……わかった。しかしその代わりしつかりとこっちと足並みを合わせてもらおうぞ
？」

「うん、それはもちろん。個人的にはモモ先輩が戻ってくるまでちよつとおしやべりに
付き合っってほしいだけだからね」

願わくば化け物に相對するなんてのはこれで最後になってほしいものである。

これでヒュームさんに負けやがったらどうしてくれようか……。

第四十四話 最終決戦 其之一

SIDE 百代

私は現役最強と名高いヒューム・ヘルシングの誘いを受けて移動をしている。

……それはいいんだが。

「……………んで？ どこまで行くつもりなんだ？」

「……………ふん、退屈か？」

「……………まあ、そうだな。場所移すのはいいが、あまり時間がかかるようだ toward 間に合わないじゃないか」

武神として、戦うべきは戦わなくてはいけない。

早くしろと、気を高めて挑発してやる。

「ハハハ！ いいぞ、百代よ。その覇気、やはり敗北はいい薬になったようだな」
むう、やはり動じないなあ。

あー、これだからこのおじいちゃんは面倒だ。

やる気はあるのだからすぐにでもぶつけに来てくれれば都合がいいのに……。

まあ、家のじじいにしてみれば、私もせめてこのくらいまではなれと言うことか。

……いや、この人の方が手が早いと思うんだけどなあ？

「まあ、逸るな。どれ、少し昔話でもしてやろうか」

……まあ、まだまだ急いで戻れば間に合わなくなるってほどでもないか。

そうは見えないが、どうやらこの人は私をそこそこ買ってくれているようだ。

取りあえず余裕がある内はこういう会話も悪くはないだろう……

決戦日の朝、集合場所は学校。

……いや、正直もつと向こう側に投降する人多いと思つてました。

最初向こう側行こうとしてた僕って……。

「「「「「おおおおお!!」「」」」」」

クリスが演説して学園生の士気はかなり高いようだ。

「へっへーん、城を攻め落とすって響きがいいぜー」

こつちも盛り上がってるなー。

てか、昨日スルーしてしまっただけで風間はあの化け物の巣窟に殴り込んで大丈夫なの

だろうか？

……なんとなくだがこいつは無傷で生還しそうな気がする。

「それでは、行動開始!!」

紋ちゃんの号令で動き出す一同。

杖突でもしっかりついて行けるように石田と島が肩を貸してくれる。

……ありがたいけど女の子の方がよかつたな。

さてさて、お城が近付いてまいりましたよーと。

竜兵にも場所は教えておいたから多分梁山泊の一人くらいはあの姉弟がどうにかするだろう。

「んじゃ、椎名は与一の場所探りながら牽制よろしくねー」

「ん、任された」

敵さんが出陣するのをみんなで待っている。

いや、これで葉桜先輩とかも出陣してくれたらすんごく楽なんだけどな。

大将先行とかありえないだろうな。

うーん、集団戦ってそんなに経験ないからな。

東西大戦もぶっちゃけスタンドプレーかましてたし。
いや、暇だ。

あ、動いたみたいね。

それじゃあ、行きましようか。

椎名が火薬をくくりつけた矢を川神上に向けて放つ。

が、クラウドイオさんに防がれる。

「!! 見つけた!」

まあ、こちらもちちらで成果はあったようだ。

工場地帯の方を見つめだす椎名。

……いや、てか目が良すぎだろう弓兵。

僕でも言われれば気配で「あ、見つけた」って感じだぞ？

お互い確認できるって……。

まあ、そう言うのの相手は専門家に任せよう。

「よっしゃあああ! 突撃だあああ!!」

そして考えなしに突っ込もうとする風間の前に

「……」

義経が立ちふさがる。

そういえば、もう別にいいけどヒュームさん機会は作るとか言いながら結局義経たちと戦ってなかったなー。

「黛由紀江、お相手します」

そこに相対する由紀江ちゃん。

おーおー、真剣沙汰とは恐ろしい。

何気に隣の石田もうずうずしている。

まあ、同じ剣士として感じる場所があるんだろうなー。

その二人が睨み合っているうちに駆け抜けていく突入組。

「……」

「……」

「オイ！ ボーイ！！ てめえ空気読みやがれ！ なに残ってるんだよ!」

うん、松風に暴言放たれた。

いや、だって駆け抜けるには体きついし？

ちよつと試したいことあったし？

「あ、僕のごとは気にしなくていいよ?」

「う、いや、でも……。ここに居ては危ないぞ?」

「そうです。正直周りを気にして戦う余裕はありません……」

うん、そう言いながら睨み合うだけになっている二人はとってもいい子だと思うんだ。

まあ、とりあえず試してみますか。

「ふう、……おおおーい!! 葉桜せんぱーい!! あっそびまつしよーーー!!!」

うん、あらん限りの大声で叫んだ。

「……………」

「……………」

「…………いや、まゆっち? あいつ馬鹿だぜ?」

「シーーンと静まり返るその場。」

うん、やっぱり無理だったかなー。

っと思っただが。

「クハハハハハ!! お前は馬鹿か!? 馬鹿なのか!!?」

葉桜先輩が叫び返してくれた。

いや、どうしよう。

走るのきつかったからやってみたけど本当に返事してくれるとは思わなかった。

え? これもしかして何とかなる流?

二人に視線を向けてみると見事に目をそらされた。

「えー！？」 かわいい後輩が遊びに来たんだから玄関くらいには迎えに来て下さいよー！ー！！」

もう自棄だ。

とりあえず行くところまで行ってやろう。

「ハハハハハハ！！ 面白いなお前！！ 状況分かって言っているのか！！」

うん、応じてるアンタも状況分かってる？

義経ちゃんなんて、自分の大将の行動に顔真つ赤ですぜ？

「せっかくだからちよつとくらいお話しましよーよ！！ どうせ俺怪我人だし警戒することないでしょー！！？」

うん、僕にはね。

「フハハハ！！ いや、こんなすがすがしい馬鹿は初めてだ！！ よかろう！ 興が乗った！ 少し待っている！！ ……何？ 知るか！ 最悪落とされても俺がいれば取り返せばよかろう！ 無能を晒すな！！」

うわー、あれが大将ですか……。

「……やつた僕が言うのもなんだけどさ。義経ちゃんいいの？」

「……さあ、尋常に勝負だ！ 黛さん！ すぐやろう！ 早くやろう！」

そう言っただけでなんか吹っ切れたような義経につられて戦いながら移動していく二人。

あ、逃げたな。

まあ、うん吹っ切れたようで何よりだ。

うん、本当に来るとは思わないよ。

とりあえずお前の相手は僕だからな！

つてな宣言くらいにはなると思ってたんだが……。

葉桜先輩、想像以上に暴君で残念だった。

まあ、ほとんど才能だけであれじゃあなー。

しかもまわり持ち上げるし、そりゃあ自信過剰にもなるか。

あ、飛び降りてきやがったぜ？

「ふう、さて、お前は確か……高坂だな？ うむ、あの滑稽な行動と武神を倒したとい

う経歴、……後はこの項羽である俺を変わらず呼び続けるその行動に免じて会いに来て

やったぞ？」

ああ、それらしい理由述べてるけど、驚いたことに全部本気で言っているらしい。

まあ、なんでもやってみるもんだな。

とりあえず対面できちやったよ。

「んー？ 時間稼ぎがてらちよつとデートしません？」

おお、初めてデートに誘うな。

なんかドキドキしてきた。

しかも相手は美少女だぜ!!

年上の美人なお姉さん……、滾るな!

口説き落として見せる!!

「クハハ!! 本当にお前は状況が分かっているのか? 俺を誘うにしたって町が戦場

になっているこの現状で言い出すとか頭がおかしいだろう?」

よっしゃー、まだ断られているわけじゃないし、何取り結構楽しそうだ。

これ結構好感触なんじゃね?

「いやー、それはそうですね。でもほら、こういう時だからできるデートってある

と思いませんか?」

「……ほう、その様で俺に挑むというのか? だが、どこかに行く必要があるとは思え

んが?」

「いや、まあほら、お相手の家が近いとできないことつてあるじゃないですか? て

か、葉桜先輩が動くとお家壊れますよ?」

よし、がんばれ僕!

あともうひと押しだ!

「ほう、……その様で、この俺を、本気にさせられるとでも?」

「……試してみるか？」

釣れたかな？

まあ、場所は移動しなくても目的としては問題ないんだけど人質さんがなあ……。

「……いいだろう。騷！」

おお、呼ぶだけで来るのかあのバイク！

高性能すぎだろ！

「場所は？」

「んー、工場地帯に廃工場あるしその辺でいいんじゃないですかね？」

「うむ、距離も大したこともないし、いいだろう。……詰まらん罠など俺には無意味だ

ぞ？」

「いやー、デートにそんなの用意してるわけじゃないですか」

そんな無粋な。

「クク！ そうだったな。光栄に思え。デートだといわれて応えるのはこれが初めて

だぞ？」

いやっほーい！

そいつはうれしーや。

因みにスイスイ号に乗ったら舌打ちされました。

お気に入り数2000記念お礼、IF一子END

「一子ちゃん。僕は先にやってみるよ。そしてそこで君を待っている。今までずっと君と一緒に歩いてきたんだ。だから、その夢の向こうもきつと君と一緒に居たい」

決戦前、お互いの成果を見せあつた後一子ちゃんにそう言った。

お互い一度もあきらめらることもなく同じ頂点を目指してきた一子ちゃんだからこそ僕は本心から武神の打倒を宣言し、そしてきつとたどり着こうと手を伸ばした。

その時拳をぶつけあつた一子ちゃんとは、この十年ずっとお互いを見てきた分深いところであつていいることを確信できるくらいいい笑顔だつた

そして、その笑顔を向けられ多と言うだけで、あれだけ絶望的に思えた武神に勝つことなどなんでもないことだとすら感じてしまった。

……ああ、また満身創痍かよ。

でも、でも僕は勝つたんだ。

——最後の最後、身を捨てて武神の生み出す暴力に向かい、極限の中で浮かんだのは一子ちゃんの顔だった。

厚かましいかもしれないが、あそこで意識を失ったら、手を放していたら、或いは地についた足がフ抜けてしまっていたら、それは自分だけではなく、同じ道を行く彼女の志すらも台無しにしてしまう気がしたのだ。

「ああ、勝ってよかった……」

——ガラガラ

そう呟くのと、襖が開くのはほぼ同時であった。

「失礼しまー……」

あ、デジャブ。

「……じつちゃー!」

「ちよつと待って一子ちゃん!」

やはり走り去ろうとしていた一子ちゃんを思わず止める。

「ふえ?」

呼び止められ多理由が分からないらしく疑問顔の一子ちゃん。

うん、でも仕方がない。

「ったく。起きたかと思つたら何やつてるんだか……」

悲鳴を聞きつけて多くの人がこの部屋に来ててんやわんやになってしまったが、今では残つたのは鉄心さんと武神と一子ちゃんだけだ。

「いや、しようがないじゃん。せつかく長年の目標を成し遂げたんだもん。かつこつきたいじゃん。男の子として」

うん、この気持ちは間違いなんかじゃあないはずである。

「ほーう、つまり、家のワン子を口説いていたと？　そういうことかあ？」

うわ、なんだろう？

すつごく悪戯じみた笑顔じゃありませんか？

「お、お姉さま……」

あ、一子ちゃんはこの程度で顔が赤くなってるよ。

天使や。

「まあ？　それはそうだよなあ？　あの状況でワン子の名前を口に出すくらいだから

なあ？　いやー、意識が落ちる寸前のことだが耳にこびりついて仕方がなかったぞ？」

「え？」

は？ え？ うそ？

あの時もう何が口から出てきたかなんて一切覚えていなかったけど、え？
真剣で？

武神を見つめるとにやにやした笑み。

「ふふふ、いやー、愛されてるなあワン子？ あの状況で呼ばれるなんてなあ。おねー
ちゃんちよつと妬いちゃったぞ〜？」

やべえ。

これほどまでに恥ずかしいことってあっただろっか？

顔が上気するのを自覚しながら肝心の一子ちゃんの方を向くと……。

「!! あわわわわわ……。ア、アタシ食べるもの用意してもらってくるわー……
!!」

目があった瞬間一子ちゃんの顔が爆発したような錯覚するくらいさらに真っ赤な顔
になり、逃げるように、と言うより逃げるといふ言葉そのままの格好で立ち上がり走り
去ってしまった。

「……うわあ」

「ハハハハ!! あー、妹は可愛いなあ」

「ふおっふおっふお。若いのう」

いや、この状況恥ずかしすぎる。

いやまあ、僕の今まで生きてきた中で一番優先順位の高かった打倒武神の後、一番最初に、ともすればその最中すら頭に浮かんだんだ。

まあ、盲目的に見続けた目標を達成した今なら素直に自覚できてしまった。

——僕は一子ちゃんに惹かれてる。いや、好きなんだ。

うん、それをその相手の身内、しかもからかう気満々の二人と取り残されるって……。

「なー、じじい？ 家の可愛い妹だが、もし嫁にやるならどんな奴なら許せる？」

「うーむ、まあ、半端な男など絶対に許せんと思うぞい？」

「だよなー？ まあ？ 大きな困難位乗り越えられるくらい骨がある奴じゃないとダメだよなー？」

「うむうむ、その通りじゃわい。たとえばあれじゃのう？ 武神などと呼ばれているものくらい倒してやるというくらいの気概は欲しいもんじゃのう？」

「おお！ それはいいなあ！ いやーでもジジイ？ 偶然なんだが最近そんな感じのやつがいたんだがあ？」

「おお！ 本当か？ モモよ！ それはちょうどいい人間もいたもんじゃのう？」

くそ！
にやにやにやにや真剣UZZEEE！

「あー、クソ！ そうだよ！ 僕は一子ちゃんのこと好きだよ！ 見てろよこん畜生
!! 絶対に口説いてお前から奪ってやるからな!!」

——ガシャン!!

耐えきれずに啖呵を切った後入口の方から食器を落とす音がした。

ああ、タイミング神憑ってやしませんかねえ？

一子ちゃんよ。

案の定逃げ去る足音と遠ざかる一子ちゃんの気配。

気が付いていたようでさらににやにやしている二人。

クソ！ 真剣クソ!!

恥ずかしすぎて気配なんて読めなくなるなんて不覚にもほどがある!!

「ククク。いや、こうまでやってくれるとはなあ？ トラ？ いや、義弟よ？」

「うむうむ、よい啖呵じゃったぞ？ 高坂、いや孫よ？」

あー、もう、ここまで行けばもう行くところまで行つてやんよ！

「あー、はいはい。義姉さんにじいちゃん。もういいよもう。んで？ 未来の嫁になつてくれるといいなあと思う子のことで聞きたいんだけどさ。二人は一子ちゃんが夢叶えられる可能性つてどのくらいだと思つてるわけさ？」

聞いた瞬間に二人の顔からからかいの色が消える。

「無理だ。ワン子の才能ではこっち側には来られない」

「うむ、おそらく川神院の高弟の中でも上位までは行けるじやろうが最後の一步はできんじやろう……」

さつきまでの馬鹿騒ぎが嘘と思えない凜とした表情を作る二人。

これが武の総本山川神院のトップとしての顔か。

だが、

「はん！ その才能の足りない人間にトップを取られたくせに見くびった評価してるんじゃないよ！ いいか？ やり方が違えどあの子は僕だ。俺とおんなじなんだよ！ 一日だつて腐らず、簡単に越えられるなんて幻想も抱かず、ただただいやになるほどわかりやすい壁にぶつかり続けてるんだ！ ああ、いいさ。アンタらが諦めるつてんなら俺が支える。俺の武の道なんかどうせ武神を倒したことで腐つて消えてもおかしくないんだ。なら、先を、倒して終わりの俺と違つて先を見つけてるあの子の糧になつてやる。見てろよ化け物どもめ!!」

うん、もうこの先使う必要も感じていなく、武神を一度とはいえ倒せたこの腕、せめて愛する人のために使つたつていいだろうさ。

「……ああ、なるほどな。うん、おふぎけなしでお似合いじゃあないか。トラ、いや高坂 虎綱。私の妹の夢、本当に支えられるか？」

「ああ、やってやるよ。知ってるだろう？俺はしつこいぜ？身を捨ててだってやり遂げてやるさ！」

「そうか……、高坂よ、孫を頼むぞ」

ああ、やれる。

同じ時間を同じ目標掲げて走り続けられた子なんだ。

おんなじことをしていた僕だからこそ断言できる。

一念、岩をも砕く。

ならば壁だろうとできない理由などないさ。

「ああ、私を倒した男だ。本当に頼もしい。……ん？待てよ？ここまで言ってお

いてなんだがまだワン子に返事すらもらってないよな？」

「……ああ」

その後、僕は武神との戦いと同じくらい痛みを超越して悶えてしまった。

流石に爆笑は失礼だと思ったのか堪えてくれている二人の気遣いがつらかった……。

翌日、僕は一子ちゃんが来るのを待っていた。

いや、避けられてもおかしくはないんだが、あの二人がなんやかんや理由つけて二人の時間は作ってくれそうだ。

「し、シシシ、失礼しまみゅ!!?」

あ、囁んだ。

かわいい。

「あー、えーと? 一子ちゃん?」

「(こ)高坂君? あ、えつと(こ)はん(こ)はんもって来たわよ!!」

これでもかと言うくらいテンパっている。

天使や。

「そ、それじゃあ食べ終わったところに取りに来るから!!」

そうやって出ていこうとする一子ちゃん。

「ちよ! 待って一子ちゃん!!」

「ななな、にやにかしりや!」

あ、二回囁んだ。

嫁にしたい。

「えーと? 食べられないんだけど?」

そう言っ過ぎてぎちぎちに固められた両腕を見せる。

「あー！ そうよね……。ううう……。」
入ってきてから今まででもうそれは赤面しっぱなしである。
愛おしい。

一子ちゃんにご飯を食べさせ貰った後、今度は逆に出ていくタイミングを掴めないのか視線をきよろきよろさせながら黙ってしまっている。

うん、ずっと眺め手たいけどそうもいかない。

ああ、これから言うことに比べたら武神なんて何ぞと言うものや。

「……一子ちゃん？」

「ひゃい!!？」

うん、それでもこれだけ近くに好きな子がいるんだ。

みつともない真似なんかできないわな。

「一子ちゃん、僕は武神に勝った。勝てたんだ。次は君の番だよ？」

「あ……。うん。まあ、アタシは勝つじやなくて力になれるくらいになりたいんだけどね」

うん、ちよつと落ち着いてくれた。

つかみはOK。

かな？

「うん、それで、一子ちゃんの夢なんだけど、僕に支えさせてくれないかな？」

「え？」

また真つ赤になってしまう。

でも今回は僕は目を合わせて外さない。

よし、逃げないようだ。

「僕はもう正直強くなる気も必要以上に戦う気もないんだ。でもね、ずっと見てきた君の力になりたい」

見つめ合い、視線は離れない。

今まで心を揺らさないよう心掛けていた人生だったが、どうしようもなく心が揺れる。

「うん、そうだ。十年ずつと同じ方向を見てた君を振り返ってみるとどうしようもなく好きになっていたみたいなんだ」

ああ、今なら目をつぶっていても何とかなるような不意打ちでもまともに食らってしまっただろう。

「だから、君の夢を。それに向かっていく君の人生を僕に支えさせてほしい」

だから、胸にもたれかかってきた一子ちゃんを避けることなど絶対に不可能だった。

「どうかな？ 一子ちゃん？」

コクリ、と無言で一子ちゃんはうなずいてくれた。

「ううううう……。恥ずかしいわ……」

ああ、この可愛い生物を抱きしめられないなんて……。

うん、これはあれだ。

ちよつともう一度武神を倒す必要があるかもしれない。

何時かの川神院は、歴代最強とまで言われる総代と、光るところはなくとも万能型の女性の師範代と倒すことは武神と同じくらい難しいとまで言わしめる柔の拳の使い手により盛りたてられていた。

第四十五話 最終決戦 其之二

SIDE百代

かなりの時間を移動に使ったが、車を降りるように促された場所は海岸だった。

「……………んで？　……でいいの？　まあ、海辺であれば少し気を付ければ津波も起こ

さずに済むかもしれないが……………」

「フ、まだ到着したわけではないさ。あれに乗るぞ」

そう言つて顔を向けた先にあつたのは……………」

「あれは……………ロケットか？　まさか宇宙にでも行こうつていうのか？」

「そう、宇宙こそ俺とお前が心置きなく全力で戦える場所だ」

ほう……………、宇宙で決戦か……………」

いや、アイツが聞いたら目を輝かせて羨ましがりそうだなあ。

「宇宙怪獣大決戦だつて!!？」とか言つて……………」

うん、言いそうだ。

なんかイラツときたから帰つたらお仕置きだな。

大体アイツは時たまこんな美少女掴まえて化け物とか抜かすからな、全く。

さて、まあ場所など大して気にしないのだが問題は……。

「それはいいとして、宇宙まで行ったとして戻ってくるのに私は間に合うのか？ 流石に行ったことがないから疑問なのだが」

そう、私は、武神は武神として戦うべき戦場がもう一つあるのだ。

答え如何によつてはここでやるように持ちかけるのだが。

「フフフ、本気で言っているようだな？ なあに、もう一戦できるほどの余裕があるのであればそつちの方が早いかもしれんぞ？ 何せ指定された座標に超高速で落ちていくだけだからな」

ふーん、そう言うものなのか？

まあ、それならいいさ。

「そうか、それでは行こうか」

S I D E 大和

お、突入班から連絡だね。

遂に梁山泊の一般兵連中が動いたらしい。

「こちらら本部、敵、出動、警戒せよ」

『ポイント1 川神学園一子了解したわ!』

『ポイント2 クリス了解した!』

『ポイント3 岳斗いつでも来いってんだ!』

『ポイント4 虎子ALL RIGHT!』

『こちら大友 了解だ!』

「OK, 無線も感度良好。しっかり守ってくれよう。」

ふう、とりあえずあとは敵さんの情報を逐一チェックかな。

『こちら偵察部、全部隊予定外の動きなし。なお、個人行動は女性二人とルーのみ、女性のうち一人は板垣が接触、おそらく史進と思われる。もう一人の楊志と思われる方は川神学園へ向かっている。また、鍋島館長が止めるはずだったルーについては失敗した模様。しかし対策として釈迦堂刑部を向かわせたため心配するなだそうだ。以降は変化があり次第連絡する』

「了解」

うん、流石九鬼従者部隊は仕事が早いね。

偵察部隊としてプラス数人程度なら向こうもうだうだ言わないだろうしね。

いやー、優秀な密偵は本当に助かる。

「さーて、委員長！ 怪我人の受け入れ準備は？」

「はい！ 準備完了してますよ！」

うん、戦場でも癒し系だなあ。

「卓！ 妨害電波の対応は？」

「流石にプロ相手にどうにかできるわけではないが……予備チャンネル及び察知はできるはずだ。指定した緊急用の有線も今のところつながる」

よし、こういう時地味に頼りになるんだよなあこいつは……。

「クツキー衛星映像は？」

「はい、でにーろさんの協力で映像はいいとは言えませんが見られるようにしました。

なお、予備1基を総理の協力で確保完了しました」

うん、これである程度は見えるな。

「よし、事前準備にはこんなところだろう。後方部隊のみんなもこっから気合い入れていこう！」

「「「おう!!」」」

ふう、まあ、今できることはこんなもんかね？

ふむ、高坂と九鬼部隊の話だと向こうの戦局動させる札でフリーなのは楊志一とルー先生の二枚。

ルー先生についてはもうこっちの手に負えないし対策があるらしいし、最悪これに関しては学長に怪我押して何とかしてもらおうしかない。

あと一枚か……。

こっちが用意できた札は二枚、後は不確定要素さえ起きなければつて所か。

それにしても……。

「ああ、この戦場が掌の上にあるような感覚、忘れてたな……。てか、最近タッグマツチとかなんで俺、戦場に立つようなことになってたんだろう？ ……まあいいや、とりあえず楽しませてもらうかね」

SIDE 竜兵

見つけた!!

「へへへへ！ オイ！ 女！」

「ああん？ なんだお前？ 懸賞金もかかってない雑魚がわつちになんのようにだよ？」

ほう、なめ腐りやがって。

それにしてもアイツいい情報くれやがったぜ。

おかげでこうして待っているだけで難なく二人の敵に会えた。

もう一点の方にはつてる辰姉にも連絡入れたから時期に来るだろう。

確か、大和がこれの指揮をしているらしいなあ。

よし、終わったら二人に礼として天国を見せてやろうか……。

おっと、まずはこのふざけた女にすっかり落とし前つけさせねえとな。

「ハン！ お前の都合なんか関係ないんだよ。板垣一家に手を出したんだ。きつちりけじめつけてもらわねえとならないんだ。覚悟しろよ？」

「あー、面倒くさいなあ。弱いんだからこそこそ隠れてろってんだ。……町の不良如きがわつちに勝てるんでも思ってたのか？」

へ、流石は亜巳姉と天をやった奴だ。

ビリビリきやがる。

なるほど、俺じゃあ勝てねえわなあ。

だがない

「っは！ ……それがどうしやがった!? こちとら無頼！ 勝とうが負けようがやるべき喧嘩もやらずにいられるほど考えて生きてなんかいねえんだよ!!!」

最近アイツ相手にも暴れてねえし、マロードもいも引きやがった。

何も考えずに暴れられるってんなら願ったりだ!!

SIDE由紀江

「はああああああ!!」

義経さんの斬撃を受ける、受ける、受ける、受ける。

……やはり強いです。

「おおおお!!」

つく、威力は義経さんの方が高いですね。

しかし義経さんは刀の消耗のことは頭にはないのでしょうか？

今は何とかなってますが、この先ずつとうまく受け続けられるとは限らないのに……。

「ううう……、清楚のばかああああ!!」

……まあ、それも仕方がないかもしれませんがね。

相当思い悩んであそこに立っていたようなのに、自らの総大将、しかも親しい人にあるんなことをされては……。

心中お察しします……。

私だって覚悟を決めて義経さんの前に立ったというのに高坂先輩は……。ホント空気読めよあの死にぞこない！

……ゴホン、いけませんよ松風、結局成功していたのですからそう言っでは。松風も思念で話しかけてくるくらいご立腹のようですね。

「ああああ!!」 なんて出てくるんだ！ 義経は……よしつねは!!」
うん、心底同意します。

本当に出てくるなんて、と、言うより高坂さんまで驚いてこっちに助け求めていましたよ？

本当になんなんでしょうかあの人は……。

しかしまあ、冷静さ欠いてますね……。

このままいれば義経さんを戦線から離脱させるという目的は達成できるんですが……。

「つつつつせい!!」

「!!?」

——キイン

今の私にできる限りの一閃。

それを義経さんが綺麗に受け止めた濁りのない金属音が響く。

先ほどまでの乱れた心では決してできない綺麗な受け方ですね。

これならもう大丈夫でしょう。

「落ち着きましたか？」

「……ああ、だがよかつたのか？　これで義経にも勝機はできてしまったぞ？」

ええ、そうでしょう。

先ほどまでであれば私も大してできることはありませんでしたが、何も起こらずに戦い続けることはできた。

……しかし、それではいけない。

「ええ、私は皆さんには少し申し訳ないですが、此処には一人の武人として立っているつもりです」

「……そうか」

ああ、ああ！

これだ。

今日私が求めていたのはこれなのです。

冷静になった義経さんからは先ほどまでの烈火の如き威圧感を感じない。

しかし、切るような冷たい気迫がその身からあふれ出ている。

ああ、よくて互角。

同じ剣士として今までここまでの相手と巡り合えたことなどありませんでした。

思えば故郷で剣の道を歩みながら、その力故か友人ができず、この才と環境が煩わしくさえ感じていました。

諦め、孤独、今まで感じていたあの思いなど一息で吹き飛ばしてしまうような緊張感。

「それじゃあ、改めて。……源義経、参る」

うらやましかった。

モモ先輩と戦った松永先輩が、見るに堪えない大けがをしたとはいえモモ先輩に打ち勝った高坂先輩が。

私はモモ先輩と、武神と戦いたいなどと言う思いは今でもない。

しかし、しかし、难道でしょうか。

この同じ剣士として向き合って初めて得ることのできた高揚感は何？

自分の性格を嫌っている余地など一部すら許されぬ緊張感は!!

ああ、

「黛流、黛由紀江。お相手いたします」

やはり私は武人であったということですね。

第四十六話 最終決戦 其之三

SIDE 心

今、此方は城の入り口で弁慶と対峙している。

奴は此方を見つめて動こうともせん。

……て、言うかこやつ本当にやる気があるのだろうか？

成り行きで、と、言うより此方の担当であつたから残りはしたが他の連中のこと総スルーしおつたぞ？

もしかしたら普通に通れるのでは……。

「そおいー！」

「によわ!!」 あ、あああ、危ないではないか!!」

脇を通り抜けようとしたら錫杖を振り回しおつたぞ!?

いや、ここを守るというのならそれで正しいのじゃが、なんで此方だけ？

「おい！ 弁慶よ！ あ奴ら素通ししたくせになぜ此方だけ邪魔するのじゃ？」

「んー？ いや、一人くらい止めとけば面目立つかないって」

ほほう。

まあ、此方を止めてるといふのだから十分か。

ふむふむ、まあ確かにそれなら確かに面目も立つ、か。

「いやー、一人残ってくれて助かったよ。全員行つてたら流石に動かないとまずいからね。一人に足止めされて通してしまいました。つてね」

「適当か!!」

駄目じゃこやつ完全に駄目人間じゃ。

ケラケラ笑いながら何の負い目も感じておらん。

これだけ大ごとだというのにこの態度とは……、ある意味尊敬できるのう。

「んー、まー、気が乗らないことだしね。……何より後ろに主がいるわけでもないし。

立ち往生なんてしてやる気も起きないさね」

なるほど、モチベーションが低いものにも理由があるということか。

「いいのか? その主が戦っているのにお前がそんな調子で……」

「あー、いいのいいの。あの子はまあ、従うこと選んだけど、私に命令したわけじゃないからね。ぶつちやけここに立ってること自体忠義じゃなくて義理だからねー。とつと……」

そう川神水を注ぎながらゆるーく言っておるが……。

こんな時まで手放せんとは筋金入りじゃ。

「ふむ、まあ、此方の役割を果たしてはおるが……。なんとというか釈然とせんとう」
「あく、いいじゃんいいじゃん。らくーに行こうよ。こうやって向かい合っているだけ都合良いんだし。今から追いかけるなんて面倒くさいことしたくないし」

……ほう？

ああ、そうか。

あの余裕はそう言う考えからと言うことなのじゃな。

「……つまり、此方と戦えば面倒くさいことをせねばならんと言うことか」

「あれ？ いや、別にそう言う挑発したつもりじゃあないんだけどなあ……」

ふん、口でどう言おうともその揺るがぬ態度ではどうにもならん。

確かに、弁慶を相手にすることになって少しは、僅かには、ほんの少しだけ、そこはかとなく尻こんではおったが……。

高貴なものとして、こうなっても動かぬのであれば示しがかんではないか。

「あー、本当に来るの？ ほら、こっちに川神水とつまみもあるよ？」

「ええい、うるさい！ 此方は三大名家が一つ不死川じゃぞ！ ここで引いては庶民にも劣る負け犬ではないか!!」

元々、それなりに意気込んできているのじゃ。

当事者にあんな態度を見せられて黙っていられるわけがないじゃろうが！

S I D E 京

睨み合い。

大和以外の男に見下されるのはごめんだけど位置関係的に仕方がないネ。

工場の上部和建物の下。

これだけの距離がありながらここはもはやお互いの間合いの内。

間合いで負けているとはいえ、自分の間合いでもあるここまで近づければ関係がない。
い。

あとはここで弓さえ離さなければお互い下手には動けない。

「ククク、足止め完了。下手な動きを見せれば射るだけ」

まあ、同じくこちらでも下手な動きは見せられないけど。

なるほど、トラも簡単に言ってくれれると思っただけど、確かにこの状況になってみれば私ならできるといふのは確かだね。

我慢比べ我慢比べと。

SIDE石田

「ふむ、何とも阿呆が上に居るものだ。あれの下につくような選択をしなくて正解だったな」

「御意ですな」

まあ、あんなことをしようと思う高坂も高坂ではあるが……。

別にあいつの下についているわけではないから深くは考えなくていいだろう。

さて、予定外にあいつと別行動になってしまったわけではあるが、こういう時は適当

に動いていいといわれている。

ならば

「おい、俺と島は人質とやらの救出に向かう。どうやら九鬼の従者たちは次々に狩られてるようだからな」

悔しいが松永やヨッシーに比べれば今の俺はまだ劣る。

俺が主導したわけでないのだし裏方で活躍させてもらおう。

「……へえ」

「なんだ？ 松永。その変なものを見る目は？」

「あー、ごめん。石田君つてもっと前に出たがるタイプだと思つてたからさ」

ふん、そんなものは当然

「不本意に決まっているだろう。だが、力不足を知った上で突つ込む真似の方が俺の価値を落とす。それに、ここにいる人材は九鬼に不信感を抱いているだろうからな。俺の出世街道の糧になろう」

なにより、ここには友人の助っ人として立っている。

無様を晒すなどもつてのほかではないか。

「ほー」

なんか温かい目で見られている。

「なんだ？ その目は……」

「いやいや、男の子っていいな。って思ってね」

つく、見透かしたような態度が気に入らん。

能力はあるが性格があれか。

「ふーん、まあいいか。頑張れ男の子！」

……寒気がした。

本当に心を読んでいるのか？

これはもつと鍛錬を積まなくては俺の出世街道に化け物が立ちはだかつた時にまづいことになりそう。

「フン、島よ、ついて来い。」

「はー！」

まずはこちらの兵を狩りまくっている気の持ち主のところへ向かうか。

「おやおや、ここにきて邪魔が入ったようですね」

「……なるほど。それなりに精鋭な九鬼従者たちを狩れる人間だ。大体の予想は着く

が名を聞いておこうか」

いや、九鬼とはいえこんなことをホイホイできる奴がそういるはずもない。

「これは申し訳ありません。遅れましたが、クラウディオと申します。そちらは天神館の石田様と島様とお見受けしますが、どうでしょう？」

「ふん、流石は九鬼の万能執事と言うことか。こちらのこともお見通しと言うわけか。いや、俺のことを知っているのは当然かもしれないがな」

ふむ、こうして対峙してみれば、なるほど、万能などと言われるのは伊達ではないな。戦闘もその内と言うわけだ。

「ええ、貴方は私たちの協力者になっていただけると思っていますので調査しておりましたので……。それもかなわなかったようですが」

「ふん、俺はどこに居ようとも俺が進む道が出世につながる人の上に立つ人間だ。今回はこちらに力を貸す目的があったまでだ」

「ほう、……なるほど。いい目的だと思えますよ」

……こいつもか。

どいつもこいつも人の心を読んだみたいに。

と、言うか島よ、生暖かい「成長しましたな」みたいな目で見るのはやめろ。

「……まあいい。それで、お前は俺の道の前に立ちふさがるといふのだな？」

「ええ、残念ですが。こちらとしても邪魔をされるわけにはまいりませんので」
ならば

「島！ 先に行け！」

「な、お、御大将、それは！」

「行けというのだ！ お前がここに居て俺に忠を見せられるか!？」

俺を置いていくというのに戸惑いを見せるのはわからなくないが、正直この老執事相手では……、我が忠臣では足手まといだ。

「つく……、分かり申した、ご無事で！ 御大将！」

「ふむ、行かせるとでもお思いで？」

老執事が腕を広げる。

なるほど、糸か。

あれに十分な攻撃力を持たせるとは、かなり応用が利きそうだ。

なるほど、戦闘方法も万能と言ったところか。

あれであれば島の行く手も阻めるだろう。

しかし、

「ああ、あれは俺の命で動いているのだ。行けるに決まっているだろう？」

相性は悪くない。

確かに素材も練り主も一流ではあるが、この俺に斬れないほどではない。

劍士同士の戦いに名乗りを上げられなかった分の鬱憤も込めて一閃してやる。

「……ふむ、通してしまいましたか。まあ、あちらは部下に任せるとしましょうか」

「ふん、俺の部下をあまり舐めるなよ？ お前ならいざ知らず、そうそう止められはせんや」

油断がならないことにすでに俺の刀に絡みつこうとしている糸を一閃しながら言う。

「ならば、あなたを倒してから追わせていただくことにしましょう」

「できるかな？ 万能執事、俺の出世街道に立ちふさがるに足るものか、心して試してやろう！」

コイツが向かつては島でもヨツシーでも厄介なことになる。

何よりこうして対峙した以上は俺の相手だ。

ここで討ち取れば俺の名にも箔が付くというものだ！

第四十七話 最終決戦 其之四

SIDE 燕

「ナ、トウー」

いやいや、ラスダンとは思えないほど楽だねー。

要注意人物は軒並み誰かが何とかしてくれるし。

九鬼従者とはいえそこらの人たちに手古摺るほど突入組は弱くないしね。

「フン」

それにこつち側の実力者がもう一人味方にいるし。

石田君たちがいてくれて助かったよ。

いやいや、件の項羽相手に決死の覚悟を決めなくてすんでよかったよ。

「怖いほど順調であるな……」

「そうですね……、壁越えこつちに残しとけと言っていた意味がよくわかります……」

おやおや、九鬼主従が引いてるよ。

身近に筆頭みたいな人がいるんだからそのくらいわかってたでしょうに。

いや、味方に居るからこそその脅威がよくわかってなかったのかな？

「ほらほら、紋ちゃん？ そろそろ首謀者とご対面なんだからびしつとして」

「ああ、そうであるな。順調なのはいいことなのだ、うん」

「そうです。それに、流石にマーブルの周辺には精鋭がいるはずですし、ここからが勝負ですよ？」

うん、気を引き締めてくれて何よりだ。

だって、もうちよつとといったところにかなり強そうな子が控えてるしね。

「来てしまったか。ここは梁山泊が一人としてこの林冲が通さない！」

一際立派な襖の数歩前に一人の女性が槍を持って待ち構えている。

うん、結構強い。

まあ、ここまで来たら私も少し頑張つて……

「ガトリング・クロウ！」

と、思ったら横からものすごい連撃が横から放たれた。

「ここは俺に任せてもらおう」

「え？ いいの？ ここまで来たらみんなで凹っちゃったほうが早いけど……」

あれ？ なんでみんなそんな恐ろしいものを見るような目を向けるんだろう？

あんなに勇ましかった林冲ちゃんも涙目だし。

あれー？ なんでだろーなー？ フフ……。

「いや、いい、行ってくれ。そもそも俺はどちらかと言うと部外者だ。家の大将と別行動になった以上はラストシーンまでいる意味もない。というか、この子が可哀想だから行ってくれないか？」

ふむ、まあそれならそれでいいんだけどね。

……助かったね林冲ちゃん。

「わ、分かった！ ほら行くぞ松永の！」

「はいはい☆ 恐怖を振りまく子はさっさと退場しましょうねー」

「ウヒョー!! 俺に構わず先に行けてやつか!! 燃える展開だぜー!」

うーん、なんか扱いがちよっと酷くなったような気がするな……。

まあ、進めるんなら進んじやおうかな？

「あ、ま、待て！ 私は守らなくては！」

ん？ やっぱり通れないのかなあ？

「おま!?! ガトリング・クロウ!!」

「つくー!」

「ほら！ 早く行け！ 何やらかすか分からないだろうが！ 早く……間に合わなくなつても知らんぞ!! お前も下手に鬼を刺激しようとするな!!」

「で、でも守らないと……」

九鬼のメイドさんに引つ張られながらも聞こえてるんだよな！。

大村君はひどいこと言うな！。

……お仕置きかな？

「さて、着いたぞ」

そう言つて下車を促される。

いやー、九鬼の機械つて本当に高性能ですねー。

数分に一回の舌うち機能に、素晴らしいサスペンションで揺れを感じないはずなのに、なぜか局所的に大揺れを起こすことができるなんて。

さらに、なぜか一部に直接エンジン熱を伝えることができ、尚且つ他の機能に影響がないなんて、正に新機能の目白押し！

……ぶっ壊してやろうか？

「どうした？ 妙に疲れているし、なんだか焦げ臭いぞ？」

あー、そうでしょうとも。

本当に優秀な奴だよ、あのマシンはよ。

この怪我だとそれだけでも結構な負担になるつてのに……。

「ハハ……、今度あのマシンにしつかり教育しましょう？」

「??」

ああ、主人にはわからないのか、そうですか。

あのメイドと言いい不良執事と言いい九鬼つてそんなんばっかりか……。

もっと部下をしつけておかないからこんなことになっているんだろが！

「？ まあいい、それで？ お前はどうかやって俺を楽しませてくれるんだ？」

うわ、やべ。

着いたとたんにやる気になってやがるよこの暴君。

さつき怪我人どうこう言つてたくせに！

落ち着け、こういう時は……、

「凛々しい顔も素敵だよ？」

「…………おこい」

あ、一気にやる気が漏れてしまったようだ。

うん、呆れてるけど微妙に照れてるって眼福だよな。

「お前……、お前！ 普通こうまで舞台上上がったならすぐにでもやりあうだろうが！ それをなんだ!? 凜々しい顔？ ああ、それはそうだろうさ！ あの凶悪執事が嬉しそうに話すんだ。それは期待位するさ！ それがなんだ？ 正反対のフ抜けた顔でいきなりおべんちゃらって！」

おおう、ヒートアップしていらっしやる。

なんだ？

あれか、今日は霸王霸王する霸王の日なのか？

「いや、デートって言ったしまずは褒めるものかなあと思いました……」

「いや、言ったけど、確かに言ってたけど！ あの時の俺を挑発したあのふてぶてしいほどの覇気はなんだったんだ!? この……」

あれ？

こういう時ってまず褒めるのが正解なんじゃないの？

なんか怒っていらっしやる……。

くそう、女の子をどう扱っていいかわからないぜ。

助けて武神！

そんな時武神なら……。

「ハハハ、照れちやつて☆ かわいいんだから」

「……殺すぞ?」

なん……だ……と?」

くそう、やつぱりあれは武神並みの美形で初めてできる技なのか?

せつかく精一杯の笑顔で……くそう。

やつぱり世界は不公平だ……。

「いや、なんで絶望的な顔してるんだよ……。褒めるんだつたら雰囲気大事にしない

と喜べるわけないだろう」

「……そうなの?」

霸王様による恋愛講座が始まるか?

うん、お相手役つてだけで大盛況間違いなしだね。

「いや、食いつくなよ。それ、デートとしても落第だろう……」

ああ、今僕は憐れまれている。

初デートでこれつてトラウマになるのではないだろうか?

「はあ……、もういい、それだけなら俺は帰るぞ?」

こ、この上飽きられて相手に帰られるというのか!?

それはまずい！

連れ出した目的としても男としてのプライドと言う意味でも!!

「いや、ちよ、ちよつと待つてくださいよ!! だめ、お願いだから捨てないで!!」

「おい! つちよ、離せ! ってなんだこいつ? 怪我人のくせに気持ち悪いくらい絡みついて? って、いい加減に! 分かった、とりあえず話聞くから離せ、な?」

ふう、とりあえず引き留められたか……。

なんだろう、これはこれで情けなすぎる気がする……。

「はあ……、はあ……、なるほど、あのヒュームが認めているというのも伊達ではないようだな……、いや、もつとましなところで発揮してくれればいいのに……」

「いやいや、それほどでも」

「褒めとらんわ!! お前、いくら時間稼ぎとは言っても誇りはないのか……。まあ、俺が戻れば勝負がつくから仕方がないが……」

ハツハツハ、何をおっしゃるのか。

「いえいえ、時間稼ぎはしてませんが、連中が失敗しようがどうでもいいんですよね」
「何?」

うん、自分で言つといて結構最低じゃね?

「いや、あれですよ。向こうに松永先輩いるじゃないですか? あの人は下手した

ら勝つちやうかもしれないじゃないですか？」

「ふむ、あの一番強いやつか。まあ、俺が負けるかは置いといて、お前からすればそれに何の問題があるのだ？」

いや、まず目的が全然違うからな、他の人たちとは。

だから最初頼ろうとしたのは竜兵と辰子さんだけなんだよな。

「うん、僕としてはね、待っていてもらいたいんだよ」

「待つ？」

そう、今どこかであの化け物執事で戦っているあいつを。

「誰が来ても叩き潰す。そう言うのであればあの武神も叩き潰してくれないとね」

ああ、先ほどとは違った意味で僕の顔は満面の笑みを作っているのだろうか。

第四十八話 最終決戦 其之五

SIDE 大和

『ポイント4 BEGIN FIGHTING!』

「了解、健闘を祈る」

『ポイント3 こっちも敵が来たぜ。なんか青髪の女は迂回して川神学園に向かうらしい』

「OK, ワン子、そっちに梁山泊が向かう。最低足止め頼む。ああ、遠慮なくたおしていいぞー!」

『ポイント1 了解したわ! 皆の仇はとるんだから!』

「ポイント2、戦闘継続中だ。戦力には余裕があるが他に回すか?」

「あー、ちよつと待って、えーつと、偵察部、要注意人物の動向は?」

『こちら偵察部、ポイント3に長宗我部、ポイント2に宇喜多が向かっている。先も報告した通り楊志は川神学園、史進は現在板垣と交戦中、ルーは……申し訳ないがロストしている』

「了解、クリス、そっちに厄介な十勇士が向かっている。戦力は分配せずにそのまま

で

『了解した』

ふう、これで全部のポイントが接敵したかな？

『こちら大友だ、とりあえずはぐれはそれなりに狩っているが、まだか？』

「あー、もうちよつと待って。札を切るならひっくり返される余地の少ない瞬間がいからね」

『了解』

それにしても……

「どうした？ 軍師、不満そうだが。戦況には問題ないいんだろう？」

通信器具やらの調整に待機している卓に聞かれたが……

「いや、せっかくこっちに地の利があるつてのに碌な罠も仕掛けられなかったからね。

ほら？ 防衛戦での罠で一網打尽とかって憧れるだろう？」

うん、流石に戦闘後に影響出すような罠なんてできないしそもそも時間と人員が足りなさすぎだ。

せいぜい悪戯レベルの罠しか用意できなかったのはなあ……。

「……参謀様が余裕そうで何よりだ。だが、十勇士と梁山泊とやらが出てきたんだろ
う？ いいのか、気を抜いていて」

まあ、確かにここからが本番だよな。

けどなあ……

「いや、正直あとはこっちの札切るタイミングだけなんだよね……。ぶっちゃけ手におえない状況となると川神院の師範代さんとかそれレベルが動くってことくらいでさ。それやられるともう鉄心さんとかに鞭うつしかなしい……。第三勢力なんて出てきたらそれこそ九鬼動かす口実になって俺の手から離れちゃうだろうしねー」

自分の手の内超えればもう手におえない獣が飛び出してくれるんだ。
気楽なものだ。

「なるほどな……。そうなっていない今はお前の手のひらの上ってことか」
にやりと笑いかけてくる。

コイツ結構悪人笑いだよな……。

参謀役がすごく似合っている。

「買いかぶりすぎだよ。この余裕は……」

『こちらポイント2、十勇士、宇喜多と接敵！』

『こちらポイント1、梁山泊の人が目視で来たわ』

「……つと、これで要注意人物は貼り付けになったわけだ」

さてこれで、各々の奮闘で戦局が決まるわけだが

「大友さん、ここらで動こう。そうだな……ポイント4、2、3、1で回ってくれ」
『了解、黄泉返り部隊、行くぞ!!』

うん、札を切るにはいいタイミングだろう。

「……で、スグル、この余裕はね」

『ポイント1、制圧完了NE! 「オラオラオラ! 舐めるんじゃねーぞ!」 「フン……手ごたえのない豚だねえ」 「逃げるな! 狩ってやりましょう」 ……STOP!』

うわあ、戦場はひどいなあ……。

「あちら以上の戦力を用意できたからなんだよね、これが」

『こちら黄泉返り部隊、ポイント4制圧……こいつら本当に怪我人なのか大友は疑問だ』

「了解、それじゃあ次のポイントよろしく。うん、俺も志願者聞きに行つたときビックリしたよ」

昨日の夜、被害者たちのところ回つたが……、うん最近やられた人たちは参加できなかったのが多いけど約一月に渡って奴らは狩っているんだ。

それで戦力外と見るにはちよつとこの川神は特殊だったみたいだ。

て、言うか暴れさせろっていう人が多すぎて逆に困つたね。

「……この制圧速度、なるほど、こんなの用意しているんなら余裕にもなるわな……」

ああ、スグルも呆れてるな。

ま、あちらが標的にする猛者たちだ、そりゃあ規格外だろうね。

「そう言うことさ。下手な策よりも相手より戦力を用意しておくのが一番だつてことだね」

『鍋島だ。釈迦堂がルーの奴の目を覚まさせたぞ。つたく、この俺がここまで鈍つてやがるとはなあ……』

「了解です。……ふう、これは本当にもうやることなくなつてきちやつたや」
まあ、後は突入組の成功とイレギュラーがないことを祈つときますかね。

S I D E 一子

校門前、ほかならぬ自分の引いた防衛ラインを挟んで梁山泊の楊志と対峙している。

「おらおら!!」

「ちよ!!? こいつら本当に学生か!？」

周りでは言霊部と言う怪しい部活の部長、京極先輩の一言でなんだかすごく強化されているわね。

アタシもあの応援だけで力がみなぎっているからあの先輩は底が見えないと思うわ……。

「んー、君、やるの？ 多分格が違うと思うけど……」

ああ、三人でとはいえ、あのルー師範代を無事で抑え込んだと聞いているし、実際にそうなんだと思う、けど、

「やってみなきや……」

「分かるよ、ホラー！」

鋭い蹴り、でも反応できないわけではないわね。

武器を合わせていなして

「ほうら、バーストハリケーン！」

追って出された技には対応できなかった。

「ねー、格が違うよ」

ああ、そうでしょうね。

師範代に時間をかけて教わっていてもアタシはまだ気を使う技はできない。

でも、

「猿真似で誇ってるんじゃないわよ!!」

違う、アタシが立てる程度の練度で格など語られてたまるか!!

「へえ……、それ耐えたくらいで大口叩いちやうんだ?」

そう言つて双剣を手にして向かつてくる。

「この吹毛剣の前には無力……!?!」

言うだけある剛撃、だけどアタシはそれと真逆の極致に居る人とこの十年幾度も戦つている。

この程度流せないような鍛え方はしていないわ!

「……へえ、今ので武器壊せると思つたんだけどなあ……」

「言つたでしょ? やつてみないとわからないって!!」

「へえ? ま、でもいつまで続くかな!!」

流れるような連撃、ああ、この人は本当に強い。

けれど、

「は、っほ、とりゃあ!!」

力だけで打ち破れない壁、それに何度も打ち込んできたアタシだから、打ち崩せなくても守り切れる!

「……つく、あー、その武器の特性は本当に厄介だねえ」

そう、当然だ。

「この武器はアタシの一部、そう言えるくらいに振り続けてきたのよ！ 他人の技を振り回すのにご執着なあんたなんかは負けてたまるものですか！」

悔しいけれど、相手の方が格上、それでもそんなのは慣れてる！

任せられたのは防衛、意地でもこの線だけは跨がせない！！

「フフ、まあでも、手が出せないんじゃないよ!!……え？」

——ズドン!!

「Hasen Jagt!!」

「ヒヤッハー、オイ亜巳姉、アイツ面白いくらいトンだぜ!!」

「はあ、天、まだ全快じゃないんだから興奮剤は控えろって言っただろう」

「黄泉返り部隊！ 助太刀するぞ！」

また連撃が来ると言思ったらあたりに爆音が響き渡る。

次々に吹き飛ばされていく一般兵に楊志の注意がされる。

「敵と向かい合ってるのによそ見るんじゃないわよ！」

渾身の突き、今まで只管磨いてきた一撃をお見舞いしてやる！

「!! つと、ざーんねん。才能が違うんだよねー。ちよつと位よそ見して求められ

ちやうんだよね、これが」

双剣をクロスしてピンポイントで突きを止められた。

意表をついての一撃を完全に見切って受けられてしまう。

……ああ、分かっていたわ。

アタシの一撃なんて所詮はこんなもの。

けど、

「ああああああああ!! 川神流! 大輪花火!!」

そんなの身近で目標を見ていけばいやと言うほど思い知らされている。

止められたなら、そのまま振りぬいてやる!!!

「んえ!! つく、ああああああ!!」

初めて必死になった楊志、飛び跳ねながらの切り上げに体を宙に浮かせられた。

「つく、この程度で!?!」

そして、それだけで防ぎ切ったと思ったら大間違いよ!

薙刀の真価は円運動!

渾身の切り上げは相手のガードを持ち上げている。

切り上げた勢いで半周した柄を楊志の顎に叩き込んでやる!

「くあ!!? ……こんのツ!?!」

ああ、アタシの力ではまだ相手を落とせていないのね。

けれども、こちらだけに意識を向けてちやいけないわよ？

意識から消えている振りおろしは、先ほどの円を逆にするだけでできるんだからね。

「ああああああああ!!!」

浮かんでいる体を想いつきり叩きつける。

「……………くあ、……………」

それで流石にもう立ち上がることはなかった。

「フン、格がどうこう言うんなら、アタシの攻撃程度で意識を失ってるんじゃないわよ！
いくら格上の技を盗めても、自分のものはしなきゃ怖くもなんともないわ!!」

——— おおおおおおおおお!!!

ああ、学校のみんなの声が心地いい。

!!!

うん、アタシなら大丈夫。

こうやって自分より強い相手だって倒せるって知ってているんだから！